國譯一切經

大東出版社藏版

UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

般若部 五

椎尾辨匡譯

目次

（本　丁）　（頁）

大般若波羅蜜多經（全六百卷中自卷第四百一至卷第五百七十三）……〔一五〇四―一八三〇〕……一

第二分乃至第四分（自卷第四百一至卷第五百五十五）の略脱に就いて……〔一五〇四―一五一五〕……一

第五分解説……〔一五一六―一五一八〕……三

第五分

善現品第一（五五六）……〔一五二〇―一五三四〕……一七

天帝品第二（五五五）……〔一五三五―一五四〇〕……三二

宰堵波品第三（五五七）……〔一五四〇―一五四七〕……三七

神呪品第四（五五七）……〔一五四八―一五五六〕……四六

分設利羅品第六（五五八）……〔一五五七―一五六〇〕……五四

經典品第六（五五八）……〔一五六一―一五六五〕……五九

廻向品第七（五五八）……〔一五六六―一五七三〕……六三

地獄品第八（五五九）……〔一五七四―一五八〇〕……七一

清淨品第九（五五九）……〔一五八一―一五八六〕……七六

不思議品第十（五五九—五六〇）……〔一五八九—一五九七〕……八六
魔事品第十一（五六〇）……〔一五九八—一六〇四〕……九五
眞如品第十二（五六〇）……〔一六〇五—一六〇九〕……一〇三
甚深相品第十三（五六一）……〔一六一〇—一六一六〕……一〇七
船等喩品第十四（五六一）……〔一六一七—一六一八〕……一一四
如來品第十五（五六一—五六二）……〔一六一九—一六二九〕……一一六
不退品第十六（五六二）……〔一六三〇—一六三七〕……一二七
貪行品第十七（五六二—五六三）……〔一六三八—一六四八〕……一三五
姉妹品第十八（五六三）……〔一六四九—一六五四〕……一四六
夢行品第十九（五六三）……〔一六五五—一六六〇〕……一五三
勝意樂品第二十（五六四）……〔一六六一—一六六七〕……一五八
修學品第二十一（五六四）……〔一六六八—一六七一〕……一六五
根栽品第二十二（五六四—五六五）……〔一六七二—一六八〇〕……一六九
付囑品第二十三（五六五）……〔一六八一—一六八七〕……一七八
見不動佛品第二十四（五六五）……〔一六八八—一六九二〕……一八五

第六分解說……〔一六九三—一六九五〕……一八〇
第六分
緣記品第一（五六六）……〔一六九六—一六九九〕……一九三
通達品第二（五六六）……〔一七〇〇—一七一一〕……一九七
顯相品第三（五六七）……〔一七一二—一七二一〕……二〇九
法界品第四（五六七—五六八）……〔一七二二—一七三四〕……二一九
念住品第五（五六八—五六九）……〔一七三五—一七四五〕……二三三
法性品第六（五六九）……〔一七四六—一七六三〕……二四三
平等品第七（五七〇）……〔一七六四—一七七〇〕……二五一
現相品第八（五七〇）……〔一七七一—一七八〇〕……二六六
無所得品第九（五七一）……〔一七八一—一七九〇〕……二七八
證勸品第十（五七一）……〔一七九一—一七九七〕……二八八
顯德品第十一（五七二）……〔一七九八—一八〇三〕……二九五
現化品第十二（五七二）……〔一八〇四—一八〇八〕……三〇二
陀羅尼品第十三（五七二）……〔一八〇九—一八一三〕……三〇六

勸誡品第十四（五七二―五七三）……〔一八一四―一八一九〕……三二一
二行品第十五（五七三）……〔一八二〇―一八二七〕……三二七
讃歎品第十六（五七三）……〔一八二八―一八三三〕……三三五
付屬品第十七（五七三）……〔一八三四―一八三六〕……三四三

大般若經第二會乃至第四會（自巻第四〇一至巻第五五五）の略脱に就いて

――諸本〔初分乃至第五分〕比較解說――

一、十萬頌

先に譯出せる大般若初分（第一會）四百巻は支那譯中の一會大乘經の最大なるもの、尼波爾傳說によれば大般若拔抄として十萬、二萬五千、一萬、八千の四種ありと云ふ、その四本の存在確かなるのみならず、ワッシリエフ氏は曰ふ

「此の名（般若）の下に西藏甘珠爾にては無比の多量の書を見る。即ち十萬と二萬五千と一萬八千と一萬と八千と七百頌波羅蜜とあり、又他方には小本の波羅蜜金剛能斷と波羅蜜多心とあり。傳へ云ふ十萬頌大本すら三大波羅蜜經の最小なるものに過ぎず」

とし、更に玄奘譯と比較して、

「唐代玄奘譯の六百巻般若は獨り十萬、二萬五千、一萬八千、一萬、八千頌とに成れる波羅蜜を充うせるのみならず、西藏の丹珠に在りて頌數を以て呼ばれざる勝天王問、金剛能斷等をも含み、且つ奘譯には西藏甘珠爾に見ざる布施、持戒、忍辱等の特殊波羅蜜の譯をも含む」

と云へるもの、孰れも初分を以て十萬頌とせるが如し。支那には羅什の傳へに基き、僧叡の小品序に、

「斯の經の正文凡て四種あり、是れ佛異時適化廣略の說なり、其多きものは十萬偈、少き者は六百偈」

として十萬偈、大品（六十餘萬言）、小品（三十萬言）及び六百偈の四種ありとするもの、道安の一萬七千二百六十頌（鈔經の

原本、一萬八千頌般若）を加ふれば五種となる。金剛仙論には

（第一部十萬偈（大品是れ）、第二部二萬五千偈（放光是れ）、第三部一萬八千偈（光讚是れ）、第四部八千偈、（道行是れ）、第五部四千偈（小品是れ）、第六部二千五百偈（天王問是れ）、第七部六百偈（文殊是れ）、第八部三百偈（即ち此の金剛般若是れ））

と云ふ。これ八部般若として廣く依用せらるゝも、諸部般若の傳說に既譯の諸本を配當したるものに過ぎず正確とする能はず、而かも第一部は十萬偈とするものなるが、果して然るか。

二、大本の梵漢比較

第一表　初會梵漢比較

漢	梵	A. 大般若初分	B. Śatasāhasrikā P.
			nnmas Fas. I. PP 1—2.
$8\frac{1}{2}$紙	50 Ps.	1. 緣起品（220第五 1b—11b）	P. I. Fas. I. P. 2—55
$7\frac{1}{2}$	78	2. 學觀品（同 11c—20c）	P〃 Fas. I. P. 55—Fas. II. P. 136.
$13\frac{1}{2}$	127	3. 相應品（同 20c—37b）	P〃 Fas. II. P. 136—Fas. III. P. 266.
11	44	4. 轉生品（同 37b—50c）	P〃 Fas. III. P. 266—Fas. IV. P. 310.
$2\frac{1}{3}$	6	5. 讚勝德品（同 50c—53b）	P〃 Fas. IV. PP. 310—316.
2	9	6. 現舌相品（同 53b—56a）	Fas. IV. PP. 316—328.
$117\frac{1}{2}$	8	7. 敎誡敎授品（同 56a—199c）	P. II. Fas. IV. P. 324 Fas. V. P. 473.

$2\frac{1}{2}$	27	8. 勧學品	(同 199c—202c)	P. III.	Fas. V. P. 474—Fas. VI. P. 503.
6	137	9. 無住品	(同 203a—210a)	P. IV.	Fas. VI. P. 504—Fas. VII. P. 641.
$19\frac{1}{3}$	242	10. 般若行相品	(同 210a—234a)	P. V.	Fas. VII P. 641—Fas. X. P. 885.
$17\frac{1}{2}$	566	11. 譬喩品	(同 234a—255c)	P. VI.	Fas. X. P. 886—Fas. XIII. P.

以上は梵本十萬頌般若（Bibliotheca Indica, Śatasāhasrikā Prajñāpāramitā）と大般若經初會との初部に就て比較したるものに止るも、梵本は五種の原文に依てプラターパチャンドラゴーシャ Pratāpacandra Ghoṣa によりて出版せらる、正確なる標準と認めらる。同時に玄奘の譯本は支那譯者中最も原文に忠實なるもの、殊に大般若は佛典の冥旨によつて一語も略せず、二本比較の上に譯出したと云はるゝ程にして、其精確なること想像に餘りあり、然るに此梵漢二本を比較するとき、大體一致するも各部の出入差異少からず、梵本の首に歸命偈を題すること、各品に文偈多少あること等なり、例せば上表教授品の梵文は他に類せば一千頁に上るべきもの、僅かに百四十八頁に過ぎず、之に反して無住品、譬喩品の如き梵文却つて詳密なるが如き相違を見る。又梵文は同種別目の反復せらるゝもの多きに反して諸法の名目は漢本僥かなり。又般若は二乘に超過すとすること梵漢同一なるも通三乘の義に於て梵本一層明瞭なり、例せば菩薩十地の如き漢譯之を反復するも梵本は四果に就て云ふに止まる。又漢本眞如の異名に富むも梵本然らず。此等の點に於て梵本は印度的般若を顯はし、漢本は北方大乘的色彩多きが如し。若し梵漢二本增廣變易の迹より論ずれば梵本十萬頌般若の如きもの先づ存して、玄奘譯の初會の原本成立すべきものと云ふべし。

三、初會は十二萬五千頌か

玄奘譯の大般若は四處十六會二十萬頌六百卷の般若の集大成なり。此には根本般若と枝末般若、本經と別生とを混合し大集せるものたるを以て、大般若を原本とし他本を別出なりと獨斷すべきものにあらず。これを明かにせずして本別を論ずる研究

錄以下の所説は正當なりとする能はず。

轉じて第一卷の凡例に掲げたる十六會の表示に於て西蕃本は十六萬四千五十頌とするとせり、該蕃本には第四會八千頌とし第五會は八千の分、常啼と法涌と囑累と慈氏問との四品を缺くとするも、第四會は一萬頌に比すべきものとして、增して一萬とし、蕃缺の第六會第八會を加ふるも十七萬六百五十に過ぎず。玄弉が大般若二十萬頌とするは大數とも云ひ得るも亦實に初分が十二萬五千頌の大本とも考へらる。

第二表　蕃漢比較

	蕃本	漢譯	推定數
(1)	100,000	100,000	125,000
(2)	25,000	25,250	25,250
(3)	18,000	19,250	19,250
(4)	8,000	6,000	10,000
(5)	8,000(一四品)	3,250	8,000
(6)	缺	4,000(or2,500)	2,500
(7)	700	700	700
(8)	缺	600	600
(9)	300	300	300
(10)	150	150	150
(11—16)	3,900	3,900	6,875
16	164,050	163,400(or 161,900)	198,625

(本表中〜〜〜せるは推定頌數なり)

かくして粗々二十萬頌の數に近く、又梵本十萬頌よりも長廣にして、尼泊爾の十二萬五千頌本に匹敵するものと云ふを得。卽ち本典は西藏所傳の無量波羅蜜經本の長大なるに及ばざるも現存梵典の最大なるものとす。本國譯に於ては消闕法によりて重言を略標せるが故に書冊の分量を減じたるも實質に於ては一も損するなきを期したり。

四、五會比較

大般若の第一會から第五會までは廣略著しく異るも內容頗る類似し、本支前後相關するものと考へらる。

第三表　大般若五會比較(T、II)〔折込〕

第四表　諸本容量比較　（參考のため十六會全部を表す）

初　會	400	1766(—9)					
二　會	79(—479)	358(—2)	放光 122	大品 165	光讚 57		
三　會	58(—537)	273(—2)					
四　會	18(—555)	86	道行 44	明度 $33\frac{1}{2}$	小品 $41\frac{1}{2}$	鈔經 $23\frac{1}{2}$	佛母出生 78
五　會	10(—565)	47(—1)					
六　會	8(—573)	36	勝天王 $32\frac{1}{2}$				
七　會	2(—575)	$8\frac{1}{2}$					
八　會	1(—576)	4					

大般若波羅蜜多經卷第四〇一—五五五			一五〇九
九　會	1(—577)	$4\frac{1}{2}$+	
十　會	1(—578)	$4\frac{1}{2}$—	
十一ヨリ十六	22(—600) / 600	97— / 2683(—14)	

第五表　十六會容量比較

會次	初會	二	三	四	五	六	七…十	十一…十六	
紙數	1757(+9)	356(+2)	271(+2)	86	46(+1)	36	21(+$\frac{1}{2}$)	97	=2,670(+14$\frac{1}{2}$)
%	100	20.2	15.4	4.8	2.6	2	1.2	5.5	=%191.7
首盧	125,000	25,250	19,250	6.000	3,250	2,500	1,500	6,875	=189,625

本表は初會紙數を基準として十六會の容量を百分率に示したるもの。首盧(Śloka)の數は初會は十二萬五千頌と假定せるもの、第二表第三表と參照すべし。

五、第二會、大品般若

今の大般若第二會は古來大品般若と稱するものに當る。支那傳譯より云へば最も早く傳はれる大乘經典は道行般若即ち小品般若にして、大品は殆ど一百年後に傳はれり。之より先き沙門朱士行(正元元年、西紀二五四)は大法の弘通を以て己が任務とし、慧學を道資として甘露五年(二六〇)に洛陽に小品を講ぜしが、抄略にして義意通ぜざる所あるを以て全本を西土に求むると云ふ。彼は漢土に於ける眞の出家講經求法の先驅者と云はる。雍州より發して流沙を渡り于闐に至り、正品を寫し得たり、梵書 本九十章六十萬餘言なり。既に寫し得て後送せんとせるに小乘學徒之を妨げたるも、瑞あり免がるゝを得たりと云ふ。

傳（2145第五五97c）には

「未だ發せざる間に于闐の小乘學衆、遂に以て王に白して云ふ、漢地の沙門、婆羅門の書を以て正典を惑亂せんと欲す。王は地主たり、若し之を禁ぜざれば將さに大法を斷じ漢地を聾盲たらしむるは王の咎なりと。王卽ち經を齎すを聽るさず。士行憤慨し乃ち經を燒きて證とせんことを求む」

と、かくて經を積薪の上に置き火を加ふるに皮牒一字を損せず、大衆之を見て駭き服し、後送するを得、士行直ちに弟子弗如檀（法饒）等十人をして送らしむ。時に太康三年（二八二）なり。而後の消息放光經記（2145第五五47c）に詳なり。

「胡本洛陽に至る、住まること三年、復た許昌に至る二年、後ち陳留界倉垣水南寺に至る、元康元年（二九一）五月十五日を以て衆賢者皆集議し、晋書に正寫す。時に胡本を執るもの于闐の沙門無叉羅、優婆塞竺叔蘭口傳す、祝太玄周玄明共に筆受す。正書九十章、凡て二十萬七千六百二十一言なり。時に倉垣の諸賢者等、大小皆勸めて供養を助く、其の年十二月二十四日に至り寫都て訖る」

と。卽ち二八二年に弗如檀等送り來れる原本は二九一年に至り無叉羅等に由りて譯出せらる。經記に依れば、この後太安二（元?）年十一月十五日に沙門竺法寂この經を求め、竺叔蘭と共に五部の寫本並に胡本を用ひて考校書寫し、太安元年（三〇三）四月二日に訖る。これ現存する放光經の定本なり。

放光の譯出に先たちて泰康七年（二八六）に于闐沙門祇多羅と云ふもの別本を齎し來り、同年十一月二十五日法護之を譯出す。道安の合放光光讚隨略解序（2145第五五48a）に放光は光讚に先たち來るもの四年、光讚に後くれ出づること九年と云へるものこれなり。

二本得失あり互に相補益するも、放光後出なるを以て人多く之を重んじ、中山支和上も人をして之を寫さしめ、中山王及び衆僧、城南四十里に幢幡を立てゝ、之を迎ふと云ふ。その重んぜられたること察すべし。之に反して光讚は世に知られず、法護譯して後九十一年を經て涼土に殆ど滅亡せんとせしが、慧常、進行、慧辯等之を傳へて襄陽に至り、道安之を比較し、その後

羅什の大品、玄弉大般若第二會の譯出とによりて四本となる。

第六表　大品般若

		卷	品		
1	放光般若	二〇（三〇）	九〇	太康三年(二八二)送 元康元年(二九一)譯	無叉羅（221第八 1—146）
2	光讃般若	一〇（一九）	二七（二七）	太康七年(二八六) 同	祇多羅齎 法護譯（222第八 147—216.）
3	摩訶般若	二七(三〇)	九〇	弘始五年(四〇三)譯 翌年校	羅什（223第八 217—424）
4	大般若第二會	七八	八五	六六〇——六六三	譯玄奘(220第七 1a—426a)

前表の四本皆現存す。その他開元錄（2145第五五 493a）には度無極經三卷（或は四卷大品經に出づ）と云ふものあるも、長房等の魏吳失譯錄中のもので、智昇旣に之を刪除せる如く除外するを以て正しとす。故に比較すべきは四本のみなるが譯出より云へば第一たる光讃は只前半のみにして、第二の放光は言少事約、遺るる所ありと云はるゝもの、共に完全ならず。第三の羅什譯に至て始めて具備するを得たり。これに僧叡の大品序（2145第五五 52c）あり。抑も支那佛教は般若の研究に始まり、其大小二品は早く數譯を見、朱士行は志を立てゝ大品を求め（二六〇）、支道林は（三六〇死2059第五。348b）大小品對比要抄（序、2145第五五55a—56c）を著し、道安は漢陰に在る十五年間に每載二回宛、放光經を講じ、泰元元年(三六七)に光讃を得て歡喜に堪へず、合放光光讃隨略解（2145 第五五47c）、光讃折中解一卷、光讃抄解一卷（2145第五五39b）等を著すに至る。彼れは太元四年(三七九)に襄陽が沒落すると倶に符秦長安に移住し、其後も亦每歲二回の講經を怠らず、建元十八年（三八二）に般若鈔を出すにも關係せしが、恒に放光と光讃とを軌範とせり、かくて大品の講習は其人を得て盛に行はれたり、而して本經は蕃藏及び梵本 Pañcaviṃśati sāhasrikāprajñā pāramitā に一致せり。

梵本二萬五千頌般若、漢譯大般若第二會及び異譯大品諸經の五本を比較して第七表を作る。

第七表　大品諸譯比較（T、III）〔折込〕

第八表　大品諸本分量比較

梵筴	第二會	大品	放光	光讚
139	119	50	35	57
384	356(+2)	164(+2)	121(+2)	
%	100	46	34	

以上第二會大品諸經に關して略述せるが、その緣由發達、教理、內容概說等は拙譯國譯大般若經の大品般若解題中に詳記したれば參照されたし。（拙著「佛教經典概說第二章參照」）

六、第三會

第二會は第四百一卷より四百七十八卷を以て終り、第三會は第四百七十九卷より五百三十七卷に至る五十九卷たり。第二會が二萬五千頌般若に當るとすれば第三會は一萬八千頌般若に當る。玄奘は第二會を二萬五千二百五十首盧迦とし、第三會を一萬九千二百五十首盧迦とす。本會は別出の漢譯なきが如きも、摩訶般若波羅蜜鈔經（226 第八 508b—536 輔、同八 536—537）は之に匹敵するものゝ如し。鈔經は符秦建元十八年（三八二）に車師の國師鳩摩羅跋提獻ずる所の梵本に基き、曇摩蜱、佛念これを譯す。彌天の道安も亦これに與かる。經序（2145 第五五 52b）によれば諸經に際し放光と光讚と同一なる所は更出せず、其漏るゝ所、異る所のみを出す、原文は大品一部四百二牒、言二十千失盧、即ち略かに之を數ふれば凡そ十七千二百六十首盧殘二十七字と云へば、原本一萬頌小品より大に、二萬五千頌大品より小なる中間經なるを知る。放光光讚と同一なる所更出せず

と云へる點が、本經を鈔經とせる所以なるも、本經現存する須菩提品の如きは全く小品般若の別出に外ならず。蓋し道安僧祐等は般若の大小二品等の知識明瞭を缺くを以て記事往々矛盾を免がれず。この鈔經は或は長安品と云ひ或は須菩提品と云ふ、五卷(或は四卷)十三品より成る。第三會經は小品の增廣されたるものにして大品より稍小なるものと云ふべし。

七、第四會、小品般若

大乘般若の先づ支那に入れるは小品に屬する道行の傳來を以て嚆矢とす。後漢靈帝の時竺佛朔の將來する所、西紀一六八—一七二の間に在り、般若流通の史年最も確かなるもの之より遡る能はず。恐らくこれ月支の新佛教が澎湃たる元氣と寬容の態度を以て東西文化を融合し新舊佛教を融合するために弘通せる新經典の先驅をなせるものと云ふべきか。爾來再譯三譯、羅什玄弉の譯出を加へて五百年間十本の譯出を見る、誠に盛なりと云ふべし。

第九表　小品般若

經名	卷數	譯人	譯時	品數	在處	備考
(1)道行經	一	竺佛朔	漢靈、憙平元(一七二)	一?	缺	2145第五五(6)安註(恐非)
(2)般若道行品經(或摩訶般若波羅蜜經)	一〇(八)	支婁迦讖	漢光和二年(一七九)十月八日	三〇	221第八425—478	同、安序(註亦然)
(3)大明度無極經(或云明度經)	六(四)	支謙	呉(二二三—二五三)	三〇	225第八478—508	初品子註
(4)呉品經	五	康僧會	晋太元元年(二五一)	一〇	缺	
(5)小品經(更出)	七	竺法護	晋太始八年(二七二)		缺	
(6)摩訶般若波羅蜜道行經(略出)	二	衞士度	晋惠帝時(二九〇—三〇六)		缺	

(7)大智度經	四	祇多蜜	東晉(三一七―四二〇)			2145第五五21c云失譯大智度無極經四卷
(8)摩訶般若波羅蜜鈔經(或云長安品又云須菩提品)	五(四)	(曇摩蜱 佛護)	符秦建元十八年(三八二)	一三	226第八 507―536	道安序
(9)小品般若波羅蜜經	一〇	羅什	弘始十年(四〇八)	二九	227第八 537―586	僧叡序
(10)大般若經第四會	一八	玄奘	唐顯慶五―龍朔三(六六〇―六六三)	二九	220第七 763a―865a	
(11)佛母出生三法藏般若波羅蜜多經	二五	施護	宋	三二	228第八 587―676	
			(前本三品缺)			

上表の外大周刊定衆經目錄第二(2153第五五382c)に大明度經一部四卷一百六紙右北凉沙門道龔於西凉譯出長房錄上ありo然るに三寶紀九(2034第四九84b)には晋安帝世北凉道龔が悲華、寶梁二部十二卷の譯出を云ふのみ、經錄に長房錄を引き揭ぐるもの恐く誤りならむ。

尚又上表中(1)(2)は僧祐は別として說くも道安の道行序(2145第五五47c)に云ふ所は明白ならず。又前出せる鈔經は第三會別出とせば本經より除くべきも古來の列例に倣つて併せ揭ぐ。

此等の諸本其略不同なるも現存の五本原本皆異るがために比較攷證に資する所多く逸缺したるもの多くに略出更譯に係るが故に、今之を缺くも大たる缺陷とならず。卽ち初流の大乘般若はこの第四會によりて闡明せらるゝを得ん。

第十表　小品諸本比較(T、V)〔折込〕

第十一表　小品諸本分量比較

	梵典	道行	明度	鈔	小品	第四會	佛母三法藏
(1)	C.104	44	$23\frac{1}{2}$	(24)	$41(+\frac{1}{2})$	86	73
(2)	%	46.8	28		44	91.5	77.6

註　(1)　[illegible] f.182＋[illegible] f 204＋f 212＋[illegible] 237＋2＝104＝mitra's edition 529.

(2)　百分率は最多量の第四會に其欠缺せる部分八紙を加へたる九十四紙を壹百とす。

第十二表　新舊比較

玄奘譯	（第二會）	356	（第四會）	86	＝100：24	C. 4：1
羅什譯	（大　品）	164	（小　品）	41,5	＝100：25	
梵　典	（P. V.S.）	384	（A，S.）	104	＝100；27	

本表によりて新舊兩譯の具略と大小二品の比率が凡そ四對一なることを知るを得べし。

大般若の初分乃至第五分の內容關係を比較表示せるを以て本末具略粗ゝ明かなるを得たらん。若し發達よりせば道行（小品）を第一として大品之に次ぎ、大本その後に成り、集成大般若最後たるべし。通途の流布に從へば大品第一にして小品之に次ぐ蓋し大品には龍樹の釋論大智度論一百卷ありて古來學習せられ、智論宗すら成立せる因緣あり、南北朝隋唐の間翫學頗る盛なるものあればなり。然れども譯者は旣に國譯大藏經刊行の際、大品般若を譯出解說せるを以て今次は譯家の巨匠玄奘が念願弘通せる六百卷大般若を譯することゝせるも、其尨大なると重言多きとは讀者の倦厭を免がれず。これ正法を輕賤せしむる罪緣たるを以て、勉めて大般若を簡約ならしむるに力め、卽ち大本（第一會）は通關法によりて省譯し、第二會乃至第四會を對照比較によりて略脫し、最長最大なる第一會より直ちに最短最略なる第五會に飛移することゝせり。冀くは具略併せ讀み般若の經相と法門とに通ずる因緣たらしめんことを。

第五分解說

第五分般若は大般若第五百五十六卷より第五百六十五卷に至る十卷（大正藏經 220 第七 865—920）にして、その品目(1)善現(2)天帝(3)窣堵波(4)神咒(5)設利羅(6)經典(7)迴向(8)地獄(9)清淨(10)不思議(11)魔事(12)眞如(13)甚深相(14)船等喩(15)如來(16)不退(17)貪行(18)姉妹(19)夢行(20)勝意樂(21)修學(22)根栽(23)付囑(24)見不動佛の二十四品より成る。

今その大綱を云はゞ善現品は須菩提佛力によりて般若の妙義、無所住の學修を說き一切法の取るべからず隨行すべからず執受すべからざる如くなるを般若を行ずとす。菩薩の惡友善友を辨じて菩薩摩訶薩大乘の義を論ず。

第二の天帝品　帝釋梵天等諸天を對告として般若を說くは眞實報恩なるを明し、假名を壞せずして實義に達するを示す、諸天幻化の妙華を供養し幻實不二を體し、般若有情無邊にして畢竟淨なるを明す。

第三窣堵波品　般若受持功德殊勝にして相好身舍利塔婆供養に優るを示す。

第四神咒品。深般若は大神咒たり勝善の根本たり、邪魔留難せざるを說き、諸天散華供養して般若の人中に久住せんことを求め、般若は五度の尊導たり、般若行者は諸天護持し現法勝利あることを述ぶ。

第五設利羅品。前品に續きて般若受持の福德、設利羅供養に勝り、般若を他に施すは自ら供養するよりも福聚大なることを說く。

第六經典品、更に般若善持施與の功德、十善業道、上界定果聖道等を成就せしむるよりも遙に大なるを說く。

第七迴向品。慈氏隨喜迴向に勝劣を說くも、取相あるを難じて平等迴向の義を明し、方便して遠離を知らば倒見に墮せざることを說く、慈氏と善現と義を論ずること頗る銳きものあり。

第八地獄品。前品に續きて般若の取相なく能く照明ともなり廣大なるを明す。然るに宿善清淨ならざるもの有相に住し長く大地獄に墮することを說くが故にこの品名あり。

第九清淨品。前品末に色と一切智と不二無別、清淨なりとせるを承けて諸法畢竟淨を說くが故に清淨品と云ふ。粗細の執着を辨じ無着般若の尊さと、眞の守護たるを明し最後に善現は種々の名相を擧げて甚深般若を宣說す。

第十、不思議品。般若聞解の宿緣深廣なるを說き、般若の行住學を明し、種々譬說し、如來般若の不思議、菩薩の勝行は諸魔の留難すべからざるを示し、本經滅後南、西、東北方に流布するも信者少く義趣を說く者更に稀なりとす。

第十一、魔事品。深般若を行ずるとき、般若を淺劣なりとするは魔事なり、更に諸念、說聽不和合等に依る魔事を說く。

第十二、眞如品。魔事無量なるも佛力方便するが故に能く般若を成就せしむ。但し般若は佛母にして能く諸法實相、眞如を示すが故に難解難信なるを說く。

第十三、甚深相品。甚深の法相、空、無相、無願、無作、無生無滅、無所依止、無性を相とし、その法相の執すべきもなきを明す。又般若は大事の爲に出現す、能く之を信ずるは前生業に因るを示す。

第十四、船等喩品。良船、熟瓶、助力者等の譬喩により般若に依附して菩提を證するを說く。

第十五、如來品。新學の般若習學を說き利他の爲に精進する相を示し、善現も如來も不二なるを云ふ。

第十六、不退品。菩薩如何なる誘惑障難に逢ふも魔事として惑はざるは受記不退轉菩薩たるの相なり。

第十七、貪行品。般若相應の義處を明し、その精進修行して得る功德の殊勝を說き、後に諸法の實性實相を明す。品名は貪行人の千思百端なるを喩とするが故なり。

第十八、姉妹品。天女の金花供養は釋迦の燃燈佛を供養し受記するに倣へる因緣を說き、般若を修し衆生を成就するに急にして實際を證せざるを論ず。

第十九、夢行品。不退轉の菩薩の相を明し、次に退轉相を說く。

第二十、勝意樂品。菩薩勝意を以て無上菩提を證せんとせば善友に親近すべく般若相應の作意に安住すべきを說く。

第二十一、修學品。惡魔の擾亂を陳ねて、一切學の究竟は唯般若行學にあるを明す。

第二十二、根栽品。般若は一切波羅蜜を攝受し、隨喜功德の大なるを說き、甚深不可得にして能く魔障を離れ諸佛の稱揚を蒙るを示す。

第二十三、付囑品。慇懃に阿難に般若の受持を付囑す。

第二十四、見不動佛品。佛力を以て不動如來の大衆に開示するゝを示すが故に名づくるも、重ねて般若修學相を說き般若の無量引發たるを明し、克く諸佛に護念せらるゝを述ぶ。

以上二十四品般若を廣說して正法を信奉すれば般若無所得自在の生活に大歡喜し大活躍するを說く、即ち廣說なりと雖も前四會に比すれば頗る集約せられたる骨子のみなるを見る。

第三表 大般若五会比較

[illegible]

一九六—一九九	七常啼菩薩	
一九九、二〇〇	大法涌菩薩	
二〇〇	九結	

註

(3) [illegible]

(4) 第四会、第五会が前会の舎利子〔illegible〕を欠如する。

(5) 第四会如行〔illegible〕(第五会、

[illegible]

(7) 〔illegible〕分よりも此品に辺釈義を細説してある

(8) 第七 275—278b 日、三 451—45b 〔illegible〕(日、八 452—456) 〔illegible〕

(9) 第四会、第五会が以下の所説に近き略

(10) 第二会以下の諸会は倶に初会の常啼〔illegible〕

る。然れども〔illegible〕般若〔illegible〕

(11) 随順般若が細説してある。〔illegible〕にして縁起観と般若智相観と〔illegible〕結合である。〔illegible〕

[illegible]

第七表　大品諸譯比較

A. Pañcaviṃśatisāhasrikā P.

B. 大般若

C. 摩訶般若(什譯)

Parivarta I. [illegible]
(Ut Nidāna)

第十表　小品諸本比較（一）

(A) 道行（古 大）1(224帖入425〜429.3)

(B) 明度（古 日）（古 大）1(225帖入478〜482)

(C) 般若鈔(長安品)

[illegible]

第五分善現品第一[一]

是の如く我れ聞きぬ、一時薄伽梵、[二]王舍城の鷲峰山の頂に住りたまへり、[三]大苾芻衆萬二千人と倶なりき。皆[四]阿羅漢にして具壽善現舍利子等而かも上首爲り、[五]阿難陀の獨り學地に居せるをば除く。復た無量無數の[六]菩薩摩訶薩の無礙辯を得たる有り、慈氏菩薩妙吉祥菩薩等而かも上首爲り。[七]爾の時世尊、善現に告げて曰はく、汝辯才を以て當に菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示し諸の菩薩摩訶薩衆をして般若波羅蜜多を修行して速に成辦することを得せしむべしと。時に舍利子是の念言を作さく、具壽善現は[八]自力を以て諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示すと爲すや、是れ如來威神の力なりと爲すやと。[九]爾の時善現、舍利子の心の所念を知り便ち之に告げて言はく、諸佛の弟子の宣示する所有るは皆是れ如來威神の力なり。何を以ての故に、舍利子、[一〇]佛は弟子の爲に法要を宣示す、彼れ佛の教に依りて精勤修學して乃至諸法の實性を證得し、證し已て他の爲に宣示する所有るに若し法性と能く相違せずんば皆是れ如來威神の教す所なり。亦た是の所說は法性の[一一]等流なり。是の故に我れ當に諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多を宣示すべきは皆是れ如來威神の力なりと。爾の時善現佛に白して言さく、世尊、便ち我れ諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示し諸の菩薩衆をして般若波羅蜜多を修行して速に成辦することを得せしめん。世尊、言ふ所の諸の菩薩とは何の法の[一二]增語を爲れ菩薩なりと謂ひたまふや。世尊、我れ法の菩薩摩訶薩と名づく可き有るを見ず亦た法の般若波羅蜜多と名づく可き有るを見ず。世尊、我れ、菩薩及び菩薩の法に於て見ず得ず亦復た般若波羅蜜多を見ず得ざるなり。云何が我れをして諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示せしめたまふや。世尊、我れ何等の菩薩摩訶薩に教へて何等の般若波羅蜜多を

【一】前四會に對す。第五會なり、善現(須菩提)、佛力によりて般若を說示する故に善現品と云ふ。
【二】王舍城等。前四分と同じく王舍城鷲峰山を會處とす。
【三】大苾芻衆。第四分は比丘衆千二百五十人倶とせり。
【四】應供の聖者。須菩提舍利弗以下の人々をす。
【五】阿難陀等。阿難陀は世尊の常侍なるため無學地に自由人とならざるなり。
【六】無礙辯等。法義詞辯に通じたる研學奉仕の大人のみなり。彌勒文殊以下の人々なり。
【七】佛。善現の辯才を以て大衆に般若を宣示せしむ。
【八】自力。般若は諸緣相應に動く、如來實相に從ふ、既に自性なし、故に自力なし。
【九】善現の宣示する所は如來威神の力なるを明す。
【一〇】佛力他力に依るは、佛說の法、要に具ふるが故に、教によりて勤學するが故に、法性と相應するが故なり。故に又法性相應の語は悉く佛說となる。
【一一】等流。等は等同、流は流類なりともいふ、一類のものが同じき一類に相續すること。
【一二】增語。分別し假名し數

修行して速に成辦せしめんや。世尊、菩薩摩訶薩是の語を說くを聞きて[一三]心沈沒せず亦た退屈無く驚かず怖かず說の如にして住し般若波羅蜜多を修行せば是の菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜多行りて速に成辦せしむべし。若し執する所無くんば卽ち是れ般若波羅蜜多なり。[一四]復た次に世尊、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行せんには應に是の如く學すべし、謂ゆる是れ菩薩の心なりとして執著せずと。何を以ての故に、是の[一五]心非心の本性淨なるが故なりと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、是の心非心の性有りと爲すや不やと。善現反て舍利子に問ふて言はく、心非心性の若しは有若しは無得可しと爲すや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。善現便ち舍利子に語て言はく、心非心性の若しは有若しは無既に得可からず、如何が是の心非心の性有りと爲すや不やと問ふ可けんと。[一六]時に舍利子、善現に問ふて言はく、何等をか名づけて心非心の性と爲すやと。善現答へて言はく、若し變壞無く亦た分別無くんば是れ則ち名づけて心非心の性と爲すと。時に舍利子、善現を讃めて言はく、善哉善哉、誠に所說の如し、佛は仁者（きみ）の[一七]無諍定に住せるを最も爲れ第一なりと說きたまへり、實に聖の言の如し。若し菩薩摩訶薩是の語を說くを聞きて心沈沒せず亦た退屈無く驚かず怖かず說の如くにして住し般若波羅蜜多を修行せば是の菩薩摩訶薩は已に無上正等菩提に於て不退轉を得たるなり。若し菩薩摩訶薩是の如く心非心の性を觀察せば是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を離れざるなり。若し諸の有情、或は聲聞地或は獨覺地或は菩薩地を勤め修學せんと欲せば皆般若波羅蜜多に於て應に常に聽聞し受持讀誦し善く通利せしめ說の如く修行すべし。所以は何ん、此の般若波羅蜜多甚深の教の中に於ては一切の學ぶべき所の法を廣說すればなり。諸の菩薩摩訶薩此の般若波羅蜜多に於て精勤し修學せば一切處に於て皆善巧なることを得んと。[一八]爾の時善現復た佛に白して言さく、我れ菩薩の心に於て知らず亦た得ず、我れ菩薩摩訶薩衆に於て及び般若波羅蜜多に於て倶に實事の得可き有るを見ず、云何が我れをして諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示せしめたまふや。世尊、

衍するを云ふ。

【一三】心沈沒等。菩薩なく般若なしとせば怯弱のものは虛無に墮し昏く沈み行くを心沈沒と云ふ。

【一四】般若修學の法を明す。

【一五】心非心等。菩薩の心とか心に非ずとか二法分別なく執着なく緣起するが本性淨なり。

【一六】心非心の性を明す。

【一七】無諍定。空、無相、無願三昧に住するなり。

【一八】善現の問ひは一切法無所有不可得なるに云何が般若を宣示すべきやとなり。

我れ一切を觀ずるに若しは生若しは滅若しは染若しは淨都て得可からず、而かも其の中に於て菩薩般若の名等[19]有りと說かば便ち疑悔有り。世尊、菩薩等の名は俱に決定無く亦た住處無し。所以は何ん、菩薩の名等は都て所有無く、無所有の法は定無く住無ければなり。若し菩薩摩訶薩是の事を說くを聞きて心沈沒せず亦た退屈無く驚かず怖かずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は決定して不退轉地に安住すと[20]無所住を以て而かも方便の爲に無所住に住するなりと。[21]復た次に世尊、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるに色に住すべからず亦た受想行識に住すべからず。所以は何ん、若し色に住せば便ち[22]色行を作すなり。深般若波羅蜜多を行ずるに非ず、若し受想行識に住せば便ち受想行識行を作す、深般若波羅蜜多を行ずるに非ざればなり。所以は何ん、[23]行を作す者は能く般若波羅蜜多を攝受するに非ざればなり。若し般若波羅蜜多を攝受すること能はずんば則ち般若波羅蜜多を修習すること能はず。若し般若波羅蜜多を修習すること能はずんば則ち般若波羅蜜多を圓滿すること能はず。若し般若波羅蜜多を圓滿すること能はずんば則ち一切智智を成辦すること能はず。若し一切智智を成辦すること能はずんば便ち益する所の有情を益すること能はず。所以は何ん、色は受想行識を攝受すべからず亦た般若波羅蜜多を攝受す可からず亦た色を攝受すべからざればなり。攝受す可からざるが故に卽ち色に非ず、受想行識も亦た攝受す可からざるが故に卽ち受想行識に非ず、般若波羅蜜多も亦た攝受す可からざるが故に便ち般若波羅蜜多に非ず。諸の菩薩摩訶薩は應に是の如く甚深般若波羅蜜多を學すべし。若し是の如く甚深般若波羅蜜多を學せば是れを菩薩の無所攝受三摩地輪廣大にして資具無量無出なりと名づく。一切の聲聞獨覺の引奪する所と爲らず亦た一切智智を攝受せず。所以は何ん、是の一切智智は相を取りて修するに非ざればなり。[24]諸の取相を得る者は皆是れ煩惱なり。[25]若し一切智智を取りて修得する者は則ち[26]勝軍梵志なり。一切智智に於て信解すべからず。是の勝軍梵志は信解力もて佛法に歸趣せるに由り[27]隨信行と名づくと雖も而かも能く少

【一九】菩薩とか般若とかゝ實有なるが如くするを云ふ。

【二〇】無所住等。所住なきに不退に住すと云ふは無所住に住すと假說するもの、方便なり進化を云ふなり。

【二一】菩薩の無所攝受を明す。

【二二】色行。物を目的として動く、物的動作にして、般若行、度世行、眞實行にあらず。

【二三】行を作す。色行等、有爲を執て分別に住するなり。

【二四】取相分別は妄想なり、惑なり、惱害たるのみ。

【二五】勝軍梵志の隨信行を明す。

【二六】勝軍梵志(Śrenika)。室哩尼迦、西儞迦、世尼、先尼、仙尼、先仁などと音寫し、勝軍、有軍など譯さる。初め大戒行者にて Puṇṇa Koliyaputta といふ牛戒行者と共に Koliya の Haliddavasana に住み、そこにて佛陀に會ひ、佛を信じ四ケ月の別住を經て比丘となり、信解に依つて一切智智に悟入す

【二七】隨信行。廿七賢聖の一、隨法行の對、他の知識の敎を聞信してその敎の如く修業する義。

分の智を以て一切の法性空を觀じ一切智智に悟入す。旣に悟入し已て[二八]色相を取らず亦た受想行識相を取らず、喜樂の觀を以て此の智を見ず、聞くを得る觀を以て此の智を見ず、內色觀を以て此の智を見ず、外色觀を以て此の智を見ず、內外色觀を以て此の智を見ず亦た色觀を離れて此の智を見ず、內受想行識觀を以て此の智を見ず、外受想行識觀を以て此の智を見ず、內外受想行識觀を以て此の智を見ず亦た受想行識觀を離れて此の智を見ず。勝軍梵志は是の如き等の諸の離相門もて一切智智に於て深く信解を生ずるを以て隨信行と名づけ一切法に於て皆取著無し。是の如く梵志は離相門を以て一切智智に於て信解を得已て一切法に於て皆相を取らず亦た無相の諸法を思惟せず。是の如く梵志は勝解力に由りて一切法に於て取らず捨てず得る無く證する無し。時に後の梵志は自らの信解乃至涅槃に於ても亦た取著せず、眞の法性を以て[二九]定量と爲すが故なり。世尊、是の菩薩摩訶薩の甚深般若波羅蜜多は色を攝受せず亦た受想行識を攝受せず、諸法に於て攝受する所無しと雖も若し未だ如來の十力四無所畏四無礙解及び十八佛不共法等を圓滿せざるには終に中道にして般涅槃に入らず。當に知るべし是の如き諸の菩薩摩訶薩の甚深般若波羅蜜多は取著無しと雖も而かも能く一切智智を成辦して一切有情を利益安樂すと。復た次に世尊、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるには應に是の如く觀ずべし。何をか般若波羅蜜多と謂ひ、是れ誰れの般若波羅蜜多なるか。若し法所有無く得可からずんば是れ般若波羅蜜多なり耶。無所有の中彼れ無く此れ無くして何れの所にか繫屬すると。世尊、若し菩薩摩訶薩是の如きの事に於て審に觀察する時心沈沒せず退屈無く驚かず怖かずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を離れずと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、何の因緣の故に色は色性を離れ受想行識は受想行識性を離れ般若波羅蜜多は般若波羅蜜多性を離れて而かも菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を離れずと說くやと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、色は色性を離れ受想行識は受想行識性を離れ般若波羅蜜多は般若波羅蜜多性を離れ、是の如き諸

【二八】色相等。欲界相。色界相等一切の分別取相を列ぬ。

【二九】定量。標準の義にして、取相定執するにあらず。

の法相も亦た性を離れ、性も亦た相を離れ、相も亦相を離れ性も亦た性を離れ、能相所相共に得可からず。若し菩薩摩訶薩の能く如實に是の如きの義を知る者は般若波羅蜜多を離れざるなりと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、若し菩薩摩訶薩此の中に於て學せば速に能く一切智智を成辦する耶と。善現答へて言はく、是の如し是の如し、若し菩薩摩訶薩此の中に於て學せば速に能く一切智智を成辦す。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は一切法生滅無しと知るが故なり。舍利子、若し菩薩摩訶薩能く是の如く行ぜば則ち一切智智に隣近すと爲す。[三〇]復た次に舍利子、諸の菩薩摩訶薩若しは色を行ずるを行相と爲し、若しは色生を行ずるを行相と爲し、若しは色壞を行ずるを行相と爲し、若しは色滅を行ずるを行相と爲し、若しは色空を行ずるを行相と爲し、若しは我れ能く是の行を行じて所得有りと謂ひ、若しは受想行識を行ずるを行相と爲し、若しは受想行識生を行ずるを行相と爲し、若しは受想行識壞を行ずるを行相と爲し、若しは受想行識滅を行ずるを行相と爲し、若しは受想行識空を行ずるを行相と爲し、若しは我れ能く是の行を行じて所得有りと謂ひ、若しは菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、我れは是れ菩薩にして能く般若波羅蜜多を行ずと、是れを行相と爲す。若しは菩薩摩訶薩是の如き念を作さん、能く是の如く行ずる者は是れ般若波羅蜜多を作行するなりと、亦た行相と爲す。當に知るべし是の菩薩は方便善巧無しと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、諸の菩薩摩訶薩は當に云何が行ずるを般若波羅蜜多を行ずと名づくるやと。善現答へて言はく、諸の菩薩摩訶薩若し色を行ぜず色相を行ぜず色生を行ぜず色壞を行ぜず色滅を行ぜず色空を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。諸の菩薩摩訶薩若し受想行識を行ぜず受想行識相を行ぜず受想行識生を行ぜず受想行識壞を行ぜず受想行識滅を行ぜず受想行識空を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し菩薩摩訶薩行を取らず不行を取らず亦行亦不行を取らず非行非不行を取らず、不取に於ても亦た取らずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。何を以ての故に、舍利子、

【三〇】般若の行相を明す。

一切法は皆取る可からず隨行す可からず執受す可からざればなり。性相を離るゝを以ての故に。是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩一切法に於て無生定輪廣大にして資具無量無出なりと爲す一切の聲聞獨覺と共ならず。若し菩薩摩訶薩此の定に安住せば疾く無上正等菩提を證するなりと。爾の時善現、佛の神力を承け復た大德舍利子に告げて言はく、若し菩薩摩訶薩此の定に安住すと雖も而かも此の定を見ず亦た此の定に著せず亦た念言を作さず、我れ此の定に於て[三一]已正當に入ると。彼れ是の如き等の思惟分別此の定力に由りて一切起らずんば當に知るべし已に過去の如來應正等覺に無上正等菩提不退轉の[三二]記を授與せられたるなりと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、若し菩薩摩訶薩此の定に住するに由りて已に過去の諸佛世尊に現前に授記せらるとせば是の菩薩摩訶薩は能く是の如き定を顯示すと爲すや不やと。善現答へて言はく、不なり舍利子、何を以ての故に、是の善男子は是の如き定に於て知る無く想ふ無ければなりと。舍利子言はく、其善彼の諸の善男子は是の如き定に於て知る無く想ふ無しと說く耶と。善現報へて言はく、我れ定めて彼の諸の善男子は是の如き定に於て知る無く想ふ無しと說く。所以は何ん、是の如き諸定は所有無きが故に、彼の善男子は是の如き定に於て知る無く想ふ無きなり。是の如き諸定は一切法に於ても亦た知る無く想ふ無し。所以は何ん、一切法は所有無きを以ての故なりと。[三三]時に薄伽梵、善現を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し。故に我れ汝は無諍定に住して最も爲れ第一なりと說けり。諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を學せんと欲せば應に是の如く學すべし。若し是の如く學せば般若波羅蜜多を學すと名づくと。[三四]時に舍利子便ち佛に白して言さく、若し菩薩摩訶薩能く是の如く學せば眞に般若波羅蜜多を學すと名づくる耶と。佛、舍利子に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩能く是の如く學せば眞に般若波羅蜜多を學すと名づくと。時に舍利子復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩是の如く學する時何の法に於て學するやと。佛、舍利子に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩是の如く學する時法に於て學す

【三一】已正當に入る。已に定に入り正しく定に入り當に定に入るべしと分別するなり。

【三二】記を授與。成佛を豫約されたるなり。

【三三】佛、善現の所說を印可し、般若修學の法を說く。

【三四】舍利弗。如法般若に就て佛に問ふ。

るに非ず。何を以ての故に、舍利子、諸の愚夫異生の執する所の如く一切法は是の如く有るに非ざるが故なりと。時に舍利子復た佛に白して言さく、若し爾れば諸法は如何して而かも有るやと。佛、舍利子に告げたまはく、無所有の如く是の如くして有り。若し是の如き無所有の法に於て了達すること能はずんば說いて[35]無明と爲す。愚夫異生は一切法の無所有性に於て無明貪愛して勢力を增長し[36]斷常二邊に分別し執著す。此れに由りて諸法の無所有性を知らず見ずして諸法を分別す。分別するに由るが故に便ち執著を生ず。執著するに由るが故に諸法の無所有性を分別す。此れに由りて法に於て見ず知らず。諸法に於て見ず知らざるを以て過去未來現在を分別す。分別するに由るが故に[37]名色に貪著す。名色に著するが故に無所有法を分別し執著す。無所有法に於て分別し執著するが故に[38]如實道に於て知らず見ず三界の生死より出離すること能はず、[39]諸法を信ぜず實際に覺らず是の故に愚夫の數中に墮在す。斯れに由りて菩薩摩訶薩衆は法の性相に於て都て執著無しと。時に舍利子復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は是の如く學する時豈に一切智智を求め學せざるやと。佛、舍利子に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は是の如く學する時亦た一切智智を求め學せず、然かも諸の菩薩是の如く學する時學する所無しと雖も而かも實に一切智智を學して速に能く一切智智を成辦すと名づくと。[40]爾の時具壽善現便ち佛に白して言さく、世尊、設ひ人有り來りて是の如き問ひを作さん、幻士若し一切智智を學せば彼れも亦た能く一切智智を成辦するや不やと。我れ此の問ひを得ば當に云何が答ふべきと。佛言はく、善現、我れ還て汝に問はん、汝が意に隨て答へよ。意に於て云何、幻は色受想行識に異るや不やと。善現答へて言はく、幻は色に異らず色は幻に異らず、幻は卽ち是れ色色は卽ち是れ幻なり、受想行識も亦復た是の如しと。[41]佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、五取蘊中想等の想を起し言說を施設して假りに菩薩摩訶薩と名づくるや不やと。善現對へて曰く、是の如し世尊と。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩の無上正等菩提

【三五】無明。大煩惱地法の一。すべて事理に闇き精神作用を云ふ、癡煩惱のこと。眞に生くる道に通曉せぬこと。

【三六】斷常二邊。邊とは中道を離れて一方に傾くを云ふ。斷常には斷見と常見。斷見とは我身を觀じて一度死すればそのまゝ斷滅して生ずることなしと執著する妄見、常見とは世界は永久不變なると共に我身また死すとも再び生れて無窮に今の狀態にて相續すと執著する妄見なり。

【三七】名色。受想行識法と色法。主と客、心法と質礙法。心と物。

【三八】如實道。眞に生くる進み。

【三九】諸法。眞理、實相、眞正の生活。

【四〇】善現。幻實の區別に就て問ふ。

【四一】佛。幻實の區別すべきなきを說く。

を求趣して般若波羅蜜多を修學するは一切皆幻士の修學するが如し。何を以ての故に、幻士は卽ち是れ五取蘊なるが故なり。所以は何ん、我れは五蘊、眼等の六根皆幻化の如く都て實有に非ずと說けばなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し菩薩摩訶薩の新に大乘を學するもの是の如き說を聞きて其の心將に驚怖退屈無きやと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩の新に大乘を學するもの惡友に親近して是の如き說を聞かば心便ち驚怖して則ち退屈を生ぜん。若し善友に近づかば此の說を聞くと雖も而かも驚怖せず亦た退屈無しと。[四二]具壽善現復た佛に白して言さく、何等をか名づけて菩薩の惡友と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩の惡友とは謂ゆる菩薩に教へて般若波羅蜜多を厭離し菩提心を捨てて諸の法相を受らしめ、相を取る世俗の書典を學せしめ、聲聞相應の經法を學せしめ、又た衆の魔の事業に習近せしむる、此れ等を名づけて菩薩の惡友と爲すと。具壽善現復た佛に白して言さく、何等をか名づけて菩薩の善友と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩の善友とは謂ゆる菩薩に教へて般若波羅蜜多を勸修せしめ乃至爲に魔事魔過を說き其れをして覺知せしめて方便して棄捨する、此れ等を名づけて新學菩薩の大誓莊嚴眞淨の善友と爲すと。[四三]具壽善現復た佛に白して言さく、菩薩と言ふは是れ何の句義なるやと。佛、善現に告げたまはく、一切法の著無く礙無きを學し、一切法の著無く礙無きを覺りて菩提を求證するが故に菩薩と名づくと。具壽善現復た佛に白して言さく、此れ復た何に緣りて摩訶薩と名づくるやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩は大有情衆の中に於て當に上首爲るべきを以ての故に復た摩訶薩と名づくと。[四四]時に舍利子便ち佛に白して言さく、我れ今摩訶薩の義を說かんことを樂ふ、唯だ願くは聽許したまへと。佛、舍利子に告げたまはく、汝が意に隨つて說けと。舍利子言さく、諸の菩薩方便善巧して諸の有情の爲に法要を宣說して我見有情見命者見補特伽羅見有見無見斷常の見を斷ぜしむるを以て是の如きの義に依りて摩訶薩と名づくと。爾の時善現も亦た佛に白して言さく、我れ今摩訶薩

【四二】菩薩の惡友。善友を明す。

【四三】佛。菩薩及び摩訶薩の義を明す。

【四四】舍利子。善現、滿慈子相互に摩訶薩の義を述ぶ。

の義を說かんことを樂ふ、唯だ願くは聽許したまへと。佛、善現に告げたまはく、汝が意に隨つて說けと。善現白して言さく、諸の菩薩は菩提心、[四五]無等等心、聲聞獨覺の引くこと能はざる心を發し、是の如き心に於ても亦た執著せず。所以は何ん、一切智の心は是れ[四六]眞無漏にして三界に墮せず中に於て執著を生ずべからざるを以て、是の如きの義に依りて摩訶薩と名づくと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、何の因緣の故に是の如きの心に於ても亦た執著せざるやと。善現答へて言はく、是の如き諸心は心性無きが故に執著すべからずと。時に滿慈子も亦た佛に白して言さく、我れ今摩訶薩の義を說かんことを樂ふ。唯だ願くは聽許したまへと。佛、[四七]滿慈子に告げたまはく、汝が意に隨つて說けと。滿慈子言はく、諸の菩薩は普ねく一切有情を利樂せんが爲に[四八]大願の鎧を被るを以ての故に、大乘を發趣するが故に、大乘に乘るが故に摩訶薩と名づくと。[四九]爾の時善現便ち佛に白して言さく、世尊の、諸の菩薩摩訶薩は大願の鎧を被ると說きたまふが如き幷しく何すれぞ諸の菩薩摩訶薩は大願の鎧を被ると言ふやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は是の如き心を作す、我れ應に無量無數無邊の有情を度脫して[五〇]無餘依般涅槃界に入らしむべしと。是の事を作すと雖も而かも法及び諸の有情の涅槃を得る者有ること無し。何を以ての故に、諸法の實性[五一]法爾に爾るべきが故なり。譬へば幻師或は彼の弟子四衢道に於て大衆の互に相加害するを化作するが如し、意に於て云何、此の中實に相害する事有りや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩も亦復た是の如し、現に無量無數無邊の有情を度脫して無餘依般涅槃界に入らしむと雖も而かも法及び諸の有情の涅槃を得る者有ること無し。若し菩薩摩訶薩是の如きの事を聞きて驚かず怖かず亦た退屈無くんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は大願の鎧を被たるなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば諸の菩薩摩訶薩の大願の鎧を被ざるを、當に知るべし是れを大願の鎧を被ると爲すと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如

【四五】無等等心。無等等とは無比無等最上の義、即ち佛なり。

【四六】眞無漏。二乘の無漏智は何ほ法執及び所知障がある が、佛菩薩の無漏智はこれ等をすべて離るゝが故に眞無漏と云ふ。

【四七】滿慈子。富樓那(Pūrṇa)の譯、佛十大弟子の一、說法第一と稱せらる。

【四八】大願の鎧。四弘誓願を充實するを云ふ。

【四九】菩薩有情を饒益せんが爲に大乘に發趣して大願の鎧を被るを明す。

【五〇】無餘依般涅槃。四涅槃の一。煩惱障を斷じて得たる涅槃、即ち灰身滅智したる處に顯はるゝ涅槃を云ふ。

し、所以は何ん、一切智智は造無く作無く、一切有情も亦た造無く作無ければなり。諸の菩薩摩訶薩は彼の有情を饒益せんと欲するが爲の故に大願の鎧を被る。所以は何ん、色は造に非ず不造に非ず作に非ず不作に非ず、受想行識も亦た造に非ず不造に非ず作に非ず不作に非ざればなり、何を以ての故に、色乃至識は得可からざるが故なりと。具壽善現復た佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば色乃至識は染無く淨無し。所以は何ん、色は縛無く脫無く、受想行識も亦た縛無く脫無ければなりと。時に滿慈子、善現に問ふて言はく、尊者、色は縛無く脫無しと說き、受想行識も亦た縛無く脫無しと說く耶と。善現答へて言はく、是の如し是の如しと。滿慈子言はく、何等の色縛無く脫無しと說き何等の受想行識も亦た縛無く脫無しと說く耶と。善現答へて言はく、幻士の如く色は縛無く脫無しと說き、幻士の如く受想行識も亦た縛無く脫無しと說く。所以は何ん、色乃至識は無所有の故に縛無く脫無く、遠離の故に縛無く脫無く、寂靜の故に縛無く脫無く、生滅無きが故に縛無く脫無し。是れを菩薩大乘に發趣して大願の鎧を被ると名づくと。時に滿慈子、是の如き說を聞き歡喜して信受し默然として住す。[五二] 爾の時善現便ち佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩大乘を發趣するは云何が大乘にして云何が菩薩は大乘を發趣するや。是の如き大乘は何處より出でて何處に至りて住まるや、誰れか復た是の大乘に乘りて出づるやと。佛、善現に告げて言はく、大乘とは卽ち是れ無量無數の增語なり、無邊の功德共に成ずる所なるが故に。云何が菩薩は大乘を發趣するやとは謂ゆる諸の菩薩は六種波羅蜜多を勤修して能く一地より進みて一地に趣く、是れを菩薩大乘を發趣すと名づく。是の如き大乘は何處より出で何處に至りて住まるやとは謂ゆる此の大乘は三界の中より出で一切智智の中に至りて住まる、然かも無二を以て方便と爲すが故に出づる無く住まる無し。誰れか復た是の大乘に乘りて出づるやとは都て是の大乘に乘りて出づる者無し。所以は何ん、能乘所乘是の如き二法は倶に所有無ければなり。無所有の中誰れか乘り何の法か乘る者と名

【五二】大乘の義を明す。

づく可けんと、具壽善現復た佛に白して言さく、是の如き大乘は普ねく一切世間の天人阿素洛等に勝る。是の如き大乘と虚空とは等し。譬へば虚空の普ねく能く無量無數無邊の有情を容受するが如く、大乘も亦た爾なり普ねく能く無量無數無邊の有情を容受す。又た虚空の來る無く去る無く住りて見る可き無きが如く大乘も亦た爾なり來る無く去る無く住りて見る可き無し。又た虚空の[五二]前後中際皆得可からざるが如く大乘も亦た爾たり前後中際皆得可からず。三世平等なるが故に大乘と名づくと。佛、善現に告げたまはく、善哉善哉、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。時に滿慈子、便ち佛に白して言さく、世尊、先に大德善現をして諸の菩薩摩訶薩衆の爲に般若波羅蜜多を宣示せしめたまへり、而るに今何が故ぞ乃ち大乘を說けるやと。爾の時善現卽ち佛に白して言さく、我れ大乘を說くも將に所說の般若波羅蜜多に違越する無からんと。佛、善現に告げたまはく、汝大乘を說くは皆般若波羅蜜多に順じて違越する所無しと。具壽善現復た佛に白して言さく、我れ都て前際後際中際の菩薩を得ず、色無邊なるが故に菩薩も亦た無邊、受想行識無邊なるが故に菩薩も亦た無邊なり、色に卽し色を離れし菩薩は所有無く得可からず、受想行識に卽し受想行識を離れし菩薩も亦た所有無く得可からず。是の如く世尊、我れ此れ等一切法に於て一切種一切處一切時を以て諸の菩薩を求むるも都て見る所無く竟に得可からず、云何が我れをして諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多を宣示せしめたまふや。[五三]復た次に世尊、菩薩と言ふは但だ假りの名のみ有りて都て自性無し。我れ等畢竟不生にして但だ假りの名のみ有りて都て自性無しと說くが如く、諸法も亦た爾なり、畢竟不生にして但だ假りの名のみ有りて都て自性無し。此の中何等か是れ色にして畢竟不生なる、若し畢竟不生なれば則ち色と名づけず。何等か是れ受想行識にして畢竟不生なる、若し畢竟不生なれば則ち受想行識と名づけず。世尊、色是れ菩薩に得可からず受想行識是れ菩薩も亦た得可からず。此の不可得も亦た得可からず。我れ是の如き一切法に於て一切種一切處一切時を以て諸の菩薩を求むるに皆

【五二】前後中際、三際なり、三世に同じ。卽ち過去、未來、現在の稱。

【五三】一切法畢竟不生、無自性にして但だ假名のみ有ることを明す。

得可からず。當に何等の法を教へ何等の法を修して何等の時に於て何等の法を證すべきや。復た次に世尊、諸の佛菩薩甚深般若波羅蜜多は但だ假りの名のみ有りて都て自性無し。我れ等畢竟不生にして但だ假りの名のみ有りて都て自性無しと說くが如く諸法も亦た爾なり、但だ假りの名のみ有りて都て自性無し。何等か是れ色にして既に取る可からず亦た生ず可からざる、何等か是れ受想行識にして既に取る可からず亦た生ず可からざる。若し法無性にして亦た生ず可からずんば此の無生法も亦た生ず可からず。我れ豈に能く畢竟不生の甚深般若波羅蜜多を以て畢竟不生の菩薩摩訶薩に教へんや。世尊、不生法を離れて法の得可き無く亦た菩薩の能く無上正等菩提を行ずる無し。世尊、若し菩薩摩訶薩是の語を說くを聞きて驚かず怖かずんば當に知るべし是の菩薩摩訶薩は能く深般若波羅蜜多を行ずと。所以は何ん、若し時に菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて諸法を觀察せば、是の時菩薩摩訶薩は卽ち色を取らず。所以は何ん、色無生なれば卽ち色に非ず、色無滅なるも亦た色に非ざればなり。既に無生無滅なれば卽ち二無く別無し、若し色を說くも卽ち無二の法數に入る。若し時に菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて諸法を觀察せば、是の時菩薩摩訶薩は卽ち受想行識を取らず。所以は何ん、受想行識無生なれば卽ち受想行識に非ず、受想行識無滅なるも亦た受想行識に非ざればなり。既に無生無滅なれば卽ち二無く別無し、若し受想行識を說くも卽ち無二の法數に入ると。時に舍利子、善現に謂て言はく、我れ仁の所說の義を領解するが如くんば諸の菩薩等は畢竟生ぜず、若し爾れば何に緣りて諸の菩薩有りて無量無數の有情を度せんが爲に多百千の難行苦行を修して備さに無量の生死の大苦を受くるやと。善現報へて言はく、我れ彼の無生法の中に於て菩薩有り無量無數の有情を度せんが爲に多百千の難行苦行を修して備さに無量の生死の大苦を受くるを許すに非ず。然かも諸の菩薩は此の事を爲すと雖も而かも其の中に於て苦行想無し。何を以ての故に、舍利子、若し苦行に於て苦行想を作さば無邊の有情を饒益すること能はざればなり。是の

故に菩薩は諸の苦行に於て樂行想を作し行じ難き行に於て易行想を作し、諸の有情に於て父母及び己身想を作し、彼れを度せんが爲の故に菩提心を發し、此れに由りて乃ち能く大饒益を作す。爾の時菩薩是の思惟を作す、我が自性は一切法に於て一切種一切處時を以て求むるも得可からざるが如く内外の諸法も亦復た是の如し、都て無所有にして皆得可からずと。若し此の想に住せば便ち難行苦行有るを見ず、此れに由りて能く無邊の有情の爲に多百千の難行苦行を修し有情類の與に大饒益を作すと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、是の諸の菩薩は實に生ずる無きや不やと。善現答へて言はく、是の如し是の如し、一切の菩薩は皆實に生ずる無しと。舍利子言はく、但だ菩薩のみ實に是れ無生なりと爲すや一切智も亦た實に無生なりと爲すやと。善現答へて言はく、此の一切智も亦た實に無生なりと。舍利子言はく、但だ一切智のみ實に是れ無生なりと爲すや諸の[五四]異生類も亦た無生なりと爲すやと。善現答へて言はく、諸の異生類も亦た實に無生なりと。舍利子言はく、若し諸の菩薩皆實に無生ならば諸の菩薩法も亦た應に無生なるべし。若し一切智實に是れ無生ならば一切智法も亦た應に無生なるべし。若し異生類實に是れ無生ならば異生類法も亦た應に無生なるべし。若し爾れば菩薩は一切智を得て應に無生法もて能く無生を證すべきやと。善現答へて言はく、我が意無生法中得有り證有るを許さず。何を以ての故に、無生法の中には證得無きが故なり。舍利子言はく、生法の生法を證するを許すと爲すや、無生法の無生法を證するを許すと爲す耶と。善現答へて言はく、我が意生法の生法を證するを許さず亦た無生法の無生法を證するを許さずと。舍利子言はく、生法の無生法を證すを許すと爲すや、無生法の生法を證するを許すと爲す耶と。善現答へて言はく、我が意生法の無生法を證するを許さず亦た無生法の生法を證するを許さずと。舍利子言はく、若し是の如くんば應に證を得ること無かるべしと。善現答へて言はく、證を得ること有りと雖も而かも實有に非ずと。舍利子言はく、未生の法生ずるを許すと爲すや、已生の法生ずるを許すと

【五四】異生。凡夫の異名。凡夫は聖者に異る生類にして、また五趣等の異類の生を受くるが故に此名あり。

爲す耶と。善現答へて言はく、我が意未生の法生ずるを許さず、亦た已生の法生ずるを許さずと。舍利子言はく、生の生ずるを許すと爲すや、不生の生ずるを許すと爲す耶と。善現答へて言はく、我が意生の生ずるを許さず亦た不生の生ずるを許さずと。舍利子言はく、仁者は所說の無生法に於て無生相を辯說するを樂ふ耶と。善現答へて言はく、我れ所說の無生法に於ても亦た無生相を辯說することを樂はずと。舍利子言はく、無生法に於て無生の言を起し此の無生の言も亦た生ずる無きや不やと。善現答へて言はく、無生法に於て無生の言を起す、此の法及び言俱に生義無し。而かも世俗に隨て無生相と說くと。[五五]時に舍利子、善現を讃めて言はく、說法人中仁を第一と爲す、佛世尊を除いて能く及ぶ者無し。所以は何ん、問詰する所に隨て種種の法門皆能く酬答すればなりと。善現答へて言はく、諸佛の弟子は一切法に於て依著する者無く、法爾として皆能く問詰する所に隨て一一酬答し自在にして畏れ無し。所以は何ん、一切法所依無きを以ての故なりと。時に舍利子、善現に謂て言はく、善哉善哉、若し諸の菩薩能く是の如く問ひに隨て答へを作すは何等の波羅蜜多の威力に由りて辦ずる所と爲すやと。善現報へて言はく、此れは是れ般若波羅蜜多の威力の辦ずる所なり。所以は何ん、一切法の依止する所無きを說くは、要らず般若波羅蜜多に由りて一切法の所依無きに達するが故なり。舍利子、若し菩薩摩訶薩是の如き語を聞きて心迷悶せず亦疑惑無くんば當に知るべし是の菩薩は能く是の如き住に住して恒に捨離せず亦た常に大悲の作意を離れずと。時に舍利子、善現に謂て言はく、若し諸の菩薩是の如き住に住して恒に捨離せず亦た常に是の如き作意を離れずんば則ち一切有情は應に是れ菩薩なるべし。所以は何ん、一切有情も亦た此の住及び此の作意に於て常に般若大悲性平等を捨離せざるが故なり。[五六]則ち諸の菩薩と諸の有情と應に差別無かるべしと。善現報へて曰はく、善哉善哉、我れを難ずるに似たりと雖も而かも我が義を成ず。何を以ての故に、舍利子、一切有情は自性無きが故に、當に知るべし是の如き住及び作意も亦た自性無しと。一切の有

【五五】善現の隨問酬答自在なるを讃じ、般若の威力の辦ずる所なることを明す。

【五六】舍利子の難意は菩薩と有情と差別なきを問ふも、答は無差別の實義なるを示す。

情は性遠離の故に當に知るべし是の如き住及び作意性も亦た遠離なりと。一切の有情に覺知無きが故に當に知るべし是の如き住及び作意も亦た覺知無しと。此の因縁に由りて是の諸の菩薩は是の如き住及び此の作意に於て常に捨離せず諸の有情と亦た差別無し。若し諸の菩薩能く是の如く住らば滯礙する所無し、是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。我が意一切の菩薩をして此の作意を以て深般若波羅蜜多を行ぜしめんと欲すと。

第五分天帝品第二一

二爾の時天帝釋は四萬の天子と倶に會に來集し、護世四天王は二萬の天子と倶に會に來集し、三索訶界の主四大梵天王は萬の梵衆と倶に會に來集し、復た五千の五淨居天衆有りて倶に會に來集す。是の諸の天衆の業果身の光、佛の威光に對するに皆悉く現ぜず。時に天帝釋、善現に白して言はく、今無量の諸の天子等有りて大德の般若波羅蜜多を宣示するを聞かんと欲す。唯だ願くは大德哀愍して說くことを爲したまへ。云何が菩薩は般若波羅蜜多に住すべきやと。爾の時善現、帝釋に告げて言はく、吾れ佛力を承けて諸の天衆の爲に般若波羅蜜多を宣示せん。諸の菩薩の應に安住すべき所の如く、汝諸天等の未だ無上菩提の心を發さゞる者は今皆應に發すべし。諸の已に聲聞獨覺の六正性離生に入れるもの有らば復た大菩提心を發すこと能はず。何を以ての故に、七憍尸迦、彼れは八生死に於て限礙有るが故なり。其の中若し能く無上正等覺の心を發すもの有らば我れも亦た九隨喜せん。何を以ての故に、憍尸迦、諸の勝人の應に勝法を求むべき有らば我れ終に他の勝善品を礙げざればなりと。爾の時世尊、善現を讃めて曰はく、善哉善哉、汝今善能く諸の菩薩に勸むと。具壽善現便ち佛に白して言さく、我れ旣に一〇恩を知りて云何が報ひざらんや、謂ゆる過去の佛及び諸の弟子は諸の菩薩に種種の法要を敎へ方便して波羅蜜多に趣入せしめたまひ、如來も爾の時亦た中に於て學し今無上正等菩提を證し妙法輪を轉じて我れ等を饒益したまへり。故に我れ今應に佛の敎に隨ひて此の諸の菩薩を攝受護念して無上菩提を證得せしめ妙法輪を轉じて一切を利樂すべし。是れ則ち名づけて彼の恩德に報ゆと爲すと。爾の時善現、帝釋に語て言はく、汝等諸天皆應に諦に聽くべし。當に汝が爲に諸の菩薩衆の深般若波羅蜜多に於て住すべき所の相を說くべし。憍尸迦、諸の菩薩衆は大誓莊嚴して大乘を發趣し應に空相を以て般若波羅蜜多に安住すべし。色に住すべからず亦

【一】天帝。天帝釋以下諸天を對告衆とするに由る。

【二】善現、諸天衆の爲に菩薩の般若に於ける住相を說く。

【三】索訶界。舊稱、娑婆界。現住世界の名、三千大千世界の通名なり、忍土と云ふ。

【四】大梵天。色界初禪天の主

【五】淨居天。色界第四禪の五天、

【六】正性離生。見道位のこと。正性とは涅槃又は聖道の義、生とは煩惱のこと、卽ち煩惱を離れたる聖道を云ふ。

【七】憍尸迦。天帝釋のことなり。

【八】生死に於て限礙等。三界の個人的分段生を脫すればよいとのみ考ふるを云ふ。此のものは全法界を大覺し大度生を願ふ能らず。

【九】隨喜。賛同すること。

【一〇】佛敎に依りて開覺せらるることに就て知恩報恩を說く。

た受想行識にも住すべからず、預流果に住すべからず亦た一來不還阿羅漢果獨覺菩提にも住すべからず、此れは是れ色なりとするに住すべからず亦た此れは是れ受想行識なりとするにも住すべからず、此れは是れ預流果なりとするに住すべからず、亦た此れは是れ一來不還阿羅漢果獨覺菩提なりとするにも住すべからず。色受想行識の若しは常若しは無常、若しは樂若しは苦、若しは我、若しは無我、若しは淨、若しは不淨、若しは空、若しは不空に住すべからず。預流果乃至獨覺菩提は皆是れ無爲の所顯是れ眞の福田にして應に供養を受くべしとして住すべからず。預流果は七返を極めて必ず入涅槃有りとして住すべからず。一來果は未だ究竟に至らざるも一たび此の間に來りて定めて衆苦を盡くすとして住すべからず。不還果は彼に往きて滅度し復た還り來らずとして住すべからず。阿羅漢果は今世に定めて無餘涅槃に入るとして住すべからず。獨覺果は聲聞地を超え佛地に至らざるも而かも般涅槃すとして住すべからず。佛は無爲の所顯是れ眞の福田にして應に供養を受くべく諸の聲聞獨覺等の地を超え無量無數の有情を利樂して無餘般涅槃界に入らしめ假使ひ一切の有情界盡きしめて亦た無餘般涅槃界に入るとするにも住すべからずと。時に舍利子、是の念言を作さく、若し爾れば菩薩は當に云何が住すべきと。爾の時善現、舍利子の心の所念を知り便ち之に謂て曰はく、意に於て云何、如來の心は何れの所に住すと爲すやと。時に舍利子、善現に語て言はく、如來の心は都て住する所無し。無所住を以ての故に如來と名づく。謂ゆる有爲界に住せず亦た無爲界に住せず亦た住せざるに非ずと。善現報へて言はく、菩薩も亦た爾なり、諸の如來の如く一切法に於て心住する所無く亦た住せざるに非ず、謂ゆる諸の菩薩は深般若波羅蜜多に於て無所得を以て方便と爲して應に是の如く住すべく應に是の如く學すべしと。[二]爾の時衆中に諸の天子有りて竊に是の念を作さく、諸の[三]藥叉等の言詞呪句は種種に差別し復た隱密すと雖も而かも我れ等の輩も猶ほ了知す可し。大德善現は深般若波羅蜜多に於て種種の言詞を以て顯示すと雖も而かも我れ等の輩竟に

【二】善現、諸天子の心の所念を知り、能く假名を壞せずして勝義の實相を說く。
【三】藥叉、卽夜叉なり。

解すること能はずと。具壽善現、諸の天子の心の所念を知り便ち彼れに告げて言はく、我れ此の中に於て說く無く示す無し、汝も亦た聞かず、當に何をか解する所あるべきと。時に諸の天子復た是の念を作さく、尊者善現は此の義の中に於て解し易からしめんと欲するも而かも轉た深細にして測量す可きこと難しと。具壽善現、彼の天子の心の所念を知り復た之に告げて言はく、諸の預流一來不還阿羅漢果獨覺菩提諸佛の無上正等菩提を證せんと欲し住せんと欲する有らば要らず[一三]此の忍に依りて乃ち能く證し住すと。時に諸の天子是の念言を作さく、大德善現は今何等の有情の爲に何等の法を說かんと欲すると。具壽善現、諸の天子の心の所念を知り而かも彼れに告げて言はく、吾れ今幻の如き有情の爲に幻の如き法を說かんと欲す。彼れ所說に於て聞く無く解する無く證する所無きが故にと。時に諸の天子復た是の念を作さく、聽法者及び法は幻の如しとや爲ん、餘の有情預流果等も亦た皆幻の如しとや爲んと。善現彼の心の所念を知り便ち之に告げて言はく、餘の有情類の若しは預流果若しは一來果若しは不還果若しは阿羅漢果若しは獨覺菩提若しは佛の無上正等菩提も亦た皆幻の如しと。時に諸の天子、善現に問ひて言はく、豈に諸の如來應正等覺所證の無上正等菩提も亦た皆幻の如くなるかと。善現答へて言はく、是の如し是の如し乃至涅槃も亦復た幻の如しと。時に諸の天子、善現に問ひて言はく、豈に涅槃も亦復た幻の如くなる可きかと。善現答へて言はく、設ひ更らに法の涅槃より勝るゝ者有らんも亦復た幻の如し、何に況んや涅槃をや。何を以ての故に、諸の天子、幻と有情及び一切法乃至涅槃と二無く別無く皆得可からず說く可からざるが故なりと。時に舍利子、[一四]執大藏、滿慈子、[一五]大飲光等[一六]慶喜に問ひて言はく、所說の般若波羅蜜多は是の如く甚深なり誰れか能く信受せんと。慶喜答へて言はく、不退轉の諸の菩薩衆有りて此の所說の甚深般若波羅蜜多に於て能く深く信受す、復た無量の正見を具足せる補特伽羅及び願滿せる諸の阿羅漢有りて此の所說の甚深般若波羅蜜多に於て亦た能く信受すと。爾の時善現是の如き言を作す、是の如

【一三】此の忍。空、無生忍なり。

【一四】執大藏。舊には摩訶拘絺羅（Mahākauṣṭhila）とありて佛の十大弟子中の一人なり。

【一五】大飲光。摩訶迦葉（Mahā-kāśyapa）の譯。釋尊敎團の長老の一。

【一六】慶喜。阿難陀なり。

き所說の甚深般若波羅蜜多は能く信受する無し。所以は何ん、此の中法の顯す可く示す可き無きが故に信受する者も亦た得可からずと。

[一七]時に天帝釋是の念言を作さく、尊者善現大法雨を雨す、我れ應に微妙の[一八]香華を化作して奉散し供養すべしと。是の念を作し已つて卽便ち微妙の香華を化作して善現の上に散ず。爾の時善現是の念言を作さく、今散ずる所の花は諸王の處に於ても未だ曾て有るを見ず、是の花の微妙なる定めて水陸の草木の所生に非ず應に是れ諸天の心より化出せるなるべしと。時に天帝釋旣に善現の心の所念を知り善現に謂て言はく、此の散ずる所の花は實に水陸の草木の所生に非ず亦た諸天の心より化出せるにも非ず、散ずる所の花は無生性なるを以ての故にと。具壽善現、帝釋に語つて言はく、此の花生ぜずんば便ち花性無しと。時に天帝釋是の念言を作さく、尊者善現は覺慧深廣にして假名を壞せずして而かも實義を說くと。是の念を作し已て善現に白して言はく、是の如し是の如し、誠に尊の敎の如し。諸の菩薩衆は諸法の中に於て應に尊者の所說に隨て學すべしと。爾の時善現、帝釋に語つて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、諸の菩薩衆は諸法の中に於て皆應に我が所說に隨つて學すべし。憍尸迦、諸の菩薩衆我が所說に隨つて深般若波羅蜜多に於て是の如く學する時は預流果に依りて學せず、一來不還阿羅漢果に依りて學せず、獨覺菩提に依りて學せず、若し此の諸地に依りて學せずんば便ち諸佛の一切智智を學するなり。若し諸佛の一切智智を學せば則ち無量無邊の佛法を學するなり。若し無量無邊の佛法を學せば則ち色受想行識の增有り減有るを學せず、若し色受想行識の增有り減有るを學せずんば則ち色受想行識の取有り捨有るを學せず。若し受想行識の取有り捨有るを學せずんば則ち一切法の攝受す可く及び滅壞す可き有るを學せず。若し一切法の攝受す可く及び滅壞す可き有るを學せずんば則ち一切智智の攝受す可く及び滅壞す可き有るを學せず。諸の菩薩衆の是の如く學する時を名づけて眞に一切智智を學して速に能く一切智智を

【一七】諸天善現に微妙の香華を散供し、善現の所說に隨て一切智智を學す。
【一八】香華を化作。實香華を用ひず、化作香華を以て幻化說を供養するなり。

證得すと爲すと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、若し諸の菩薩、一切智智の攝受す可く及び滅壞す可き有るを學せずんば、是の諸の菩薩の是の如く學する時を名づけて眞に一切智智を學して速に能く一切智智を證得すと爲す耶と。善現答へて言はく、是の如し是の如し、無所得を以て方便と爲すが故にと。[一九]爾の時天帝釋、舍利子に問ひて言はく、菩薩の學する所の甚深般若波羅蜜多は當に何れに於て求むべきやと。舍利子言はく、菩薩の學する所の甚深般若波羅蜜多は當に善現の所說の中に於て求むべしと。時に天帝釋、善現に問ひて言はく、是れ誰れの神力依持と爲るが故に舍利子をして是の如き說を作さしむるやと。善現答へて言はく、如來の神力依持と爲るが故に舍利子をして是の如き說を作さしむと。天帝釋言はく、復た誰れの神力依持と爲るが故に尊者能く甚深般若波羅蜜多を說くやと。善現報へて言はく、如來の神力依持と爲るが故に我れをして能く甚深般若波羅蜜多を說かしむ。憍尸迦、汝の問ふ所の菩薩の學する所の甚深般若波羅蜜多は當に何れに於て求むべきやとは、憍尸迦、菩薩の學する所の甚深般若波羅蜜多は色に卽して求むべからず色を離れて求むべからず、受想行識に卽して求むべからず受想行識を離れて求むべからず。何を以ての故に、色は般若波羅蜜多に非ず亦た色を離れて別に般若波羅蜜多有るに非ず、受想行識は般若波羅蜜多に非ず亦た受想行識を離れて別に般若波羅蜜多有るに非ざればなりと。[二〇]時に天帝釋、善現に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は是れ大波羅蜜多、是れ無量波羅蜜多、是れ無邊波羅蜜多なりと。善現報へて言はく、是の如し是の如し、何を以ての故に、憍尸迦、色無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと、受想行識無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと。復た次に憍尸迦、所緣無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと。憍尸迦、云何が所緣無邊なるが故に當に般若波羅蜜多も亦た無邊なりと知るべき。謂ゆる一切法の前中後際皆說き得可からざるを無邊と爲す、法無邊なるが故に所緣無邊なり。此れに由りて般若波羅蜜多も亦た無

【一九】天帝釋、般若の何れに於て求むべきやに就て舍利子、善現と問答す。

【二〇】更に般若、有情ともに無邊にして畢竟淨なるを明す。

邊なりと說く。復た次に憍尸迦、一切法無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと。憍尸迦、云何が一切法無邊なるが故に當に般若波羅蜜多も亦た無邊なりと知るべき。謂ゆる一切法の邊り[三一]得可からず、所以は何ん、色乃至識の前中後邊皆得可かざればなり。此れに由りて般若波羅蜜多の前中後邊も亦た得可からざるが故に無邊なりと說く。復た次に憍尸迦、有情無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと。憍尸迦、云何が有情無邊なるが故に當に般若波羅蜜多も亦た無邊なりと知るべき。憍尸迦、[三二]有情類は其の數甚多なるに非ず、其の邊りを計算するに得可からざるが故に說いて無邊なりと爲すと。天帝釋言はく、何の義の爲の故に是の如き說を作すやと。善現答へて言はく、我れ今汝に問はん、汝の意に隨つて答へよ。意に於て云何、有情と言ふは何の法の增語ぞやと。天帝釋言はく、有情と言ふは法の增語に非ず、但だ是れ[三三]假りに立つる客名の攝する所にして、事名の攝する所無く、緣名の攝する所無きなりと。善現復た天帝釋に告げて言はく、意に於て云何、此の中頗し眞實の有情の顯示す可き有りや不やと。天帝釋言はく、不なり大德と。善現告げて言はく、實に有情の顯示す可き無きが故に說いて無邊と爲す。憍尸迦、意に於て云何、假使ひ如來應正等覺殑伽沙數の如き大劫を經て無邊の音を以て有情類に無量の名字を說かんに此の中頗し眞實の有情有りて生滅有りや不やと。天帝釋言はく、不なり大德。何を以ての故に、諸の有情は本性淨なるを以ての故にと。善現告げて言はく、此れに由るが故に、有情無邊なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無邊なりと說く、無性甚深にして倶に無邊なるが故なりと。

卷の第五百五十七

第五分 [一]窣堵波品第三

[二]爾の時衆中の天帝釋等欲界の諸天、大梵王等色界の諸天及び餘の神仙歡喜踊躍し同時に三返高聲

【三一】この義常に錯誤す。衆生無邊とは個在多數なりと計す。個在は非有なり、空の多數を云ふべきに非ず、只限極すべからざるを無邊と云ふなり。

【三二】過誤を避くるために重ねて說意を問答す。

【三三】假りに立つる等。有情は實有に非ず、對象として假說するのみ。體空の有にして事空緣空の名にあらず、事實の進みにも諸緣の法にもあらず。

【一】窣堵波。塔婆なり般若書寫供養と舍利塔婆供養との功德比較を論ずるによる。

【二】菩薩般若を離れざれば佛の如く恭敬供養すべきを說く。

に唱へて言はく、奇なる哉奇なる哉、法性深妙にして如來出世して神通力を以て善現等に加へ宣說開示せしめたまふ。若し諸の菩薩般若波羅蜜多を離れずんば我れ等彼れに於て恭敬供養すること佛世尊の如くせんと。爾の時佛、諸天等に告げて言はく、是の如し是の如し、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を離れずんば汝諸天等皆應に供養すること佛世尊の如くすべし。天等當に知るべし、我れ往昔[三]然燈佛の時に於て蓮華王都の四衢道の首にて然燈佛に五莖の花を獻じ髮を布き泥に掩はれ正法の要を聞きて般若波羅蜜多を離れざるを見たり。時に彼の如來我が與に授記したまへり。汝來世に於て無數劫を過ぎて當に如來を成ずべし。號づけて[四]能寂と爲し、般若波羅蜜多を宣說して諸の有情の與に大饒益を作さんと。時に諸天等俱に佛に白して言さく、甚奇なり世尊、希有なり善逝、是の如き般若波羅蜜多は大威神を具し諸の菩薩をして速に能く一切智智を引攝せしむと。爾の時世尊、天帝釋を顧命して言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學して理の如く思惟し、或は復た他の爲に書寫解說せば魔及び眷屬人非人等其の短を伺求するも終に得ること能はず、災橫疾疫皆害すること能はず。若し諸の天子、已に無上正等覺の心を發せるも未だ善く甚深般若波羅蜜多を聽聞し受持讀誦せずんば皆應に是の善男子善女人の所に來至して至心に聽聞し受持讀誦し極めて通利し轉じて他の爲に說かしむべし。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學し理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說し若しは空宅曠野險道及び危難處に在らんに諸天善神常に來りて擁護し驚恐無からしめんと。時に四天王及び天帝釋梵天王等合掌恭敬し俱に佛に白して言さく、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學し理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說せば我れ等眷屬常に隨て守護し一切の災橫をして侵惱せしめざらんと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、甚奇なり世尊、希有なり善逝、是の善男子善女人等は般若波羅蜜多に奉事して

【三】 然燈佛（Dīpaṃkara）。過去久遠の時に出現し給ひし如來にて釋尊に記別を授け給ひし佛なり。

【四】 能寂。能仁寂默の略。釋迦(Sakya)を能仁と譯し牟尼（Muni）を寂默と譯す。

是の如き現法の功德を攝受す。世尊、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を攝受せば則ち具さに布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を攝受せんと。[五]爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學して理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說して獲る所の功德を、汝應に諦かに聽き極めて善く作意すべし。當に汝が爲に說くべしと。天帝釋言はく、唯然願くは說きたまへ、我れ等樂聞したてまつらんと。佛言はく、憍尸迦、若し諸の異外道の梵志若しは諸の惡魔或は魔の眷屬若しは餘の暴惡の[六]增上慢の者有りて種種の不饒益事を作さんと欲し彼れ適心を興すに自ら殃禍に遭ひて漸く當に殄滅して所願を果さざるべし。何を以ての故に、憍尸迦、是の善男子善女人は能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學し理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說せば、法爾として能く惡心を起す者をして自ら殃禍に遭ひて所願を果さざらしむればなり。憍尸迦、是の善男子善女人等は般若波羅蜜多に承事して是の如き等の功德勝利を獲。妙藥有り名を[七]莫耆と曰ふ、是の藥の威勢能く衆毒を銷す。是の如き妙藥は所在の處に隨て諸の毒蟲類遍近すること能はず。大毒蛇有り饑ゑ行きて食を求め適生類を見て之を螫噉せんと欲す。[八]其の生、死を怖れ奔りて妙藥に趣くに蛇藥氣を聞き尋で便ち退走せんが如し。何を以ての故に、憍尸迦、是の如き妙藥は大威勢を具し能く身命を益して衆毒を銷伏すればなり。當に知るべし般若波羅蜜多の大威勢を具するも亦復た是の如し。若し善男子善女人等至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學して理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說せば諸の惡人等其の作す所に於て饒益せざらんと欲するも、必ず當に殄滅し能く爲す所無かるべし。般若の威神彼れを摧くが故に。憍尸迦、是の善男子善女人等は四大天王及び餘の天衆並びに諸の神仙常に來りて擁護し一切の災橫をして侵惱せしめず、諸佛菩薩も亦た常に護念し、法の如く求むる所滿足せざる無く、言詞威肅聞くもの皆敬受し、發言量に稱ひて

【五】佛、般若の功德を詳說す。

【六】增上慢。四慢、七慢の一。殊勝の法及び證を得ずして、得たりと思ひたかぶること。

【七】莫耆。又、摩祇、摩秖に作る。藥の名なり。

【八】其の生。蛇に遇へる生類なり。

語喧雜ならず、堅く善友に事へ深く恩を知りて報ひ、慳嫉忿恨覆惱諂誑矯等其の心を隱蔽することを爲さず。何を以ての故に、憍尸迦、是の善男子善女人等は般若の威力もて身心を調伏し其れをして貪瞋癡等の[九]隨眠纏結を遠離せしむればなり。是の善男子善女人等は念を具すること正しく慈悲喜捨を知り、常に是の念を作す、我れ[一〇]慳貪破戒忿恚懈怠散亂愚癡の勢力に隨て轉ずべからず。若し彼れに隨て轉ぜば則ち我が布施淨戒安忍精進靜慮妙慧成ぜず嚴淨色身すら尚ほ得ること能はず況んや無上正等菩提を得んをや。故に我れ彼の力に隨て轉ずべからずと。是の善男子善女人等は此の思惟に由りて常に正念を得て諸の惡煩惱其の心を蔽はず。憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤修學して理の如く思惟し或は復た他の爲に書寫解說せば是の如き等の功德勝利を獲んと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は甚だ爲れ希有なり、能く菩薩を調へて高心を離れて所求の一切智智に廻向せしむと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、云何が般若波羅蜜多は甚だ爲れ希有にして能く菩薩を調へて高心を離れて所求の一切智智に廻向せしむるやと。天帝釋言さく、若し諸の菩薩般若波羅蜜多に依らずんば方便善巧無きが故に諸の善を修すと雖も而かも高心を起して一切智智に廻向すること能はず。若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多に依らば方便善巧有るが故に修する所の諸善能く高心を伏して所求の一切智智に廻向すと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦せば一切の災橫に侵惱せられず。若し軍旅交戰の陣に在らん時至心に是の如き般若波羅蜜多を念誦せば諸の有情に於て慈悲護念して刀仗の傷殺する所と爲らず、對する所の怨敵皆慈心を起さん、設ひ惡心を起さんも自然に退敗せん。是の善男子善女人等若し軍陣に在るも刀箭に傷つけられ命を失ひ身を喪ふこと終に是の處(ことわり)有ること無し。何を以ての故に、憍尸迦、是の如き般若波羅蜜多は是れ大神呪、是れ無上呪なればなり。若

【九】隨眠纏結。煩惱が深まり増してその身心を束縛するを云ふ。
【一〇】慳貪等、六度に反する六不度なり。

し能く此れに於て精勤して修せば自ら害することを爲さず他の言を爲さず倶に害することを爲さず、疾く無上正等菩提を證し斯れに由りて一切智智を獲得し、有情類の心行差別を觀じて宜しきに隨て爲に無上の法輪を轉じ、說の如く行じて大饒益を得せしめん。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等此の般若波羅蜜多を書きて淸淨の處に置きて供養恭敬し、或は復た精勤して受持讀誦せば人非人等其の短を求めんと欲するも終に得ること能はず、唯だ宿世の惡業の應に受くべきをば除く。憍尸迦、譬へば人或は傍生類有りて菩提樹院に入り或は彼の院の邊りに至るも人非人等傷害すること能はざるが如し。何を以ての故に、憍尸迦、三世の諸佛は皆此の處に坐して大菩提を得て諸の有情に無恐無怖無怨無害の身心の安樂を施せばなり。當に知るべし般若波羅蜜多の所住の處に隨ふも亦復た是の如し、一切の天龍阿素洛等常に來りて守護す。當に知るべし是の處は卽ち眞の[一一]制多なりと。一切の有情皆應に敬禮すべく、恭敬供養尊重讃歎して暫くも捨つべからず。何を以ての故に、憍尸迦、是れ諸の有情の歸依處なるが故なりと。[一二]時に天帝釋復た佛に白して言さく、若し善男子善女人等此の般若波羅蜜多を書き種種に莊嚴して供養恭敬尊重讃歎し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を以て供養を爲さんに、善男子善女人等有りて佛涅槃の後[一三]窣堵波を起て七寶もて嚴飾し寶函に佛の[一四]設利羅を盛り貯へて其の中に安置して供養恭敬尊重讃歎し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を以て供養を爲さば二つの獲る所の福は何れが多しと爲すやと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、我れ還て汝に問はん、當に意に隨て答ふべし。意に於て云何、如來所得の一切智智、所證の無上正等菩提及び所依の身は何等の道に依り修學して得たるやと。天帝釋言はく、皆般若波羅蜜多に依り修學して得たまへりと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、但だ[一五]相好身を獲得せるが故に說いて如來應正等覺と名づくるのみに非ず、要らず一切智智を證得せるに由りて乃ち如來應正等覺と名づく。憍尸迦、如來所得の一切智智は要らず般若波羅蜜

【一一】制多(Caitya)。制底なり。記念建築、寺宇、伽藍などを云ふ。骨舍利を祀る窣堵波と區別するも、塔廟まで併せ稱することあり。

【一二】般若供養の福果は如來の舍利羅供養の之れに勝る所以を明す。

【一三】窣堵波(Stūpa)。塔のこと。

【一四】設利羅(Śarīra)。身骨、遺骨、骨分などと譯す、佛又は聖者の遺骨を云ふ。舍利なり。

【一五】相好身よりも一切智智貫く般若の重んずべきを說く。

多因と爲るに由るが故に起る、佛の相好身は但だ依處爲るのみ。若し佛の相好身に依らずんば由て起る無し。是の故に般若波羅蜜多は正しく因と爲りて一切智智を生ず。此の智をして[一六]現前に相續せしめんと欲するが故に復た佛の相好身を修集す。此の緣に由るが故に我が涅槃の後諸の天龍神人非人等我が設利羅を供養恭敬す。憍尸迦、若し善男子善女人等此の般若波羅蜜多を書きて種種に莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を以て供養恭敬尊重讃歎せば則ち爲れ一切智智及び依止する所の佛の相好身並びに涅槃後の佛の設利羅を供養するなり。何を以ての故に、憍尸迦、一切智智及び相好身並びに設利羅は皆般若波羅蜜多を以て根本と爲すが故なり。是を以ての故に、憍尸迦、此の般若波羅蜜多を書きて種種に莊嚴し供養恭敬して獲る所の福聚は七寶を以て窣堵波を起て如來の設利羅を供養する福に勝る。何を以ての故に、憍尸迦、般若波羅蜜多を供養せば則ち爲れ一切智智、佛の相好身、設利羅を供養するが故なりと。

[一七]時に天帝釋便ち佛に白して言さく、贍部洲の人は此の般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し恭敬供養すること能はず、彼れ豈に是の如き所說の功德勝利を知らざるやと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、我れ還て汝に問はん、當に意に隨て答ふべし。意に於て云何、贍部洲內に幾許の人有りて[一八]佛證淨を成じ、法證淨を成じ、僧證淨を成じ、幾許の人有りて預流果乃至阿羅漢果を得、幾許の人有りて發心して定めて獨覺菩提に趣き、幾許の人有りて發心して定めて無上菩提に趣くやと。天帝釋言はく、贍部洲內に少し許りの人有りて三證淨を成じ、轉じて少し許りの人預流果乃至阿羅漢果を得、轉じて少し許りの人發心して定めて獨覺菩提に趣き、轉じて少し許りの人發心して定めて無上菩提に趣くと。佛言はく、憍尸迦、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、贍部洲內の極めて少分の人發心して定めて無上菩提に趣くのみ。中に於て少分既に發心し已て精勤修學して菩提行に趣き、中に於て少分精勤して菩提行を修學する時此の般若波羅蜜多に於て深心に信受し、

【一六】現前に相續。智相に續の所依身なるが故に尊ばる、若し智なくば何の身の尊重なるべきとの意。

【一七】般若の信受少きを明す。

【一八】佛證淨等。三寶に堅固なる淨信を有するを云ふ。

中に於て少分深く信受し已て般若波羅蜜多を修行し、中に於て少分旣に修行し已て漸次に不退轉地に安住し、中に於て少分此の地に住し已て疾く無上正等菩提を證す。憍尸迦、若し諸の菩薩已に不退轉地に安住することを得て無上正等菩提を求證せば乃ち能く深心に般若を信受して受持讀誦し恭敬供養し書寫解說せん。憍尸迦、無量無邊の諸の有情類菩提心を發すも中に於て若しは一若しは二若しは三、菩薩の不退轉地に住し多分は退きて聲聞獨覺に住す。[一九]是の故に當に知るべし善男子等菩提心を發して菩薩行を修し、菩薩の不退轉地に住して疾く無上正等菩提を證し留難無からんと欲せば應に般若波羅蜜多に於て書寫聽聞し受持讀誦し供養恭敬して他の爲に演說すべし。何を以ての故に、憍尸迦、是の諸の菩薩は應に是の念を作すべければなり。如來昔菩薩の位に住せし時常に勤めて是の如き般若波羅蜜多を修學したまへり。我れ等も亦た應に精勤して修學すべし。是の如き般若波羅蜜多は是れ[二〇]我が大師なり。我れ彼れに隨て學せば所願當に滿すべしと。憍尸迦、一切の菩薩は若しは佛の世に住し若しは涅槃の後常に應に甚深般若波羅蜜多に依止し精勤して修學すべし。憍尸迦、若し善男子善女人等諸の如來般涅槃の後に於て佛の設利羅を供養せんが爲の故に妙七寶を以て窣堵波を起て種種の珍奇もて間に雜へて嚴飾し復た種種天の妙花鬘乃至燈明を以て其の形壽を盡くすまで供養恭敬尊重讃歎せば、意に於て云何、是の善男子善女人等の此の因緣に由りて福を獲ること多しや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、善男子善女人等有りて此の般若波羅蜜多を書き衆寶もて莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讃歎するに是の善男子善女人等の獲る所の功德は甚だ前よりも多く無量無數なり。憍尸迦、此の一事を置き、若し善男子善女人等諸の如來般涅槃の後に於て佛の設利羅を供養せんが爲の故に妙七寶を以て窣堵波を起て種種の珍奇もて間に雜へて嚴飾し、是の如く一贍部洲、或は四大洲或は小千界或は中千界或は復た三千大千世界に充滿し皆種種天の妙花鬘乃至燈明を持て其の形壽を

【一九】不退轉ならんとせば般若受持を要す。

【二〇】般若は大師なり、般若を受持せば佛常在し、所願滿足す。

こと多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、善男子善女人等有りて此の般若波羅蜜多を書き衆寶もて莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讚歎するに是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數なり。憍尸迦、是の如きの事を置き、假使ひ三千大千世界の諸の有情類前に非ず後に非ず皆人身を得、此の一一の人、佛の設利羅を供養せんが爲の故に諸の如來般涅槃の後に於て妙七寶を以て窣堵波を起て種種の珍奇もて間に雜へて嚴飾し是の如き一一各三千大千世界に滿ち復た種種天の妙花鬘乃至燈明を持て其の形壽を盡すまで供養恭敬尊重讚歎せんに、意に於て云何、是の諸の有情は此の因緣に由りて福を獲ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦　善男子善女人等有り此の般若波羅蜜多を書き衆寶もて莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讚歎するに、是の善男子善女人等の獲る所の功德は甚だ前よりも多く無量無數なりと。時に天帝釋、佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝。若し善男子善女人等甚深般若波羅蜜多を供養恭敬尊重讚歎せば當に知るべし則ち爲れ過去未來現在の諸佛の一切智智を供養恭敬尊重讚歎するなりと。世尊、且らく是の事を置き、假使ひ十方各殑伽沙數の如き世界の一切有情前に非ず後に非ず皆人身を得、此の一一の人、佛の設利羅を供養せんが爲の故に各如來般涅槃の後に於て妙七寶を以て窣堵波を起て種種の珍奇もて間に雜へて嚴飾し是の如き一一各十方殑伽沙數の諸佛世界に滿ち、復た種種天の妙花鬘乃至燈明を持て或は一劫或は一劫の餘を經て供養恭敬尊重讚歎せんに是の諸の有情此の因緣に由りて獲る所の福聚は復た無量なりと雖も、而かも復た餘の善男子等有りて此の般若波羅蜜多を書き衆寶もて莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讚歎して獲る所の功德は甚だ前よりも多く無量無數なりと。

爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、是の善男子善女人等の般若波羅蜜多を供養する功德善根は無量無數にして稱計す可からず思議す可からず。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺の一切智智を生じ、一切の如來應正等覺の一切智智は能く諸佛の設利羅を生ずるが故なり。是の故に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多を書き衆寶もて莊嚴し受持讀誦し復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讚歎して獲る所の功德は前に造りし所の諸の窣堵波及び供養の福よりも百倍勝ると爲し千倍勝ると爲し乃至[三二]鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

【三二】鄔波尼殺曇（Upanisad）。梵語の算法、數の極なり。

第五分神呪品第四〔一〕

〔二〕爾の時衆中の四萬の天子聲を同うして共に天帝釋に白して言さく、大仙、此の甚深般若波羅蜜多に於て常に應に聽聞し受持讀誦し供養恭敬尊重讃歎すべし。所以は何ん、若し能く此の甚深般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し供養恭敬尊重讃歎せば則ち一切の惡法をして損滅せしめ善法增益すればなりと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、汝應に此の甚深般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し供養恭敬尊重讃歎すべし。所以は何ん若し阿素洛及び惡朋黨是の如き念を起さん、我れ等當に三十三天と共に戰諍を興すべしと。爾の時汝等應に各至誠もて是の如き甚深般若波羅蜜多を誦念し供養恭敬尊重讃歎すべし。時に阿素洛及び彼の朋黨の起す所の惡心自然に息滅せんと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、若し是の如くんば甚深般若波羅蜜多は是れ大神呪、是れ大明呪、是れ無上呪、是れ無等等呪なりと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。何を以ての故に、憍尸迦、三世の諸佛は皆是の如き甚深般若波羅蜜多大神呪王に依りて無上正等菩提を證得し諸の有情の爲に微妙の法を說けばなり。憍尸迦、深般若波羅蜜多に依りて世間に便ち十善業道若しは四靜慮若しは四無量若しは四無色定若しは五神通若しは餘の無量無邊の佛法有りて皆出現することを得。憍尸迦、深般若波羅蜜多大神呪王に依りて世間に便ち菩薩有りて出現す。菩薩に依るが故に世間に便ち十善業道若しは四靜慮若しは四無量若しは四無色定若しは五神通若しは餘の無量無邊の佛法有りて皆出現することを得。憍尸迦、若し諸の如來應正等覺出世せざる時は唯だ菩薩のみ有りて先に聞きし所の甚深般若波羅蜜多增上勢力に由りて諸の有情の爲に方便して十善業道四靜慮等を施設し勸めて修學せしむ。憍尸迦、譬へば夜分滿月輪の光明照觸するに因りて〔三〕星宿藥等其の勢力に隨て皆增盛することを得るが如く、是の如く如來應正等覺前に已に

〔一〕神呪。般若の神呪なるを說くに由る。
〔二〕甚深般若は大神呪なるを明す。
〔三〕星宿藥等。星も藥も夜光もそれぞれ光を增すを云ふ。

滅度し正法隱沒して後未だ出でざる時は世間の所有る善行正行は一切皆菩薩に依りて出現し、菩薩の所有る方便善巧は皆般若波羅蜜多に依りて成辦することを得、是の故に[四]般若波羅蜜多は是れ諸の殊勝善法の根本なり。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦せば當に現世に種種の饒益を得べし、謂ゆる諸の毒藥水火刀兵災横疾疫皆害すること能はず、若し官事怨賊の逼迫するに遭はんに至心に甚深般若波羅蜜多を誦念して若し其の所に至らば終に彼れに譴罰加害せられず、其の短を求めんと欲するも皆得ること能はず。何を以ての故に、憍尸迦、甚深般若波羅蜜多の威神勢力の法爾らしむるが故なり。憍尸迦、是の善男子善女人等若し國王王子大臣等の處に至らんと欲する有りて至心に甚深般若波羅蜜多を誦念せば定めて王等に歡喜して問訊し供養恭敬尊重讃歎せられん。何を以ての故に、憍尸迦、甚深般若波羅蜜多は常に有情に於て種種の慈悲の事を引發するが故なり。此の因緣に由り諸の短を求むる者種種に方便するも皆得ること能はずと。[五]時に衆多の外道梵志有りて佛の過を求めんと欲して佛所に來詣す。時に天帝釋見已て念言すらく、今此の衆多の外道梵志法會に來趣して佛の短を伺求す、將に般若に留難の事非ざる耶。我れ當に佛より受けし所の甚深般若波羅蜜多を誦念して彼の邪徒をして道に復りて去らしむべしと。念じ已て便ち甚深般若波羅蜜多を誦す。是に於て衆多の外道梵志遙かに敬禮を申べ世尊を右繞して道に復りて去りぬ。時に舍利子見已て念言すらく、彼れ何の緣有りて適ま來りて還り去るならんと。佛、其の心を知りて舍利子に告げたまはく、彼の諸の外道來りて我が失を求めしも天帝釋の般若波羅蜜多を誦念せしに由り彼れをして還り去らしむ。舍利子、我れ都て彼の諸の外道に少白法有るを見ず、唯だ惡心を懷きて我が過を求めんが爲に我が所に來至せるのみ。舍利子、我れ都て一切世間に諸の天魔及び外道等の有情類有りて般若を說く時勃惡心を懷き來りて求むるも便りを得るを見ず、般若の威力は能く壞するもの無きが故なりと。爾の時惡魔竊に是の念を作さく、今佛の

【四】般若は勝善の根本なり。

【五】外道梵志等。佛の過を伺求すれども般若大神呪の威力によりて其の便りを得ざるを明す。

四衆恭敬圍繞し欲色界天皆會に來集して般若波羅蜜多を宣說す。此の中必ず諸の大菩薩有りて親り佛前に於て菩提の記を受けて當に無上正等菩提を得、妙法輪を轉じて我が境界を空ずべし。我れ當に往至して其の眼を破壞すべしと。是の念を作し已て四軍を化作し奮威勇鋭して佛所に來詣す。時に天帝釋見已て念言すらく、時に惡魔斯の事を化作し來りて佛を惱まさんと欲し並びに般若波羅蜜多の與に爾かも留難[六]を作すに非るか。何を以ての故に、是の如き四軍の嚴飾殊麗なる諸王の軍衆皆及ぶこと能はざればなり。定めて是れ惡魔の化作する所ならん。惡魔は長夜に佛の短を伺求して諸の有情の修する所の善業を壞せん。我れ當に佛より受けし所の甚深般若波羅蜜多を誦念して彼の惡魔をして道に復へりて去らしむべしと。時に天帝釋念じ已て便ち甚深般若波羅蜜多を誦す。是に於て惡魔漸く退きて去りぬ。甚深般若波羅蜜多大神呪王の威力逼るが故に。[七]時に無量の三十三天有り倶時に天の妙音華を化作し身を空中に踊らして佛の上に散じ合掌恭敬して同じく佛に白して言さく、願くは此の般若波羅蜜多贍部洲の人の中に在りて久しく住せんことを。乃至般若波羅蜜多贍部洲の人間に在りて流布せば當に知るべし是の處は佛法僧寶常に滅沒せず、世間を饒益して殊勝の利益安樂を獲せしめんと。時に彼の諸天復た各天の妙香華を化作して佛の上に散じ重ねて佛に白して言さく、若し諸の有情般若波羅蜜多を修行せば一切の惡魔及び彼の眷屬其の短を伺求するも便りを得ること能はずと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、若し諸の有情但だ般若波羅蜜多の功德名字を聞くのみすら當に知るべし是の如き諸の有情類は已に曾て無量の諸佛に供養し諸佛の所に於て弘誓願を發して多く善根を集めて能く是の事を成ぜしなり。少小の善根の中より來るに非ず、況んや能く聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し轉じて有情の爲に書寫解說し供養恭敬尊重讚歎せんをや。所以は何ん、諸佛の一切智智を求めんと欲せば應に般若波羅蜜多の理趣の中に於て求むること有情類の大寶を求めんと欲して應に大海に於て方便して勤求すべきが如くすべければなり

【六】留難。邪魔來つて人の善事を留止し、修行の障難を爲すを云ふ。

【七】諸天衆。佛を散華恭敬して般若の人中に久住せんことを願ふ。

と。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。諸佛の得たまへる所の一切智智は皆般若波羅蜜多に依りて生ずることを得たりと。[八]爾の時慶喜便ち佛に白して言さく、如來は何に緣りて布施乃至靜慮波羅蜜多を讃ぜずして唯だ般若波羅蜜多のみを讃じたまふやと。佛、慶喜に告げたまはく、此の般若波羅蜜多は能く前五波羅蜜多の與に尊と爲り導と爲るに由るが故に我れ偏へに讃ず。復た次に慶喜、意に於て云何、若し一切智智に迴向せずして布施乃至般若を修するは此れを名づけて眞に布施乃至般若波羅蜜多を修すと爲す可きや不やと。慶喜對へて言はく、不なり世尊と。佛、慶喜に告げたまはく、意に於て云何、若し般若波羅蜜多を離れて能く眞に一切智智に迴向すと爲すや不やと。慶喜對へて曰はく、不なり世尊と。佛、慶喜に告げたまはく、此の因緣に由りて我れ般若波羅蜜多は能く前五波羅蜜多の與に尊と爲り導と爲るが故に我れ偏へに讃ずと說く。慶喜當に知るべし譬へば大地に種を以て中に散くに衆緣和合せば便ち生長することを得。應に知るべし大地は種の生長の與に依止する所と爲りて爲に能く建立するが如く、是の如く般若波羅蜜多及び迴向する所の一切智智は布施等の波羅蜜多の與に依止する所と爲りて、爲に能く建立し生長することを得せしむるが故に、般若波羅蜜多は能く前五波羅蜜多の與に尊と爲り導と爲るが故に、我れ偏へに讃ずと說く。慶喜當に知るべし、甚深般若波羅蜜多も亦た能く一切智智を攝受するが故に偏へに讃說すと。[九]時に天帝釋便ち佛に白して言さく、今如來應正等覺、深般若波羅蜜多の功德勝利に於て說きたまふも猶ほ未だ盡きず。何を以ての故に、我が世尊より受けし所の般若波羅蜜多の功德勝利は甚深甚廣にして量無邊際なればなり。善男子等深般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し、復た轉じて他の爲に書寫解說し、或は種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養を爲して獲る所の功德も亦た無邊際なればなりと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、我れ此の甚深般若波羅蜜多は但だ前說の功德勝利有るのみと說かず。甚深般若波羅蜜多は無邊

【八】六度中。般若は能く他の五度の尊導たるを明す。

【九】更に般若の功德無量無邊にして盡す可からざるを明す。

の功德勝利を具足し分別演說するも盡す可からざるが故なり。我れ亦た深般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し乃至供養する善男子等は但だ前に說く所の如き功德有るのみと說かず。彼の獲る所の功德は無邊際なるが故なりと。時に天帝釋卽ち佛に白して言さく、我れ等諸天常に隨て是の善男子善女人等を守護して一切の人非人等の種種惡緣の損害する所とならしめずと。[一〇]爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、若し善男子善女人等甚深般若波羅蜜多を受持讀誦し及び廣く他の爲に宣說開示せば時に無量百千の天子有りて法を聽かんが爲の故に皆會に來集し歡喜踊躍して是の如き甚深般若波羅蜜多を敬受せん。是の諸の天子は天の威力を以て說法師をして辯才を增益して宣揚すること盡くる無からしめ、樂說せざる者には其れをして樂說せしめ、身心疲極せるには康强を得せしめん。憍尸迦、是の善男子善女人等は甚深般若波羅蜜多を受持讀誦し及び廣く他の爲に宣說開示して是の如き等の現法の勝利を得。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等四衆の中に於て是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說せば心に怯怖無く一切の論難の伏する所と爲らず。所以は何ん、彼れは是の如き甚深般若波羅蜜多大神呪王に由りて護持せらるるが故なり。彼れは法空に住して都て能難所難及び所說有るを見ざるが故なり。亦た深般若波羅蜜多に於て能く短を求むる有るを見ざるが故なり。亦復た甚深般若波羅蜜多に過失有るを見ざるが故なり。憍尸迦、是の善男子善女人等は衆の爲に甚深般若波羅蜜多を宣說して是の如き等の現法の勝利を得。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等深般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し及び廣く他の爲に書寫解說せば是の善男子善女人等は心沈沒せず憂悔せず恐れず怖かず。所以は何ん、是の善男子善女人等は法の沈沒憂悔恐怖せしむ可きもの有るを見ず諸法の中に於て執著する所無ければなり。憍尸迦、是の善男子善女人等は般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し乃至解說するに由りて是の如き等の現法の勝利を得。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如

【一〇】諸天等般若行者を護持するを明し、般若によりて受くる現法の勝利を說く。

く思惟し亦た轉じて他の爲に書寫解說し、復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養を爲さば是の善男子善女人等は恒に父母師長親友國王大臣及び諸の沙門婆羅門等の敬愛する所と爲り、亦た十方の諸佛菩薩聲聞獨覺の護念する所と爲り、復た世間諸の天魔梵人及び非人の守衞する所と爲り、一切の災橫皆自ら消滅し外道異論皆伏すること能はず。憍尸迦、是の善男子善女人等は般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し乃至供養するに由りて是の如き等の現法の勝利を得。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等是の如き甚深般若波羅蜜多を書寫し種種に莊嚴して淸淨の處に置きて供養恭敬尊重讃歎せば時に此の三千大千國土及び餘の十方無邊世界の所有る四大王衆天乃至廣果天の已に無上菩提の心を發せる者常に此の處に來りて觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し右繞禮拜合掌して去り、諸の淨居天も亦た常に此に來りて觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し右繞禮拜合掌して去り、大威德の諸の龍藥叉―廣說乃至―人非人等有りて亦た常に此に來りて觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し右繞禮拜合掌して去らん。憍尸迦、是の善男子善女人等は應に是の念を作すべし。今此の三千大千國土及び餘の十方無邊世界の一切の天龍―廣說乃至―人非人等常に此に來至して我が書寫せし所の甚深般若波羅蜜多を觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し右繞禮拜合掌して去れり、此れ我れ則ち已に法施を設けたりと爲すと。是の念を作し已て歡喜踊躍し獲たる所の福をして倍す復た增さしむ。憍尸迦、是の善男子善女人等は無邊界の天龍藥叉阿素洛等常に隨て擁護するに由り所住の處の人非人等損害すること能はず、唯だ宿世の定惡業因の現在に應に熟すべく、〔一〕或は轉じて重惡の現世に輕受するをば除く。憍尸迦、是の善男子善女人等は深般若波羅蜜多の大威神力に由りて是の如き等の現法の勝利を獲と。

〔二〕時に天帝釋便ち佛に白して言さく、是の善男子善女人等は何の驗（しるし）を以て是の三千大千國土及び餘の十方無邊世界の天龍藥叉阿素洛等其の處に來至して彼の書持せる所の甚深般若波羅蜜多を觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し合掌右繞し歡喜護念せる有るを知るやと。爾の時佛、天帝釋に告げて言は

【一】重惡も福力によりて輕受することあるを云ふ。

【二】天龍藥叉等の般若を供養讃歎し、護念する驗を說く。

く、是の善男子善女人等若し是の如き甚深般若波羅蜜多所在の處に妙光明有るを見、或は其の處に異香氛郁せるを聞き、或は復た微細の樂音有るを聞かば、當に知るべし爾の時大神力有り威德熾盛の諸の天龍等其の處に來至して彼の書持せる所の甚深般若波羅蜜多を觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し合掌右繞し歡喜護念せりと。復た次に憍尸迦、是の善男子善女人等鮮淨の行を修し其の處を嚴麗して至心に甚深般若波羅蜜多を供養せば、當に知るべし爾の時大神力有り威德熾盛の諸の天龍等其の處に來至して彼の書持せる所の甚深般若波羅蜜多を觀禮讀誦し供養恭敬尊重讃歎し合掌右繞し歡喜護念せりと。憍尸迦、是の如き大神力を具し威德熾盛の諸の天龍等有りて其の處に來至するに隨て此の中の所有る惡鬼邪神は驚怖し退散して敢へて住する者無し。此の因緣に由りて是の善男子善女人等の心便ち廣大にして〔一三〕淨勝解を起し修する所の善業倍す復た增明し諸の爲す所有るもの皆障礙無し。是を以ての故に、憍尸迦、甚深般若波羅蜜多所在の處に隨て應當に周匝して糞穢を除去し揩拭塗治し香水を散灑し寶座を敷設して之を安置し香を燒き花を散じて供養を爲すべし。〔一四〕復た次に憍尸迦、是の善男子善女人等若し能く是の如く甚深般若波羅蜜多を供養恭敬尊重讃歎せば決定して當に身心の無倦を得べし。身心安樂に身心調柔に身心輕利にして心を般若波羅蜜多に繫け、夜寢息の時も諸の惡夢無く唯だ善夢のみを得ん。謂ゆる如來應正等覺の身眞金色にして相好莊嚴し大光明を放ちて普ねく一切を照らし、聲聞菩薩恭敬圍繞し、身、衆の中に處して佛爲に布施等の六波羅蜜多及び餘の善根相應の法義を說きたまふを聞くを見、或は夢の中に於て菩提樹の其の量高廣にして衆寶もて莊嚴し、大菩薩有りて樹下に往詣して結跏趺坐し無上正等菩提を證得し妙法輪を轉じて有情衆を度するを見、或は夢の中に於て無量無數の菩薩有りて種種の法義を論議〔一五〕決擇するを見、或は夢の中に於て無量無數の菩薩有りて六種波羅蜜多を修行し有情を成熟し佛土を嚴淨して一切智智に廻向し攝受するを見、或は夢の中に於て十方界に各無量〔一六〕那庾多の佛有り亦た其の聲を聞くに、某の世界に某の

〔一三〕淨勝解。心所の名。淨は清淨。勝解は殊勝なる了解の義。對境に向ひて明了なる了解をなし、その如何なるかを斷定する精神作用をいふ。

〔一四〕般若行者の善夢相を明す。

〔一五〕決擇。批判し採決し論定するなり。

〔一六〕那庾多（Nayuta）。數名。百阿由多を一那庾多とす。數萬億、千億、數千萬などといふ。

如來應正等覺有りて若干百千の聲聞菩薩に恭敬圍繞せられて是の如き法を說くと謂ふを見、或は夢の中に於て十方界に各無量那庾多の佛有りて般涅槃して後各施主有りて佛の設利羅を供養せんが爲の故に妙七寶を以て各無量の大窣堵波を起て、復た一一の窣堵波の所に於て各無量上妙の花鬘乃至燈明を持て無量[一七]劫を經て供養恭敬尊重讃歎するを見ん。憍尸迦、是の善男子善女人等は是の如き類の諸の善夢相を見て、若しは睡若しは覺に身心安樂にして、諸の天神等其の精氣を益し、彼れをして自ら身體の輕便を覺らしめん。此の因緣に由りて多く飮食醫藥衣服臥具に貪著せず、[一八]四供養に於て其の心輕微なること、[一九]瑜伽師の勝妙定に入るに彼の定力に由りて身心を滋潤し定より出で已て美膳に遇ふと雖も而かも心輕微なるが如し、此れも亦た是の如し。何を以ての故に、憍尸迦、是の善男子善女人等は此の三千大千國土及び餘の十方無邊世界の諸佛菩薩獨覺聲聞天龍藥叉阿素洛等慈悲護念し妙精氣を以て冥に身心に潮ぎ其れをして志勇ましく體充盛せしむるに由るが故なり。憍尸迦、若し善男子善女人等是の如き現法の勝利を得んと欲せば、深般若波羅蜜多に於て常に聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し廣く有情の爲に宣說開示すべし。憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多に於て能く聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し廣く有情の爲に宣說開示せずと雖も、而かも正法世間に久住して有情を利樂し滅沒せざらんが爲の故に是の如き甚深般若波羅蜜多を書寫し衆寶もて嚴飾し復た無量上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讃歎せば亦た前に說く所の如き勝利を得ん。

【一七】劫（Kalpa）。劫波、劫簸、羯臘波ともいふ。長時と譯す。非常に長き時間のこと。

【一八】四供養。飮食と醫藥と衣服と臥具となり。

【一九】瑜伽師。瑜伽とは心と境と相應融合し、これによりて定力自在を得るを云ふ。この瑜伽の觀行を修する人を瑜伽師と名づく。

卷の第五百五十八

第五分設利羅品第五[一]

[二]復た次に憍尸迦、假使ひ此の贍部洲に充滿する佛の設利羅を以て一分と爲し、般若波羅蜜多深妙の法門を書ける有りて復た一分と爲さんに斯の二分に於ては汝何れの者を取るやと。天帝釋言はく、我が意寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取る。所以は何ん、我れ諸佛の設利羅の所に於て信受し供養恭敬せざるに非ず、然かも諸の佛身及び設利羅は皆般若波羅蜜多深妙の法門に因りて出生するが故に、皆般若波羅蜜多深妙法門の功德威力に由りて熏修せらるるが故に、乃ち一切世間の天人阿素洛等に供養恭敬せらるればなり。世尊、如し[三]我れ坐して三十三天の善法殿の中の天帝座上に在りて諸の天衆の爲に正法を宣說する時は無量の諸の天子等有りて我が所に來至して我が所說を聞きて供養恭敬し右繞して去る。我れ若し彼の法座に在らざる時は諸の天子等も亦た其の處に來りて我れを見ずと雖も我が在りし時の如く供養恭敬して咸言く、此の處は是れ天帝釋の諸天等の爲に法を說きし座なり。我れ等皆應に天主の在すが如く供養恭敬し右繞して去るべしと。佛の設利羅も亦復た是の如し、深妙の般若波羅蜜多は爲れ一切智智の依止する所を引生するに因るが故に一切世間の天人阿素洛等に供養恭敬せらる。是の故に我れ二分の中に於ては我が意寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取ると說く。世尊、假使ひ三千世界に充滿する佛の設利羅を以て一分と爲し、般若波羅蜜多深妙の法門を書ける有りて復た一分と爲さんに斯の二分に於ては我が意寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取る。所以は何ん、我れ諸佛の設利羅の所に於て信受し供養恭敬せざるに非ず、然かも諸の佛身及び設利羅は皆般若波羅蜜多深妙の法門に因りて出生するが故に、皆般若波羅蜜多深妙法門の功德威力に熏修せらるるに由るが故に、乃ち一切世間の天人阿素洛等に供養恭敬せらる。世尊、負債人の債主を怖畏、

【一】前品の續き舍利供養に優るを云ふも、品を改めて設利羅と云ふのみ。
【二】般若の福德設利羅のそれに勝るを說く。
【三】我れ坐し等。天帝釋、憍尸迦は忉利天（三十三天）主として善法殿に住すればなり。

卽便ち國王に親近し奉事し王の勢力に依りて怖畏を免るゝことを得反て債主怖畏を爲して供養するが如し。所以は何ん、彼の人は國王の勢力に依附し王に攝受せられて威勢を具するが故なり。王は般若波羅蜜多に喩へ、佛の設利羅は王に依る者に喩ふ。般若波羅蜜多に由依るが故に世間の供養恭敬を得。諸佛の得たまへる所の一切智智も亦た般若波羅蜜多に依りて成辦することを得るが故に我れ寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取る。【四】世尊、譬へば無價の大寶神珠無量種勝妙の威德を具し、所住の處に隨つて此の神珠有らば人非人等爲に害すること能はざるが如し。設ひ男子或は復た女人有りて鬼の執る所と爲りて身心苦惱せんに、若し此の神珠を持て之に示す有らば珠の威力に由りて鬼便ち捨て去らん。諸の熱病或は風或は痰或は二或は三和合して病を爲す有らんに若し此の神珠を繋けて身に著くる有らば是の如き諸病除こり愈えざる無し。此の珠闇に在らば能く照明を作し、熱時には能く涼しく寒時には能く暖かく、地方の所に隨て此の神珠有らば時節調和して寒からず熱からず。若し地方の所に此の神珠有らんに蚰蜒等の毒敢へて【五】停止する無し。設ひ男子或は復た女人有りて毒の中る所と爲りて楚痛忍び難からんに若し此の神珠を持て見せしむる有らば珠の威勢の故に毒卽ち消滅せん。若し諸の有情の身、癩疾惡瘡腫皰目の眩瞖等、眼病、耳病、鼻病、舌病、喉病、身病諸支節病に嬰らんに此の神珠を帶べば衆病皆愈えん。若し諸の池沼泉井等の中の其の水濁穢し或は將に枯涸せんとするに珠を以て之に投ぜば水便ち盈滿し香潔澄淨にして八功德を具せん。若し青黃赤白紅紫碧綠雜綺種種の色衣を以て此の神珠を裹みて之を水に投ぜば水衣の彩りに隨て種種の色を作さん。是の如く無價の大寶神珠の威德無邊にして說くとも盡くすこと能はず。若し箱篋に置かんに亦た其の器をして無邊の威德を具足し成就せしめん、設ひ箱篋を空にするも曾て珠を置きしに由りて其の器仍ほ衆人に愛重せられんと。爾の時慶喜、帝釋に問ひて言はく、是の如き神珠は天のみ獨り有りと爲すや人にも亦た有り耶と。天帝釋言はく、人中天上倶に此の珠有り、若し人中

【四】無價の大寶神珠を以て般若の威德殊勝に喩ふ。

【五】停止する無し。毒停滯せず、流散す。

に在らば形小にして重く若し天上に在らば形大にして輕し。又た人中の珠相は具足せざるも天上に在る者は其の相周圓なり。天上の神珠は威德殊勝にして無量倍數人に有る所に過ぐと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、深妙の般若波羅蜜多も亦復た是の如し、衆の德本と爲りて能く無量の惡不善法を滅し、所在の處に隨て諸の有情の身心の苦惱を滅し、人非人等も害を爲すこと能はず。如來の得たまへる所の一切智智及び餘の無量無邊の功德は皆般若波羅蜜多に因る。佛の設利羅は諸の功德に由りて熏修する所なるが故に、是の諸の功德の依る所の器なるが故に、佛涅槃して後一切世間の天人阿素洛等の供養恭敬を受くるに堪ふ。是の故に我れ二分の中に於ては我が意寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取ると說く。世尊、假使ひ十方各殑伽沙の如き界に充滿する佛の設利羅を以て一分と爲し、般若波羅蜜多深妙の法門を書ける有りて復た一分と爲さんに斯の二分に於ては我が意寧ろ深妙の般若波羅蜜多を取る。所以は何ん、我れ諸佛の設利羅の所に於て信受し供養恭敬せざるに非ず、然かも諸佛の身及び設利羅は皆般若波羅蜜多深妙の法門に因りて出生するが故に、皆般若波羅蜜多深妙法門の功德威力に熏修せらるゝに由るが故に、乃ち一切世間の天人阿素洛等に供養恭敬せらる。復た次に世尊、深妙の般若波羅蜜多は能く如來の一切智智を生じ、如來の得たまへる所の一切智智は能く佛身及び設利羅を生ず。是の故に是の如き般若波羅蜜多を供養せば則ち爲れ三世の諸佛の一切智智及び設利羅を供養するなり。復た次に世尊、若し善男子善女人等常に十方の諸佛を見たてまつることを得んと欲せば甚深般若波羅蜜多を當に行ずべく當に修すべしと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、過去未來現在の諸佛は皆般若波羅蜜多に依りて無上正等菩提を證得す。是の故に如來は供養恭敬すと。天帝釋言さく、是の如き般若波羅蜜多は是れ大無上波羅蜜多なり、一切の如來は皆般若波羅蜜多に依りて諸の有情の心行差別を知りたまふと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦　是

の故に菩薩摩訶薩衆は長夜に甚深般若波羅蜜多を修行して如實に諸の有情類の心行差別を知ることとを爲すと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、諸の菩薩衆は但だ般若波羅蜜多のみを行ずべしと爲すや亦た餘の五波羅蜜多も行ずべしと爲すやと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、諸の菩薩衆は應に具さに六波羅蜜多を行ずべし、然かも布施淨戒安忍精進靜慮を行じて諸法を覩ずる時は、皆般若波羅蜜多を以て上首と爲す。憍尸迦、贍部洲の所有る諸樹の枝條莖幹花葉果實種種の形類有りて同じからずと雖も而かも其の蔭影都て差別無きが如く、是の如く六種波羅蜜多は各異り有りと雖も而かも般若波羅蜜多に由りて方便善巧して一切智智を攝受し廻向するに、諸相の差別都て得可からざるなりと。[六] 時に天帝釋復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は廣大圓滿無量無邊の功德を成就す、若し是の如き般若波羅蜜多を書持し衆寶もて嚴飾し、復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讃歎し守護して捨てざる有り、復た是の如き般若波羅蜜多を書持し衆寶もて嚴飾し轉じて他人に施して受持讀誦せしむる有らば、此の二の福聚は何れが多しと爲すやと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、我れ還て汝に問はん、汝が意に隨て答へよ。若し諸の有情他より佛の設利羅を請ひ得て盛るに寶函を以てし清淨の處に置き復た種種上妙の花鬘乃至燈明を持て供養恭敬尊重讃歎し守護して捨てず、若し復た人有りて他より佛の設利羅を請ひ得て分施して他に與へ其れをして供養せしむるに、意に於て云何、此の二の福聚は何れが勝れりと爲すやと。天帝釋言はく、我れ佛の所說の義を解する如くんば二福聚にては後者を勝れりと爲すと。爾の時佛、天帝釋を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し。憍尸迦、般若波羅蜜多を書持して若しは自ら供養し、若しは轉じて他に施して受持讀誦せしめんに此の二の福聚にては後者を多と爲す。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等能く般若波羅蜜多甚深の義趣を以て如實に他の爲に分別し解說せば獲る所の福聚は復た他に施すに勝ること多く百千倍なり。此の法師を敬ふこと應に佛を敬ふが如くすべし。

【六】般若を轉じて他に施して受持讀誦せしめて得る福聚は、これを自ら供養して得る福聚よりも大なるも、尚これが義趣を以て他の爲に分別解說して獲る福德に比すれば遙かに及ばざるを明す。

第五分經典品第六[1]

[2]復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等贍部洲の諸の有情類を教へて皆[3]十善業道に安住せしめ、展轉して乃至普ねく十方殑伽沙等の諸佛世界の諸の有情類を教へて皆十善業道に安住せしめんに、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し他に施して讀誦せしめて獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等贍部洲の諸の有情類に教へて皆[4]四靜慮四無量四無色定五神通に安住せしめ展轉して乃至普ねく十方殑伽沙等の諸佛世界の諸の有情類に教へて皆四靜慮四無量四無色定五神通に安住せしめんに、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し他に施して讀誦せしめて獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し自ら恒に讀誦せんに人有り般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し他に施して讀誦せしむるには如かず。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し他に施して讀誦せしめんに、人有り深般若波羅蜜多に於て善く義趣を知りて他の爲に解說せんには如かずと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、應に何等の諸の有情類の爲に般若波羅蜜多甚深の義趣を解說すべきかと。佛言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等の般若波羅蜜多甚深の義趣を知らざるには爲に解說すべし。何を以ての故に、憍尸迦、當來世に於て善男子善女人等有りて無上正等菩提を求趣せんに他のものゝ相似の般若波羅蜜多を宣說するを聞かば心便ち迷謬して中道より退失すればなりと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、何等をか名

【一】經典。般若書持を說く故に經典と云ふ。
【二】前品に續いて般若によりて獲る福聚を明す。
【三】十善業道。欲界散地の人々が身(三)口(四)意(三)の善業に因りて引生する世界なり、不殺等の業道なり。
【四】皆四靜慮等。上界定果に安住せしむるよりも般若福聚多し。

づけて相似の般若波羅蜜多と爲すと。[五]佛言はく、憍尸迦、當來世に於て諸の苾芻有り愚癡にして顚倒し、眞實の般若波羅蜜多を宣說せんと欲すと雖も而かも顚倒して相似の般若波羅蜜多を說くなり。云何が苾芻は顚倒して相似の般若波羅蜜多を宣說する。謂ゆる彼の苾芻は無上菩提の心を發せる者の爲に[六]色壞するが故に名づけて無常と爲す、常無きが故に名づけて無常と爲すに非ずと說き、受想行識壞するが故に名づけて無常と爲す、常無きが故に名づけて無常と爲すに非ずと說くなり。復た是の說を作す、若し是の如く求めば是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。憍尸迦、是の如きを名づけて顚倒して相似の般若波羅蜜多を宣說すと爲す。憍尸迦、色壞するを以ての故に色無常なりと觀ずべからず、受想行識壞するを以ての故に受想行識無常なりと觀ずべからず、但だ應に常無きを以ての故に色乃至識爲れ無常なりと觀ずべし。是を以ての故に、憍尸迦、若し善男子善女人等深般若波羅蜜多に於て善く義趣を知りて他の爲に解說するは其の福甚だ多し。復た次に憍尸迦、若し善男子善女人等贍部洲の一切有情に敎へて[七]皆預流果或は一來果或は不還果或は阿羅漢果或は獨覺菩提に住せしめ展轉して乃至普ねく十方各殑伽沙數の如き世界の一切有情に敎へて皆預流果乃至獨覺菩提に住せしめんに、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、善男子善女人等有りて般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し他に施して讀誦せしめ彼の有情に敎授敎誡して言はく、汝應に精勤して般若波羅蜜多相應の佛法を修學すべし定めて當に一切智智を證得すべしと。是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。何を以ての故に、憍尸迦、一切の預流一來不還阿羅漢果獨覺菩提は皆是れ般若波羅蜜多より流出する所なるが故なり、謂ゆる[八]彼れは一切智智を證得し無量無邊の有情を敎化して預流乃至獨覺を成ぜしむること無邊際なるが故なり。復た次に憍尸迦、[九]若し贍部洲の諸の有情類皆無上正等覺の心を發し展轉して乃至十方各殑伽沙の如き界の一切有

【五】相似の般若波羅蜜多の顚倒せるを明す。

【六】色壞等。色壞滅す、物の分散によりて無常を云ふは小乘相似の說なり。常無、常無きが故に無常と云ふは大乘眞實の說なり。

【七】皆預流果等。二乘聖果よりも般若受持福大なり。

【八】彼れ。般若を指す。

【九】十方殑沙の發心者に般若讀誦せしむるよりも一不退轉者に般若を與へて勸修學せしむる德大なり。

情皆無上正等覺の心を發さんに、善男子善女人等有りて般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしめんに、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し轉じて一りの已に無上正等菩提に於て退轉せざる者に施與し勸めて修學せしめんに是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。何を以ての故に、憍尸迦、是の如き菩薩は般若波羅蜜多を修行して疾く圓滿することを得、深般若波羅蜜多をして廣く流布を行ぜしむればなり。復た次に憍尸迦、若し贍部洲の諸の有情類皆無上正等覺の心を發し展轉して乃至十方各殑伽沙の如き界の一切有情皆無上正等覺の心を發さんに善男子善女人等有りて般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしめ復た巧妙の文義を以て解釋せんに、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、若し善男子善女人等般若波羅蜜多を書持し轉じて一りの已に無上正等菩提に於て退轉せざる者に施與し其れをして讀誦せしめ復た巧妙の文義を以て解釋せんに是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。復た次に憍尸迦、若し贍部洲の諸の有情類皆無上正等菩提に於て不退轉を得展轉して乃至十方各殑伽沙の如き界の一切有情皆無上正等菩提に於て不退轉を得んに、善男子善女人等有りて般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしめんに意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、已に無上正等菩提に於て不退轉を得たる菩薩の中に一りの菩薩有りて是の如き言を作さん、我れ今欣樂して疾く無上正等菩提を證し有情を生死の衆苦より拔濟せんと。若し善男子善女人等彼の事を成ぜんが爲に般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしむるに是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前より

も多く無量無數なり。復た次に憍尸迦、若し贍部洲の諸の有情類皆無上正等菩提に於て不退轉を得展轉して乃至十方各殑伽沙の如き界の一切有情皆無上正等菩提に於て不退轉を得んに、善男子善女人等有りて般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしめ復た巧妙の文義を以て解釋せんに意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を得ること多しや不やと。天帝釋言はく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛言はく、憍尸迦、已に無上正等菩提に於て不退轉を得たる諸の菩薩の中に一りの菩薩有りて是の如き言を作さん、我れ今欣樂して疾く無上正等菩提を證し有情を生死の衆苦より抜濟せんと。若し善男子善女人等彼の事を成ぜんが爲に般若波羅蜜多を書持し衆寶もて莊嚴し施して讀誦せしめ復た巧妙の文義を以て解釋せんに是の善男子善女人等の獲る所の福聚は甚だ前よりも多く無量無數なりと。[一〇]時に天帝釋便ち佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝、世尊是の如き菩薩摩訶薩は轉た無上正等菩提に近づき、是の如く是の如く[一一]應に般若波羅蜜多を以て轉じて更らに慇懃に教授教誡すべく[一二]應に上妙の飲食衣服臥具醫藥及び餘の資具を以て供養恭敬して乏少すること無からしむべし。若し善男子善女人等能く是の如き法施財施を以て彼の菩薩摩訶薩を攝受し供養せば是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること無量なり。所以は何ん、彼の菩薩摩訶薩は要らず是の如き法施財施に由りて攝受供養せられて疾く無上正等菩提を證し諸の有情の爲に大饒益を作せばなりと。爾の時善現、帝釋を讃めて言はく、善哉善哉、善能く諸の菩薩摩訶薩を攝受し勸勵護助して疾く所求の無上正等菩提を證得せしむ。憍尸迦、汝今已に佛の聖弟子の作すべき所の事を作せり。何を以ての故に、憍尸迦、一切如來の諸の聖弟子は諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に法爾として諸の菩薩摩訶薩を攝受し勸勵護助して疾く所求の無上正等菩提を證得せしむればなり。所以は何ん、一切の如來聲聞獨覺世間の勝事は皆菩薩摩訶薩衆に由りて出現することを得ればなり。何を以ての故に、憍尸迦、若し菩薩摩訶薩の菩提心を發す無くん

【一〇】法施財施を以て無上菩提に趣く菩薩を攝受供養すべきを說く。
【一一】法施。
【一二】財施。

ば則ち菩薩摩訶薩の能く六種波羅蜜多を學する無く、若し菩薩摩訶薩の六種波羅蜜多を修學する無くんば則ち菩薩摩訶薩の能く無上正等菩提を證する無く、若し菩薩摩訶薩の無上正等菩提を證得する無くんば則ち如來聲聞獨覺世間の勝事無ければなり。是の故に如來の諸の聖弟子は諸の有情を利樂せんと欲するが爲の故に、法として應に諸の菩薩衆を攝受し勸勵護助し、六種波羅蜜多を學して能く疾く一切智智を證得して盡未來際まで有情を利樂せしむべしと。

第五分廻向品第七[一]

二爾の時慈氏菩薩善現に謂て言はく、菩薩の隨喜し、廻向し倶行する諸の三福業事は餘の有情の四施戒修等の諸の福業事よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと。爾の時善現、慈氏菩薩に問ひて言はく、五若し諸の菩薩の起す所の隨喜廻向の心普ねく無量無數の世界を緣じ、一一の世界の無量無數の已に入涅槃せる諸佛世尊の初發心より乃至成佛まで、展轉して乃至般涅槃に入るまで、是の如く乃至法の將に滅盡せんとするまでの其の中間に於ける所有る六種波羅蜜多相應の善根、若しは諸の弟子の施戒修等の諸の福業事及び學無學の無漏の善根、若しは佛の六戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫智見蘊、若しは一切有情を利樂せんが爲の大慈大悲及び餘の無量無邊の佛法、若しは法要を說き若しは法要に依りて學せる諸の善根、若しは佛世尊般涅槃の後諸の有情類の種ゑし所の善根、合集稱量して現前に最尊最勝最上最妙の隨喜の心を發起し、復た是の如き隨喜倶行の諸の福業事を以て諸の有情と平等に共に無上正等菩提に廻向する有りて此の善根の有情類と共に無上正等菩提を引發せんことを願はんに、意に於て云何、彼の諸の菩薩の是の如きの事を緣じ是の如き行相を起す隨喜廻向の心は是の如き七所緣の得可く彼の菩薩の取れる所の相の如き有りと爲すや不やと。慈氏菩薩、善現に答へて言はく、彼の諸の菩薩の是の如きの事を緣じて、是の如き行相を起す隨喜廻向の心は實に是の如き所緣の得可く、彼の菩薩の取れる所の相の如き無しと。八具壽善現、慈氏菩薩に謂て言はく、若し是の如き所緣の諸の事、彼の菩薩の取れる所の相の如きもの無くんば彼の諸の菩薩の隨喜廻向は豈に皆九想心見倒を成ぜずや。所以は何ん、無所有の事に執著有りて無常を常と謂ひ、實に苦なるを樂と謂ひ、無我を我と謂ひ、不淨を淨と謂ふが如きは、斷れに由りて想心見倒を發起すればなり。所緣の事實に所有無きが如く菩提及び心も亦た應に是の如くな

【一】廻向。慈氏が隨喜廻向に勝劣を說くもの取相あるを難じて平等廻向の義を明す。
【二】菩薩の隨喜廻向倶行の諸福業事の最勝無上たりやを論ず。
【三】福業事。欲界の善業のこと。可愛の果を感生して有情を利益するが故に名づく。
【四】施戒修。布施と受戒と修行六念十念等なり。
【五】般若相應の隨喜廻向ならば無邊に平等に緣じ相應すべし。
【六】戒蘊等。佛の五分にして五眼に應ずる完全內容なり。
【七】所緣…取れる…相有りや。行者が考ふる如き對象や形式や條件の差別せらるべきものなるかと云ふ意。
【八】隨喜廻向を詳說し、想心見倒に墮せざる所以を明す。
【九】想心見倒。有相、有執による顚倒の邊見と云ふこと。卽ち無限なるを有限とし、無常なるを常一とするが如きなり。

るべし。若し爾れば一切應に差別無かるべし。此の中何等か是れ所緣の事、何等か是れ隨喜心、何等か是れ菩提、何等か是れ廻向、[一〇]云何が菩薩是の如きの事に緣りて隨喜心を起して無上正等菩提に廻向するやと。慈氏菩薩、善現に報へて言はく、[一一]是の如く起す所の隨喜廻向は彼の新に大乘を學せる菩薩の前に對して說くべからず。所以は何ん、彼れ是の如き隨喜廻向を聞かば所有る信樂恭敬の心皆當に滅沒すべければなり。是の如き隨喜廻向の法は應に不退轉の菩薩摩訶薩或は曾て無量の諸佛を供養し久しく大願を發して多く善根を植ゑ多く善友の攝受する所と爲れる者の爲に分別開示すべし。所以は何ん、彼れは是の如き隨喜廻向を聞きて驚かず怖かず退せず沒せざればなり。諸の菩薩衆は應に是の如き隨喜し俱行する諸の福業事を以て所求の一切智智に廻向すべし、[一二]爾の時に當て應に是の念を作すべし、心を用て隨喜廻向す可き所なるも、此の用ふる所の心盡滅離變す、此の所緣の事及び諸善根も皆亦た心の如く盡滅離變す。此の中何等か是れ用ふる所の心、復た何等を以て所緣の事及び諸善根と爲し、而かも無上正等菩提に隨喜廻向すと說かんや。是の心を心に於て理として隨喜廻向すること有るべからず、無二の心俱時に起るを以ての故に、心も亦た隨喜廻向す可からず心自性なるが故に。是の故に隨喜廻向の心及び所緣の事は皆得可からずと。[一三]時に天帝釋、善現に白して言さく、新に大乘を學せる諸の菩薩衆是の如きの事を聞きて其の心將に驚怖退沒無しとするや。云何が菩薩は所緣の事に於て隨喜心を起し、云何が隨喜し俱行する諸の福業事を攝受して無上正等菩提に廻向するやと。爾の時具壽善現、[一四]慈氏菩薩に依りて是の如き言を作さく、諸の菩薩衆は普ねく十方一切の如來應正等覺に緣りて諸の有路を斷じ[一五]戲論道を絕し諸の雲霧を殄し諸の棘刺を摧き諸の重擔を捨て己利を逮得し諸の[一六]有結を盡し正智もて解脫し心自在にして[一七]第一究竟に到り無餘依涅槃界に入れる者、初發心より乃至成佛まで、展轉して乃至般涅槃に入るまで、是の如く乃至法の將に滅沒せんとするまでの其の中間に於ける所有る功德、及び諸の弟子の種うる所の善根、合集

【一〇】對象も隨喜心も、これより彼に廻向することもなければ、某の事件を贊成して成佛の爲にすると云ふが如きことあるべからずとす。

【一一】彌勒は須菩提の云ふ所は調高くして俗耳に入るべからず、新學大乘者に說くべからず、若し說かば呆然として信も敬もなくなる。これ唯不退菩薩にのみ說くべしとす。

【一二】上位久修の菩薩は無相に驚かず、故に廻向に當て能廻の心も所廻の事も無常なり又能廻所廻等く心なり隨喜廻向すべからずとするに至る。

【一三】慈氏は新久、上下を分ちて有相廻向と無相無廻向とを說くに對して善現の無相一如と相違するを以て問ふなり。

【一四】善現はかかる分別による隨喜廻向に於て新學菩薩邊見に陷らざるかを問ふ。

【一五】戲論。無義非理の言論。また愛論(情意的迷執)、見論(理智的迷執)をいふ。

【一六】有結。二十五有の果報を生ずる原因たる煩惱をいふ。

【一七】第一究竟。第一次的なる、絕對至上、最勝の統一原理。これ結縛して驅使する結使なり。

稱量して現前に最尊最勝最上最妙の隨喜の心を發起し、復た是の如く隨喜し倶行する諸の福業事を持て無上正等菩提に廻向せんに是の諸の菩薩云何が想心見倒に墮せざるやと。[一八]慈氏菩薩、善現に謂て言はく、若し諸の菩薩自ら起す所の隨喜廻向心等の諸法に於て心等の想無くんば則ち想心見倒に墮せず。若し諸の菩薩自ら起す所の隨喜廻向心等の諸法に於て心等の想有らば則便ち想心見倒に墮するなり。又た諸の菩薩は[一九]是の如き心を以て佛弟子の功德善根を念じて而かも隨喜を生ず。正しく此の心は盡滅離變して能隨喜に非ずと知り、正しく彼の法其の性も亦た然なり所隨喜に非ずと知る。又た正しく能廻向心、法性も亦た爾なり能廻向に非ずと了達し、及び正しく所廻向の法、其の性も亦た爾なり所廻向に非ずと了知す。若し能く是の如き所說に依りて隨喜廻向する有らば是れ正にして邪に非ざるなり。[二〇]諸の菩薩衆は皆應に是の如き隨喜廻向無上正等菩提を發起すべし。又た諸の菩薩は普ねく過去未來現在の諸佛世尊の所有る功德、若しは諸の弟子の所有る善根、若しは異生類の所有る善根、若しは傍生趣の正法を聽聞せる所有る善根、若しは餘の天龍―廣說乃至―人非人等の正法を聽聞して發せる菩提心、是の如き一切を合集稱量せるを緣じて、現前に最尊最勝最上最妙隨喜の心を發起し、既に隨喜し已て無上正等菩提に廻向せよ。是の如き時に於て若し正しく諸の能隨喜廻向の法は、盡滅離變し、諸の所隨喜廻向の法も其の性亦た然なりと解了し、是の如く知ると雖も而かも能く無上正等菩提に隨喜廻向せよ。復た是の時に於て若し正しく都て法の能く隨喜廻向す可き有ること無しと解了し法に於て是の如く知ると雖も而かも能く無上正等菩提に隨喜廻向せば便ち想心見倒に墮せず。所以は何ん、是の諸の菩薩は能隨喜廻向の心及び所隨喜廻向の法に於て執著を生ぜざればなり。是れを無上の隨喜廻向と名づく。若し諸の菩薩能隨喜廻向の法に於て能隨喜廻向法の想を起し所隨喜廻向の法に於て所隨喜廻向法の想を起して隨喜廻向無上正等菩提を起さば則便ち想心見倒に墮して起す所の隨喜廻向は皆邪なり。[二一]菩薩は應に方便して遠離を知るべ

【一八】慈氏は邊見となると否とは行者に分別の執著（心等の想）あるとなきとによると答ふ。

【一九】菩薩倒見に墮せざる隨喜心は下に云ふ如く能隨喜に非ず所隨喜に非ずと知るなり、但この說の如くば隨喜なき隨喜なり、慈氏が初學に分別隨喜を說くよりも善現の說に合すと云ふべし。

【二〇】正しき隨喜廻向を示す。

【二一】菩薩隨喜廻向に於て方便して遠離を知らば想心見倒に墮せざるを明す。

し。若し諸の菩薩修作する所の諸の福業事に於て如實に遠離寂靜を了知し、能隨喜迴向の心に於ても亦た如實に遠離寂靜を知り、如實に知り已て深般若波羅蜜多を行じ、諸法の中に於て都て取著無くして隨喜迴向無上正等菩提を起さば則ち想心見倒に墮せず。若し諸の菩薩修作する所の諸の福業事に於て如實に遠離寂靜を知らず、能隨喜迴向の心に於ても亦た遠離寂靜を知らず、一切法に於て諸相に執著して隨喜迴向無上正等菩提を起さば則ち想心見倒に墮せん。[22] 若し諸の菩薩已に滅度せる諸佛世尊及び諸の弟子の功德善根に於て正しく隨喜迴向を發起せんと欲せば應に是の念を作すべし。佛世尊及び諸の弟子は皆已に滅度して自性有るに非ざるが如く功德善根も亦復た是の如し。我が發起する所の隨喜迴向及び迴向する所の無上菩提の性相も亦た爾なり都て得可からずと。如實に知り已て諸の善根に於て隨喜迴向無上正等菩提を發生せば便ち能く想心見倒を生ぜず、相を取らざるが故に。佛の聽許したまふ所にして正しく菩提に隨喜迴向すと名づく。若し諸の菩薩取相を以て方便と爲して深般若波羅蜜多を行じ、已に滅度せる佛及び弟子の功德善根に於て相を取りて菩提に隨喜迴向せば是れを善隨喜迴向に非ずと爲す。若し諸の菩薩不取相を方便と爲して深般若波羅蜜多を行じ、已に滅度せる佛及び弟子の功德善根に於て相を離れて菩提に隨喜迴向せば是れを名づけて善隨喜迴向と爲すと。[23] 慈氏菩薩、善現に問ひて言はく、云何が菩薩は佛及び弟子の功德善根等に於て皆相を取らずして而かも能く菩提に隨喜迴向するやと。[24] 善現答へて言はく、應に知るべし菩薩の學する所の般若波羅蜜多方便善巧は相を取らずと雖も而かも作す所成ず、般若波羅蜜多を離れて能く正しく隨喜迴向を起すこと有るに非ず。是の故に菩薩の成ずる所を成ぜんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべしと。[25] 慈氏菩薩、善現に謂て言はく、是の說を作すこと莫れ、所以は何ん、甚深般若波羅蜜多の中には佛及び弟子の功德善根都て得可からず、起す所の隨喜迴向菩提も亦た得可からざるを以て此の中にて菩薩は應に是の觀を作すべし、過去の如來及び諸の弟子の功德善根性は皆已

【二二】已滅の佛德隨喜に例して一切隨喜迴向の不可得を說く。

【二三】正。邪隨喜迴向に就て明す。

【二四】善現は不取相の隨喜迴向は般若の修學にありとす。

【二五】慈氏は般若には佛も迴向も不可得なるを說く。

に滅し、起せし所の隨喜迴向の心及び大菩提性も皆寂滅せり。我れ若し彼れに於て相を取りて分別して隨喜迴向の心を發生せば諸佛世尊の皆許さざる所なり。所以は何ん、[二六]已に滅度せる佛弟子等に於て相を取りて分別し隨喜迴向する是れ則ち名づけて大有所得と爲せばなり。過去は已に滅して所有無きが故に未來現在の佛弟子等の未だ至らずして住せざるも亦た得可からず。若し得可からずんば取相の境に非ず。若し其の相を取りて隨喜迴向菩提を發生せば便ち顛倒に墮せん。是の故に菩薩、如來及び諸の弟子の功德善根に於て正しく隨喜迴向菩提を發さんと欲せば中に於て有所得取相の分別隨喜迴向を起すべからず。若し其の中に於て有所得取相の分別隨喜迴向を起さば佛は彼れに大義利有りと說きたまはず。所以は何ん、是の如き隨喜迴向の心は妄想分別にして毒を雜ふと名づくるが故なり。飮食有りて上妙の色香美味を具すと雖も毒藥を雜ふるに愚夫淺識は貪り取りて之を噉ひ初め意に適すと雖も後便ち大いに苦しまんが如し。是の如く一類の[二七]補特伽羅は甚深般若波羅蜜多を善く受持せず善く觀察せず、善く甚深の義趣に通達せずして而かも大乘種性の者に告げて曰はく、來れ善男子、汝三世の諸佛世尊に於ける戒等の五蘊及び餘の無量無邊の功德、若しは佛弟子の種うる所の功德、若しは佛世尊の諸の菩薩聲聞獨覺に授けし[二八]三菩提の記、彼の有情類の種うる所の善根、若しは諸の天人阿素洛等の種うる所の善根、是の如き一切を合集稱量して現前に菩提に隨喜迴向すと。是の如くして說く所の隨喜迴向は有所得を以て方便と爲すが故に、譬へば世間の毒を雜へし飮食の如し。菩薩種性の補特伽羅は彼の所說に隨て學すべからず。是の故に大德、應に云何が菩薩乘に住せる善男子等、三世十方の諸佛及び弟子等の功德善根に應じて隨喜迴向して毒無しと名づく可きかを說くべし。[二九]善現答へて言はく、若し諸の菩薩、佛を謗らずして而かも隨喜迴向心を發さんと欲せば應に是の念を作すべし、諸の如來應正等覺の如實に功德善根に通達して其の如き性有り、是の如き相有り、是の如き法有り、而かも隨喜す可しとするが如く、我れも今亦た應に

【二六】此に慈氏の主張あり。

【二七】補特伽羅 (Pudgala)。數取趣、又は人と譯す。有情、又は有情の我をいふ。

【二八】三菩提。聲聞菩提、緣覺菩提、諸佛菩提の稱。

【二九】善現。佛說に隨順せる隨喜迴向を說く。

是の如く隨喜すべし。諸の如來應正等覺の如實に通達して應に是の如き諸の福業事を以て菩提に廻向すべしとするが如く我れも今亦た應に是の如く廻向すべしと。若し是の如き隨喜廻向を作さば則ち佛を謗らず衆毒を雜へず諸の過咎無く善く佛の敎に順ずとす。復た次に菩薩は應に是の如き隨喜廻向を作すべし。[三〇]戒蘊等の三界に墮せず三世の攝に非ざるが如く隨喜廻向も亦た應に是の如くなるべし。所以は何ん、彼の諸法の自性空なるが故に三界に墮せず三世の攝に非ざるが如く隨喜廻向も亦復た是の如くなればなり。若し能く是の如く隨喜廻向せば衆毒を雜へず失壞する所無し。若し是の如く隨喜廻向せずんば當に知るべし是れ邪隨喜廻向なりと。若し諸の菩薩是の如き念を作さん、諸の如來應正等覺の如實に諸の功德等に通達して是の如き法有るは此の法に依る可しとして[三一]無倒に隨喜廻向を發生するが如く我れも今亦た應に是の如き法に依りて隨喜廻向の心を發生すべしと、是れを正しく隨喜廻向を發すと爲すと。

[三二]爾の時世尊、善現を讃めて曰はく、善哉善哉、汝今乃ち能く諸の菩薩の爲に大佛事を作せり。善現當に知るべし、假使ひ三千大千世界の諸の有情類一切皆四靜慮四無量四無色定五神通等世出世間有相の功德を得んに是の一菩薩の起す所の無倒の隨喜廻向は彼の功德よりも最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと。復た次に善現、假使ひ三千大千世界の一切有情皆無上正等覺の心を發して一一殑伽沙の如き劫に住し有所得を以て方便と爲し皆上妙の衣服飲食臥具醫藥及び餘の樂具を持て殑伽沙の如き世界の有情を恭敬供養して常に間斷無からんに、意に於て云何、是の諸の菩薩は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。善現對へて曰く、甚だ多し世尊、是の如き福聚若し形色有らば十方各殑伽沙の如き界にも容受すること能はずと。佛言はく、善現、是の如し是の如し、汝が所說の如し。若し一りの菩薩深般若波羅蜜多に攝受せらるるに由るが故に無倒の隨喜廻向を發起して獲る所の功德は前の菩薩の有相の福聚よりも百倍勝ると爲し千倍勝ると爲し乃

【三〇】戒蘊等の五分は如來身にして三界を超え三世に攝せられず。

【三一】無倒。一切の顚倒を離れたる正見をいふ。

【三二】無倒の隨喜廻向の功德は最勝無上なるを明す。

至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

爾の時四大天王各眷屬二萬の天子と倶に[三三]佛足を頂禮し合掌恭敬して白して言さく、世尊、是の諸の菩薩の起す所の無倒の隨喜迴向は甚深般若波羅蜜多方便善巧に攝受せらるるが故に威力廣大にして前に說く所の有所得施に勝ること多く百千倍なりと。時に天帝釋乃至他化自在天王各眷屬十萬の天子と倶に皆種種天の妙花鬘塗散等の香衣服瓔珞寶幢幡蓋衆妙珍奇の天樂を奏する音を持て佛を供養し佛足を頂禮し合掌して白して言さく、是の諸の菩薩の起す所の無倒の隨喜迴向に甚深般若波羅蜜多方便善巧に攝受せらるるが故に威力廣大にして前に說く所の有所得施に勝ること多く百千倍なりと。時に大梵王——廣說乃至——色究竟天各無量百千の天衆と前んで佛所に詣り佛足を頂禮し合掌恭敬し倶に聲を發して言さく、希有なり世尊、是の諸の菩薩の起す所の無倒の隨喜迴向は甚深般若波羅蜜多方便善巧に攝受せらるるが故に威力廣大にして前に說く所の有所得施に勝ること多く百千倍なりと。爾の時佛、淨居天等の諸の天衆に告げて言はく、且く三千大千世界の一切有情の皆無上正等覺の心を發せるをば置き假使ひ十方殑伽沙等の諸佛世界の一切有情皆無上正等覺の心を發し一一殑伽沙の如き劫に住し有所得を以て方便と爲し皆上妙の衣服飮食臥具醫藥及び餘の樂具を持て殑伽沙の如き世界の有情を恭敬供養して常に間斷無からんに、若し菩薩有りて普ねく三世の諸佛世尊の所有る戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫智見蘊及び餘の無量無邊の佛法、若しは諸の弟子の所有る善根、若しは餘の有情の修する所の善法、是の如き一切を合集稱量せるを緣じて現前に最尊最勝最上最妙の隨喜倶行の諸の福業事を發起し、復た是の如き隨喜倶行の諸の福業事を持て無上正等菩提に迴向せば、是の如くして起す所の隨喜迴向の獲る所の功德は前に說く所の有相福聚に勝ること無量無邊にして稱計す可からずと。

[三四]爾の時善現便ち佛に白して言さく、世尊の說きたまふ如き現前の最尊最勝最上最妙の隨喜倶行の

【三三】佛足を頂禮し、佛の足にわが頭面をつけて禮拜すること、佛敎に於て最も丁寧なる敬禮法なり。

【三四】最尊最勝最上最妙の隨喜迴向の義を明す。

諸の福業事とは云何が名づけて最尊最勝最上最妙の隨喜俱行の諸の福業事と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩三世の法に於て取らず捨てず念ぜず得ずんば法の[三五]已に正しく當に生ずべき有ること無しと知り、法の已に正しく當に滅すべき有ること無しと知り、法の實性の如く隨喜迴向無上正等菩提を發生す、是の如きを名づけて最尊最勝最上最妙の隨喜俱行の諸の福業事と爲す。復た次に善現、若し諸の菩薩三世の諸佛世尊及び弟子等の布施淨戒安忍精進靜慮般若及び正解脫智見相應の善根に於て無倒の隨喜迴向を發生せんと欲せば應に是の念を作すべし、眞解脫の如く布施淨戒安忍精進靜慮般若相應の善根も亦復た是の如し、眞解脫の如く戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫智見蘊相應の善根も亦復た是の如し、眞解脫の如く所有る勝解も亦復た是の如し、眞解脫の如く隨喜迴向も亦復た是の如し、眞解脫の如く一切過去の已に滅せる諸法も亦復た是の如し、眞解脫の如く一切未來の未だ生ぜざる諸法も亦復た是の如し、眞解脫の如く一切現在の現に轉ぜる諸法も亦復た是の如し、「眞解脫の如く過去無量無數世界の諸佛世尊及び弟子等も亦復た是の如し、眞解脫の如く未來無量無數世界の諸佛世尊及び弟子等も亦復た是の如し、眞解脫の如く現在無量無數世界の諸佛世尊及び弟子等も亦復た是の如し。是の如く諸法の眞如法性は向無く背無く縛無く脫無く染無く淨無し。我れ是の如き功德善根に於て現前に隨喜し移轉無く及び失壞無く相無く得無きを以て方便と爲し無上正等菩提に迴向せんと。是の如きを名づけて最尊最勝最上最妙の隨喜迴向と爲す。善現當に知るべし、是の如く無倒に隨喜迴向して獲る所の功德は十六面各殑伽沙數の如き世界の一切有情皆無上正等覺の心を發して一一殑伽沙の如き劫に住し有所得を以て方便と爲して修する所の淨戒安忍精進靜慮般若相應の善根に百倍勝ると爲し千倍勝ると爲し乃至鄔波尼殺曇倍も亦復た勝ると爲すと。

【三五】已に正しく等。三世の生を云ふ。

巻の第五百五十九

第五分地獄品第八[一]

[二]時に舍利子便ち佛に白して言さく、是の如き無倒の隨喜廻向は皆般若波羅蜜多の威力に由りて成辦するやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如しと。時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は能く照明と作る。皆應に敬禮すべし。世間の諸法も染汚すること能はず、能く翳闇を除きて能く光明を發し、能く利安を施し能く導首と爲り、諸の盲者の與には淨眼目と作り、闇を渉る徒の爲には明燈炬と爲り、道を失へる者を引いて正路に入らしめ、諸の法性を顯し[三]薩婆若に卽して一切法の無生無滅を示す。是れ諸の菩薩摩訶薩の母にして能く諸佛をして具さに[四]三轉十二行相の無上法輪を轉ぜしめ、依護無き者には爲に依護と作り、能く一切の生死の苦惱を除き、諸法の無性を性と爲すを開示す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多に於て應に云何が住すべきかと。佛、舍利子に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多に於て應に佛の如く住すべし、般若波羅蜜多に敬事すること應に諸佛世尊に敬事するが如くすべしと。時に天帝釋是の念言を作さく、今舍利子は何の因何の緣にて佛に斯の事を問へるやと。念じ已て便ち舍利子に問ひて言はく、何の因緣を以て是の問ひを作すやと。時に舍利子、帝釋に報へて言はく、前に佛は、諸の菩薩甚深般若波羅蜜多に攝受せらるるが故に、起す所の隨喜俱行の諸の福業事は疾く能く一切智智を證得して有所得の菩薩の修する所の布施淨戒安忍精進靜慮般若相應の善根に勝ると說きたまへり。是の故に我れ今是の如き問ひを作す。憍尸迦、[五]生盲衆若しは百若しは千ならんも[六]淨眼者の方便して引導する無くんば近きすら尙ほ正道に趣入すること能はざるが如し。況んや能く遠く豐樂の大城に達せんをや。是の如く前五羅波蜜多の諸の生盲衆は若し般若波羅蜜多の淨眼者の導き無く

【一】地獄品。般若は無取相にして能く照明ともなり廣大なるを明す然るに宿善淸淨ならざるもの毀謗し長く大地獄に墮することを說くに由る。

【二】般若の成辦力に就て明す。

【三】薩婆若（Sarvajña）。一切智者と譯す、佛なり。

【四】三轉十二行相。三轉は三轉法輪、佛が四諦の法を三番に說き給ふをいふ。卽ち示轉法輪（苦集滅道を示し給ふこと）、勸轉法輪（苦は知れ集は滅せよ滅は證れ道は修めよと勸め給ふこと）、證轉法輪（四諦に就き自己の所證を以て示し給ふこと）の稱なり。十二行相とは四諦に各示勸證の三行相あれば合せて十二行相と云ふなり。

【五】生盲衆。眞理に暗き者を云ふ。

【六】淨眼者。淨眼とは淸淨の法眼なり。眞理に通達せる者の稱。

んば尙ほ菩薩の正道にすら趣くこと能はず況んや能く一切智城に證入せんをや。憍尸迦、布施等の五波羅蜜多は要らず般若波羅蜜多に由りて目有る者と名づけ、復た般若波羅蜜多の攝受する所に由るが故に彼岸に到ると名づくと。時に舍利子復た佛に白して言さく、云何が菩薩は般若波羅蜜多を引發するやと。佛、舍利子に告げたまはく、若し諸の菩薩、色受想行識を引發せず亦た色受想行識を見ずんば是れ卽ち名づけて般若波羅蜜多を引發すと爲すと。時に舍利子復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を引發せば何の法を成ずと爲すやと。佛、舍利子に告げたまはく、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を引發せば一切法に於て都て成ずる所無し。成ずる所無きが故に般若波羅蜜多と名づくることを得と。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は、[七]豈に一切智智を成ずること能はざるやと。佛言はく、憍尸迦、是の如き般若波羅蜜多は亦た一切智智を成ずること能はず。何を以ての故に、憍尸迦、所得有るが如く、名想有るが如く、造立有るが如く成ずること能はざるが故にと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、若し爾れば般若波羅蜜多は云何が一切智智を成ずと說きたまふやと。佛言はく、憍尸迦、是の如き般若波羅蜜多は引發する所の一切智智に於て[八]成ずる所無きが故に說いて成ずと爲すと名づくと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、是の如き般若波羅蜜多は一切法を生滅することを爲さざるが故に、一切法を成壞することを爲さざるが故に世間に出現して世間の與に饒益事を作すと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の如き想を起さば則便ち甚深般若波羅蜜多を捨遠するなりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、復た因緣有りて般若波羅蜜多を捨遠す、謂ゆる[九]是の想を生ずるなり、甚深般若波羅蜜多は空無所有なりと。卽便ち甚深般若波羅蜜多を捨遠す。所以は何ん、菩薩の般若波羅蜜多は空に非ず有に非ず分別する所無ければなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、佛の般若波羅蜜多を說きたまふは何の法を顯はさんが爲なるやと。佛、善現に告げたまはく、我が般

【七】前に一切法に都て成ぜずと云ふが故に一切智智すら成ぜざるかを疑ふ。

【八】成ずる所無き…成ず。矛盾の如きも成ずるとする取相なきが故に成ずるなり。

【九】般若を捨つる想は有のみならず、空なり無所有なりと取想するも亦同じ。

若波羅蜜多を說くは色を顯さんが爲ならず亦た受想行識を顯さんが爲ならず、預流果を顯さんが爲ならず亦た一來不還阿羅漢果獨覺菩提を顯さんが爲ならずと。[一〇]具壽善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は卽ち是れ廣大波羅蜜多なりと。佛、善現に告げたまはく、何に緣りて汝甚深般若波羅蜜多は卽ち是れ廣大波羅蜜多なりと說くやと。善現答へて言はく、甚深般若波羅蜜多は[一一]色に於て大と作さず小と作さず集と作さず散と作さず、受想行識に於ても亦た大と作さず小と作さず集と作さず散と作さず、佛の十力に於て强と作さず弱と作さず、一切智に於て廣と作さず狹と作さず。若し諸の菩薩是の如き想を起さば般若波羅蜜多を行ずるに非ず。何を以ての故に、是の如き諸想は深般若波羅蜜多の[一二]等流果に非ざるが故なり。甚深般若波羅蜜多若し是の想を起さん、我れ當に若干の有情を度脫して無餘依般涅槃界に入らしむべしと。是れ則ち名づけて大有所得と爲す。有所得は能く辦ずる所有るに非ず。何を以ての故に、世尊、有情無生なるが故に當に知るべし般若波羅蜜多も亦た無生なりと。有情は自性無きが故に、遠離の故に、思議す可からざるが故に、滅壞無きが故に、覺知無きが故に、當に知るべし般若波羅蜜多も亦た自性無く―廣說乃至―亦た覺知無しと。世尊、有情力積集するが故に當に知るべし如來力も亦た積集すと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に於て能く信解を生じて疑無く惑無く亦た迷謬せずんば是の諸の菩薩は何處より沒し來りて此の間に生じ行を積むこと久如く深法の義に於て能く隨て覺了するやと。佛言はく、舍利子、是の諸の菩薩は他方界の諸佛に事へし所の法會中より沒し來りて此の間に生ず。舍利子、是の諸の菩薩は已に多く諸佛世尊に親近し曾て此の中の甚深の法義を問ひ已て無量無數の大劫を經、百千の難行苦行を修集し大願力に乘じて此の土に來生じ深般若波羅蜜多に於て若しは見若しは聞きて大歡喜を生じ便ち是の念を作す、我れ今佛を見、佛の所說を聞くと。此の因緣に由りて恭敬し信受するなりと。爾の時善現、便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は見聞す

【一〇】甚深般若はこれ廣大波羅蜜多なるを明す。

【一一】物に大小集散なり十力の力に强弱を云はず、一切智が博覽廣大なりとせず、卽取相分別ならず。

【一二】等流果。五果の一。六因の中同類因、遍行因によりて得る所の結果をいふ。後時の結果が前時の原因と同等の流類なるが故に等流果と云ふ。

可き耶と。佛言はく、不なりと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に於て能く勤めて修學せば是の諸の菩薩は行を積むこと久如きやと。[13]佛言はく善現、此れ應に分別すべし、諸の菩薩の初發心より眞善友に遇ひ方便して攝受し卽ち能く甚深般若波羅蜜多を修學して深法門に於て能く信解を生ずる有り。諸の菩薩の曾て多百千の佛に値遇し諸佛の所に於て梵行を勤修すと雖も而かも有所得を方便と作すが故に、深般若波羅蜜多に於て能く修學せず、般若波羅蜜多を說くを聞き信解を生ぜずして卽便ち捨て去る有り。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は過去の佛の所にて般若波羅蜜多を說くを聞きて信敬心無く衆を捨てて去り、今般若波羅蜜多を聞き信敬心無く還りて復た捨て去るなり。彼れは般若波羅蜜多に於て若しは身若しは心皆和合せず、和合せざるが故に惡慧を感ずる業を造作し增長す。此の業に由るが故に深般若波羅蜜多を聞きて毀謗し厭捨す。善現當に知るべし若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多を毀謗し厭捨せば當に知るべし則ち爲れ一切智智を毀謗し厭捨するなり、若し一切智智を毀謗し厭捨せば卽ち三世の諸佛を毀謗し厭捨するなり。此の因緣に由りて正法を害する罪を造作し增長す。此の罪に由るが故に多時を經歷して諸の重苦を受く、謂ゆる彼の造りし所の罪極重なるが故に多く百千歲大地獄に墮ち、此の界他方と往還輪轉して諸の重苦を受け解脫することを得ず。此の界[14]火水風劫起る時移して他方の大地獄內に置かれ、他方火水風劫起る時移して此の界の大地獄內に置かれ、是の如く輪廻し無數劫を經て大地獄の極めて忍び難き苦を受く。彼の法を害せし罪業の勢稍微へ地獄より出でて[15]傍生趣に墮ち、前に展轉せるが如く此の界他方と多劫輪廻して諸の劇苦を受く。彼の法を害せし罪業の勢漸く薄らぎ傍生趣を脫して鬼趣の中に墮ち此の界他方と輪廻展轉して諸の重苦を受けて無量劫を經ん。彼の法を害せし業の餘勢將に盡きなんとして餓鬼趣を免れて人中に來生し具さに人間の貧窮下賤頑愚疾病醜陋等の苦を受け尙ほ佛法僧の名有るを聞かず況んや能く精勤して諸の善業を修せんをや。諸の惡業を以て正法を害せし

【一三】般若を毀謗し厭捨する所以を明す。

【一四】火水風劫。壞劫到來して此世界滅盡する時大火大水大風起るを云ふ。

【一五】傍生趣 (Tiryagyoni)。畜生道なり。身橫生にして正しからざれば名づく。

が故に是の如き類の圓滿の苦果を受けんと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、正法を害せし業と五無間と此の二惡行は相似すると爲んや不やと。[一六]爾の時佛、舍利子に告げて言はく、此の業は五無間に似ると謂ふこと勿れ。所以は何ん、[一七]五無間業は重苦を感ずと雖も而かも正法を毀謗するに比す可からず。謂ゆる彼れは甚深般若波羅蜜多を說くを聞き毀謗し拒逆して言はく、此の[一八]般若波羅蜜多は眞の佛語に非ず修學すべからず、法に非ず律に非ず大師の敎に非ずと。此の因緣に由りて其の罪極めて重し。比するに五無間業を以てす可からず。舍利子、此の法を害する人は自ら正法を謗り亦た他をして謗らしめ、自ら其の身を壞し亦た他をして壞せしめ、自ら毒藥を飮み亦た他をして飮ましめ、自ら生天解脫の樂果を失ひ亦た他をして失はしめ、自ら其の[一九]身を持て地獄の火に足し亦た他をして足さしめ、自ら苦海に沈み亦た他をして溺れしめ、自ら甚深般若波羅蜜多を信解せず亦た他人に敎へて信解せず迷謬顚倒せしむ。舍利子、我れ般若波羅蜜多に於て尙ほ正法を害す者をして其の名字を聞かしむるを欲せず況んや當に爲に說くべきをや。舍利子、正法を害する者をば我れ尙ほ菩薩乘に住する善男子等の目を擧げて觀視するをすら聽さず況んや當に共住すべきをや。舍利子、正法を害する者には、我れ尙ほ袈裟を被服するすら聽さず況んや供養を受けんをや。何を以ての故に、舍利子、正法を害する者は黑闇類に墮すること臭爛糞の如く穢蝸螺の如く癩病人の甚だ厭惡す可きが如し。諸の法を害する者の言を信用する有らんも亦た前に說く所の如き大苦を受けんと。時に舍利子復た佛に白して言さく、何に緣りて正法を害する者の當來に受くる所の惡趣の身量を說かざるやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、止みね彼の趣の身量を說くを須ひず、忽に法を害する者聞き已らば驚惶し心頓に憂愁して毒箭に中れるが如く身漸く枯顇し苗を截られしが如く彼れ或は之を聞きて當に熱血を嘔き身命を喪失し或は死苦に近づくべきが故に我れ彼の趣の身量を說かずと。時に舍利子、復た重ねて請ひて言はく、唯だ願くは爲に說いて後の明識と作したまはんことを

【一六】正法を毀謗する罪の極重なることを明す。

【一七】五無間業。五逆罪なり。

【一八】般若を佛法に非ずとするは一切の覺醒眞善を破るが故にその罪最大なり。謂ふる謗法は五逆より重し造逆大罪なるも、その罪となるは正法に闕る、法なくば罪も罪とならず。

【一九】身を以て獄火の薪とす。

と。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、我が先に彼の受苦の多劫なるを說けるは後人の與に大明誡と作すに足らん。當來に自ら善男子等に類するものは、我が前に說きし正法を害する報ひを聞かば寧ろ身命を捨つるも終に法を謗らじ。我れ當來に長時に苦を受くる勿らんと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、諸の聰明なる善男子等有らば應に善く身語意業を守護すべし。彼れ豈に語惡業に由るが故に惡趣人の中にて長時に苦を受くるならずやと。佛言はく、善現、是の如し是の如し、我が正法[二〇]毘奈耶の中に於ても當に愚癡の諸の[二一]出家者有るべし。彼れ我れを稱して其の大師と爲すと雖も而かも我が甚深般若波羅蜜多を說くを毀謗し拒逆せん。善現當に知るべし、若し甚深般若を毀謗する有らば則ち爲れ無上菩提を毀謗するなり、若し無上菩提を毀謗する有らば則ち爲れ三世の諸佛を毀謗するなり、若し三世の諸佛を毀謗する有らば則ち爲れ一切智智を毀謗するなり、若し一切智智を毀謗する有らば則ち法を毀謗するなり、若し法を毀謗せば則ち僧を毀謗するなり、若し僧を毀謗せば則便ち無量の罪業を造作せん、若し無量の罪業を造作する有らば則便ち無邊の苦報を攝受せんと。[二二]具壽善現復た佛に白して言さく、彼の愚癡人は幾ばくの因緣の故に甚深般若を毀謗し拒逆するやと。佛、善現に告げたまはく、二因緣に由る。一には邪魔の扇惑する所と爲り、二には深法に於て信解する能はざればなり。復た次に善現、四因緣に由りて甚深般若を毀謗し拒逆す。一には惡友に誘誑せらるゝが爲に、二には善法を勤修する能はざるが爲に、三には惡を懷いて他の過を憙求するが爲に、四には嫉妬して自讃毀他するが爲なり。是の如き諸の因緣を具するに由るが故に彼の愚癡人は甚深般若波羅蜜多を毀謗拒逆して無邊の極重惡業を發起すと。爾の時善現復た佛に白して言さく、彼の愚癡人は勤めて精進せずんば佛の說きたまふ所の甚深般若波羅蜜多に於て實に信解し難からんと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如しと。具壽善現復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は云何が甚深にして極めて信解し難きやと。佛、善現に告げたまはく、色は

【二〇】毘奈耶（Vinaya）。離行、制止、調伏、滅などと譯す。三藏の中の律のこと。

【二一】出家者等。俱迦梨伴黨惡口妄語を以て佛を謗り僧を破する因緣などを暗含する經說なり。

【二二】般若を毀謗拒逆する因緣を明し、般若の信解し難き所以を說く。

縛に非ず、脫に非ず、何を以ての故に、色は無性を以て自性と爲すが故なり。受想行識は縛に非ず、脫に非ず、何を以ての故に、受想行識は皆無性を以て自性と爲すが故なり。復た次に善現、色の前後中際は縛に非ず脫に非ず、何を以ての故に、色の前後中際は皆無性を以て自性と爲すが故なり。受想行識の前後中際は縛に非ず脫に非ず、何を以ての故に、受想行識の前後中際は皆無性を以て自性と爲すが故なりと。

三 具壽善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は若し精勤せずんば甚だ信解し難からんと。佛言はく、善現、是の如し是の如し。所以は何ん、色清淨ならば卽ち果清淨色清淨なるが故に果も亦た清淨、受想行識清淨ならば卽ち果清淨、受想行識清淨なるが故に果も亦た清淨なればなり。復た次に善現、色清淨ならば卽ち一切智清淨、一切智清淨なるが故に色も亦た清淨なり。是の色清淨と一切智清淨とは本より已來二無く別無く斷無く壞無し。受想行識清淨ならば卽ち一切智清淨、一切智清淨なるが故に受想行識も亦た清淨なり。是の受想行識清淨と一切智清淨とは本より已來二無く別無く斷無く壞無しと。

【三】深般若を信解するには精勤を要す一切清淨なるべきが故に。

第五分　淸淨品第九

[二]爾の時舍利子、佛に白して言さく、世尊、是の如き淸淨は最も爲れ甚深なりと。佛言はく、是の如し、極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は是れ大光明なりと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は、[三]得無く現觀無しと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は生起する所無しと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は三界に生ぜずと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は知る無く解する無しと。佛言はく、是の如し、極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、是の如き淸淨は色に於て知る無く受想行識に於ても亦た知る無しと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、甚深般若波羅蜜多は極めて淸淨なるが故に一切智に於て損する無く益する無しと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。舍利子言はく、甚深般若波羅蜜多は極めて淸淨なるが故に一切法に於て取る無く捨つる無しと。佛言はく、是の如し極めて淸淨なるが故にと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、我淸淨なるが故に色受想行識も亦た淸淨なりと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、我淸淨なるが故に果も亦た淸淨なりと。佛言はく、是の如し畢意淨なるが故にと。善現復た言さく、我淸淨なるが故に一切智も亦た淸淨なりと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、我淸淨なるが故に得無く現觀無しと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、我無邊なるが故に色受想行識も亦た無邊なりと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、若し諸の菩薩能く是の如く覺せば是れを般若波羅蜜多と爲すと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、是の如き般若波羅蜜多は此岸に

【二】前品末の色と一切智と不二無別、淸淨なりとせる義を承說するが故に。
【二】諸法畢竟淨を說く。
【三】得無く現觀無し。法相の一も取得すべきなく現量實有とすべきもなし。

非ず彼岸に非ず中間に非ずと。佛言はく、是の如し畢竟淨なるが故にと。善現復た言さく、若し諸の菩薩[四]是の如き想を起さば般若波羅蜜多を捨遠すと。佛言はく、善哉善哉、善現、是の諸の菩薩は名に著し相に著するなりと。具壽善現便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、善く菩薩の爲に深般若波羅蜜多に於て著相を開示し分別し究竟したまふと。時に舍利子、善現に問ふて言はく、云何が菩薩、深般若波羅蜜多に於て起す所の著相なりやと。[五]善現答へて言はく、若し諸の菩薩色に於て空なりと謂ふ是れを名づけて著と爲し受想行識に於て空なりと謂ふ是れを名づけて著と爲す。三世の法に於て三世の法なりと謂ふ是れを名づけて著と爲す。諸の菩薩初發心の時無量の福生ずと謂ふ、是れを名づけて著と爲すと。時に天帝釋、善現に問ひて言はく、何に緣りて[六]是の如きをも亦た名づけて著と爲すやと。善現答へて言はく、有心に執するが故なり。謂ゆる此の心能く正しく無上菩提に廻向すと執するが故に名づけて著と爲す。憍尸迦、心の本性は空にして廻向すること能はず、若し諸の菩薩他人をして大菩提に趣かしめんと欲せば應に實相に隨て示現勸導讃勵慶喜すべし、自らに於て損する無く亦た他を損せず、諸佛世尊の同じく開許したまふ所にして一切の分別執著を遠離すと。

[七]爾の時世尊、善現を讃めて曰く、善哉善哉、汝善現能く諸の菩薩の爲に說いて著相を分別し諸の菩薩をして遠離を覺知せしむ。復た此の餘の微細の執著有り、當に汝が爲に說くべし。汝應に諦に聽くべしと。善現白して言さく、唯然、願はくは說きたまへと。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩乘の善男子等諸の佛所に於て相を取りて憶念せば取る所の相に隨て皆執著と名づく。若し三世の諸佛世尊の無漏法の中に於て深く隨喜を生じ、既に隨喜し已て諸の有情と共に菩提に廻向せば亦た執著と名づく。諸法の實性は三世の攝に非ず相を取る可からず[八]攀緣す可からず亦た見聞覺知の事無きが故に無上覺に於て廻向す可からずと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、諸法の實性は最も爲れ甚深なりと。佛言はく、是の如し、本性離の故にと。善現復た言さく、是の如き般若波羅蜜多は

【四】種種名相を以てするもの深般若を捨遠するを明す。

【五】善現、菩薩の爲に著相を說く。

【六】是の如きをも、一一の法正しきが如きも一一有とし此心とし隨喜廻向すればなり。

【七】佛、善現の所說を讃じ、更に餘の微妙の執著を說く。

【八】攀緣。猿が木の枝を飛び廻りて休むことなきが如く、心、外境のために轉ぜられて、靜平を得る能はざるを云ふ。

皆應に敬禮すべしと。佛言はく、是の如し、法性は無作無覺知なるが故にと。善現復た言さく、諸法の本性は無作無覺知なる耶と。佛言はく、是の如し、諸法の本性は唯だ一にして二無く造無く作無く覺知す可からず分別す可からず、若し諸の菩薩能く是の如く知らば即ち能く一切の執著を遠離すと。善現復た言さく、是の如き般若波羅蜜多は覺知す可きこと難しと。佛言はく、是の如し、知者無きが故にと。善現復た言さく、是の如き般若波羅蜜多は思議す可からずと。佛言はく、是の如し、心心所能く了知するに非ざるが故にと。善現復た言さく、是の如き般若波羅蜜多は造作する所無しと。佛言はく、是の如し、諸の作者得可からざるを以ての故にと。善現復た言さく、云何が菩薩は應に般若波羅蜜多を行ずべきやと。[九]佛言はく、菩薩若し色を行ぜず亦復た受想行識を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し色空を行ぜず亦復た受想行識空を行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し色を行ぜず相を圓滿せず亦復た受想行識を行ぜず相を圓滿せずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。所以は何ん、色圓滿せずんば即ち色に非ず受想行識圓滿せずんば即ち受想行識に非ず、若し是の如く行ぜずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、能く執著に於て無著相を說きたまふと。佛、善現に告げたまはく、若し色受想行識を行ぜず相に執著する無くんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば便ち諸の色受想行識に於て執著を生ぜず、預流果乃至無上正等菩提に於て執著を生ぜず。所以は何ん、一切の著を超えて無障礙の覺を薩婆若と名づくればなり。是の如く善現、若し諸の菩薩、諸の著を超えんと欲せば應に般若波羅蜜多を行ずべしと。具壽善現復た佛に白して言さく、希有なり世尊、甚深の法性は若し說くも說かざるも俱に增減無しと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、譬へば虛空は假使ひ諸佛其の壽量を盡くすまで或は讚め或は毀るも而かも彼の虛空は增無く減無きが如く甚深の法性も亦復た是の如し、若し說くも說かざる

【九】般若行に於ける無著相を明し、不行の行を說きて般若を禮讚すべきを說く。

も倶に增減無し。譬へば幻士讃毀の時に於て喜無く憂無く、增さず減ぜざるが如く、甚深の法性も亦復た是の如し、若し說くも說かざるも本の如くにして異ること無しと。具壽善現復た佛に白して言さく、諸の菩薩衆の深般若波羅蜜多を行ずるは甚だ爲れ難事なり、謂ゆる深般若波羅蜜多は若し修するも修せざるも增無く減無く進無く退無し、諸の菩薩衆の般若波羅蜜多を修行するは虛空を作するが如く都て所有無し、諸の菩薩衆は我れ等有情皆應に敬禮し尊重讃歎すべし。所以は何ん、諸の菩薩衆は有情を度せんが爲に功德の鎧を被ればなり。虛空と戰諍せんと欲する有らば堅固の鎧を被るが如く諸の菩薩衆は有情を度せんが爲に功德の鎧を被るなり。健者有りて虛空を抜いて高勝處に置かんと欲するが如く諸の菩薩衆の虛空の如き諸の有情類の爲に無上正等菩提を求趣するを、大勇猛にして大精進波羅蜜多を得ると名づくと。時に苾芻有りて是の如き念を作さく、應に般若波羅蜜多を禮すべし、此の中都て諸法の生滅する無しと。時に天帝釋、善現に問ひて言はく、菩薩甚深般若波羅蜜多を學せんと欲せば當に如何が學すべきと。善現答へて言はく、菩薩、甚深般若波羅蜜多を學せんと欲せば當に虛空の如く精勤して修學すべしと。

[一〇] 時に天帝釋便ち佛に白して言さく、若し諸の有情能く般若波羅蜜多を學せば云何が守護せんと。爾の時善現、帝釋に語て言はく、汝是の法の守護す可きを見るや不やと。天帝釋言はく、不なり大德と。善現語て言はく、若し諸の菩薩大般若波羅蜜多の所說の如くにして[一一]行ぜば即ち守護と爲らん。若し般若波羅蜜多を離るれば人非人等皆其の便りを得ん。憍尸迦、若し深般若波羅蜜多を行ずる諸の菩薩を守護せんと欲する者は人有り發勤精進して虛空を守護するに異らず、唐設ひ劬勞するとも都て益する所無し。憍尸迦、能く響聲等を守護する有りや不やと。天帝釋言はく、不なり大德と。善現語て言はく、若し深般若波羅蜜多を行ずる諸の菩薩を守護せんと欲する者も亦復た是の如し、唐設ひ劬勞するも都て益する所無し。憍尸迦、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに諸法は皆

【一〇】 般若行者の守護に就て明す。

【一一】 般若行そのままが眞の守護にして特に諸天守りて護たるにあらず。

響等の如しと知りて而かも覩見せず亦た顯示せずと雖も能く是の如く住せば是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。

爾の時世尊威神力の故に此の三千大千世界の四大天王及び天帝釋大梵王等の一切の天衆をして佛所に來詣して雙足を頂禮し却て一面に住し、佛の神力を以て十方界に於て各千佛の般若波羅蜜多を宣說するを見せしめたまふ名字相狀皆此れに同じく、般若波羅蜜多を說くを請ふ苾芻の首なるは皆善現と名づけ、般若波羅蜜多を問難する諸天衆の首なるは皆帝釋と名づく。爾の時世尊、善現に告げて曰はく、慈氏菩薩の當に無上正等覺を證すべき時も即ち[二]此の名を以て亦た此の處に於て般若波羅蜜多を宣說せんと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、慈氏菩薩の當に無上正等覺を證すべき時何等の名を以て即ち此の處に於て般若波羅蜜多を宣說するやと。佛、善現に告げたまはく、慈氏菩薩の當に無上正等覺を證すべき時色空の法を說かず受想行識空の法を說かず、色縛脫の法を說かず受想行識縛脫の法を說かずと。具壽善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なりと。佛、善現に告げたまはく、色清淨なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なり。受想行識清淨なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なり。虛空清淨なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なり。色無染なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なり。受想行識無染なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なり、虛空無染なるが故に甚深般若波羅蜜多は最も爲れ清淨なりと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し諸の有情甚深般若波羅蜜多を受持讀誦せば終に橫死せず亦た橫病及び橫殃禍無く常に無量百千の天神に恭敬圍遶隨逐守護せられん。若し善男子善女人等[三]黑白月の[四]各第八日第十四日第十五日に於て在在處處に甚深般若波羅蜜多を讀誦し講說せば當に無邊の功德勝利を獲べしと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多の說聽等の時は多く留難有りと。所以は何ん、甚深般若波羅

【二】此の名。前文によれば善現等の如きも、無著名の名たること次文にて明かなり。

【三】黑白月。十五夜の滿月より前の十五日を白月、後十五日を黑月と稱す。印度に於ける曆法の名なり。

【四】各第八日等。一ケ月では八日十四日十五日廿三日廿九日三十日を列ぬるも同じ。日曜の如く、修養修法の日とす。

蜜多は是れ大珍寶にして諸の怨賊多ければなり。一切法に於て著無く取る無し。何を以ての故に、一切法は都て所有無く得可からざるを以ての故に。善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は一切法に於て無所得なるが故に能染汚に非ず所染汚に非ずと。何を以ての故に、無法は無法を染すること能はざるが故なり。無染を以ての故に說いて無染波羅蜜多と名づく。此の般若波羅蜜多染汚無きに由るが故に餘の一切法も亦た染汚無し。若し是の如きに於て亦た分別せざれば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は分別無きが故に一切法に於て見不見無く取る無く捨つる無しと。時に無量百千の天子有りて虛空の中に住し歡喜踊躍し互に相慶慰し聲を同うして唱へて言はく、我れ等今贍部洲に於て佛の第二に妙法輪を轉ずるを見ると。爾の時世尊、善現に告げて曰はく、是の如き法輪は[一五]第一轉に非ず亦た[一六]第二に非ず。甚深般若波羅蜜多は轉還無きが故にと。

[一七]爾の時善現便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は是れ廣大波羅蜜多と爲す。一切法に於て縛無く著無く菩提を證すと雖も而かも證する所無く、法輪を轉ずと雖も而かも轉ずる所無し。法の示す可き無く法の顯す可き無く、法の得可き無く、法の轉ず可き無く、法の還る可き無し。一切法畢竟不生なるを以て亦復た滅せず、生滅せざるが故に轉ずる無く還る無しと。爾の時世尊、善現に告げて曰はく、是の如し是の如し。所以は何ん、空無相無願無作無生無滅無性法の中にては若しは轉若しは還倶に得可からざるを以てなり、若し能く是の如く宣說開示せば是れを善淨に般若波羅蜜多を宣說すと名づく。此の中都て說者受者無く亦た作證して涅槃を得る者無く亦た法を說いて福田と作る者無し。福田無きが故に福性も亦た空なり。表示の名言皆得可からざるが故に廣大波羅蜜多と名づくと。爾の時善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は是れを無邊波羅蜜多と爲す太虛空の如く無邊際なるが故に。是れを正等波羅蜜多と爲す、一切法の性平等なるを以ての故に。是れ

【一五】第一轉。鹿野苑に於ける三轉法輪經の說法を第一轉と云ふ。
【一六】第二に非ず。初轉に對する第二轉に非ず、般若は轉還なく取相なければなり。
【一七】以下。善現、種種に般若を宣說開示す。

を遠離波羅蜜多と爲す、一切法畢竟空なるを以ての故に。是れを難伏波羅蜜多と爲す、一切法不可得なるを以ての故に。是れを無跡波羅蜜多と爲す、一切法名體無きを以ての故に。是れを無行波羅蜜多と爲す、一切法往來無きを以ての故に。是れを無奪波羅蜜多と爲す、一切法取る可からざるを以ての故に。是れを無盡波羅蜜多と爲す、一切法盡す可からざるを以ての故に。是れを無生波羅蜜多と爲す、一切法生ず可からざるを以ての故に。是れを無作波羅蜜多と爲す、諸の作者得可からざるを以ての故に。是れを無知波羅蜜多と爲す、諸の知者得可からざるを以ての故に。是れを無轉波羅蜜多と爲す、諸の死生者得可からざるが故に。是れを無垢波羅蜜多と爲す、煩惱淨なるが故に。是れを無染波羅蜜多と爲す、所依處得可からざるを以ての故に。是れを無壞波羅蜜多と爲す、前際を離るるが故に。是れを如幻波羅蜜多と爲す、一切法皆生ぜざるを以ての故に。是れを如夢波羅蜜多と爲す、是の諸の意識平等性なるが故に。是れ無戲論波羅蜜多、諸の戲論の平等性を覺るが故に。是れ無思慮波羅蜜多、諸の思慮法畢竟無なるが故に。是れ無動轉波羅蜜多、法界に住するが故に。是れを離染波羅蜜多と爲す、一切法は虛妄ならざるを以ての故に。是れ無作用波羅蜜多、一切法に於て分別無きが故に。是れを寂靜波羅蜜多と爲す、一切法の相得可からざるが故に。是れ無煩惱波羅蜜多、過失を離るるが故に。是れ無有情波羅蜜多、有情の實際得可からざるが故に。是れを無斷波羅蜜多と爲す、一切法等起無きを以ての故に、是れ無二邊波羅蜜多、一切法に於て執著無きが故に。是れ無取著波羅蜜多、二乘地に於て分別無きが故に。是れ無分別波羅蜜多、諸の分別の平等性を覺るが故に。是れを無量波羅蜜多と爲す、無量法の故に。是れを無起波羅蜜多と爲す、我法を離るるが故に。是れを虛空波羅蜜多と爲す、一切法に於て皆無礙なるが故に。是れを不生波羅蜜多と爲す、一切法皆起らざるを以ての故に。是れを無常波羅蜜多と爲す、一切法の常に無性なるを以ての故に。是れを名づけて苦波羅蜜多と爲す、是の逼惱法平等性なるが故に。是れを無我波羅蜜多

と爲す、一切法に於て執著無きが故に。是れを名づけて空波羅蜜多と爲す、一切法得可からざるを以ての故に。是れを無相波羅蜜多と爲す、一切法諸の相を離るるを以ての故に。是れを無願波羅蜜多と爲す、一切法成ずる所無きを以ての故に。是れを名づけて力波羅蜜多と爲す、一切法屈す可からざるを以ての故に。是れ無量佛法波羅蜜多、數量を過ぐるが故に。是れ無所畏波羅蜜多、心怯れ無きが故に。是れを眞如波羅蜜多と爲す、一切法虛妄ならざるを以ての故に。是れを自然波羅蜜多と爲す、一切法は自性無きを以ての故にと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。

第五分 [一]不思議品第十之一

[二]時に天帝釋是の念言を作さく、若し但だ甚深般若波羅蜜多を聞くこと有らんのみすら、當に知るべし已に曾て諸佛を供養して弘誓願を發せるなりと、況んや能く受持讀誦し書寫し他の爲に演說し教の如く修行せんをや、當に知るべし是の人は已に過去無量の佛所に於て親近し供養して多く善根を種ゑ曾て般若波羅蜜多を聞き、聞き已て受持讀誦し書寫し他の爲に演說し敎の如く修行し、或は此の經に於て能く問ひ能く答ふるもの、先の福力に由りて今此の事を辦ずるなり。若し諸の有情已に曾て無量の諸佛を供養せる功德純淨にして深般若波羅蜜多を聞けば其の心驚かず恐れず怖かざるなりと。時に舍利子、天帝釋の心の所念を知りて便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に於て能く信解を生ぜば當に知るべし。[三]是の人は不退轉の諸の大菩薩の如しと。所以は何ん、是の如き般若波羅蜜多は理趣甚深にして極めて信解し難ければなり。若し前世に於て久しく甚深般若波羅蜜多を修行せず佛前に於て請問し聽受せず、佛所に於て多く善根を種ゑずんば豈に暫く聞きて卽ち能く信解することを得んや。若し甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて毀謗し拒逆せば當に知るべし是の人は先世に已に甚深般若波羅蜜多に於て毀謗し拒逆せるなりと。所以は何ん、是の如き愚人は善根少きが故に深般若波羅蜜多に於て淨信を生ぜず、未だ曾て佛及び弟子に甚深の義を請問せざるが故に般若波羅蜜多甚深の義趣を說くを聞きて毀謗し拒逆するなりと。爾の時天帝釋、舍利子に謂て言はく、是の如き般若波羅蜜多は理趣甚深にして極めて信解し難し。諸の未だ久しく甚深般若波羅蜜多を信樂し修行せざる有りて此の中の甚深の義趣を說くを聞きて信解を生ぜざるは未だ希有と爲さず。若し人甚深般若波羅蜜多を禮敬せば卽ち爲れ一切智智を禮敬するなりと。舍利子言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、何を以ての故に、憍尸迦、[四]如來所得の一切智智は皆般若波羅蜜

【一】不思議。如來所說の不思議にして、而かも不思議に不思議想せざるを說く。

【二】般若の理趣甚深にして信解し難きを說き、これを信解し得るは過去世に於ける般若修行の功德によることを明す。

【三】是の人唯信解するも宿緣深廣にして不退轉大菩薩に同じ。

【四】如來一切智智と深般若波羅蜜と一如たり共生たり。

多より生ずることを得るが故に、甚深般若波羅蜜多は復た如來の一切智智に由りて有るを得るが故なり。憍尸迦、諸の菩薩衆は甚深般若波羅蜜多を應に是の如く行ずべく是の如く住すべく是の如く學すべしと。[五]時に天帝釋便ち佛に白して言さく、諸の菩薩衆の云何が深般若波羅蜜多を行ずるを深般若波羅蜜多に住すと名づけ深般若波羅蜜多を學すと名づくるやと。爾の時佛、天帝釋を讃めて言はく、善哉善哉、汝佛力を承けて能く如來に是の如き深義を問へり。憍尸迦、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに若し色に住せず亦た此れは是れ色なりとして住せずんば是れを色を學すと爲す、若し受想行識に住せず亦た此れは是れ受想行識なりとして住せずんば是れを受想行識を學すと爲す。復た次に憍尸迦、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに若し色を學せず亦た此れは是れ色なりとして學せずんば是れ色に住せず、若し受想行識を學せず亦た此れは是れ受想行識なりとして學せずんば是れ受想行識に住せざるなり。憍尸迦、是の菩薩は深般若波羅蜜多を行ずと名づけ亦た深般若波羅蜜多に住すと名づけ亦た深般若波羅蜜多を學すと名づくと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深なり、測量す可きこと難く執取す可きこと難く限量有ること無しと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。舍利子、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに若し色甚深の性に住せず亦た此れは是れ色甚深の性なりとして住せずんば是れを色甚深の性を學すと爲す。若し受想行識甚深の性に住せず亦た此れは是れ受想行識甚深の性なりとして住せずんば是れを受想行識甚深の性を學すと爲す。復た次に舍利子、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに若し色甚深の性を學せず亦た此れは是れ色甚深の性なりとして學せずんば是れを色甚深の性に住せずと爲す、若し受想行識甚深の性を學せず亦た此れは是れ受想行識甚深の性なりとして住せずんば是れを受想行識甚深の性に住せずと爲すと。時に舍利子復た佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は既に最も甚深にして測量す可きこと難く執取す可きこと難く限量有

【五】般若に於ける、行、住、學の義を明す。

ること無く則ち信解すること難し、但だ應に彼の[六]不退轉位の諸の菩薩の爲にのみ說くべし、彼れは此の中に於て疑無く惑無く迷謬せざるが故にと。時に天帝釋、舍利子に問ひて言はく、若し未だ受記せざる諸の菩薩の爲に說かば當に何の咎か有るべきと。舍利子言はく、彼れ聞きて驚怖し或は毀謗を生ぜん、此の因緣に由りて久しく大苦を受け無上正等菩提を得ること難しと。天帝釋言はく、頗し菩薩の未だ受記を得ざるに深般若波羅蜜多を聞きて心驚怖せず毀謗を生ぜず深く信解する有り耶と。舍利子言はく、有り、是の菩薩は久しく無上正等覺の心を發し久しく菩薩摩訶薩行を修し未だ大菩提の記を受くるを得ずと雖も一佛或は二佛の所を過ぎずして定めて當に大菩提の記を受くることを得べしと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、舍利子、若し諸の菩薩未だ受記を得ざるに深般若波羅蜜多を聞きて心驚怖せずして深く信解を生ぜば當に知るべし久しく大菩提心を發し多く善根を種ゑ多くの善友に事へしなりと。時に[七]舍利子便ち佛に白して言さく、我れ今少分の譬喩を樂說せん、唯だ願くは聽許したまへと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、汝が意に隨て說けと。時に舍利子白して言さく、世尊、菩薩乘の善男子等自ら夢に妙菩提の座に坐するを見るが如き當に知るべし是の人は近く無上正等菩提を證すと。若し甚深般若波羅蜜多を聞くことを得て心驚怖せずして深く信解を生ずる有らんも亦復た是の如し、當に知るべし是の人は久しく無上正等覺の心を發して善根成熟し或は已に大菩提の記を受くることを得、或は近く當に大菩提の記を受けて疾く無上正等菩提を證すべしと。世尊、譬へば人有り曠野を遊行して險道を經過すること百踰繕那或は二或は三乃至五百にして諸の城邑の王都の前相の謂ゆる放牧人園林田等を見ん。是の相を見已て便ち是の念を作さん、城邑の王都此を去ること遠きに非ずと。是の念を作し已て身意泰然として惡獸惡賊饑渴を畏れざるが如く、是の如く菩薩般若波羅蜜多を聞くことを得て深心に信敬せば當に知るべし久しからずして菩提の記を受け疾く無上正等菩提

【六】深般若は上位不退の菩薩にのみ說くべしとは眞信仰は純熟人に說くべしとの論にして常に說かるる所なり。何故に初心に說くべからざるか、驚怖不安を感ずるが故に。不安あるが故に初心に說かずば初心如何にして入眞すべき。未受記のもの信解することありや。多佛に受教の因緣に依ると。曠劫値遇の緣多し、今こそ諸佛慈悲成熟の時なりとして深般若正信解を勸むれば皆入眞すべし、その驚怖不安を恐れて說かず聞かず、佛緣を空しくして入信の時なからん。本經屢〻此問題に觸れ論述稍透徹を缺く。

【七】舍利子。比喩を以て未受記の菩薩の般若を深く信解せば當に大菩提の記を受くるを明す。

を證して聲聞獨覺地に墮つる畏れ無しと。何を以ての故に、已に甚深般若波羅蜜多を見聞し恭敬し信受することを得るは無上菩提の前相なるが故なり。世尊、譬へば人有り大海を觀んと欲し漸次に往趣して多時を經略して山林を見ずして便ち是の念を作さん、今此の相を觀るは大海遠きに非ず、所以は何ん、大海岸に近づけば地必ず漸く下りて諸の山林無ければなりと。彼の人爾の時未だ海を見ずと雖も而かも近相を見て歡喜踊躍するが如く、是の如く菩薩般若波羅蜜多を聞くことを得て深心に信敬せば當に知るべし久しからずして菩提の記を受け疾く無上正等菩提を證せんと。何を以ての故に、已に無上正等菩提を見聞することを得るは無上菩提の前相なるが故なり。世尊、譬へば春時花果樹等の故葉已に墮ち枝條滋潤せるが如し、衆人之を見て咸く是の念を作す、新しき花果葉の當に出づべきこと久しきに非ず。所以は何ん、此の諸樹等の新しき花果葉の先相現ずるが故にと、是の如く菩薩般若波羅蜜多を聞くことを得て深心に信敬せば當に知るべし久しからずして菩提の記を受けて疾く無上正等菩提を證せんと。時に衆中に諸の天子有り見已て歡喜して是の念言を作さく、先の諸の菩薩は此の相を得已て久しからずして便ち大菩提の記を受けたり、今此の菩薩も亦た是の相を得て久しからずして當に大菩提の記を受くべし。世尊、譬へば女人懷妊して漸く久しく其の身轉た重く動止安からず飮食睡眠悉く皆減少し多く語るを憙ばず常の所作を厭ひ苦痛を受くるが故に衆事頓息せんに異母人有り是の相を見已て卽ち此の女の久しからずして產生するを知るが如く、是の如く菩薩般若波羅蜜多を聞くことを得て深心に信敬せば當に知るべし久しからずして菩提の記を受け疾く無上正等菩提を證し能く盡未來まで一切を利樂せんと。爾の時佛、舍利子を讚めて言はく、善哉善哉、汝今善く菩薩の譬喩を說く、皆是れ如來威神の力なりと。

卷の第五百六十

第五分不思議品第十之二

[一]爾の時、善現便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、諸の菩薩に於て善能く付囑し善能く護念したまふと。佛言はく、善現、是の如し是の如し、所以は何ん、諸の菩薩衆は長夜に多生を利樂し世間の大生衆を哀愍せんと欲するが爲の故に、天人をして大義利の安樂事を獲せしめんと欲するが故に無上正等菩提を求證して諸の有情の爲に法要を宣説すと。具壽善現復た佛に白して言さく、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに云何が甚深般若波羅蜜多を修習せば速に圓滿せしむるやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に依りて色の增すを見ず色の減ずるを見ずして般若波羅蜜多を行じ、受想行識の增すを見ず受想行識の減ずるを見ずして般若波羅蜜多を行じ、是れ法なりと見ず非法なりと見ずして般若波羅蜜多を行ぜば是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修習して速に圓滿することを得と。具壽善現復た佛に白して言さく、[二]如來の所說は不可思議なりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、色も亦た不可思議、受想行識も亦た不可思議なり。若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多を行ずるに色に於て[三]不思議想を起さずして般若波羅蜜多を行じ、受想行識に於ても亦復た不思議想を起さずして般若波羅蜜多を行ぜば是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修習して速に圓滿することを得と。具壽善現復た佛に白して言さく、是の如く般若波羅蜜多の義趣甚深なるに誰れか能く信解せんと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩久しく勝行を修せば深般若波羅蜜多に於て能く信解を生ずと。具壽善現復た佛に白して言さく、諸の菩薩衆は云何が久しく勝行を修すと名づけ得るやと。[四]佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば如來の十力を分別せず、四無所畏を分別せず、十八佛不共法を分別せず、一切智を分別せず。所以は何ん、如來の十力は思議す可からず乃至一切智も亦た思議す可からず、色も亦た思議す可からず受想行識

【一】菩薩善く法要を示す。

【二】本品に不思議と名づくる所以。

【三】不思議なりと取想することなきなり。

【四】菩薩の勝行を明す。

も亦た思議す可からず、一切法も亦た思議す可からざればなり。若し諸の菩薩是の如く行ぜば都て行ずる處無し。是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。是の諸の菩薩は乃ち名づけて久しく勝行を修すと爲す可しと。具壽善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は是れ珍寶聚、是れ清淨聚にして淨虚空の雲煙等を離るゝが如し。奇なる哉、般若波羅蜜多の義趣甚深にして諸の留難多きに而かも今廣說するも留難生ぜずと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、佛の神力の故に留難生ぜず、是の故に大乘の善男子等、深般若波羅蜜多に於て若し書寫し讀誦し演說せんと欲せば乃至一歳までに必ず總て了らしめよ。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は大寶神珠にして諸の障礙多ければなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、奇なる哉惡魔は常に是の如き甚深般若波羅蜜多大寶神珠に於て留難を作さんと欲すと。佛、善現に告げたまはく、一切の惡魔は般若波羅蜜多に於て常に留難し諸の菩薩の所作をして成ぜざらしめんと欲すと雖も而かも願遂げずと。時に舍利子佛に白して言さく、是れ誰れの神力もて彼の惡魔をして深般若に於て留難すること能はざらしむるやと。

五 爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是れ佛の神力なり、亦た是れ十方一切世界の諸佛の神力なり。舍利子、一切の如來應正等覺は皆共に深般若波羅蜜多を行ずる諸の菩薩衆を護念し諸の惡魔をして留難すること能はざらしむ。何を以ての故に、舍利子、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば法爾として皆十方無量無邊世界の一切の如來應正等覺に護念せらるゝことを蒙ればなり。若し如來應正等覺に護念せらるゝことを蒙らば惡魔は法爾として留難すること能はず。又た舍利子、若し淨信の善男子等有りて深般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し修習思惟し演說して障礙無からんとせば應に是の念を作すべし、我が今般若波羅蜜多を書寫し受持讀誦し修習思惟し演說するは皆是れ十方一切世界の諸佛世尊の神力もて護念して成辦することを得せしめたまふなりと。時に舍利子佛に白して言さく、若し菩薩乘の善男子等深般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し修習思惟し演說せ

【五】諸佛の般若行者を護念し、惡魔をして留難する能はざらしめ給ふを明す。

ば皆是れ十方諸佛の神力もて慈悲護念し彼の作す所の殊勝の善業をして一切の惡魔に留難すること能はざらしめたまふと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。時に舍利子、復た佛に白して言さく、若し菩薩乘の善男子等深般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し修習思惟し演說せば十方世界の諸佛世尊皆共に識知し歡喜護念し、十方世界の諸佛世尊常に佛眼を以て皆共に觀見し慈悲護念して彼の修する所をして成辦せざること無かしめたまふと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、若し菩薩乘の善男子等深般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し修習思惟し演說せば常に十方一切世界の諸佛世尊、佛眼もて觀見し識知護念し諸の惡魔をして嬈惱すること能はざらしめ、所作の善業皆速に成辦せしむることを爲す。若し菩薩乘の善男子等能く般若波羅蜜多に於て書寫し受持讀誦し修習思惟し演說せば當に知るべし已に無上菩提に近づき惡魔の眷屬留難すること能はずと。若し菩薩乘の善男子等能く般若波羅蜜多を書き種種に莊嚴し受持讀誦し供養恭敬せば常に諸佛の護念する所と爲り、此の因緣に由りて大饒益を獲ん。復た次に舍利子、是の如き般若波羅蜜多甚深の[六]經典は佛涅槃の後流れて南方に至り漸く當に興盛すべし。後南方より流れて北方に至り漸く當に興盛すべし。佛所得の[七]法毘奈耶無上の正法は滅沒の相有るに非ず。佛所得の法毘奈耶無上の正法は卽ち是れ般若波羅蜜多甚深の經典なり。是の如き經典を菩薩乘に住する善男子等書寫し受持讀誦し修習思惟し演說し恭敬供養せば一切の如來應正等覺常に佛眼を以て觀見護念し稱揚讃歎して憂苦無からしむと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多甚深の經典は後時後分に東北方に於て廣行流布すと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、舍利子、後時後分に彼の東北方の菩薩乘に住せる善男子等此の般若波羅蜜多甚深の經典を聞きて若し能く信樂し書寫し受持讀誦し修習思惟し演說し恭敬供養せば當に知るべし彼の人は久しく無上正等覺の心を發して久しく菩薩摩訶薩行を修せり

【六】經典滅後に南方に後時に東北方に弘通すべきを說く。

【七】法律(達磨毘奈耶)は滅後二百年代になり、後經律論三藏となる。今は般若經を以て法律無上の正法と云ふ。

た。[八]時に舍利子復た佛に白して言さく、彼の東北方の後時後分に當に幾許の菩薩乘に住せる善男子等有りて般若波羅蜜多甚深の經典を聞くことを得て能く信樂を生じて書寫し受持讀誦し修習思惟し演說し恭敬供養するやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、彼の[九]東北方の後時後分に無量の菩薩乘に住せる善男子等有りと雖も而かも少しく甚深般若波羅蜜多を聞くことを得て深心に信樂し書寫し受持讀誦し供養するのみ。無量の菩薩乘に住せる善男子等深般若波羅蜜多を聞きて深心に信樂し書寫し受持讀誦し供養すること有りと雖も而かも少分修習し思惟すること有るのみ。若し能く他の爲に甚深の義趣を宣說開示するは甚だ爲れ得難し。舍利子、若し菩薩乘の善男子等般若波羅蜜多を說くを聞きて心沈沒せず驚かず怖かず深く信樂を生じて書寫し受持讀誦し修習思惟し演說せば當に知るべし是の人は已に曾て無量の如來應正等覺及び諸の菩薩に視近して供養恭敬し般若波羅蜜多甚深の義趣を請問せるなりと。是の菩薩乘の善男子等は定めて當に諸の菩薩行を圓滿し疾く無上正等菩提を證し諸の有情の與に大饒益を作すべし。何を以ての故に、舍利子、我れ常に彼の菩薩乘に住せる善男子等の爲に一切智相應の法を說き、是の人轉身して常に能く諸の菩薩行を修集して速に無上正等菩提に趣き諸の有情の爲に微妙の法を說きて無上正等菩提に趣かしむればなり。是の菩薩乘の善男子等は身心安定し諸の惡魔王及び彼の眷屬すら尙ほ無上正等覺を求趣する心を壞すること能はず、何に況んや其の餘の樂ひて惡を行ずる者をや。菩薩乘に住せる善男子等は深般若波羅蜜多を說くを聞かば心廣大にして淸淨の喜樂を得亦た能く無量の有情を無上菩提相應の善法に安立せん。舍利子、是の菩薩乘の善男子等は今我が所に於て弘誓願を發し定めて當に無量百千の諸の有情類を安立して無上正等覺の心を發さしめ、菩薩行を修し示現勸導讃勵慶喜し無上正等菩提に於て乃至不退轉の記を受くることを得せしむべし。我れ彼の類に於て深く隨喜を生ず。何を以ての故に、舍利子、我れ彼の人の發す所の弘願を觀ずるに心語相稱へり。彼れは當來に於て定めて能く無量百

【八】 [illegible]典を修習し思惟する者の極めて少分なるを說き、有情に[illegible]する般若の大益を明さし。

【九】 東北方菩薩無量なるも、[illegible]修習思惟する者は少く、[illegible]更に少く、[illegible]義趣を說くは[illegible]

千の諸の有情類を安立して無上正等覺の心を發さしめ、菩薩行を修して示現勸導讃勵慶喜し無上正等菩提に於て乃至不退轉の記を受くることを得せしむべければなり。是の菩薩乘の善男子等は亦た過去無量の佛所に於ても是の如き願を發せしに、過去の如來應正等覺も亦た深く隨喜を生じ、彼の心語定めて相稱へるを觀ぜるが故に是の菩薩乘の善男子等は信解廣大にして廣大行を修し、願ひて他方諸佛國土の現に如來應正等覺有りて般若波羅蜜多甚深の法を宣說する處に生じ、彼れ般若波羅蜜多甚深の法を聞き已て復た能く彼の佛土の中の無量百千の諸の有情類を安立して無上正等覺の心を發さしめ菩薩行を修して示現勸導讃勵慶喜し無上正等菩提に於て不退轉を得せしむと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、佛は過去未來現在の所有る諸法及び諸の有情の心行差別に於て佛菩薩等は證知せざる無く覺了せざる無し。世尊、若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤して修學し理の如く思惟し書寫解說して廣く流布せしめば是の諸の菩薩當來世に於て深般若波羅蜜多を求め精勤して息まざるに、彼れは般若波羅蜜多に於て得る時得ざる時有りと爲すや不やと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の諸の菩薩、深般若波羅蜜多に於て常に求めて息まずんば一切時に得て得ざる時無し。或は求めざるに自然に而かも得ること有らん。諸佛菩薩常に護念するが故にと。時に舍利子復た佛に白して言さく、是の諸の菩薩は般若波羅蜜多相應の經典に於てのみ一切時に得て得ざる時無しと爲すや、六種波羅蜜多相應の經典に於ても亦た能く常に得と爲すやと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、若し諸の菩薩常に般若波羅蜜多相應の經典に於て勇猛に信じ求めて身命を顧ずして時に諸餘の經典を得ざること有りとせば是の處有ること無し。何を以ての故に、舍利子、是の諸の菩薩は無上正等菩提に趣かんが爲に諸の有情類を示現勸導讃勵慶喜し、般若波羅蜜多相應の經典及び餘の經典に於て受持讀誦せしめ、亦た自ら中に於て精勤して修學す、斯の福力に由りて所生の處に隨て法爾として常に甚深般若波羅蜜多相應の經典及び餘の六種波羅蜜多相應の經典に遇ひて恒に捨離せざればなりと。

第五分 魔事品第十一[一]

[二]爾の時具壽善現便ち佛に白して言さく、世尊、所說の菩薩乘に住せる善男子等善法を作する時諸の魔事有りとは云何が名づけて菩薩の魔事と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩法要を說かんと欲するに[三]辯久しくして乃ち生ぜば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は法要を說くに辯乃ち[四]卒に生ぜば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は法要を說くに辯量を過ぎて生ぜば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は說かんと欲する所未だ盡きずして便ち止まば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は法要を說くに言詞亂雜せば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は法要を說くに言詞間斷せば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。或は說法の時諸の橫事起りて說かんと欲する所をして本心を遂げざらしめば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多相應の經典を書寫等の時に於て或は[五]頻申欠呿し或は更に相嗤笑し或は互に相輕凌し或は身心躁擾し或は失念散亂し或は文句顚倒し或は義理に迷惑し或は滋味を得ずして心厭捨を生じ或は橫事卒に起り或は互に相乖諍し斯れ等の事に由りて作す所成ぜずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多相應の經を說くを聞かん時或は是の念を作さん、我れ此の中に於て受記を得ず、何ぞ聽きて爲すを用ひんと。或は是の念を作さん、此の中我れ等の名字をも說かず、何ぞ聽きて爲すを用ひんと。或は是の念を作さん、此の中我れ等の生處城邑聚落をも說かず、何ぞ聽きて爲すを用ひんと。此れ等の緣に由りて心淸淨ならず即ち座より起ち厭捨して去り顧戀の心無くんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。善現當に知るべし、若し諸の菩薩般若波羅蜜多相應の經を說くを聞かん時心淸淨ならずして厭捨して去らば彼の所に隨て不淸淨の心を起して此の經を厭捨し擧步多少ならんも便ち爾所の

【一】深般若を行ずるとき起る種々魔事を說く故なり。
【二】菩薩の魔事を詳說す。
【三】スラ〳〵と說けぬこと。
【四】輕率に發言する。
【五】アクビすること。

劫數の功德に減じて爾所の劫に菩提を障ふる罪を獲ん。彼の罪を受け已て更らに爾所の時に發勤精進し菩薩行を修して方に本に復へる可し。是の故に名づけて菩薩の魔事と爲すと。復た次に善現、若し諸の菩薩能く一切智智を引く甚深般若波羅蜜多相應の經典を棄捨して、一切智智を引くこと能はざるを學し、二乘諸餘の經典に隨順し、[六]根本を棄捨して枝葉に攀ぢなば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多相應の經典は能く菩薩の世出世間の殊勝の功德を生じ斯れに由りて能く一切智智を引けばなり。若し般若波羅蜜多相應の經典を學せば卽ち菩薩の世出世間殊勝の功德を學して速に能く一切智智を引發す。[七]善現當に知るべし、癡なる餓狗の主の食を棄捨し反て僕使に從ひて之を求覓するが如く是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして本を棄てゝ末を求め終に一切智智を得ること能はずと。復た次に善現、譬へば人有り香象を觀ぜんと欲し身量の大小形類の勝劣、得て而かも觀ぜず反て其の跡を尋ねるが如き當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと、是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして本を棄てゝ末を尋ね終に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、譬へば人有り珍寶の爲の故に大海に求趣するが如し、既に海岸に至りて大海に入らず反て牛跡を觀じて是の念言を作さく、大海中の水其の量深廣ならんも豈に此れに及ばん耶。此の中亦た應に諸の珍寶なるべしと。當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと。是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして本を棄てゝ末を求め終に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、工匠或は彼の弟子有りて大殿の天帝釋の殊勝の殿量の如くなるを造らんと欲し彼の殿を見已て反て規を日月宮殿に模するが如き當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと。是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして大を棄てゝ小を求め終

【六】般若大乘は諸經の根本とす、その根本をすてて枝末の小乘を取るを魔事とす。

【七】愚癡者は本末顚倒して般若を棄てゝ二乘相應の經典を求學するの故に一切智智を得ざるを比喩を以て明す。

に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、轉輪聖王を見んと欲する有り見已て識らず捨て、馳走に至り小國王を見其の形相を觀じて是の如き念を作すが如し、轉輪聖王の形相威德豈に此れに勝らんやと。當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと。是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして勝を棄てゝ劣を求め終に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、饑人有り百味の美食を得るも棄てゝ而かも[八]六十日穀飯を求め噉ふが如き當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと。是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして勝を棄てゝ劣を求め終に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、貧人有りて無價の寶を得るも棄てゝ而かも翻て[九]迦遮末尼を取るが如き當に知るべし彼の類は甚だ爲れ愚癡なりと。是の如く當來に諸の菩薩有りて深般若波羅蜜多を棄てゝ二乘相應の經典を求學するは是れ愚癡の類にして勝を捨てゝ劣を取り終に一切智智を得ること能はず。復た次に善現、諸の菩薩有りて若し正しく甚深般若波羅蜜多相應の經を書寫し受持讀誦し思惟修習する時樂辯卒に起り樂ひて種種差別の法門を說き書寫等をして究竟することを得ざらしめば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は書寫す可きや不やと。世尊、告げて曰はく、不なり善現。[一〇]若し菩薩乘の善男子等般若波羅蜜多相應の經を書寫する時是の如き念を作さん、我れ文字を以て般若波羅蜜多を書寫す、是の如き文字は卽ち是れ般若波羅蜜多なりと。或は文字に依りて般若波羅蜜多有りと執せば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。爾の時應に彼の菩薩を誡めて言ふべし、汝今文字有りて能く般若波羅蜜多を書くと執すべからず、若し是の執を作さば是れを魔事と爲すと。若し此の執を捨てなば便ち魔事を捨つるなりと。[一一]復た次に善現、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多相應の經を書寫し受持讀誦し修習思惟し演說する時或は國土城邑王都方處師友を念じ、或は父母妻子眷屬伴侶王臣を念じ、或は盜賊惡

【八】六十日穀飯。早熟の穀にてつくれる粗飯。

【九】迦遮末尼（Kācamaṇi）。玉の名。

【一〇】文字般若を明す。

【一一】[illegible]行中。以下[illegible]念に依る魔事を明す。

禽獸惡人惡鬼を念じ、或は衆の集れる伎樂遊戲報恩報怨を念じ、或は飲食衣服臥具及び餘の資財を念じ、或は文頌書論を製造するを念じ、或は時節寒熱豐儉を念じ、或は象馬水火等の事を念じ、或は諸餘の所作の事業を念ぜば菩薩當に知るべし皆是れ魔事なりと。復た次に善現、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多相應の經を書寫し受持讀誦し修習思惟し演說する時大名利恭敬供養を得んに、彼れ此の緣に由りて所作の業を廢せば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多相應の經を書寫し受持讀誦し修習思惟し演說する時惡魔方便して種種世俗の書論、或は復た二乘相應の經典を執持し菩薩に授與して是の如き言を作さん、是の如き書典は義味深奧なり應に勤め修學して習ふ所の經を捨つべしと。若し此の菩薩方便善巧あらば受け著すべからず。彼れは一切智智を引くこと能はず。若し此の菩薩惡魔の授くる所の書典を受け著して習ふ所の經を捨てなば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。[二]復た次に善現、能聽法者は般若波羅蜜多を樂聞するも能說法者樂に著し懈怠にして爲に說くを欲せず、或は上に相違して兩つながら和合せずして說受するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能聽法者は具さに慧力を念じて般若波羅蜜多を樂聞するも能說法者他方に往かんと欲して爲に說くを獲ず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說受するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は名利を愛重し能聽法者は惠施を欲せず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說受するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能聽法者は信樂心有りて般若波羅蜜多を聞かんと欲するも能說法者の習誦不利にして爲に說くこと能はず或は能說法者は習誦通利し他の爲に說くを樂ふも能聽法者疑ひて通利せず聽受するを欲せず、兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は樂ふて他の爲に甚深般若波羅蜜多を說くも能聽法者聽受するを欲せず、或は上に相違し兩つながら和合せ

【二】能聽法者。能說法者の不和合に依る魔事を明す。

ずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。

復た次に善現、能說法者は般若波羅蜜多を樂聞するも能說法者身重く疲極して睡眠に覆はれ爲に說くこと能はず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多相應の經を書寫し受持讀誦し修習思惟し演說する時或は人有り來りて三惡趣の種種の苦事を說きて菩提を捨つるを勸め、或は人有り來りて人天趣の種種の樂事は皆是れ無常苦空非我なりと說きて圓寂に入るを勸むるに彼れ此の書に由りて書寫等の事究竟することを得ずして心に愁惱を懷かば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は好みて徒衆を領し樂ふて他事を營み自業を憂へざるに能聽法者は一身にして累無く己事を專修して他業を憂へず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は樂ふて喧雜に處し、能聽法者は喧雜を樂はず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は他方の身命を危くする處に往かんと欲するも能聽法者は身命を失ふを恐れて共に往くを欲せず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者は他方の賊匪疫癘渇多き國土に往かんと欲するも能聽法者は彼の艱辛を慮りて共に往くを肯せず、或は上に相違し兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者他方に往かんと欲するに經る所の道路曠野險阻にして諸の賊難及び〔三〕栴荼羅惡獸獵師毒蛇等の怖れ多からんに能聽法者其れに隨て去らんと欲す。能說法者方便して試みて言はく、汝今何が故ぞ無事なるに我れに隨て是の如き諸の險難の處に往かんと欲するや、宜しく善く審思して後に憂悔することを勿るべしと。能聽法者聞き已て念言すらく、師應に我れをして隨ひ往くを欲せざるべし、

【三】栴荼羅（Caṇḍāla）。屠者、殺者、暴惡などと譯す。印度種姓の名。最下卑の種族にして四姓の下に位す。

設ひ因より隨ひ往くも何ぞ必しも法を聞かんと。此の因緣に由り其れに隨て去らず、兩つながら和合せずして說聽するを獲ずんば菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、能說法者多く施主有りて數追隨し聽法者來りて般若波羅蜜多を說かんことを請ひ或は書寫し受持讀誦し說の如く修行するを請ふも彼れ多く礙に緣りて敎授に暇無し。能聽法者嫌恨の心を起し後敎授すと雖も而かも聽受せず、兩つながら和合せずんば甚深般若波羅蜜多を敎授し聽受し書持し讀誦し修習するを獲ず、菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。[一四]復た次に善現、諸の惡魔有り種種の形を作して菩薩の所に至り方便して破壞し般若波羅蜜多相應の經典に於て書持し受持讀誦し修習思惟し他の爲に演說することを得ざらしむ。是の故に善現、菩薩乘に住する善男子等深般若波羅蜜多の書寫等の時に於ける所有る障礙は菩薩當に知るべし皆是れ魔事なりと。具壽善現便ち佛に白して言さく、何に緣りて惡魔は諸の形像を作して菩薩の所に至り方便して破壞し般若波羅蜜多相應の經典に於て書寫し乃至演說することを得ざらしむるやと。佛、善現に告げたまはく、甚深般若波羅蜜多は能く如來の一切智智を生じ、如來の所有る一切智智は能く佛教を生じ、佛教は能く有情の妙慧を生じ、有情の妙慧は能く無邊の諸の煩惱斷を證す。煩惱斷ずれば一切の惡魔其の便りを得ず、彼の諸の惡魔便りを得ざるが故に多く憂苦を生ずること箭の心に入るが如く、我れ斯の[一五]甚深般若波羅蜜多に由りて境界空缺すること勿れと。是の故に惡魔は諸の形像を作して菩薩の所に至り方便して破壞し般若波羅蜜多相應の經典に於て書寫し乃至演說することを得ざらしむと。具壽善現復た佛に白して言さく、云何が惡魔は諸の形像を作して菩薩の所に至り方便して破壞するやと。佛、善現に告げたまはく、諸の惡魔有りて種種の形を作して菩薩の所に至り方便して破壞し其れをして甚深般若波羅蜜多を毀厭せしめ、謂ゆる是の言を作す、汝が習誦する所の無相の經典は眞の般若波羅蜜多に非ず我が習誦する所の有相の經典こそ是れ眞の般若波羅蜜多なれと。是の語を作す時諸の菩薩の未だ受記を

【一四】般若相應の經典に於て書寫乃至演說の時、惡魔の來りて起す魔事を明す。

【一五】般若の爲に魔界空缺ならしめずと。

得ざる有りて便ち般若波羅蜜多を甚深の經典に於て心疑惑を生じ、疑惑に由るが故に便ち般若波羅蜜多に於て而かも毀厭を生じ、毀厭に由るが故に遂に書寫し乃至演說せず、菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。復た次に善現、諸の惡魔有りて種種の形を作し菩薩の所に至り菩薩に謂て曰はく、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるも唯だ實際を證して聲聞果を得或は能く獨覺菩提を證得するのみ。決定して佛果を證得すること能はず、何に緣りて此れに於て唐しく劬勞を設くるやと。菩薩當に知るべし是れを魔事と爲すと。

第五分　眞如品第十二[一]

[二]復た次に善現、甚深般若波羅蜜多の書寫等の時諸の魔事多くして爲に留難を作さば菩薩應に覺し、覺し已て精勤し正念正知もて方便して遠離すべしと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、是の如し世尊、是の如し善逝、甚深般若波羅蜜多の書寫等の時は諸の留難多し、譬へば無價大寶神珠の得難くして能く多く諸の怨賊を具するが如く是の如く般若波羅蜜多の理趣は甚深にして勝功德を具し諸の菩薩衆書寫等の時多く惡魔有りて爲に留難を作さん。樂欲有りと雖も而かも成ずること能はず。所以は何ん、愚癡有る者は魔の魅する所と爲り、新學大乘の善男子等の深般若波羅蜜多に於て書寫等の時爲に留難を作せばなりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、愚癡有る者は福慧薄劣にして廣大の法に於て心信樂せず、新學大乘の善男子等の深般若波羅蜜多に於て書寫等の時爲に留難を作さん。當來世に於ても愚癡有る者は福慧薄劣にして自ら般若波羅蜜多に於て信樂すること能はず、他の彼れに於て書寫等を見る時、魔の威力を承けて爲に障礙を作さん。當に知るべし彼の類は罪を獲ること無邊にして多劫輪廻して諸の劇苦を受くと。復た次に善現、若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多に於て書寫等の時魔事無くんば當に知るべし皆是れ佛の威神力なりと。所以は何ん、惡魔の眷屬勤め方便して般若波羅蜜多を障へんと欲すと雖も而かも諸の如來應正等覺も亦た勤め方便して護念攝受し書寫等をして諸の留難無からしむればなり。復た次に善現、譬へば女人の多く諸の子有るが如し、或は五或は十乃至百千なり。其の母病を得るに諸の子各別に醫藥を勤求して咸く是の念を作す、云何が我が母の病をして除こり愈えしめ、障難無く身名滅せず久しく安樂に住し苦受生ぜず諸の妙樂具咸く我が母に歸せしめんと。所以は何ん、我れ等を生育して世間の事を示すは甚だ大艱辛なればなりと。是の念を作し已て競うて方便を設け安隱事を求めて母の身を覆護

【一】般若は佛母にして能く諸法實相眞如を示すを說くが故なり。

【二】前品に續いて般若に於ける魔事を說き、諸佛の善巧方便もて般若を護念し給ふを明す。

し蚊虻蛇蠍風雨人非人等の非愛の觸るゝ所と爲る勿く、勤めて供養を加へて恭敬を盡し、六根清淨にして諸の憂苦無からしめ、復た種種上妙の樂具を以て供養恭敬して是の言を作さく、我が母は慈悲して我れ等を生育し一切世間の事業を爲示したまへり。我れ等豈に母の恩に報ひざるを得んやと。是の如く如來應正等覺は常に種種の善巧方便を以て般若波羅蜜多を護念し、若し受持讀誦し修習思惟し演說し或は書寫する者有らば如來も亦た種種の方便を以て勤めて護念を加へて損惱無からしめ、十方現在の餘の世界中の一切の如來應正等覺も哀愍して諸の有情を利樂し、亦た種種の善巧方便を以て般若波羅蜜多を護念し、諸の惡魔をして毀壞することを能はざらしめ、久しく住して一切世間を利樂せん。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺を生じ、能く正しく一切智智を顯了し、能く世間諸法の實相を示し、一切智智も亦た彼れより生ずればなり。善現當に知るべし、三世の諸佛は皆是の如き甚深般若波羅蜜多に依りて精勤修學して無上正等菩提を證得したまへりと。是の故に[三]般若波羅蜜多は能く如來應正等覺を生じ、能く正しく一切智智を顯了し、能く世間諸法の實相を示すと。[四]爾の時善現便ち佛に白して言さく、云何が般若波羅蜜多は能く世間諸法の實相を示すや、佛は何の法を說いて名づけて世間と爲したまふやと。佛、善現に告げたまはく、佛は五蘊を說いて名づけて世間と爲し、甚深般若波羅蜜多は能く世間色等の五蘊の變壞相無きを示すが故に、般若波羅蜜多は能く世間諸法の實相を示すと說く。所以は何ん、色等の五蘊は自性無きが故に、說いて名づけて空無相無願と爲せばなり。即ち[五]眞法界は空等の法變壞有る可きに非るが故に、般若波羅蜜多に能く世間諸法の實相を示すと說く。復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依りて普ねく能く無量無數無邊の有情の[六]施設心行の種種の差別を證知するが故に般若波羅蜜多は能く世間諸法の實相を示すと說く。復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依りて如實に、無量無數無邊の所有る散心は法性に由るが故に[七]散心性無し、所有る[八]略心は盡の故

【三】般若は佛母たり又よく諸法の法として顯はるゝ、實相を完うす。

【四】般若能く世間諸法の實相を示すを明す。

【五】眞法界非空等法可有變壞。五蘊無自性にして空なれば不變なり眞法界なり故に五蘊は實相なり。

【六】施設心行。精神活動の過程相なり。

【七】散心に別に散心自性なし、散心即實相なり。

【八】略心。心[illegible]。

に離の故に略心性無し、諸の[九]有貪心は如實性に由りて有貪心に非ず、諸の有瞋心に如實性に由りて有瞋心に非ず、諸の有癡心は如實性に由りて有癡心に非ず、諸の[一〇]離貪心の離の中に有るに非ず、諸の離瞋心は離の中に有るに非ず、諸の離癡心は離の中に有るに非ず、所有る[一一]廣心は增無く減無く亦た遠離にも非ずして已に遠離なるが故に廣心性無く、所有る[一二]大心は來無く去無く亦た所住無く大心性無く、諸の[一三]無量心は生無く滅無く住無く異無く依止する所無きこと太虛空の如くにして無量心に非ず、諸の[一四]無見心は相の得可き無きが故に種種の境を離るゝが故に無見心に非ず、

[一五]不可見心は三眼の境に非ざるが故に心性無きが故に不可見心に非ずと證知す。此れ等の義に由るが故に般若波羅蜜多は能く世間諸法の實相を示すと說く。[一六]復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依りて如實に無量無數無邊の有情の若しは出若しは沒を證知す。謂ゆる如實に彼の有情類の心心所法の若しは出若しは沒は皆色受想行識に依りて生ずと知る。謂ゆる諸の有情の心心所法は或は色受想行識に依りて[一七]如來の死後或は有、或は無、或は亦有亦非有、或は非有非非有、此れは是れ諦實にして餘は皆愚妄なりと執する有り、或は色受想行識に依りて我及び世間は或は常、或は無常、或は亦常亦無常、或は非常非無常、此れは是れ諦實にして餘は皆愚妄なりと執する有り、或は色受想行識に依りて我及び世間は或は有邊、或は無邊、或は亦有邊亦無邊、或は非有邊非無邊、此れは是れ諦實にして餘は皆愚妄なりと執する有り、或は色受想行識に依つて命者は身に卽し或は復た身に異る、此れは是れ諦實にして餘は皆愚妄なりと執する有り、[一八]是の如く善現、一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依りて如實に無量無數無邊の有情の若しは出若しは沒を證知す。[一九]復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依つて如實に無量無數無邊の有情の若しは出若しは沒を證知す。謂ゆる如實に諸の所有る色受想行識は皆[二〇]眞如の如く二無く別無しと知る。善現當に知るべし、如來眞如は卽ち五蘊眞如、五蘊眞如は卽ち世間眞如、世間眞如は卽ち一切

【九】有貪心等。煩惱惑相、實に有貪等の心存せざればなり。
【一〇】離貪心等。有貪心なきが故に離貪の絕對離性別存するに非ず。
【一一】廣心に廣心性なし、增減遠離なきが故なり。
【一二】大心に大心性なく三世なし。
【一三】無量心に生滅住異なく大虛の如くして無量心もなし。
【一四】無見心。相なく境を離れ、無見心もなし。
【一五】不可見心。肉、天、法眼の境に非ず、心性なく、不可見心もなし。
【一六】諸佛は般若によりて有情の出沒を證知するを明す。
【一七】列ぬる所は十四無記法なり、然るに偏見者は一は實とし他は妄なりとす。
【一八】如來は正覺して偏見なきが故に衆生の迷悟出沒を證見す。
【一九】般若によりて如實に諸法の眞如相を覺るを明す。
【二〇】眞如卽五蘊世間とす、

法眞如、一切法眞如は卽ち預流果眞如、預流果眞如は卽ち一來果眞如、一來果眞如は卽ち不還果眞如、不還果眞如は卽ち阿羅漢果眞如、阿羅漢果眞如は卽ち獨覺菩提眞如、獨覺菩提眞如は卽ち一切の菩薩摩訶薩行眞如、一切の菩薩摩訶薩行眞如は卽ち諸佛の無上正等菩提眞如、諸佛の無上正等菩提眞如は卽ち一切の如來應正等覺眞如、一切の如來應正等覺眞如は卽ち一切有情眞如なりと。善現當に知るべし是の如き眞如は皆相離れず一に非ず異に非ず盡くる無く二無く亦た二分無く分別す可からずと。善現當に知るべし一切の如來應正等覺は皆甚深般若波羅蜜多に依りて一切法眞如を證し究竟して方に無上正等菩提を得と。斯れに由るが故に甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺を生ず。是れ如來の母にして能く如來應正等覺に世間の實相を示すと說く。善現當に知るべし一切の如來應正等覺は皆般若波羅蜜多に依りて能く如實に諸法の眞如不虛妄性不變異性を覺ると。如實に眞如相を覺るに由るが故に說いて如來應正等覺と名づくと。具壽善現便ち佛に白して言さく、[三] 甚深般若波羅蜜多所證の眞如不虛妄性不變異性は極めて爲れ甚深にして見難く覺り難し。一切の如來應正等覺は皆是の如き諸法の眞如不虛妄性不變異性を用て一切の菩薩摩訶薩行諸佛の無上正等菩提を宣說開示し分別顯了したまふ。是の如き眞如不虛妄性不變異性は誰れか能く信解せん、唯だ不退轉の菩薩摩訶薩及び諸願滿ぜし大阿羅漢並に正見を具する善男子等のみ有りて佛の說きたまふ此の甚深の眞如不虛妄性不變異性を聞きて能く信解を生じ、如來は彼れの爲に自ら證したまふ所の眞如の相に依りて顯示し分別したまふと。

佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、所以は何ん、眞如は無盡なり。是の故に甚深なり。唯だ如來のみ有りて現に等正覺して無盡眞如甚深の相を諸の菩薩摩訶薩衆の爲に宣說開示して信解を生ぜしむ。善現當に知るべし色無盡なるが故に眞如無盡、色甚深なるが故に眞如甚深なり、色と眞如と差別無きが故に。受想行識無盡なるが故に眞如無盡、受想行識甚深なるが故に眞如甚深な

【三】般若所證の眞如。無盡甚深にして信解し難きを明す。

り、受想行識と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし眼處無盡なるが故に眞如無盡、眼處甚深なるが故に眞如甚深なり、眼處と眞如と差別無きが故に。耳鼻舌身意處無盡なるが故に眞如無盡、耳鼻舌身意處甚深なるが故に眞如甚深なり、耳鼻舌身意處と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし色處無盡なるが故に眞如無盡、色處甚深なるが故に眞如甚深なり、色處と眞如と差別無きが故に。聲香味觸法處無盡なるが故に眞如無盡、聲香味觸法處甚深なるが故に眞如甚深なり、聲香味觸法處と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし眼界無盡なるが故に眞如無盡、眼界甚深なるが故に眞如甚深なり、眼界と眞如と差別無きが故に。耳鼻舌身意界無盡なるが故に眞如無盡、耳鼻舌身意界甚深なるが故に眞如甚深なり、耳鼻舌身意界と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし色界無盡なるが故に眞如無盡、色界甚深なるが故に眞如甚深なり、色界と眞如と差別無きが故に。聲香味觸法界無盡なるが故に眞如無盡、聲香味觸法界甚深なるが故に眞如甚深なりと、聲香味觸法界と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし眼識界無盡なるが故に眞如無盡、眼識界甚深なるが故に眞如甚深なり、眼識界と眞如と差別無きが故に。耳鼻舌身意識界無盡なるが故に眞如無盡、耳鼻舌身意識界甚深なるが故に眞如甚深なり、耳鼻舌身意識界と眞如と差別無きが故に。善現當に知るべし一切法無盡なるが故に眞如無盡、一切法甚深なるが故に眞如甚深なり、一切法と眞如と差別無きが故に。是の故に眞如は極めて信解し難しと。

第五分[一] 甚深相品第十三

[二]爾の時欲界十千の天子、天主帝釋而かも上首爲り。復た梵世二萬の天子有り、大梵天王而かも上首爲り、倶に佛所に詣りて雙足を頂禮し却て一面に住し同じく佛に白して言さく、世尊、所說の諸の甚深の法は何を以て相と爲すやと。[三]爾の時佛、諸の天衆に告げて言はく、我が宣說する所の諸の甚深の法は空無相無願無作無生無滅無所依止無性を以て相と爲すと。時に諸の天衆復た佛に白して言さく、佛の所說の法は依止する所無し。譬へば虛空の表示す可からざるが如し。如來所說の甚深の法相は世間の天人阿素洛等安立すること能はず亦た壞すること能はず。何を以ての故に、世間の天人阿素洛等は皆是れ[四]相なるが故なり。諸の有相の者は無相の相に於て安立すること能はず亦た壞すること能はず。如來所說の甚深の法相は色の[五]數に墮せず亦た受想行識の數に墮せず亦復た人非人の數に墮せず、人非人等成壞すること能はずと。爾の時佛、諸の天衆に告げて言はく、設ひ人有り來りて是の如き問ひを作さん、虛空は誰れか作り誰れか能く壞する耶と。汝彼の人は爲れ正問すと謂ふや不やと。諸の天衆曰さく、不なり世尊、所以は何ん、虛空は無體無爲無相なり。寧ろ問ひて成壞する者有りやと言ふ可けんやと。爾の時佛、諸の天衆に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。天衆當に知るべし、我が宣說する所の甚深の法相も亦復た是の如し、安立す可からず破壞す可からず。[六]佛有るも佛無きも法爾として常住す。佛は此の相に於て如實に覺知す。故に如來應正等覺と名づくと。時に諸の天衆復た佛に白して言さく、如來の覺りたまふ所の是の如き諸相は極めて爲れ甚深にして見難く覺り難し。如來は是の如き相を現覺したまふが故に一切法に於て智滯礙無し。一切の如來應正等覺は是の如き相に住して甚深般若波羅蜜多を分別開示し諸の有情の

【一】甚深の法相に就て明すが故なり。

【二】諸天佛說の甚深法相に就て問ふ。

【三】その相は空、無相、無願たり無作無生無滅無所依止、無性たり。即ち認識には空なり所取の相なし。意志には無願なり、故に業は無作なり、特に有爲の作なし、如來任運なり。法は緣起し生滅なし。他の依止に立たず、自の體性とすべきもののなきを甚深法相の一端とす、固より盡くすべからず、此の法相を執すべきものなし。

【四】相なるが故、有相分別の相を偏執するが故なり。

【五】數。計たり數たり分別たり。

【六】有佛無佛法爾常住。諸法は佛の出不に拘はらず緣起、如來するを云ふも常住の言に執へられて誤るもの多し注意すべし。

爲に諸の法相を集め方便開示して般若波羅蜜多に於て[七]無礙智を得せしめたまふ。甚深般若波羅蜜多は是れ諸の如來の常に行じたまふ所の處なり。佛は是の處を行じて[八]薩婆若を證し諸の有情の爲に分別開示したまふと。爾の時佛、諸の天衆に告げて言はく、是の如し是の如し、汝等所說の如し。天衆當に知るべし、一切の法相をば如來は如實に覺りて無相と爲すと。此の因緣に由りて我れ諸佛の無礙智を得るには能く及ぶ者無しと說く。爾の時世尊、善現に告げて曰はく、甚深般若波羅蜜多は是れ諸佛の母にして能く世間諸法の實相を示す。是の故に諸佛は法に依りて住し、依住する所の法を供養恭敬尊重讃歎し攝受護持す。此の法は卽ち是れ甚深般若波羅蜜多なり。一切の如來應正等覺は甚深般若波羅蜜多に依止して供養恭敬尊重讃歎し攝受護持せざる無し。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は能く諸佛を生じ能く諸佛の與に依止處と作り能く世間諸法の實相を示せばなり。[九]復た次に善現、一切の如來應正等覺は是れ恩を知る者能く恩を報ずる者なり。若し問ひ有りて言はん、誰れか是れ恩を知り能く恩を報ずる者ぞと。應に正しく答へて言ふべし、佛は是れ恩を知り能く恩を報ずる者なりと。何を以ての故に、一切世間に恩を知り恩を報ずるは佛に過ぐる無きが故なりと。具壽善現便ち佛に白して言さく、云何が如來應正等覺は恩を知り恩を報ずるやと。佛、善現に告げたまはく、一切の如來應正等覺は是の如き乘に乘り是の如き道を行じて無上正等菩提に來至し、菩提を得已つて一切時に於て是の乘是の道を供養恭敬尊重讃歎し攝受護持して時として暫くも廢する無し。此の乘此の道とは當に知るべし卽ち是れ甚深般若波羅蜜多なりと。是れを如來應正等覺は恩を知り恩を報ずと名づく。復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆甚深般若波羅蜜多に依りて一切法は實に作用無しと覺らざる無し。能作者無所有なるを以ての故に。一切の如來應正等覺は皆甚深般若波羅蜜多に依りて一切法は成辦する所無しと覺らざる無し。諸の形質不可得なるを以ての故に。善現當に知るべし諸の如來應正等覺は是の如き甚深般若波羅蜜多に依りて一切法は皆作用無く

【七】無礙智。佛智なり。何物にもさへられず一切の事理を知りつくす智慧なれば名づく。

【八】薩婆若(Sarvajña)。一切智と譯す。内外一切の法相及び言教に了達したる智慧なり。

【九】諸佛の知恩報恩を明す。

成辦する所無しと覺り、一切時に於て供養恭敬尊重讃歎し攝受護持するを知り、曾て間斷無きを以ての故に眞實に恩を知り恩に報ずと名づく。復た次に善現、一切の如來應正等覺は皆甚深般若波羅蜜多に依りて一切法に於て無作無成[一〇]無生の智轉じ、復た能く此の無轉の因緣を知らざる無し。是の故に應に知るべし甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺を生じ亦た能く如實に世間相を示すと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、如來は常に一切の法性は生無く起無く知無く見無しと說きたまへり。如何ぞ甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺を生じ亦た能く如實に世間相を示すと說く可けんやと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。一切の法性は生無く起無く知無く見無し。云何が法性は生無く起無く知無く見無き。一切法は空にして所有無く依止する所無く繫屬せらるゝ無きを以て此の因緣に由りて生無く起無く知無く見無きなり。善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は能く佛を生じ世間相を示すと雖も而かも生ずる所無く亦た示す所無しと。善現當に知るべし甚深般若波羅蜜多は色受想行識を見ざるが故に色受想行識相を示すと名づくと。具壽善現便ち佛に白して言さく、云何が般若波羅蜜多は色受想行識を見ざるが故に色受想行識相を示すと名づくるやと。佛、善現に告げたまはく、此の般若波羅蜜多に由りて諸の色受想行識を緣ぜずして識を起すを色受想行識を見ずと名づく。見ざるに由るが故に色受想行識相を示すと名づく。是の如き義に由りて甚深般若波羅蜜多は能く世間諸法の實相を示す。復た次に善現、甚深般若波羅蜜多は能く如來應正等覺に世間空を示すが故に離淨寂の故に說いて能く世間實相を示すと名づく。諸の世間は皆空離淨寂を以て實相と爲さゞる無きを以ての故にと。[一一]爾の時善現便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は大事の爲の故に世間に出現し、不可思議事の爲の故に、不可稱量事の故に、無數量事の故に、無等等事の故に世間に出現すと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、善現、云何が甚深般若波羅蜜多は大事の爲の故に世間に出現するや、謂ゆる諸の

【一〇】無生の智轉じ、生滅分別の考へ打破されて生滅なく眞に緣起進化するを見るを云ふ。

【一一】般若は大事等の爲の故に世間に出現するを明す。

如來應正等覺は皆一切有情を濟拔し時として暫くも捨つる無きを以て大事と爲し、甚深般若波羅蜜多は此の事の爲の故に世間に出現す。善現、云何が甚深般若波羅蜜多は不可思議事の爲の故に、不可稱量事の故に、無數量事の故に、無等等事の故に世間に出現するや。謂ゆる諸の如來應正等覺の所有る佛性、[二]如來性、自然覺性、一切智性は皆不可思議、不可稱量、無數量、無等等にして甚深般若波羅蜜多は此の事の爲の故に世間に出現すと。具壽善現復た佛に白して言さく、但だ如來應正等覺の所有る佛性、如來性、自然覺性、一切智性のみ不可思議不可稱量、無數量、無等等なりと爲すや、色受想行識乃至一切法も亦た不可思議、不可稱量、無數量、無等等なりと爲すやと。[三]佛、善現に告げたまはく、但だ如來應正等覺の所有る佛性、如來性、自然覺性、一切智性のみ不可思議、不可稱量、無數量、無等等なるに非ず、色受想行識乃至一切法も亦た不可思議、不可稱量、無數量、無等等なり。所以は何ん、一切法の眞實性の中に於ては心及び心所皆得可からざればなり。善現當に知るべし、諸の所有る色受想行識及び一切法は皆施設す可からざるが故に不可思議、不可稱量、無數量、無等等なり。何を以ての故に、是の如き諸法は自性無きが故に、得可からざるが故に、自性空なるが故なり。復た次に善現、諸の所有る色受想行識及び一切法は皆得可からざるが故に不可思議、不可稱量、無數量、無等等なり。何を以ての故に、是の如き諸法は限量無きが故に、所有無きが故に、自性空なるが故なり。[四]復た次に善現、諸の所有る色受想行識及び一切法は皆限量無きが故に不可思議、不可稱量、無數量、無等等なりと。具壽善現便ち佛に白して言さく、何の因緣の故に諸の所有る色受想行識及び一切法は皆限量無きやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、虛空は心心所法有りて能く限量すと爲すや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、諸の所有る色受想行識及び一切法も亦復た是の如し、自性空なるが故に心心所法は限量すること能はず。此の因緣に由りて諸の所有る色受想行識及び一切法は限量無きが故に皆不可思

【二】如來性は緣起そのまゝに現はれ來るを云ひ、それが覺醒となるが佛性と云ひ、自然覺性と云ふ。

【三】佛、一切法不可思議を說く。

【四】一切法限量無き故に不可思議乃至無等等なるを明す。

議、不可稱量、無數量、無等等なり。善現當に知るべし、一切法は皆不可思議、不可稱量、無數量、無等等なるを以ての故に一切の如來應正等覺の所有る佛法、如來法、自然覺法、一切智法も亦た不可思議、不可稱量、無數量、無等等なりと。善現當に知るべし是の如き諸法は皆思議す可からず、量稱を滅するが故に、數量無し、數量滅するが故に、等等無し、等等滅するが故にと。善現當に知るべし、是の如き諸法は皆思議す可からず、思議を過ぐるが故に、稱量す可からず、稱量を過ぐるが故に、數量無し、數量を過ぐるが故に、等等無し、等等を過ぐるが故にと。善現當に知るべし、不可思議不可稱量無數量無等等とは但だ增語のみ有りて都て眞實無しと。善現當に知るべし、不可思議不可稱量無數量無等等とは皆虛空の如く都て所有無しと。此の因緣に由りて一切の如來應正等覺の所有る佛法、如來法、自然覺法、一切智法は皆不可思議不可稱量無數量無等等なり。聲聞獨覺世間の天人阿素洛等皆悉く此の諸法を思議稱量數量等等すること能はざるが故に。如來此の不可思議不可稱量無數量無等等の法を說きたまふ時會中に五百の苾芻二十の苾芻尼有り諸漏永く盡きて心解脫を得たり。復た六萬の鄔波索迦三萬の鄔波斯迦有り諸法の中に於て遠塵離垢し淨法眼を生ず。復た二十の菩薩摩訶薩有りて無生法忍を得たり。世尊は[一五]彼れ賢劫の中に於て當に作佛することを得て有情衆を度すべしと記したまへり。爾の時善現復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は實に大事の爲に世間に出づるや不やと。[一六]佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、甚深般若波羅蜜多は實に大事の爲に世間に出づ。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は具さに能く一切智地若しは聲聞地若しは獨覺地を成辦して皆此に在りて攝すればなり。善現當に知るべし、[一七]刹帝利灌頂大王の威德自在にして一切を降伏し諸の國事を以て大臣に付囑し端拱無爲安隱に受樂するが如く如來も亦た爾なり、大法王と爲り威德自在にして一切を降伏し諸の佛法若しは獨覺法若しは聲聞法を以て悉く皆甚深般若波羅蜜多に付囑して普ねく成辦せしむ。是の故に善

【一五】賢劫。現在の劫の名。この賢劫の間に千佛（或は千五百佛）の出世ありといひ、かく多數の賢人世に出づるが故に此名ありといふ。

【一六】般若出世間の所以を明す。

【一七】刹帝利。軍權を有する階級にして、灌頂に四大海の水を以て其頂に灑ぐ權力を繼承する式なり、即位のこと。

現、甚深般若波羅蜜多は實に大事の爲に世間に出づ。善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は色を攝受し執著せんが爲の故に乃至識の故に世間に出でず、預流果を攝受し執著せんが爲の故に乃至一切智智の故に世間に出でずと。具壽善現便ち佛に白して言さく、云何が般若波羅蜜多は亦た一切智智を攝受し執著せんが爲の故に世間に出でざるやと。佛言はく、善現、意に於て云何、汝頗し阿羅漢果の攝受し執著す可き有るを見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊、我れ阿羅漢果の其の中に於て攝受し執著す可き有るを見ずと。佛言はく、善現、善哉善哉、我れも亦た如來法の其の中に於て攝受し執著す可き有るを見ず。是の故に善現、甚深般若波羅蜜多も亦た一切智智を攝受し執著せんが爲の故に世間に出でずと[一八]。爾の時欲界梵世の天子倶に佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は最も甚深にして見難く覺り難く極めて信解し難しを爲す。若し諸の有情の曾て過去無量の佛の所に於て弘誓願を發し多く善根を種ゑたるは乃ち能く信解せん。假使ひ三千大千世界の諸の有情類一切皆隨信行等を成じ、彼の有情類若し一劫、若しは一劫の餘を經て自地行を修するも、人有り一日此の甚深般若波羅蜜多に於て忍樂思惟し稱量觀察して獲る所の功德には如かず彼れに勝ること無量なりと。爾の時佛、諸の天子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。天子當に知るべし、若し善男子善女人等深般若波羅蜜多を聞きて疾く涅槃を得るも前に說く所の隨信行等の若し一劫若しは一劫の餘を經て自地行を修するに勝る、況んや忍樂等をやと。時に諸の天子、佛の所說を聞きて歡喜踊躍し如來を頂禮し右繞三匝し辭退して宮に還り、衆を去ること未だ遠からずして忽然として現ぜず、所屬の界に隨て各本宮に住し諸天に殊勝の行を修するを勸進す。[一九]具壽善現便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多に於て深く信解を生ずるは何處より沒して此の間に來生せるやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多を聞きて能く信解を生じ疑はず悶えずして甚深の義趣を樂見し樂聞し憶念思惟し、常に樂ふて能說法者に隨逐す

【一八】更に般若の信解し難くして其功德の殊勝なるを明す。

【一九】般若深信の菩薩の沒來處に就て明す。

ること積の母に隨ひて曾て暫くも離るゝ無きが如くなるも、乃至未だ甚深般若波羅蜜多相應の義趣に究竟通利し能く他の爲に說くを得ざるも終に甚深般若波羅蜜多及び說法師を須臾を經る頃も遠離せずば、是の諸の菩薩は人中より沒して此の間に來生し、宿の勝因に依りて能く是の事を成ずるなりと。爾の時善現復た佛に白して言さく、頗し菩薩有りて是の如き殊勝の功德を成就し、他方の佛に承事供養し已りて彼處より沒して此に來生する耶と。佛善現に告げたまはく、諸の菩薩有り是の如き殊勝の功德を成就し他方の佛に承事供養し已りて彼處より沒して此の間に來生す。復た次に善現、諸の菩薩有りて是の如き殊勝の功德を成就し先世に已に睹史天上に於て慈氏菩薩に承事供養し深般若波羅蜜多を聞きて其の中の甚深の義趣を請問せるは彼處より沒して此の間に來生す。復た次に善現、諸の菩薩有りて先世に甚深般若波羅蜜多を聞くと雖も而かも其の中に於て甚深の義趣を請問する能はざるは今人中に生じ般若波羅蜜多を說くを聞くも疑惑迷悶して開悟す可きこと難し。所以は何ん、義を了せざる者は心疑惑迷悶多きこと喩へ難ければなり。復た次に善現、諸の菩薩有りて先世に甚深般若波羅蜜多を聞き亦た曾て其の中の義趣を請問して或は一日乃至五日を經と雖も而かも精進して說の如く修行せざるは今人中に生じて是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて少時を經るに其の心堅固にして能く壞する者無しと雖も若し般若波羅蜜多及び說法師に深義を請問するを離るれば尋で便ち退失す、所以は何ん、此の諸の菩薩は前世に於て般若波羅蜜多を聞き亦た能く甚深の義趣を請問するを得たりと雖も而かも精進して修行せざるが故に今生に於て深般若波羅蜜多に於て或る時は樂聞し或る時は樂はず、或る時は堅固に或る時は退失し其の心輕動進退恒に非ざること[三〇]堵羅綿の風に隨て飄轉するが如くなればなり。是の如く菩薩の新に大乘を學せるは信心有りと雖も而かも堅淨ならず、深般若波羅蜜多に於て長時信樂し隨轉すること能はず、二乘地に於て或は當に一に墮すべし。

【三〇】堵羅綿。堵羅(Tūla)は草木の花絮なり。又は樹の名なりともいふ。

第五分　船[一]等喩品第十四

[二]復た次に善現、譬へば商侶の大海に遊泛し其船卒に破れんに中に於て諸人若し能く木の器物浮嚢板片死屍を取りて依附する所と爲さば當に知るべし彼の類は終に沒死せずして安隱の大海の彼岸に至るを得て損する無く害する無くして諸の快樂を受くるが如く、諸の菩薩衆も亦復た是の如し、若し大乘に於て信有り忍有り、樂(ぎやう)有り欲有り、精進有り勝解有り不放逸有り勝意樂(しよういぎやう)[三]有り捨有り敬有り清淨心有り無上正等菩提に於て善軛を捨てざる有り、復た能く甚深般若波羅蜜多を攝受して依附する所と爲さば當に知るべし、此の類は終に中道にして聲聞或は獨覺地に退入せず定めて無上正等菩提を證せんと。復た次に善現、男子或は諸の女人有り燒熟せる瓶を持ち河に詣りて水を取るが如し、若しは池にても若しは井にても若しは泉にても若しは渠にても當に知るべし此の瓶は終に爛壞せずと。何を以ての故に、是の瓶は善く熟して水を盛るに堪任し極めて堅牢なるが故なり。諸の菩薩衆も亦復た是の如し、若し大乘に於て信有り忍有り樂有り欲有り精進有り勝解有り不放逸有り勝意樂有り捨有り敬有り清淨心有り無上正等菩提に於て善軛を捨てざる有り復た能く甚深般若波羅蜜多方便善巧を攝受せば當に知るべし此の類は終に中道にして聲聞或は獨覺地に退入せず定めて無上正等菩提を證せんと。復た次に善現、商人有り善巧智を具し先に海邊に在りて固く船を修し已て方に水に牽入して穿穴無きを知り後財物を持て上に置きて行くに當に知るべし彼の船は必ず壞沒せず人物安隱に所至の處に達するが如く、諸の菩薩衆も亦復た是の如し、若し大乘に於て信有り忍有り樂有り欲有り精進有り勝解有り不放逸有り勝意樂有り捨有り敬有り清淨心有り無上正等菩提に於て善軛を捨てざる有り復た能く甚深般若波羅蜜多を攝受せば當に知るべし此の類は終に中道にして聲聞或は獨覺地に退入せず定めて無上正等菩提を證せんと。復た次に善現、譬へば人有り年百二十にして老耄衰朽せ

【一】第一に船喩を說くが故に。

【二】佛、比喩を以て般若を攝受し之に依附せば無上菩提を證するを明す。

【三】捨。偏執せず狂熱なきなり。

るに復た衆病を加ふ、謂ゆる風熱痰或は三つの雜はれる病なり、是の老病人床座より起ちて他處に往かんと欲するも而かも自ら能はざるが如し。二健人有りて各一臂を扶け徐ろに策し起たしめて而かも之に告げて言はく、難しとする所有ること莫れ、意に隨て往かんと欲せよ。今我が二人終に相棄てずして必ず趣く所に達し安隱にして損する無からしめんと。諸の菩薩衆も亦た是の如し、若し大乘に於て信有り忍有り樂有り欲有り精進有り勝解有り不放逸有り勝意樂有り捨有り敬有り清淨心有り無上正等菩提に於て善軛を捨てざる有り復た能く甚深般若波羅蜜多方便善巧を攝受せば當に知るべし此の類は終に中道にして聲聞或は獨覺地に退入せず定めて無上正等菩提を證せんと。上と相違するは是れを[四]黑品と名づくと。

【四】黑品。不善の品類にして無上菩提を證せざるもの。

第五分如[一]來品第十五之一

[二]爾の時善現便ち佛に白して言さく、新學の菩薩は云何が應に甚深般若波羅蜜多を學すべきやと。佛、善現に告げたまはく、新學の菩薩般若波羅蜜多を學せんと欲せば先に應に善友に親近し承事すべし。若し能く甚深般若波羅蜜多を宣說して諸の菩薩を教誡教授せば是れを善友と名づく。謂ゆる是の言を作さん、來れ善男子、汝應に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を勤修すべし。汝勤修する時應に無所得を方便と爲して無上正等菩提に廻向すべし。汝廻向の時色受想行識を以ての故に菩提を取ること勿れ。所以は何ん、一切智智性は取る所に非ざればなり。汝善男子、諸の聲聞獨覺等の地に於て貪著を生ずること勿れと。若し能く是の如く新學の菩薩を教誡教授し、其れをして漸く甚深般若波羅蜜多に入らしむれば當に知るべし是れを菩薩の善友と爲すと。[三]具壽善現復た佛に白して言さく、是の諸の菩薩菩提心を發して菩提に趣かんと欲するは甚だ難事と爲す。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、諸の菩薩の所作は甚だ難し、謂ゆる諸の世間を利樂せんが爲の故に無上正等菩提を發趣し是の誓を作して言はく、我れ諸の世間を濟拔せんが爲の故に、諸の世間の爲に舍宅を作らんが故に、諸の世間の爲に歸依と作らんが故に、諸の世間の爲に[四]洲渚と作らんが故に、諸の世間に[五]究竟道を示さんが故に、諸の世間の爲に導師と作らんが故に、諸の世間の爲に所趣と作らんが故に發勤精進して大菩提に趣くと。善現、云何が諸の菩薩衆は誓ひて諸の世間を濟拔せんが爲の故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩、諸の世間を見るに生死の苦に沒して出離すること能はず、發勤精進して大菩提に趣き彼の苦を拔かんが爲に正法要を說くなり。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間の爲に舍宅と作らんが故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は世間の爲に一切法皆和合せざるを說がんが爲に發勤精進して大菩提に趣くなりと。善現白し

【一】善現、如來に隨つて生ずることを明す故に如來品と云ふ。
【二】新學の菩薩の般若修學に就て明す。
【三】以下、菩薩世間利樂の爲の故に發勤精進して大菩提に趣くを明す。
【四】洲渚。所依の島地を云ふ。
【五】究竟道。理の至極なり。所謂諸法實相を云ふ。

て言さく、云何が菩薩は世間の爲に一切法皆和合せざるを說かんと欲するやと。佛言はく、善現、諸の菩薩衆は世間の爲に五蘊及び一切法皆和合せず縛無く解無く生無く滅無きを宣說せんと欲し、此れに由りて便ち能く一切を覆護すること猶ほ舍宅の如し。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間の爲に歸依と作らんが故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は世間をして一切の生老病死愁歎憂苦を解脫せしめんと欲し發勤精進して大菩提に趣き方便善巧して正法要を說くなり。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間の爲に洲渚と作らんが故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は大菩提に趣き世間の爲に五取蘊[六]の前後際斷、此の斷に由るが故に一切法斷ずるを說かんと欲す。此の一切斷は卽ち是れ寂滅微妙の涅槃なり。亦た是れ如實にして顚倒性無し。譬へば小大の海河池中の高地の居る可きを說いて洲渚と爲すが如く涅槃も亦た爾なり安隱處なるが故に。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間に究竟道を示さんが故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は大菩提に趣き世間の爲に色究竟に名づけて色と爲さざるを說かんと欲す。受想行識餘法も亦た爾なり。究竟法性は色等に非ざるが故なり。具壽善現白して言さく、世尊、若し色等の法の究竟法性を色等と名づけずんば應に諸の菩薩は已に菩提を得たるべし、究竟性の中には分別無きが故なりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、究竟性の中には都て分別無し。而かも諸の菩薩は甚だ難事と爲す。能く是の如く一切法を觀ずと雖も而かも[七]證を作さず亦た沈沒せずして是の念を作して言はく、我れ此の法に於て現等覺し已て諸の世間の爲に宣說開示して是の如き究竟道相を知らしめんと。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間の爲に導師と作るが故に發勤精進して大菩提に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は大菩提に趣き世間の爲に色の本性は生無く滅無く受想行識も亦復た是の如しと說かんと欲し、世間の爲に預流果乃至無上正等菩提の諸法の本性も生無く滅無しと說かんと欲すればなり。善現、云何が諸の菩薩衆は諸の世間の爲に所趣と作るが故に發勤精進して大菩提

【六】五取蘊。五蘊に同じきも、五蘊は有漏無漏に通じ、五取蘊は有漏のみ也。取は煩惱の異名にして煩惱は蘊を生じ、蘊また煩惱を生ずるが故に蘊のことを取蘊といふ。

【七】證を作さず等、超越して空に住せず、沒在して有に墮せず。

に趣くや。謂ゆる諸の菩薩は大菩提に趣き世間の爲に色は虛空を以て所趣と爲し受想行識及一切法も亦た虛空を以て所趣と爲すと宣說開示せんと欲し、世間の爲に、色は所趣無きこと虛空と等しく、受想行識及び一切法も亦た所趣無きこと虛空と等しく、太虛空の無來無去無作無住無生無滅なるが如く諸法も亦た爾なり、皆虛空の如く分別する所無し。何を以ての故に、諸の色は空なるが故に來る無く去る無く受想行識及び一切法も亦た皆空なるが故に來る無く去る無ければなり。所以は何ん、一切法は空無相無願を以てせざる無きを何て造無く作無く生無く性無く夢の如く幻の如く我無く邊無く、寂靜涅槃にして取る無く捨つる無く來る無く去る無く最極寂滅を所趣と爲し、彼れ是の趣に於て超越す可からずと宣說開示せんと欲すればなり。爾の時善現便ち佛に白して言さく、誰れか能く是の如き深法を信解するやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩久しく大行を修し已に曾て無量の諸佛を供養し、諸佛の所に於て弘誓願を發し種ゑし所の善根皆已に成熟して無量の善友攝受護念せば此の深法に於て能く信解を生ずと。具壽善現復た佛に白して言さく、是の諸の菩薩は何を以て性と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は調伏遠離を法性と爲す。此の性に由るが故に甚深般若波羅蜜多を能く知り能く了すと。具壽善現復た佛に白して言さく、是の諸の菩薩甚深般若波羅蜜多を能く知り能く了せば當に何れの所にか趣くべきと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は一切智に趣くと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩是の趣を證し已らば能く無量無邊の有情の爲に歸趣する所と作るかと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、若し諸の菩薩無上正等菩提を證得せば能く無量無邊の有情の爲に歸趣する所と作らんと。具壽善現復た佛に白して言さく、是の諸の菩薩は能く難事を爲す、謂ゆる是の如き堅固の甲冑を著、無量無邊の有情を度して涅槃に入らしめんと欲するも而かも有情類都て得可からずと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。復た次に善現、是の諸の菩薩の著ける

所の甲冑は諸の色受想行識に屬せず、聲聞獨覺菩薩一切智智及び一切法に屬せず。所以は何ん、一切法は皆所屬無きを以てなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば聲聞獨覺等の地に住せずと。佛、善現に告げたまはく、汝何の義を觀じて是の如き說を作すやと。善現答へて言はく、甚深般若波羅蜜多は住著する所無し。若し般若波羅蜜多を修せば一切法に於て都て修する所無く亦た修者修時、修處及び此れに由りて修習する無く得可からず。世尊、甚深般若波羅蜜多は決定法無し。若し虛空を修し一切法を修し無邊際を修し無攝受を修せば是れ般若波羅蜜多を修するなりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。復た次に善現、應に是の如き甚深般若波羅蜜多に依りて不退轉の菩薩摩訶薩を觀察すべし。謂ゆる諸の菩薩若し甚深般若波羅蜜多に貪著せず他語及び他の敎勅に執して以て眞要と爲さず、但だ他のみを信じて所作有るに非ず、是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて其の心驚かず恐れず怖かず沈まず沒せず疑無く悔無く亦た迷悶せず歡喜して樂聞し深心に信受せば是の諸の菩薩は定めて退轉せず。是の如き菩薩は先世に已に甚深般若波羅蜜多の所有る義趣を問ひしが故に今聞くことを得て心驚等無しと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を聞きて、心驚等無くんば是の諸の菩薩は云何が甚深般若波羅蜜多を觀察するやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は應に一切智に隨順する心を以て般若波羅蜜多を觀察すべしと。具壽善現復た佛に白して言さく、云何が一切智に隨順する心もて般若波羅蜜多を觀察するやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩虛空に隨順して般若波羅蜜多を觀察せば是れを一切智に隨順する心もて般若波羅蜜多を觀察すと爲す。所以は何ん、一切智は無量無邊なるを以てなり。若し無量無邊なれば卽ち色に非ず亦た受想行識に非ず、得無く現觀無く智無く識無く生無く滅無く修無く作無く從て來る所無く亦た去る所無く方無く域無く亦た住する所無し。唯だ說いて無量無邊と爲す可きのみ、善現當に知るべし、虛

空無量無邊なるが故に一切智も亦た無量無邊、一切智無量無邊なるが故に能證者無し。色は能證に非ず乃至識も能證に非ず、布施波羅蜜多は能證に非ず乃至般若波羅蜜多も能證に非ず。所以は何ん、色乃至識は卽ち一切智にして二無く別無く、布施波羅蜜多乃至般若波羅蜜多は卽ち一切智にして二無く別無ければなりと。

[八]爾の時欲界梵世の天子俱に佛所に詣り同じく佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は極めて甚深にして見難く覺り難しと爲す。爾の時佛、諸の天子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。我れ此の義を觀じて初めて成佛せし時安坐し思惟して說法を樂はず、謂ゆる是の念を作しぬ、我が法は甚深にして諸の世間卒に能く信受するに非ず、我が所證の法は卽ち是れ般若波羅蜜多なり。此の法は甚深にして能證に非ず所證に非ず證處無く證時無く、此れに由りて證するも亦を得可からずと。天子當に知るべし、虛空甚深なるが故に此の法甚深なり。我甚深なるが故に此の法甚深なり。一切の法性來去無きが故に此の法甚深なりと。時に諸の天子復た佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、佛の所說の法は一切世間極めて信解し難し。佛の所說の法は取る無く捨つる無きに、世間の有情は取捨を行ずるが故なりと。爾の時佛、諸の天子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、佛の所說の法は微妙甚深にして一切法に於て皆能く隨順し障礙する所無きこと虛空と等しく、佛の所說の法は畢竟不生なり。一切の生法不可得なるが故に、佛の所識の法は都て處所無し、一切の處行不可能なるが故にと。佛言はく、善現、是の如し是の如しと。[九]時に諸の天子便ち佛に白して言さく、大德善現は是れ眞の佛子なり。如來に隨て生じ諸の所說有るは一切皆空と相應するが故にと。爾の時善現、諸の天子に語るらく。汝等我れ如來に隨て生ずと說く。云何が善現は如來に隨て生ずるが。謂ゆる如來の眞如に隨て生ずるが故に、一切の生法得可からざるが故に如來の眞如は來る無く去る無く本性不生なり。善現の眞如

【八】般若の甚深にして難見難覺なるを明す。

【九】善現は如來に隨て生ずとなす所以を說く。善現の眞如は如來の眞如と無二無別なればなり。

も亦た來去無く本性不生なり。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は卽ち一切法の眞如、一切法の眞如は卽ち如來の眞如、是の如き眞如は眞如性無く亦た不眞如性無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く、善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は變異無く分別無く一切處に遍ず。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は常住を相と爲し而かも住する所無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は〔一〇〕罣礙する所無く、一切法の眞如も亦た罣礙する所無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如と一切法眞如とは同一眞如にして二無く別無く造無く作無し。是の如き眞如は常に眞如相にして時として眞如相に非ざること無し。是の故に眞如は二無く別無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は一切處に於て憶念無く分別無く、一切法の眞如も一切處に於て亦た憶念無く分別無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は別異無く得可からず、一切法の眞如も亦た別異無く得可からず、善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來の眞如は諸法の眞如を離れず、諸法の眞如は如來の眞如を離れず、如來の眞如は常に眞如相にして時として眞如相に非ざること無し。善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。隨て生ずと說くと雖も而かも隨て生ずる所無し。善現の眞如は佛に異らざるを以ての故に。如來の眞如は去來に非ず今一切法の眞如も亦た去來に非ず、今善現の眞如も亦復た是の如し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。如來は卽ち是れ如來の眞如なり。如來の眞如は過去の眞如に隨ひ、過去の眞如は如來の眞如に隨ひ、如來の眞如は未來の眞如に隨ひ、未來の眞如は如來の眞如に隨ひ、如來の眞如は現在の眞如に隨ひ、現在の眞如は如來の眞如に隨ひ、如來の眞如は三世の眞如に隨ひ、三世の眞如は如來の眞如に隨ひ、如來の眞如と三世の眞如とは二無く別無く一切法の眞如なり。善

【一〇】罣礙。罣は網、礙は障にて煩惱妄想を云ふ。

現の眞如も亦た二無く別無し。故に說く善現は如來に隨て生ずと。菩薩の眞如は卽ち佛の眞如なり。諸の菩薩衆は眞如に由るが故に菩提を得る時說いて如來應正等覺と名づく。如來此の眞如を證得する時三千世界[一]六種に變動す。我れ是の如き諸法の眞如に於て深く信解を生ず。故に說く善現は如來に隨て生ずと。天子當に知るべし、然かも我れ善現は色に由るが故に乃至識の故に如來に隨て生ぜず、亦た預流果に由るが故に乃至獨覺菩提の故に如來に隨て生ぜず、亦た一切智に由るが故に如來に隨て生ぜず但だ眞如に由るが故に如來に隨て生ずるのみと。天子當に知るべし。然かも我れ善現は色受想行識に隨て生ぜず、預流果乃至獨覺菩提に隨て生ぜず、故に我れ善現は如來に隨て生ずるなりと。[二]時に舍利子便ち佛に白して言さく、是の如き如來は甚深微妙なりと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。是の如き如來は甚深微妙なりと。是の如き如來相を說く時に當て三千の苾芻諸漏永く盡き心解脫を得て阿羅漢を成じ、五百の苾芻尼は遠塵離垢して淨法眼を生じ、五千の天人は無生法忍を得、[三]六十の菩薩は諸漏永く盡きて心解脫を得たり。

[四]爾の時佛、舍利子に告げて言はく、今此の衆中の[五]六十の菩薩は[六]曾て過去の五百佛の所に於て親近し供養して布施淨戒安忍精進靜慮を修すと雖も而かも甚深般若波羅蜜多方便善巧を攝受せずして別異の想を起して別異の行を修せしが故に今時に於て大法を聞くと雖も而かも諸漏を盡くし心解脫を得るのみ故に、舍利子、諸の菩薩衆は菩薩道空無相無願有りと雖も而かも甚深般若波羅蜜多方便善巧を攝受せず便ち實際を證して聲聞或は獨覺地に墮つるなり。舍利子、譬へば鳥有り其身廣大にして百踰繕那乃至五百なるも翅羽未だ成ぜず或は已に衰朽す。是の鳥彼の三十三天より身を投じて下り贍部洲に趣くに其の中道に於て欻に是の念を作す、我れ今還りて三十三天に上らんと。汝が意に於て云何、是の鳥は能く三十三天に還るや不やと。舍利子曰さく、不なり世尊と。佛、舍利子

【一】六種に變動す。六種震動なり。神通力に感應して起る奇瑞にて大地が六種に震動すること。動、起、涌、震、吼、擊の稱にて前の三は形の變にして後の三は聲の變なり。

【二】舍利子と如來甚深を說く。

【三】六十。三本等六千に作る。

【四】菩薩菩提を得んには般若方便善巧を遠離すべからざることを比喩を以て明す。

【五】前に同じく六千とす。

【六】諸佛に親近して施戒等を修するも般若に離れ分別有量に墮するが故に小證となり漏盡心解脫となる。

に告げたまはく、是の鳥中路にして或は是の願を作さん、贍部洲に至り當に我が身をして損する無く苦無からしむべしと。意に於て云何、是の鳥の願ふ所遂ぐるを得可べきや不やと。舍利子曰さく、不なり世尊。是の鳥は此の贍部洲に至る時其の身決定して損する有り苦有り、或は復た死に近づき或は命終を致さん。何を以ての故に、是の鳥身大にして遠くより而かも墮つるに翅羽未だ成ぜず或は衰朽せるが故なりと。佛、舍利子に告げたまはく、菩薩乘の善男子等有るも亦復た是の如し、無上正等覺の心を發し已に殑伽沙數の大劫を經て布施淨戒安忍精進靜慮を勤修し亦た空無相無願解脫門を修すと雖も而かも甚深般若波羅蜜多を攝受せずんば便ち實際を證して聲聞或は獨覺地に墮せん。舍利子、是の諸の菩薩は三世の諸佛の戒蘊乃至解脫智見蘊を念ずと雖も而かも[一七]心に相を取りて如實に是の如き五蘊の眞實の功德を知らず、但だ[一八]空聲のみを聞きて相を取りて菩提に執著し廻向し便ち聲聞或は獨覺地に墮す、何を以ての故に、舍利子、是の諸の菩薩は般若波羅蜜多方便善巧法の應に爾るべきを遠離せるが故なりと。時に舍利子便ち佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば若し諸の菩薩般若波羅蜜多方便善巧を遠離せば無量の福德資糧を具すと雖も而かも菩提に於て或は得、得ず。是の故に菩薩菩提を得んと欲せば決定して般若波羅蜜多方便善巧を遠離すべからずと。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。

卷の第五百六十二

第五分如來品第十五之二

[一]爾の時欲界梵世の天子恭敬合掌し俱に佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は最も微れ甚深にして極めて信解し難く、諸佛の無上正等菩提も亦た最も甚深にして極めて信得し難しと。爾の時佛、諸の天子に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。具壽善現便ち佛に白して言

【一七】五分法身を念ずるも相最差別を固執して生きたる實相の佛に卽せず。

【一八】空と云へば空に執し菩提なるものを執し又は菩提に廻向すれば增大する如く考ふるを云ふ。

【一】般若の甚深にして難信解なる如く諸佛の無上菩提も亦然るを明す。

さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば無上菩提は信得し難きに非ず。何を以ての故に、一切法は畢竟空なるを以ての故に、空中法の餘法を信證する無ければなり。所以は何ん、一切法の自性皆空なるを以てなり。若し永く是の如き法を斷ぜんが爲の故に是の如き法を說かば此の法も亦た空なり。此の因緣に由りて佛の無上正等菩提に於ては能證所證能知所知一切空寂なり。是の故に無上正等菩提は信解し難きに非ず證得し難きに非ず、一切法は皆空ならざる無きを以て是の如く信知せば便ち證得するが故にと。佛、善現に告げたまはく、無上菩提を能く信證する者不可得なるが故に、無上菩提は實有に非さるが故に、積集無きが故に信得し難しと說くと。時に舍利子、善現に語て言はく、一切法は畢竟空なるを以ての故に無上菩提は極めて信得し難し。所以は何ん、一切法は都て自性無く皆虛空の如くなるを以て譬へば虛空の是の念を作さざるが如し。我れ當に無上菩提を信得すべしと。諸法も亦た爾なり。是の故に無上正等菩提は極めて信得し難し。復た次に善現、若し佛菩提信得し難きに非ずんば則ち殑伽沙の如き諸の菩薩衆無上正等菩提を發趣して後還りて退轉すること有るべからず。故に佛菩提は極めて信得し難しと。善現對へて曰はく、意に於て云何、色は菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。受想行識は菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。色を離れて法有り菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。受想行識を離れて法有り菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。色眞如は菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。受想行識眞如は菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。色眞如を離れて法有り菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。受想行識眞如を離れて法有り菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。眞如は菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。眞如を離れて菩提に於て退轉有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。

[二]時に具壽善現、舍利子に謂つて言はく、若し[三]一切法諦の故に住の故に都て所有無く、皆得可からずんば何等の法無上正等菩提に於て而かも退轉有る可しと說くやと。舍利子言はく、汝が所說の如くんば實に法有ること無く亦た有情の菩提に於て退轉有りと說く可き無し。若し爾れば佛に何が故に三種の菩薩乘に住するを說きたまふや、但だ應に一のみを說くべきならん。又た三乘異り有りと立つべからず唯だ應に一正等覺乘のみ有るべきならんと。時に滿慈子便ち具壽舍利子に白して言はく、應に善現に問ふべし、一菩薩乘のみ有るを許さんが爲なりや不やと。然る後難ず可し、應に三乘の差別を建立すること無かるべし。唯だ應に一正等覺乘のみ有るべきならんと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、一菩薩乘のみ有るを許さんが爲なりや不やと。善現報へて言はく、眞如に顧し三種の菩薩及び三乘有り耶と。舍利子言はく、不なり善現と。眞如に顧し一菩薩乘一佛乘有りや不やと。舍利子言はく、不なり善現と。眞如に顧し一法の見て一菩薩及び一乘と名づく可き有り耶と。舍利子言はく、不なり善現と。時に具壽善現、舍利子に謂て言はく、若し一切法諦の故に住の故に都て所有無く皆得可からず、菩薩の三乘も亦復た是の如くんば如何が一有り三有りと責む可けん。若し諸の菩薩眞如無差別相を說くを聞きて驚かず怖かず亦た沈沒せずんば是の諸の菩薩は疾く菩提を證し定めて退轉無からんと。[四]爾の時世尊、善現を讚めて曰はく、善哉善哉、汝今乃ち能く諸の菩薩の爲に善く法要を說けり。汝の所說は佛の威神を承く。一切の如來は汝の說を隨喜せん。若し諸の菩薩法の眞如無差別相に於て深く信解を生ぜば是の如き諸法の眞如を說くを聞きて驚かず怖かず亦た沈沒せず、是の諸の菩薩は疾く無上正等菩提を證して定めて退轉無からんと。時に舍利子、便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩此の法を成就せば定めて無上正等覺を證する耶と。爾の時佛、舍利子に告げて言はく、是の如し是の如し、是の諸の菩薩は決定して聲聞等の地に墮せざるなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩菩提を證せんと欲せば應に云何か住すべく、應に

【二】眞如無差別相を明す。
【三】一切法、眞諦として有なく、住法として止住すべきなきことを云ふ。
【四】佛、善現の所說を讚し、無上菩提の證を欲する菩薩の住すべく、學すべき所を說く。

云何が學すべきやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩菩提を證せんと欲せば諸の有情に於て應に平等に住すべし。謂ゆる彼の類に於て應に等心、慈心、悲心、喜心、捨心、不異心、謙下心、利益心、安樂心、無瞋惱心、如父母心を起すべし、亦た此の心を以て應に其の語を與にすべし。善現當に知るべし、若し諸の菩薩菩提を證せんと欲せば應に是の如く住すべく應に是の如く學すべしと。

第五分不退品第十六

[一]爾の時善現便ち佛に白して言さく、我れ等當に何の行狀相を以て是れ不退轉の菩薩摩訶薩なりと知るべきやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩能く如實に異生聲聞獨覺菩薩及び如來地に異り有りと說くと雖も而かも諸法の眞如性の中に於て變異無く分別無く皆二無く二分無しと知り、是の諸の菩薩は實に諸法の眞如に悟入すと雖も而かも眞如に於て分別する所無く、眞如と一切法と二無く別無しと聞くと雖も而かも疑滯する所無く、諸法の種種の異相を聞くと雖も而かも其の中に於て執著する所無し。是の諸の菩薩は終に[二]輕爾にして語言を發せず、諸の所說有るは皆義利を引き、終に他の好惡長短を觀ぜず平等に憐愍して爲に法を說く。若し諸の菩薩是の如き諸の行狀相を成就せば定めて無上正等菩提に於て復た退轉せざるなり。復た次に善現、是の諸の菩薩は外道の沙門梵志の形相を觀て、謂ゆる彼れは法に於て實知實見せず、或は能く正見の法門を施設せりと、言說せず。是の處有ること無ければなり。終に外道の天神を禮敬せず亦た供養して勝福を求めず。復た次に善現、是の諸の菩薩は惡趣に墮ちず女身を受けず、亦た卑賤の種族に生ぜず。彼の有情類を度脫せんが爲に[三]同類生を示し方便して攝受するをば除く。復た次に善現、是の諸の菩薩は常に樂ひて十善業道を受行し亦た能く方便して他に受行するを勸め乃至夢中にも亦た犯す所無し。復た次に善現、是の諸の菩薩は諸の受持し思惟し讀誦する所の種種の經典を極めて通利せしめ、皆一切有情を利樂せんが爲に恒に是の念を作す、我れ此の法を以て諸の有情の爲に宣說開示して當に一切をして法の願を滿足せしむべし。復た是の如き法施の善根を持て諸の有情に與へて平等に共に有して所求の一切智智に廻向す。復た次に善現、是の諸の菩薩は佛の所說の甚深の法門に於て決定して疑惑猶豫を生ぜず亦た迷悶せず歡喜し信受す。諸の發言する所は皆饒益を爲し量を知りて說き、言詞柔

【一】不退轉の菩薩の行狀相を明す。

【二】輕率に言はず、云へばそれ相應の義理と利益とあり、好き嫌ひを加へず、公平に親切に活路を與ふ。

【三】同類生、他を救ふために之に應同せる生路を取るなり。

軟、寢寐輕少にして煩惱行はれず、入出往來に心迷謬せず、恒時に正念正知に安住す。進止威儀も亦復是の如し。諸の遊履する所必ず其の地を觀て安詳として念を繫け正視して行き、運動語言常に卒暴無し。諸の受用する所の臥具衣服皆常に香潔にして諸の臭穢無く亦た垢膩蟣虱等の蟲無く恒に清閑を樂ひて常に疾病無く、身中[四]八萬戸の蟲有ること無し。所以は何ん、是の諸の菩薩は善根增上して世間に出過し如如の善根漸漸に增長して是の如く是の如く身心清淨なればなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、是の菩薩の心は云何が清淨なるやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩如如の善根漸漸に增長して是の如く是の如く心中一切の諂曲矯誑皆永く行はれずば、此の因緣に由りて一切の煩惱及び餘の不善と皆永く息滅し亦た聲聞及び獨覺地を超えて疾く無上正等菩提に趣く。此れに由りて應に心常に清淨なりと知るべし。復た次に善現、是の諸の菩薩は利養を重ぜず名譽に徇はず心嫉慳を離れ身愆失無く、甚深の法を聞きて心迷謬せず、智慧深固にして恭敬して信受し聽聞する所に隨て皆能く甚深般若波羅蜜多に會入し、諸の造作する所の世間の事業も亦た般若波羅蜜多に依りて、方便善巧して法性に會入し一事として[五]法性を出づる者を見ず。設ひ法性と相應せざる有るも亦た能く方便して般若波羅蜜多甚深の理趣に會入す、斯れに由りて法性を出づる者を見ざるなり。[六]復た次に善現、是の諸の菩薩は設ひ惡魔有りて現前に八大地獄を化作し、一一の獄中に無量百千の菩薩の皆猛焰を被り交徹燒然せるを化作し、菩薩に告げて言ふ。此の諸の菩薩は皆不退轉の記を受得せるに由るが故に是の如き大地獄の中に墮ちて恒に斯の如き猛利の大苦を受く。汝等既に不退轉の記を受けたり、當に此の如きの類は斯の大苦を受くべし。是の故に汝等應に疾く大菩提心を捨棄して斯の苦を脫す可し。當に天上に生じ或は人中に生じ富貴自在にして諸の快樂を受くべしと。時に諸の菩薩は此の事を見聞して其の心動ぜず亦た驚疑せずして但だ是の念を作すのみ。若し諸の菩薩已に菩提の不退轉記を受けたるに更に惡趣に墮して諸の苦惱を受くること愚なる異生

【四】八萬戸の虫、寄生する微生物を云ふ。

【五】法性を出づ、法性以外のもの。

【六】不退の菩薩能く惡魔の所作所說に驚動せざるを明す。

の如しとは、必ず是の事無し。今見聞せるは定めて是れ惡魔の所作所說にして眞實有に非ずと。復た次に善現、是の諸の菩薩は設ひ惡魔有りて沙門の像を作して其の所に來至し是の如き言を說く。汝が先に聞きて受持讀誦せし甚深般若波羅蜜多相應の經典は皆是れ邪說なり、應に疾く捨棄して爲れ眞なりと謂ふこと勿るべし。汝等若し能く速に疾く捨棄せば我れ當に汝に眞淨の佛法を敎へ、汝をして速に無上菩提を證せしむべし、汝が先に聞きし所は眞の佛語に非ず、是の文頌は虛誑の撰集なり、我れの所說は是れ眞の佛語なりと。善現當に知るべし、若し諸の菩薩是の如き語を聞きて心動じ驚疑せば應に知るべし未だ不退轉の記を受けずと。若し諸の菩薩是の如き語を聞きて心驚疑せず但だ無作無相無生の法性に隨て住せば應に知るべし已に不退轉の記を受けたりと。是の諸の菩薩の諸の所作有るは他語を信ぜず他敎に隨はずして便ち動轉すること、阿羅漢の諸の所爲有るは他語を信ぜず現に法性を證して惑無く疑無く一切の惡魔傾動すること能はざるが如し。不退の菩薩も亦復た是の如し。一切の聲聞獨覺外道諸の惡魔等破壞して菩提に於て退屈を生ぜしむること能はず。復た次に善現、是の諸の菩薩は設ひ惡魔有りて其の所に來詣し詐りて親友と現じて是の如き言を作さん、汝等が所行は是れ生死の法にして菩提行に非ず。汝等今應に盡苦の道を修し速に衆苦を盡くして般涅槃を得べし。現在の苦身すら尙ほ應に厭捨すべし、況んや更に當來の苦身を樂受せんをや。宜しく自ら審思して先に信ぜし所を捨つべしと。是の諸の菩薩彼の語を聞く時心驚疑せず但だ是の念を作すのみ。是の如く說く者は定めて是れ惡魔なりと。時に彼の惡魔復た菩薩に語るらく、菩薩の無益の行を聞かんと欲する耶。謂ゆる諸の菩薩は殑伽沙數の如き大劫を經て無量種上妙の供具を以て諸佛に供養し、復た殑伽沙等の佛所に於て無量種の難行梵行を修し、殑伽沙の如き諸佛世尊に親近し承事して無量無邊の菩薩の修すべき所の道を請問せり。云何が應に住すべく云何が應に行ずべく云何が應に學すべきやと。諸の菩薩道を殑伽沙等の諸佛世尊は請問せらるるが如く次第に爲に

說き、彼の諸の菩薩は教の如くにして住し教の如くにして行じ教の如くにして學して無量劫を經るも尙ほ所求の無上正等菩提を證すること能はず、況んや今汝等能く證得す可けんやと。是の時菩薩其の言を聞くと雖も而かも心動ぜず亦た疑惑無し。時に彼の惡魔復た是の處に於て無量の苾芻の形像を化作し菩薩に告げて曰はく、此の諸の苾芻は皆過去に於て無數劫を經て無量種の難行梵行を修せしも而かも無上菩提を得ること能はず、今皆退きて阿羅漢果に住せり。云何が汝等能く菩提を證せんやと。是の諸の菩薩は此れを見聞し已て即ち是の念を作さく、定めて是れ惡魔我れを擾亂せんが爲に是の如きの事を作すならん。定めて菩薩は般若波羅蜜多を修行して圓滿位に至る無上正等菩提を證せず退きて聲聞獨覺等の地に住すること無けんと。復た是の念を作さく、若し諸の菩薩、佛の所說の如く菩提行を修して無上正等菩提を證せずとせば必ず是の處無けん。當に知るべし今見る所聞く所は定めて是れ惡魔の所作所說なりと。復た次に善現、是の諸の菩薩は設ひ惡魔有りて苾芻の像を作して其の所に來至し是の如き言を作さん、一切智智と虛空と等しくして無性を性と爲し自相本より空なり。諸法も亦た然なり都て所有無く此の中法の能證と名づく可き無く亦た法の所證と名づく可き無く、證處證時及び此れに由りて證する皆得可からず。旣に一切法と虛空と等しくして無性を性と爲し自相本より空なれば、汝等何に緣りてか唐に勤苦を受けて無上正等菩提を求證するや。汝が先に、諸の菩薩衆應に無上正等菩提を求むべし、と聞きし所は皆是れ魔說にして眞の佛語に非ず。汝等應に大菩提心を捨つべし。妄りに他の爲に虛しく勤苦を受くること勿れと。是の諸の菩薩彼の語を聞く時能く如實に是れ惡魔の事にして我が大菩提心を退敗せんと欲するなり、我れ今更に其の心を堅固にすべく惡魔の所說を信受すべからずと知る。[七] 復た次に善現、是の諸の菩薩は若し調心して四靜慮に入らんと欲せば意に隨て能く入り遊觀すること自在なるも、有情を度せんが爲に還て欲界に生ず。欲界に生ずと雖も而かも欲に染まず亦た修する所の靜慮を退失せず。復た次に

【七】不退の菩薩は能く般若方便力の持する所と爲るを明す。

善現、是の諸の菩薩は名聲を貴ばず稱譽に著せず、有情類に於て恚恨心無く常に其れをして勝利樂を得せしめ、往來入出に散亂心無く進止威儀恒に正念に住し、有情の爲の故に居家に處すと雖も而かも其の中に於て貪著を生ぜず、現に欲を受くと雖も而かも常に厭怖すること險路を渉る心恒に驚恐するが如く、食する所有りと雖も惶懼して安からず但だ何れの時にか斯の險難を出でんと念ずるのみ。現に種種の珍財を受用すと雖も而かも其の中に於て貪愛を起さず、[8]邪命を以て非法に自活せず寧ろ自ら殞歿するも人を損せず。所以は何ん、是の諸の菩薩の深般若波羅蜜多を行ずるは是れ人中の尊、人中の善士、人中の龍象、人中の蓮華、人中の調御、人中の勇健にして本より一切有情を利樂せんが爲に現に居家に處り方便して饒益す。豈に自活せんが爲に人を侵損せんや。所以は何ん、是の諸の菩薩は甚深般若波羅蜜多方便善巧力の持する所なるが故なり。[9]復た次に善現、是の諸の菩薩は[10]執金剛藥叉王有りて常に左右に隨て密に守護を爲し一切の人非人等の邪魅の威力の爲に身心を損害せず、此の因緣に由りて是の諸の菩薩は乃至無上正等菩提まで身意泰然として常に狂亂せず、丈夫相を具し諸根圓滿にして心行調ひ善く恒に淨命を修し、幻術を行じて吉凶を占相し鬼神を呪禁し湯藥を合和し卑夫を誘誑し好みを貴人に結び、聖賢を侮傲し男女に親昵せず。名利の爲に自讃毀他せず。染心を以て瞻顧戲笑せず、戒見清淨にして志性淳質なり。復た次に善現、是の諸の菩薩は諸の世間の文章伎藝に於て善巧を得と雖も而かも愛著せず、一切法の不可得に達するが故に、皆穢語邪命の攝を離るるが故に。諸の世俗外道の書論に於て亦た善く知ると雖も而かも樂著せず、一切法の本性空に達するが故に、又た諸の世俗外道の書論は所說の理事多く増減有りて菩薩道に於て隨順するに非ざるが故なり。[11]復た次に善現、是の諸の菩薩は復た所餘の諸の行狀相有り、吾れ當に汝が爲に分別し解說すべし。謂ゆる彼の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ諸法空に達して衆事の王事賊事軍事戰事、城邑聚落象馬車乘、衣服飲食臥具華香男女の好醜園林池沼山海等の事を觀察し論

【八】邪命。不正の方法を以て活命すること。出家人が乞食淨行の外の方法卽ち利養の爲に異相を現し自の功德を說き或は吉凶占相を爲す等に依り生活の資を得る如きをいふ。

【九】不退の菩薩執金剛夜叉の守護を受くるを明す。

【一〇】執金剛藥叉。跋闍羅波膩(Vajrapani)手に金剛杵を執りて佛法を守護する神。

【一一】更に不退菩薩の諸種の行狀相を明す。

說するを樂はず、藥叉[三]羅刹娑等の諸の鬼神の事を觀察し論說するを樂はず、街衢市肆樓閣商賈等の事を觀察し論說するを樂はず、歌舞伎樂俳優戲謔等の事を觀察し論說するを樂はず、洲渚船栰橋梁珠寶等の事を觀察し論說するを樂はず、星辰寒熱風雨吉凶等の事を觀察し論說するを樂はず、種種法義の相違文頌等の事を觀察し論說するを樂はず、異生獨覺聲聞相應の事を觀察し論說するを樂はず、但だ般若波羅蜜多相應の事のみを觀察し論說するを樂ふる是の諸の菩薩は常に甚深般若波羅蜜多相應の作意を遠離せず、常に一切智の心を遠離せず、乖違の樂を好み諍訟に和せず、常に正法を希ひ非法を愛せず、恒に善友を慕ひ惡友を樂はず、法より出づる言を好み非法の言を離れ、如來を見たてまつることを樂ひ出家衆を欣ひ、十方國土に佛世尊有りて法要を宣說せば彼れに往生して親近し供養して正法を聽聞せんことを願ふ。是の諸の菩薩は多く欲界色界天より歿して贍部洲の中國の人趣に生じて伎藝呪術經書地理天文及び諸法の義を善くし、或は邊地の大國の大城に生じて諸の有情の與に大饒益を作す。復た次に善現、是の諸の菩薩は終に自ら疑ひて我れ退轉すと爲し退轉せずと爲さず、自地法に於ても亦た疑を生じて有ると爲し無しと爲さず。諸の魔事に於て善能く覺了すること預流者の自地法に於て終に疑を生ぜざるが如し、設ひ惡魔有りて種種に惑亂するも傾動すること能はざること無間業を造作する者有りて彼の無間心恒常に隨逐して乃至命盡くるまで捨離すること能はず、設ひ餘心を起すも遮伏すること能はざるが如し。此の諸の菩薩も亦復た是の如し。不退轉の心恒常に隨逐して菩薩の不退轉地に安住し、世間の天人阿素洛等も自ら得たる所の法を動壞すること能はず、諸の魔業に於て若し能く覺知せば所證の法の中常に疑惑無く、他世に生ずと雖も亦た聲聞獨覺相應の心を發起せず、亦た自ら我れ來世に於て能く無上正等菩提を證するを疑はず自地に安住せず他緣に隨はず、自地法に於て能く壞する者無し。所以は何ん、是の諸の菩薩は無動無退轉地を成就して一切の惡緣傾動すること能はず其の心堅固なること金剛に踰ゆればなり。設ひ

【三】羅刹娑（Rakṣasa）。可畏、護者、食人鬼と譯す。惡鬼の通名となる。

悪魔有り佛の形像を作して其の所に來至して是の如き言を作さん、汝今應に阿羅漢果を求めて永く諸漏を盡して般涅槃に入るべし、汝未だ大菩提の記を受くるに堪へず、亦た未だ無生法忍を證得せず。汝今未だ不退轉地の諸の行狀相有らず、如來は汝に無上大菩提の記を授くべからずと。是の諸の菩薩、彼の語を聞く時能く是の如き觀察憶念を作す。定めて是れ悪魔化して佛像を爲し我れをして甚深般若を遠離せしめ、我れをして無上菩提を棄捨せしむるなり、是の昔に彼の所説に隨ふべからずと。時に魔驚怖して即便ち隱沒す。是の諸の菩薩は定めて已に不退轉地に安住し、過去の諸佛は久しく已に彼れに大菩提の記を授けたまへるなり。所以は何ん、是の諸の菩薩は不退轉地の諸の行狀相を具すればなり。故に能く惡魔の事業を覺知し彼れをして隱沒して更らに復た現ぜざらしむ。復た次に善現、是の諸の菩薩は正法を攝護して身命をすら惜まず、況んや餘の珍財眷友眷屬をや。正法を護らんが爲に勇猛精進して恒に是の念を作す、是の如き正法は即ち是れ諸佛の清淨の〔一三〕法身にして一切の如來恭敬供養したまふ。我れ今是の如き正法を攝護するは即ち爲れ諸佛の法身を攝護するなりと。復た是の念を作す、是の如き正法は三世の諸佛世尊に通屬す、我れも亦た未來の佛數に墮在するなり。佛は已に我れに大菩提の記を授けたまへり、諸佛の正法は即ち我が所有なり。我れ今即ち爲に自らの正法を護り、我れ未來世に作佛することを得ん時も亦た有情の爲に正法を宣說せんと。是の諸の菩薩は斯の義利を見て如來の所說の正法を攝護して身命親屬珍財を惜まず乃至菩提まで常に懈倦無し。復た次に善現、是の諸の菩薩は佛の說法を聞きて惑無く疑無く、聞き已て受持して常に忘失せずと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、是の諸の菩薩は但だ佛語のみを聞きて惑無く疑無く常に忘失せざるや、菩薩及び聲聞等の所說の正法を聞くも亦た能く是の如しと爲すやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は普ねく一切有情の言音文字の義理を聞きて皆能く通達し惑無く疑無く常に忘失せず。所以は何ん、是の諸の菩薩は諸法の中に於て無生忍を得て已に善

【一三】法身（Dharmakāya）三身の一。眞如法性、理佛をいふ。

能く諸法の實性に通達し、聞きて皆耳に順ひ並に疑惑無く、又た聞持[一四]陀羅尼門を得たるが故に常に能く憶念して終に忘失せざればなり。善現當に知るべし、是れを不退轉の菩薩摩訶薩の諸の行狀相と爲すと。

【一四】陀羅尼門、總持する道なり。

第五分[一]貪行品第十七之一

[二]爾の時善現便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、是の諸の菩薩は是の如き大功德聚を成就せり。世尊は能く殑伽沙の如き劫に不退轉の諸の行狀相を說きたまへり。唯だ願くは如來應正等覺復た爲に甚深般若波羅蜜多相應の義處を宣說し、諸の菩薩をして其の中に安住して菩提行を修し疾く圓滿することを得せしめたまへと。佛、善現に告げたまはく、善哉善哉、汝今乃ち能く是の如きの事を問へり。諦かに聽け諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし。善現當に知るべし、甚深般若波羅蜜多相應の義處とは謂ゆる空無相無願無作無生無滅にして寂靜離染涅槃の增語の顯す所有るに非ずと。具壽善現復た佛に白して言さく、但だ此の法のみ深般若波羅蜜多相應の義處と名づくと爲すや、一切法は皆名づけて甚深般若波羅蜜多相應の義處と爲すことを得と爲すやと。佛、善現に告げたまはく、餘の一切法も亦た名づけて甚深般若波羅蜜多相應の義處と爲すことを得。所以は何ん、謂ゆる一切の色受想行識も亦た甚深と名づくればなり。善現云何が色乃至識も亦た甚深と名づくる。謂ゆる眞如甚深なるが故に色乃至識も亦た甚深と名づくるなり。復た次に善現、若し無色に處するも色甚深と名づけ――廣說乃至――若し無識に處するも識甚深と名づくと。爾の時善現復た佛に白して言さく、希有なり世尊、微妙方便して[三]五蘊を遮遣して涅槃を顯示したまふと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し。若し諸の菩薩能く是の如き甚深般若波羅蜜多相應の義處に於て審諦に觀察せば是の如き念を作さん、我れ今應に甚深般若波羅蜜多の敎ふる所の如くにして住すべし、我れ今應に甚深般若波羅蜜多の所說の如くにして學すべしと。是の諸の菩薩は能く此の如き深般若波羅蜜多相應の義處に依りて審諦に觀察し精進修行するに由りて乃至一日に獲る所の福聚無量無邊なり。[四]貪行人の復た[五]尋伺多くして他の美女と共に邀契を爲せるに、彼の女限礙ありて期に赴くことを獲ず、此

【一】貪行人の喩あるによる。

【二】般若相應の義處を明す。

【三】五蘊差別の法に於て差別を超越して甚深法身涅槃を示すをいふ。

【四】貪行人。愛欲を貪るもの。

【五】尋伺。尋求と伺察、覺觀に同じ。

の人欲心熾盛にして流注せるが如し。善現、意に於て云何、其の人の欲心は何處に於て轉ずるやと。世尊、此の人の欲心は女處に於て轉ぜん、謂ゆる是の念を作す、彼れ何かんが當に來りて共に會し此に於て歡娯戲樂すべけんと。善現、意に於て云何、其の人晝夜に幾欲念生ずるやと。世尊、此の人の晝夜の欲念は甚だ多しと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多相應の義處に依りて審諦に觀察し精進修行せば乃至一日に超ゆる所の生死流轉の劫數は貪行人の一晝夜を經て起す所の欲念と其の數量等し。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は是の如き甚深般若波羅蜜多相應の義處に隨依して審諦に觀察し精進して修行し隨て能く、能く無上正等菩提を礙ふる所有る過失より解脫せん。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多相應の義處に依りて審諦に觀察し精進して修行し懈倦する者無く疾く無上正等菩提を證するなりと。[六]善現、當に知るべし、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に依りて審諦に觀察し精勤して修行して一晝夜を經て獲る所の功德は諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て布施する功德の無量無邊なるに勝らん。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多相應の義處に依りて審諦に觀察し精進して修行し一晝夜を經て獲る所の功德は諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て諸の供具を以て預流一來不還阿羅漢果獨覺菩薩如來を供養する布施の功德の無量無邊なるに勝らん。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多の所說に依りて住し一晝夜を經て精勤して布施淨戒安忍精進靜慮般若を修學して獲る所の功德は諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て精勤して布施淨戒安忍精進靜慮般若を修學して獲る所の功德の無量無邊なるに勝らん。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多の所說に依りて住し一晝夜を經て[七]三十七菩提分の法及び餘の善根を修して獲る所の功德は、諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て三十七菩提分の法及び餘の善根を修して獲る所の功德の無量無邊なるに勝らん。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多の所說に依りて住

【六】般若に隨依し精進修行して獲る功德の殊勝なることを明す。

【七】三十七菩提分の法。三十七道品なり。生死の迷界よる悟りの涅槃の境に到るべき道法の三十七卽ち四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の稱。この三十七法は菩提を成就する行法の支分品類なれば菩提分法といふ。

し一晝夜を經て種種の財施法施を修行し[八]空閑處に住して繫念思惟し先に修行せし所の種種の福業を無上正等菩提に廻向して獲る所の功德は諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て種種の財施法施を修行し空閑處に住し繫念思惟し先に修行せし所の種種の福業を無上正等菩提に廻向して獲る所の功德の無量無邊なるに勝らん。復た次に善現、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多の所說に依りて住し一晝夜を經て普ねく三世の佛及び弟子の功德善根に緣りて和合稱量し現前に隨喜し無上正等菩提に廻向して獲る所の功德は、諸の菩薩の深般若波羅蜜多を離れ殑伽沙數の如き大劫を經て普ねく三世の佛及び弟子の功德善根に緣りて和合稱量して現前に隨喜し無上正等菩提に廻向して獲る所の功德の無量無邊なるに勝らんと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、如來は常に諸行は皆是れ分別の所作にして都て實有に非ずと說きたまへり。何の因緣を以て此の諸の菩薩の獲る所の功德は無量無邊なるやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ亦た常に所作の善事の空無所有虛妄不實なるを觀察す。如如に所作の善事は空無所有虛妄不實なりと觀察せば是の如く是の如く便ち能く甚深般若波羅蜜多を離れず。如如に甚深般若波羅蜜多を離れずんば是の如く是の如く獲る所の功德無量無邊なりと。[九]具壽善現便ち佛に白して言さく、無量と無邊との義は何の別有るやと。佛、善現に告げたまはく、無量と言ふは謂ゆる此の中に於て其の量永く息むなり。無邊と言ふは謂ゆる是の處に於て數盡す可からざるなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、頗る因緣有りて色乃至識も亦た無量無邊なる耶やと。佛、善現に告げたまはく、亦た因緣有りて色乃至識も無量無邊なりと。具壽善現復た佛に白して言さく、何の因緣の故に色乃至識は無量無邊なるやと。佛、善現に告げたまはく、色乃至識は皆性空の故に無量無邊なりと。具壽善現復た佛に白して言さく、但だ色受想行識のみ空なりと爲すや一切法皆悉く空なりと爲す耶と。佛、善現に告げたまはく、我れは諸法皆空ならざる無しと說くと。具壽善現復た佛に白して言さく、無量無邊

【八】空閑處。阿蘭若(Aranya)の譯。村を去ること三百步、若くば六百步、靜にして比丘の修行に適する場所を云ふ。

【九】佛、無量無邊の義を明し、一切法門空を說く。

は是れ何と增語するやと。佛、善現に告げたまはく、無量無邊は是れ空無相無願を增語すと。具壽善現復た佛に白して言さく、無量無邊は但だ是れ空無相無願のみと爲すや更らに餘の義有りと爲す耶と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、我れ豈に一切の法門皆空ならざる無しと說かざるやと。善現答へて言はく、如來は常に一切の法門は皆空ならざる無しと說きたまへりと。佛、善現に告げたまはく、空は卽ち無盡なり、空は卽ち無量なり、空は卽ち無邊なり、空は卽ち餘の義なり。是の故に善現、一切の法門は種種の言說差別有りと雖も而かも義異ること無し。善現當に知るべし、諸法空の理は說く可からず、如來は方便して說いて無盡と爲し或は無量と說き或は無邊と說き或は說いて空と爲し或は無相と說き或は無願と說き或は無作と說き或は無生と說き或は無滅と說き或は非有と說き或は寂靜と說き或は離染と說き或は涅槃と說く。諸の是の如き等の無量の法門の義は實に異ること無し、皆是れ如來方便の演說なりと。[一〇]爾の時善現便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、方便善巧して諸法の實性は皆說く可からざるに而かも有情の爲に方便して顯示したまふ。我れ佛の所說の義を解する如くんば諸法の實性は皆說く可からざるなりと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し。所以は何ん、一切の法性は皆畢竟空にして能く畢竟空を宣說する者も無ければなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、不可說の義增減有りや不やと。佛、善現に告げたまはく、不可說の義は增無く減無しと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し不可說の義增無く減無くんば卽ち布施乃至般若波羅蜜多も亦た增減無かるべし。若し此の六種波羅蜜多亦た增減無くんば云何が菩薩は無增減の波羅蜜多を以て無上正等菩提を求證し能く無上正等菩提に近づくや。若し諸の菩薩六種波羅蜜多を增減せば便ち無上菩提に近づくこと能はざらんと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、不可說義の波羅蜜多は皆增減無し。然かも諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して是の念を作さず、是の如き六種波羅蜜多は增有り減有りと。但だ是の念のみを作す、唯だ名

【一〇】諸法の實性不可說の義を明す。

相のみ有りて謂ゆる布施乃至般若波羅蜜多と爲すのみと。是の諸の菩薩は布施乃至般若波羅蜜多を修行し此の六種倶行の作意を持し、並に此の起心及び善根に依りて諸の有情と平等に共に無上正等菩提に廻向する有らば佛の無上正等菩提の微妙甚深にして廻向を起せるが如く、此の廻向に由りて方便善巧して勢力を増上し能く無上正等菩提を證せんと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、何をか無上正等菩提と謂ふやと。[二]佛、善現に告げたまはく、諸法の眞如是れを無上正等菩提と謂ふ。善現當に知るべし、諸法の眞如は増減無きが故に諸佛の無上正等菩提も亦た増減無しと。若し諸の菩薩數多く是の如き眞如相應の作意に安住せば便ち無上正等菩提に近づくなり。是の如く善現、不可說の義は増減無しと雖も而かも眞如の作意を退失せず、波羅蜜多は増減無しと雖も而かも所求の無上正等菩提を退失せざるなり。若し諸の菩薩是の如き眞如の作意に安住して六種波羅蜜多を修行せば便ち無上正等菩提に近づくなりと。具壽善現便ち佛に白して言さく、是の諸の菩薩は初心起りて能く菩提に近づくと爲すや後心起りて能く菩提に近づくと爲すや、若し初心起りて能く菩提に近づかば初心起る時後心未だ起らず和合の義無し。若し後心起る時能く菩提に近づかば後心起る時前心已に滅して和合の義無し。是の如く前後の心心所法進退推徴して和合の義無くんば如何が善根を積集して得可けん。若し諸の善根積集す可からずんば云何が菩薩は菩提に近づかんやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、燈を燃やすが如き時初焰能く炷を燋くと爲んや後焰能く炷を燋くと爲んやと。善現答へて言はく、我が意の解する如くんば初焰能く炷を燋くに非ず亦た初焰をも離れず、後焰能く炷を燋くに非ず亦た後焰をも離れずと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、炷燋くと爲んや不やと。善現答へて言はく、世間は現に其の炷の實に燋くを見ると。佛、善現に告げたまはく、菩薩も亦た爾なり、初心起りて能く菩提に近づくに非ず亦た初心をも離れず、後心起りて能く菩提に近づくに非ず亦た後心をも離れず、而かも諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善

【二】無上菩提の義を說き、更にこの菩提に近づく所以を明す。

巧して諸の善根をして増長圓滿して能く菩提に近づかしむと。具壽善現便ち佛に白して言さく、是の如き緣起の理趣は甚深なり。前後の諸心に卽して起るが故に能く菩提に近づくに非ず、前後の諸心を離れて起るが故に能く菩提に近づくに非ず、而かも諸の菩薩は能く菩提に近づくと。[三]佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、若し心滅し已らば更らに生ず可きや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊、是の心已に滅せば更に生ず可からずと。意に於て云何、若し心已に生ぜば滅法有りや不やと。是の如し世尊、若し心已に生ぜば定めて滅法有りと。意に於て云何、滅法有らば心當に滅すべきに非るや不やと。不なり世尊、滅法有らば心決定して當に滅すべしと。意に於て云何、滅法無くんば心生ず可しと爲すや不やと。不なり世尊、滅法無くんば心生ず可き義無しと。意に於て云何、生法無くんば心滅す可しと爲すや不やと。不なり世尊、生法無くんば心滅す可き義無しと。意に於て云何、生滅法無くんば心生滅す可しと爲すや不やと。不なり世尊、生滅法無くんば心生滅す可き義無しと。意に於て云何、若し法已に滅せば更に滅す可きや不やと。不なり世尊、若し法已に滅せば更に滅す可からずと。意に於て云何、若し法已に生ぜば更に生ず可きや不やと。不なり世尊、若し法已に生ぜば更に生ず可からずと。意に於て云何、諸法の實性は生滅有りや不やと。不なり世尊、諸法の實性は生無く滅無しと。意に於て云何、心の住するは心眞如の如しと爲すや不やと。是の如し世尊、心眞如の如く心は是の如く住すと。意に於て云何、若し心、眞如の如く住せば是の心は眞如實際の如く性常住なりと爲すや不やと。不なり世尊、是の心は眞如實際の如く其の性常住なるに非ずと。意に於て云何、諸法の眞如は極めて甚深なりや不やと。是の如し世尊、諸法の眞如は極めて甚深なりと。意に於て云何、眞如に卽する是れ心なりや不やと。不なり世尊と。意に於て云何、眞如を離れて心有りや不やと。不なり世尊と。意に於て云何、心に卽する是れ眞如なりや不やと。不なり世尊と。意に於て云何、心を離れて眞如有りや不やと。不なり世尊と。意に

【三】諸法の空相を明す。

於て云何、眞如は能く眞如を見ると爲すや不やと。不なり世尊と。意に於て云何、汝は實に眞如有るを見ると爲すや不やと。不なり世尊と。意に於て云何、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば是れ深般若波羅蜜多を行ずるや不やと。是の如し世尊、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば是れ深般若波羅蜜多を行ずるなりと。

卷の第五百六十三

第五分貪行品第十七之二

[一]佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば何の處を行ずと爲すやと。善現白して言さく、若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば都て行ずる處無し。所以は何ん、諸の現行の法は皆轉ぜざるが故なりと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば何の義諦を行ずと爲すやと。善現白して言さく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば[二]勝義諦を行ずるなりと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、若し諸の菩薩勝義諦を行ぜば勝義諦に於て相を取ると爲すや不やと。善現對へて曰く、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於に云何、是の諸の菩薩は勝義諦に於て相を取らずと雖も而かも相を行ずるや不やと。善現對へて曰く、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、是の諸の菩薩は勝義諦に於て旣に相を行ぜずんば相を壞すと爲すや不やと。善現對へて曰く、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、是の諸の菩薩は勝義諦に於て相を壞せずと雖も而かも相を遣するや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は勝義相に於て若し壞遣せずんば云何が能く取相の想を斷ずる耶と。善現白して言さく、是の諸の菩薩は是の念を作さず、我れ今相を壞し相を遣し想を斷じ亦た未だ斷想の道をも修學せず。若し諸の菩薩精進して斷想の道を修行せば未だ佛法を

【一】菩薩の行勝義諦に就て明す。

【二】勝義諦。世俗諦に對して眞諦をいふ。實相に契へる進みを完了するを云ふ。

具せず應に聲聞或は獨覺地に墮すべし。是の諸の菩薩は方便善巧して諸相及び取相の想に於て深く過失を知ると雖も而かも壞遣せず速に此の想を斷じて無相を證す。何を以ての故に、一切の佛法未だ圓滿せざるが故なり。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如しと。[三]時に舍利子、善現に語て言はく、若し諸の菩薩夢中に三解脫門を修行するに深般若波羅蜜多に於て增益有りや不や。若し諸の菩薩覺時に三解脫門を修行せば深般若波羅蜜多に於て旣に增益有り。彼れ夢中に修するも亦た應に增益すべし。何を以ての故に、佛は夢覺差別無しと說きたまふが故なりと。善現報へて言はく、若し諸の菩薩覺時に甚深般若波羅蜜多を修行せば旣に甚深般若波羅蜜多に安住すと名づく、是の諸の菩薩夢中に甚深般若波羅蜜多を修行するも亦た甚深般若波羅蜜多に安住すと名づく。三解脫門の深般若波羅蜜多に於て能く增益を爲すも亦復た是の如し。若しは夢若しは覺の義別無きが故にと。舍利子言はく、夢中の造業は增益有りや不や。佛は諸法の不實なること夢の如しと說きたまふが故に夢の中に於て造る所の諸業は應に增益無かるべし。要らず覺時に至りて憶想分別して乃ち增益有るならんと。善現報へては曰はく、若し諸の有情夢に他命を斷じ未だ覺位に至らず憶想分別して便ち自ら慶幸するに彼の造る所の業增益せざる耶と。舍利子言はく、所緣無き事若しは思若しは業俱に生ずるを得ず、要らず[四]所緣有りて思業方に起る、夢中の思業は何を緣じて生ぜんと。善現報へて言はく、是の如し是の如し、若しは夢若しは覺、所緣の事無き思業は生ぜず、要らず所緣有りて思業方に起る。何を以ての故に、舍利子、要らず諸相を見聞覺知するに於て覺慧有りて轉じ斯れに由りて染を起し或は復た淨を起す。若し諸相を見聞覺知する無くんば覺慧轉ずる無く亦た染淨無ければなり。此れに由るが故に若しは夢若しは覺、所緣の事有らば思業乃ち生じ若し所緣無くんば思業起らずと知ると。時に舍利子、善現に問ひて言はく、佛は所緣皆自性を離ると說きたまへり。如何が所緣の事有らば思業乃ち生じ若し所緣無くんば思業起らずと說く可けんと。善現答へて言はく、

【三】覺時及び夢中に於ける諸業に就いて善現舍利子と問答す。

【四】對象なりて意志行爲成立す。

諸の思業及び所緣の事皆自性を離ると雖も而かも自心相を取りて分別するに由りて世俗に施設して所緣有りて諸の思業を起すと說く、其の所緣は心を離れて別に有るに非ずと。時に舍利子、善現に問ひて言はく、若し諸の菩薩夢中に施を行じ、施し已て無上菩提に迴向するに、是の諸の菩薩は實に施を以て無上佛菩提に迴向すと爲んや不やと。善現報へて言はく、慈氏菩薩は久しく已に大菩提の記を受得せり。宜しく請問す可し、定めて當に答へを爲すべしと。時に舍利子、善現の言ふが如く恭敬して慈氏菩薩に請問す。時に慈氏菩薩、舍利子に語て言はく、何等か名づけて慈氏菩薩と爲す、而かも謂ゆる能く尊者の所問に答ふるや。色と爲す耶。受想行識と爲す耶。色空と爲す耶、受想行識空と爲す耶。且つ色は慈氏菩薩に非ず亦た尊者の所問に答ふること能はず受想行識は慈氏菩薩に非ず亦た尊者の所問に答ふること能はず、色空は慈氏菩薩に非ず亦た尊者の所問に答ふること能はず受想行識空は慈氏菩薩に非ず亦た尊者の所問に答ふること能はず、我れ都て法の慈氏菩薩と名づく可き有るを見ず亦た都て法有りて能く答ふるを見ず、法有りて所答、答處、答時、及び此れに由りて答ふるをも皆亦た見ず。我れ都て法有りて能く記するを見ず、法有りて所記、記處、記時、及び此れに由りて記するをも皆亦た見ず。何を以ての故に、舍利子、一切法の本性は皆空にして畢竟推徵するも得可からざるが故なりと。時に舍利子、慈氏に問ひて言はく、仁者の所說の法は所證の如しと爲すや不やと。慈氏答へて言はく、我が所說の法は所證の如きに非ず。所以は何ん、我が所證の法は說く可からざるが故にと。時に舍利子、是の念言を作さく、慈氏菩薩の覺慧は甚深にして長夜に甚深般若波羅蜜多を修行して能く是の說を作すと。爾の時世尊、舍利子の心の所念を知らしめ、卽便ち告げて曰はく、意に於て云何、汝是の法に由りて阿羅漢を成じ此の法を見て是れ說く可しと爲すや不やと。舍利子曰はく、不なり世尊と。佛言はく、菩薩の深般若波羅蜜多を行じて證する所の法性も亦復た是の如く宣說す可からず。是の諸の菩薩は方便善巧して是の念を作さず、我

れ此の法に由りて大菩提に於て已に受記を得、今受記を得、當に受記を得べしと。是の念を作さず、我れ此の法に由りて當に菩提を證すべしと。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。得菩提に於ても亦た怖畏無し、決定して自ら我れ當に證すべしと知るが故なり。是の諸の[五]菩薩は深般若波羅蜜多を行じ甚深の法を聞きて驚かず怖かず亦た沈沒せず。是の諸の菩薩は若し曠野の惡獸の有る處に在らんも亦た怖畏無し。所以は何ん、是の諸の菩薩は諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に能く一切の內外の所有を捨てて恒に是の念を作せばなり。諸の惡獸等は我が身を噉はんと欲す、我れ當に施與して其れをして充足せしむべし、此の善根に由りて我が布施波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ疾く無上正等菩提を證し、我れ當に是の如く正行を勤修して無上正等覺を證得すべき時我が佛土の中一切の傍生餓鬼無きを得んと。是の諸の菩薩は若し曠野の惡賊の有る處に在らんも亦た怖畏無し。所以は何ん、是の諸の菩薩は諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に能く一切の內外の所有を捨て樂ひて諸善を修し身命財に於て顧悋する所無く恒に是の念を作せばなり。若し諸の有情競ひ來りて我が諸の資具を劫奪し或は斯れに因りて我が身命を害する有らんも我れ當に彼れに於て瞋恨を生ぜざるべし、此の因緣に由りて我が安忍波羅蜜多をして速に圓滿することを得せしめ疾く無上正等菩提を證し、我れ當に是の如く正行を勤修して無上正等覺を證得せん時我が佛土の中一切の劫害寃賊無きを得、我が佛土極めて清淨なるに由るが故に亦た餘の惡無けんと。是の諸の菩薩は若し曠野の無水の處に在らんも亦た怖畏無く是の念言を作さん、我れ當に無上の妙法を宣說して諸の有情の渴愛の病を斷ずべし、設ひ我れ此の渴乏に由りて命終せんも諸の有情に於て必ず大悲の作意を捨離せずして妙法の水を施さん。奇なる哉薄福の是の諸の有情は斯の如き無水の世界に居在す。我れ當に是の如く正行を勤修して無上正等覺を證得せん時我が佛土の中是の如き一切の燋渴乏水の曠野無きを得、我れ當に方便して諸の有情に勝福業を修するを勸め

【五】菩薩審思して怖畏無ければ能く無上菩提を證得して有情を饒益すべきを明す。

所在の處に隨て皆八功德水を具足せしめんと。是の諸の菩薩は饑饉の土に處するも亦た怖畏無く、是の念言を作さん、我れ當に精進して佛土を嚴淨すべし、當に無上正等覺を證すべき時我が佛土の中是の如き一切の饑饉無きを得、諸の有情類は快樂を具足し意に隨て須つ所念ずるに應じて即ち至ること諸の天上の念ずる所皆得るが如く、我れ當に堅猛の精進を發起して諸の有情の法願をして滿足せしめ、一切の時處の一切の有情に一切種の資緣に於て乏しき無からしむべしと。若し諸の菩薩斯の怖畏無くんば定めて無上正等菩提を證せん。是の諸の菩薩は疾疫に遇はん時も亦た怖畏無し。何を以ての故に、是の諸の菩薩は恒に審に思惟すればなり、法の病と名づくる無く亦た病者無く、一切皆空にして怖畏すべからずと。我れ當に是の如く正行を勤修して無上正等覺を證得せん時我が佛土の中諸の有情類等[六]三病無く精進して殊勝の善法を修行し佛の所說の如く常に懈廢無からんと。是の諸の菩薩は若し菩提を念じ久しきを經て乃ち得るも亦た怖畏無し。所以は何ん、前際の劫數無量なる有りと雖も而かも一念の頃に憶念分別し積集して成ずる所なればなり、後際の劫數も應に知るべし亦た爾なりと。是の故に菩薩は中に於て久遠想を作して怖畏を生ずべからず。何を以ての故に、前際後際の劫數の短長は皆一刹那の心相應するが故なり。是の如く菩薩畏る可き事に於て能く審に思惟して怖れを生ぜずんば疾く無上正等菩提を證せんと。

【六】三病。風、水、火。

第五分　姉妹品第十八[一]

[二]爾の時會中に一りの天女有り、座よりして起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して白して言さく、世尊、我れ此の中に於て亦た怖畏無し、願くは當來世に作佛することを得ん時も亦た有情の爲に斯の如き法を說かんと。是の語を作し已て妙金花を取り恭敬し至誠もて如來の上に散ず。佛の神力の故に此の金花をして虛空に上踊し繽紛として住せしむ。爾の時世尊卽便ち微笑し面門より金色の光明を出し普ねく十方を照らしたまふに還りて頂より入る。時に阿難陀是れを見聞し已て恭敬合掌して白して言さく、世尊、何の因何の緣もて此の微笑を現じたまふや、諸佛の笑を現じたまふは因緣無きに非ずと。爾の時世尊、[三]慶喜に告げて曰はく、今此の天女は未來世に於て當に如來應正等覺を成ずべく劫を星喩と名づけ、佛を金花と號はん。慶喜當に知るべし、今此の天女は卽ち是れ最後に受くる所の女身なり。此の身を捨て已て便ち男身を受け盡未來際まで復た女と爲らず。此より沒し已て東方の[四]不動佛の國に生じて梵行を勤修せん、此の女は彼の界にて便ち金花と字す。不動佛の世界より沒し已つて復た他方有佛の世界に生じ、所生の處に隨て常に佛を離れざること轉輪王の一臺殿より一臺殿に至りて歡娛受樂し乃至命終まで足地を履まざるが如く、此の女も亦た爾なり一佛國より一佛國に至り所生の處に隨て常に諸佛世尊を遠離せず乃至菩提まで恒に梵行を修せんと。時に阿難陀竊に是の念を作さく、今此の姉妹の當に作佛すべき時亦た應に今の如く菩薩衆會すべきかと。佛其の念を知ろしめて慶喜に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所念の如し、金華菩薩の當に作佛すべき時は亦た衆會の爲に是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說せん。彼の會の菩薩の其の數の多少も亦た我が今の菩薩の衆會の如く、聲聞の弟子其の數知り難からん。但だ無量無數とのみ總說す可し。彼の佛の世界は惡獸惡賊饑渴病等一切皆無く亦た諸餘の煩

【一】天女を呼びて同行とし姉妹とせるが故なり。

【二】一天女（金花）の佛より記別を受けて作佛するを明す。

【三】慶喜。阿難陀の譯名なり。

【四】不動佛の國。不動佛とは無動佛ともいひ、阿閦如來に同じ。不動佛國とは卽ち東方の全快國のことなり。

悩怖畏無けんと。爾の時慶喜復た佛に白して言さく、今此の姉妹は先に何れの佛に於て初めて無上正等覺の心を發して諸の善根を種ゑ廻向發願せるやと。佛、慶喜に告げたまはく、此の女は過去[五]燃燈佛の所にて初めて大心を發し、亦た金華を以て彼の佛の上に散じ廻向發願して今我れに値ふことを得たり。慶喜當に知るべし。燃燈如來應正等覺、我が根の熟せるを知ろしめして我が與に授記したまへり、汝來世に於て當に作佛することを得べし、號を[六]能寂と爲し、界を[七]堪忍と名づけ、劫を[八]爲賢と號はんと。天女爾の時佛の我れに大菩提の記を授けたまふを聞きて歡喜踊躍し即ち天華を以て彼の佛の上に散じて廻向發願せり、我れをして來世に此の菩薩の作佛するを得ん時に於て亦た今の佛の如く現前に我れに大菩提の記を授けたまはんことをと。故に我れ今彼れの與に記を授くるなりと。爾の時慶喜、佛の所說を聞きて歡喜踊躍して白して言さく、世尊、今此の姉妹は久しく已に大菩提心を修習し廻向發願して今成熟することを得たりと。佛、慶喜に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如しと。[九]爾の時善現便ち佛に白して言さく、云何が菩薩は深般若波羅蜜多を行じて現に空定に入らるゝやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩、深般若波羅蜜多を行ぜば諸の色受想行識空なりと觀ぜん。此の觀を作す時心をして亂れしめず。若し心亂れずんば則ち如實に法を見ん。如實に法を見ると雖も而かも證を作さずと。具壽善現復た佛に白して言さく、云何が菩薩は空法を見ると雖も而かも證を作さざるやと。佛、善現に告げたまはく、是の諸の菩薩は法空を觀ずる時先に是の念を作せり、我れ應に法の諸相皆空なりと觀ずべし而かも其の中に於て證を作すべからず。[一〇]我れは學せんが爲の故に諸法空なりと觀じ、證せんが爲の故に諸法空なりと觀ぜず。今は是れ學時にして爲れ證時に非ずと。是の諸の菩薩は未だ定位に入らず、心を境に攝するも定に入る時に非ざれば[一一]菩提分法を退失せずと雖も而かも漏を盡さず。所以は何ん、是の諸の菩薩は

【五】燃燈佛。提和竭羅(Dipaṃkara)の譯。過去久遠の昔に出現せし如來嘗て釋尊に記別を授けられしを以て有名なり。

【六】能寂。能仁寂默の略。釋迦牟尼(Śākyamuni)の譯。

【七】堪忍。娑婆(Sahā)の譯。

【八】爲賢。或は單に賢劫と云ふ(Bhadrakalpa)なり。

【九】菩薩般若を行じて空法を觀ずるも有情を饒益する迄は證を作さゞるを明す。

【一〇】學道は進趣にして證位は止住する所あるを以て區別す。

【一一】聖慧によりて漏盡に至らざるは自己を脱せず般若を完うするがためなり。

廣大の智慧善根を成就して能く自ら審思すればなり、我れ空法に於て今時に應に學すべく證を作すべからず、我れ應に甚深般若波羅蜜多を攝受して諸法空を觀じて一切の菩提分法を圓滿すべく、今時に實際を證すべからず、二乘地に墮して菩提を得ざればなり。譬へば人有り勇健威猛、所立堅固、形貌端嚴にして[一二]六十四能具足せざる無く、餘の伎術に於て學究竟に至り、多く最勝の功德[一三]尸羅を具し、聰慧巧言もて善能く酬對し、慈を具し義を具して大勢力有り、諸の爲す所有るは皆能く善事業を成辨す。故に功少くして利多く、此れに由りて衆人敬愛せざる無し。因緣有るが故に其の父母妻子眷屬を將ひて他方に發趣し中路に險難の曠野を經過するに、其の中多く惡獸怨賊有りて眷屬の大小驚惶せざる無し。其の人自ら諸の伎術多きを恃み威猛勇健に身意泰然として父母妻子眷屬を安慰す、憂懼有ること勿れ必ず苦無くして疾く曠野を度りて安隱の處に至らしめんと。彼の人爾の時種種勇銳の兵仗を化作し、諸の怨敵に遇ふも彼れをして之を見せしむるに自然に退散す。故に彼の壯士曠野の中の惡獸怨賊に於て傷害の意無く、善く權りに方便して諸の眷屬を將ひて疾く曠野を度りて安樂の處に至れるが如し。諸の菩薩衆も亦復た是の如し、生死苦の諸の有情類を愍みて念を安住に繫け慈悲喜捨して般若波羅蜜多殊勝の善根を攝受し方便善巧して佛の許したまふ所の如く諸の功德を持て無上正等菩提に迴向し、具さに空を修すと雖も而かも證を作さず。深心に一切の有情を愍念し諸の有情に緣りて安樂を施さんと欲す。是の諸の菩薩は[一四]煩惱品を超え亦た魔品乃ち二乘地をも超え、空定に住すと雖も而かも漏を盡さず、善く空を習ふと雖も而かも證を作さず。爾の時菩薩は空定中に住し相に於て執せずと雖も而かも無相を證せず、堅翅鳥の虛空に飛騰して自在に翱翔し久しく墮落せず空に依りて戲ると雖も而かも空に住せず亦た空の拘礙する所とも爲らざるが如く、諸の菩薩衆も亦復た是の如し、空無相無願解脫門を學すと雖も而かも空無相無願に住せず、乃至佛法未だ極めて圓滿せざるまでは終に彼れに依りて永く諸漏を盡さず。壯夫有りて善く射術を閑(なら)

【一二】六十四能。百能と云ふに同じ四進法にて四分、十六分、六十四分とす、六十四書六十四語等と云ふも皆此例なり。

【一三】尸羅（Sīla）。譯して戒といふ。六波羅蜜多の一。

【一四】煩惱品は內三界見思諸惑の難を云ひ、魔品は外諸魔事を云ふその外障の大なるものは二乘の小證に墮することなり。

い己が彼を顯さんと欲し仰いで虚空を射、空中の箭をして地に墮ちざらしめんが爲に復た後箭を以て前箭の筈を射是の如く展轉して多時を經、箭箭相承け共れをして墮ちしめず、若し墮ちしめんと欲せば便ち後箭を止む。爾の時諸箭方に頓に墮落するが如く、此の諸の菩薩も亦復是の如し、深般若波羅蜜多を行じ殊勝の方便善巧を攝受し乃至善根未だ極めて成熟せざるまでは終に中道にして實際を證せず。若し時に善根已に極めて成熟せば便ち實際を證して大菩提を得。是の故に菩薩深般若波羅蜜多を行ぜんには方便善巧して皆應に是の如く深法性に於て審諦に觀察すべし。若し諸の佛法未だ極めて圓滿せずんば證を作すべからずと。

爾の時善現便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、是の諸の菩薩は能く難事を爲し、深法を學すと雖も而かも證を作さずと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、此の諸の菩薩は誓て一切の有情を棄捨せずして能く斯の事を辦ず、謂ゆる諸の菩薩は廣大の心を發し有情を生死の苦より脫せんが爲の故に數（しばしば）[一五]三解脫門を引發すと雖も而かも中道に於て實際を證せず。所以は何ん、度脫せんと欲する所捨つべからざるが故に、方便善巧して護持する所なるが故に、中間に實際を證すべからず。復た次に善現、若し諸の菩薩甚深處に於て般若波羅蜜多を以て審諦に謂ゆる空無相無願[一六]等持三解脫門所行の處を觀察せんと欲せば是の諸の菩薩は應に是の念を作すべし、有情は長夜に有情想を起し有所得に執して種種邪惡の見趣を引生し生死に輪廻して苦を受くること窮り無し。我れ彼の邪惡の見趣を斷ぜんが爲に應に無上正等菩提を求め、諸の有情の爲に深法空を說き、彼の執を斷じて生死の苦より出でしむべしと。是の故に空解脫門を學すと雖も而かも中間に於て實際を證せず。是の諸の菩薩は此の念を起し方便善巧するに由りて中間に於て實際を證せずと雖も而かも慈悲喜捨の[一七]四種勝定を退失せず。所以は何ん、是の諸の菩薩は甚深般若波羅蜜多方便善巧の攝受する所たるが故に倍（ますます）白法を增し諸根漸く利し、[一八]力覺道支轉た復た增益すればな

【一五】三解脫門。三空門、三三昧ともいふ。解脫をうる三種の法門。即ち空解脫門（萬有皆空なるを觀ずること）無相解脫門（萬有に差別相なしと觀ずること）、無作解脫門（或は無願解脫門前二門を根柢としてその上に欲求の思を離ること）の稱。

【一六】等持。三摩地(Samādhi)の譯。定の別名なり。

【一七】四種勝定、慈悲喜捨の四無量心定たる四禪なり。

【一八】力覺道支、五根力七覺支八聖道支等の道品なり。

り。復た次に善現、是の諸の菩薩は應に是の念を作すべし、有情は長夜に諸相を行ずる中に種種の執を起し、斯れに由りて輪轉して苦を受くること窮り無し。我れ彼の諸相の執を斷ぜんが爲の故に應に無上正等菩提を求め諸の有情の爲に無相の法を說き、相執を斷じて生死の苦より出でしむべしと。斯れに由りて數無相の等持に入る。是の諸の菩薩は先に方便善巧を成就し及び起す所の念に由りて數現に無相等持に入ると雖も而かも中間に於て實際を證せず。中間に於て實際を證せずと雖も而かも[一九]四無量定を退失せず。所以は何ん、是の諸の菩薩は甚深般若波羅蜜多方便善巧の攝受する所なるが故に倍す白法を增して諸根漸く利し力覺道支轉じて復た增益すればなり。復た次に善現、是の諸の菩薩は應に是の念を作すべし、有情は長夜に其の心常に常想樂想我想淨想を起し、此れに由りて顚倒の執著を引生し、生死に輪轉して苦を受くること窮り無し、我れ彼の[二〇]四顚倒を斷ぜんが爲の故に應に無上正等菩提を求め諸の有情の爲に無倒法を說くべし、謂ゆる生死は無常無樂無我無淨にして、唯だ涅槃のみ微妙寂靜にして種種の眞實の功德を具足する有りと說かんと。斯れに由りて數無願等持に入る。是の諸の菩薩は先に方便善巧を成就し及び起す所の念に由りて數現に無願等持に入ると雖も而かも諸の佛法未だ極めて圓滿せずんば終に中間に實際を證せず。中間に於て實際を證せずと雖も而かも四無量定を退失せず。所以は何ん、是の諸の菩薩は甚深般若波羅蜜多方便善巧の攝受する所なるが故に倍す白法を增して諸根漸く利し力覺道支轉た復た增益すればなり。復た次に善現、是の諸の菩薩は應に是の念を作すべし、有情は長夜に先に已に有所得を行じ今亦た有所得を行じ、先に已に有相を行じ今亦た有相を行じ、先に已に顚倒を行じ今亦た顚倒を行じ、先に已に和合想を行じ今亦た和合想を行じ、先に已に虛妄想を行じ、今亦た虛妄想を行じ、先に已に邪見を行じ今亦た邪見を行じ、斯れに由りて輪轉して苦を受くること窮り無し、我れ彼の是の如き過失を斷ぜんが爲に應に無上正等菩提を求めて諸の有情の爲に甚深の法を說き彼の過

【一九】四無量定。四無量心なり。卽ち慈、悲、喜、捨の四無量心をいふ。四等又は四梵行といひ、十二門禪中の四禪なり。

【二〇】四顚倒。正理を顚倒したる四種の見解なり。これに凡夫の四顚倒と二乘及菩薩の四顚倒の二種あり。一凡夫の四倒。世間の實相なる非常を常非樂を樂、非我を我、非淨を淨と倒計すること。二二乘及菩薩の四倒。涅槃の實相なる常を非常、樂を非樂、我を非我、淨を非淨と倒計すること。

失をして皆永く斷除し復た輪廻して生死の苦を受けず速に常樂眞淨の涅槃を證せしむべしと。是の諸の菩薩は深く一切の有情を愍念して殊勝の方便善巧を成就し甚深般若波羅蜜多に攝受せらるゝに由るが故に深法性に於て常に樂ひて謂ゆる空無相無願無作無生無滅無性實際を觀察す。是の諸の菩薩は是の如き殊勝の智見る成就して若し無相無作の法に墮し或は三界に住すとせば倶に是の處無し。是の諸の菩薩は是の如き殊勝の功德を成就し、諸の有情を捨てゝ圓寂に趣き、無上正等菩提を證せずして有情を饒益すとせば亦た是の處無し。[三一] 復た次に善現、若し諸の菩薩無上正等菩提を得んと欲せば應當に諸餘の菩薩に請問すべし、云何が菩薩は一切の菩提分法を修習し何の心を引發して能く菩薩をして空無相無願無作無生無滅無性實際を學し而かも證を作さずして然かも般若波羅蜜多を修するやと。若し餘の菩薩此の問ひを得ん時は是の如き答へを作さん、諸の菩薩衆は但だ應に空無相等のみを思惟して顯示することを爲さざるべし、應に一切の有情を捨てずと念じて殊勝の方便善巧を攝受すべしと。當に知るべし、彼の菩薩は先に未だ諸佛の無上正等菩提不退轉記を攝與するを蒙らずと。所以は何ん、彼の諸の菩薩は未だ不退轉地の諸の菩薩衆の[三二] 不共法相を開示分別し顯了すること能はず、如實に他の請問する所の不退轉地の諸の行狀相を知らず亦た答ふること能はざればなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、頗し因緣有りて諸の菩薩の不退轉たるを知らるゝや不やと。佛、善現に告げたまはく、亦た因緣有りて諸の菩薩の是れ不退轉なるを知る。謂ゆる菩薩有りて深般若波羅蜜多に於て若しは聞き、聞かざるも能く如實に先に請問する所に答へ能く如實に不退轉地の諸の菩薩行を行ぜば此の因緣に由りて彼の菩薩の是れ不退轉なるを知ると。具壽善現復た佛に白して言さく、何の因緣を以て多くの菩薩有りて菩提行を行ずるに少しく能く如實の答を作す者有るやと。[三三] 佛、善現に告げたまはく、多くの菩薩、菩提行を行ずと雖も而かも少しの菩薩是の如き不退轉地の微妙慧の記を受くることを得るのみ。若し是の如き記を受くることを得る者有らば皆此の中に於て能く如實に答へん。善現當に知るべし、是の諸の菩薩の善根は明利にして智慧深廣なり。世間の天人阿素洛等皆大菩提心を壞すること能はずと。

【三一】重ねて不作證修般若の義を開示す。

【三二】不共法相。不共法とは如來の功德他と同ぜざるを名くるなり。

【三三】この佛答多菩薩中少しく受記することを肯定するのみにて善現の問意を盡くさざるが如きも因緣容易ならざるは別に示する如し。

第五分 [一]夢行品第十九

[二]復た次に善現、若し諸の菩薩乃至夢中にも三界及び二乘地に著せず亦た稱譽せずんば諸法は夢に見る所の如しと觀ずと雖も而かも實際に於て能く證受せざるなり、是れ不退轉の諸の菩薩相なり。復た次に善現、若し諸の菩薩夢中に佛の無量百千の大衆に圍遶せられて爲に法を說くを見或は自身是の如き事有るを見ば是れ不退轉の諸の菩薩相なり。復た次に善現、若し諸の菩薩夢中に佛の諸の相好を具し常光一尋にして周匝照曜し無量衆の與に虛空に踊在して大神通を現じ正法要を說いて[三]化士を化作し他方無邊の佛國に往きて諸の佛事を作さしむるを見、或は自身是の如き事有るを見ば是れ不退轉の諸の菩薩相なり。復た次に善現、若し諸の菩薩夢に狂賊の村城を破壞するを見、或は火起りて聚落を焚燒するを見、或は惡獸の來りて身を害せんと欲するを見、或は怨家の其の首を斬らんと欲するを見、或は父母の當に命終すべきに臨めるを見、或は自身に衆苦來り逼るを見、此れ等の諸の怖畏の事を見ると雖も而かも驚懼せず亦た憂惱無く夢より覺め已て能く正しく思惟す、三界は眞に非ず皆夢に見るが如し。我れ無上正等覺を得ん時當に有情の爲に三界法は一切虛妄にして皆夢境の如しと說くべしと、是れ不退轉の諸の菩薩の相なり。復た次に善現、若し諸の菩薩乃至夢中に地獄傍生鬼界の諸の有情類有るを見て便ち是の念を作さん、我れ當に精勤して菩薩行を修し速に無上正等菩提に趣きて我が佛土の中地獄傍生鬼界の惡趣及び名無きを得べしと。夢より覺め已ても亦た是の念を作さん。善現當に知るべし、是の諸の菩薩當に作佛すべき時國土淸淨にして定めて惡趣及び彼の名聲無からむと。是れ不退轉の諸の菩薩相なり。[四]復た次に善現、若し諸の菩薩夢中に火の地獄等の諸の有情類を燒くを見、或は復た城邑聚落を燒くを見て便ち願を發して言はく、我れ若し已に不退轉記を受けたるならば願くは此の大火變じて淸凉と爲らんことをと。若し此の菩

【一】夢中不著、夢中所見、如夢等と說くを以て品目とす。
【二】不退轉の菩薩相を明す。
【三】化士。佛が衆生のために變現して見せたる國土。
【四】菩薩の不退轉記の受不受を明す。

薩是の願を作す時夢中に火卽ち爲に頓に滅するを見ば當に知るべし已に不退轉の記を受けたるなりと。若し此の菩薩是の願を作す時夢中に火の爲に頓に滅せざるを見ば當に知るべし未だ不退轉の記を受けずと。覺時に火の諸の城邑を燒き、火願に隨て滅し滅せざるを見るも亦た然なり。復た次に善現、若し諸の菩薩覺時に火の諸の城邑を燒くを見て便ち是の念を作さん、我れ若し實に不退轉相有らば願くは此の大火卽ち爲に頓に滅し變じて淸凉と作らんことをと。念じ已て發言するも火頓に滅せず、然かも一里を燒き越えて一里を置いて復た一里を燒き、或は一家を燒き越えて一家を置いて復た一家を燒き是の如く展轉して其の火乃ち滅せん。是の諸の菩薩は當に知るべし、亦た已に不退の記を受けたるなりと。然かも燒かるゝ者は謗法の餘殃、或は當來の謗法を表す苦相なり。復た次に善現、若し諸の菩薩、男子有り或は女人有りて現に非人の魅著する所と爲り諸の苦惱を受けて遠離すること能はざるを見て便ち是の念を作さん、若し諸の如來我れ已に淸淨の意樂を得たりと知り、我れ已に不退轉の記を受け、已に聲聞獨覺等の地を離れて必ず無上正等菩提を得と知らしめさば願は我が心の所念に照察を垂れたまへ。我れ若し實に能く菩薩行を修して疾く無上正等菩提を證し有情を生死の苦より濟拔する者ならば願くば是の男子或は此の女人非人の擾惱する所と爲らず、彼れ我が語に隨て卽ち當に捨て去るべしと。是の諸の菩薩此の語を作す時若し彼の非人爲に去らずんば當に知るべし未だ不退轉の記を受けずと。若し彼の非人卽ち爲に去らば當に知るべし已に不退轉の記を受けたりと。

五 復た次に善現、諸の菩薩の實に未だ不退轉の記を受得せざる有り、男子有り或は女人有りて現に非人の魅著する所と爲り諸の苦惱を受けて遠離すること能はざるを見て卽便ち輒爾に誠諦の言を發さん、若し我れ已に不退轉の記を得たるならば此の男子或は此の女人をして非人の擾惱する所と爲らざらしめ、彼れ我が語に隨て速に當に捨て去るべしと。爾の時惡魔、彼れを誑惑せんが爲に卽便

【五】不退轉記不受の菩薩、惡魔の誑惑する所と爲ることを明し、善巧に魔事を覺知すべきを說く。

ち非人を驅逼して去らしむ。所以は何ん、惡魔の威力彼の非人に勝ればなり。是の故に非人魔の教勅を受けて卽便ち捨て去るなり。時に彼の菩薩是の念言を作さく、非人の今去るは是れ吾が威力なり。所以は何ん、非人は我が發す所の誓願に隨て卽便ち男子女人を放捨すればなりと。別緣無きが故に是の諸の菩薩は既に惡魔の所作なるを覺知せず是れ自力なりと謂ひ餘の菩薩を輕しめて[六]增上慢を起し、勤め精進すと雖も終に無上菩提を得ること能はず二乘地に墮して數惡魔の誑惑する所と爲らん。是の故に菩薩は應に善く諸の惡魔の事を覺知して諸の善業を修すべし。復た次に善現、諸の菩薩の實に未だ不退轉の記を受得せざる有りて般若波羅蜜多を遠離し方便善巧するも未だ魔の惑を免れず、謂ゆる惡魔有りて誑惑せんが爲の故に方便して種種の形像を化作し菩薩の所に至りて是の如き言を作さん、汝自ら知る耶、過去の諸佛は已に曾て汝に大菩提の記を授けたまへり。汝の身眷屬乃至七世の名字の差別我れ悉く善く知れり、汝が身は生じて某の方某の國某の城某の邑某の聚落の中に在り、汝は某の年某の月某の日某の時某の宿相王の中に在りて生ぜりと。是の如く惡魔若し菩薩の性を稟くること柔軟に諸根暗鈍なるを見ば便ち詐り記して言はく、汝先世に於て稟くる所の根性已に曾て是の如しと。若し菩薩の性を稟くること剛强に諸根明利ならば便ち詐り記して言はん、汝先世に於ても亦た曾て是の如しと。若し菩薩の種種の[七]杜多の功德及び餘の勝行を具足せるを見ば便ち詐り記して言はん。汝先世に於ても亦た曾て是の如く諸の功德を具せり、應に自ら慶慰すべく自ら輕んずるを得ること勿れと。時に彼の菩薩此の惡魔の其の過現の名等の功德を說くを聞きて歡喜踊躍し增上慢を起して諸餘の菩薩を凌蔑毀罵せば惡魔知り已て復た之れに告げて言はん、汝は定めて殊勝の功德を成就せり。佛は已に汝に大菩提の記を授けたまへり、已に殊勝の瑞相有りて現前せりと。爾の時惡魔擾亂せんが爲の故に復た矯りて種種の形像を化作し菩薩の所に至りて親愛を現じて言はく、汝今已に不退轉の德を具せり。應に自ら敬重すべく輒ち人を尊ぶこと勿れ

【六】增上慢。四慢、七慢の一。殊勝の法及び證を得ずして、得たりと思ひたかぶること。

【七】杜多。頭陀(Dhūta)なり。陶汰、斗藪、抖擻、修治、洗浣などと譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。これに十二種の行あり、十二頭陀行といふ。

と。時に此の菩薩彼の語を聞き已て增上慢の心轉を復た堅固にして、一切智智の遠きをして而かも更らに遠ざからしむ。是の故に菩薩菩提を得んと欲せば應に善く諸の惡魔の事を覺知すべし。復た次に善現、諸の菩薩有りて善く名字の實相を了知せず但だ名字のみを聞きて妄りに執著を生ぜん、謂ゆる惡魔有り方便して種種の形像を化作し來りて之に告げて言はん、汝が修行する所の願行は已に滿ぜり。久しからずして當に無上菩提を證すべし、汝成佛の時當に是の如き殊勝の功德尊貴の名號を得べしと。謂ゆる彼の惡魔は此の菩薩の長夜に我れ成佛せん時當に是の如き尊貴の名號を得べしと思願せるを知りて其の思願に隨て之を記說す。時に此の菩薩般若波羅蜜多を遠離し方便善巧して魔の記說を聞きて是の念言を作さく、此の人は奇なる哉、我が爲に、當に成佛して尊貴の名號を得べしと記說す。我が長夜の思願と相應せり。此れに由るが故に我れ定めて當に成佛して名號の餘人に勝過せるを得べしと知ると。如如に惡魔彼の名號を記せば是の如く是の如く憍慢轉た增し諸餘の實德の菩薩を輕蔑し斯れに由りて轉た無上菩提に遠ざかり當に聲聞或は獨覺地に墮すべし。是の諸の菩薩は或は此の身善友に親近し至誠もて悔過する有らば多時を經て生死に流轉すと雖も而かも後當に無上菩提を證すべし。若し此の身善友に遇ふも至誠もて悔過せざる有らば彼れは定めて生死に流轉すること多時にして愚癡顚倒し、精進して諸の善業を修すと雖も而かも聲聞或は獨覺地に墮せん。是の如く憍慢にして餘の菩薩を輕しむる罪は[八]四重及び五無間に過ぐること無量倍數ならん。是の故に菩薩は應に善く是の如く虛名號等を記說する微細の魔事を覺知すべく憍慢にして餘の菩薩を輕んずべからず。復た次に善現、諸の菩薩有りて山曠野に居して遠離行を修せんに、時に惡魔有りて來り其の所に至り恭敬讚歎して是の如き言を作さん、大士、能く眞の遠離行を修す、此の遠離行は賢聖稱譽し諸の天龍神皆共に守護せんと。善現當に知るべし、我れは此の遠離行を稱讚して以て眞實と爲さずと。善現白して言さく、此の遠離行若し眞實に非ずんば餘に復た是れ何ぞやと。佛、[九]善現に告げ

【八】四重。四重禁、四重罪などといふ。四種の重罪即ち殺生、偸盜、婬、妄語の稱。

【九】佛、眞淨の遠離行を說明す。

たまはく、若し諸の菩薩或は城邑に居し或は山野に居するも但だ煩惱二乘の作意を離れて深般若波羅蜜多のみを行ぜば是れを菩薩の眞の遠離行と名づく。此の遠離行は諸佛世尊稱讃開許し菩薩應に學せば諸の菩薩をして疾く菩提を證せしむべし。善現當に知るべし、魔の稱讃する所の、常に山野に居して宴坐思惟するも猶ほ煩惱二乘の作意を雜へ深般若波羅蜜多を離れなば一切智智を圓滿すること能はず、諸の菩薩有り樂ふて魔の稱讃する所の遠離行法を修行すと雖も而かも心恒に村城に居して眞の遠離を修する諸餘の菩薩を輕蔑せば、善現當に知るべし、是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を遠離し多時を經て深山野に居し遠離行を修すと雖も而かも眞の遠離法を了知せず憍慢を增長し二乘地に於て深く樂著を生じ終に無上菩提を得ること能はず、佛世尊稱讃開許するに非ず亦た菩薩の修行すべき所に非ず。善現當に知るべし、我が稱讃する所の諸の菩薩衆の眞淨の遠離法は是の諸の菩薩都て成就せず、彼れは眞淨の遠離行の中に於て亦た相似の行相有るを見ず、而かも諸の惡魔は彼れを誑惑せんが爲に憍慢を生じて餘の菩薩を輕んぜしめ、空中に來至し慇懃に讃勸して言はん、是れ眞淨の遠離行法なりと。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は山野に居すと雖も而かも心喧雜して眞の遠離行を修學すること能はず、諸の菩薩有り村城に居すと雖も而かも心寂靜にして常に能く眞の遠離行を修學すと。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は常に眞の遠離行を修學する諸の菩薩衆に於て輕弄毀呰すること旃茶羅の如く、眞の遠離行を修すること能はざる諸の菩薩衆に於て供養尊重すること佛世尊の如しと。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を遠離し種種の分別執著を發起して是の念言を作さん、我が修學する所は是れ眞の遠離なるが故に非人は我が所に來至して稱讃護念を爲し、城邑に居せる者は身心擾亂せん、誰れか當に護念して稱讃敬重すべけんと。是の諸の菩薩は心憍慢多く煩惱惡業晝夜に增長せん。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は菩薩衆に於て旃茶羅と爲して菩薩摩訶薩衆を穢汚し、亦た是れ天上人中の大賊にして天人阿素洛等を誑惑す。

其の身沙門の法衣を服すと雖も而かも心常に怨賊の意樂を懷く。諸の菩薩乘に發趣する者有らば親近し供養恭敬すべからず。所以は何ん、此の諸人等は增上慢を懷き外菩薩に似たるも内煩惱多く惡業增盛なればなり。是の故に善現、若し諸の菩薩眞實に一切智智を捨てず無上正等菩提を求證し普ねく諸の有情者を利樂せんが爲には是の如き惡人に親近すべからず。善現當に知るべし、諸の菩薩衆は常に應に精進して眞事業を修し生死を厭離して三界に著せざるべし。彼の惡賊旃荼羅人に於て常に應に慈悲喜捨を發生すべく、應に是の念を作すべし、我れ彼の惡人の起す所の如き過患を起すべからず。設ひ當に失念して彼れの如く暫くも起さば即ち應に覺知して速に除滅せしむべしと。是の故に菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば當に善く諸の惡魔事を覺知すべく應に勤め精進して彼の菩薩の起す所の如き過患を遠離除滅して無上正等菩提を勤求すべし。若し諸の菩薩是の如く學せば是れを善巧に魔事を覺知すと爲す。

卷の第五百六十四

第五分 [一]勝意樂品第二十

復た次に善現、若し諸の菩薩勝意樂を以て無上正等菩提を證せんと欲せば常に應に眞淨の善友に親近し供養恭敬尊重讃歎すべしと。[二]爾の時善現便ち佛に白して言さく、何等をか名づけて菩薩の善友と爲すと。佛、善現に告げたまはく、諸佛は皆菩薩の善友と名づく。若し能く甚深般若波羅蜜多を宣說して諸の菩薩衆を教誡教授し般若波羅蜜多甚深の法門に於て能く悟入せしむる者も亦た名づけて菩薩の善友と爲すことを得。布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多も當に知るべし亦た菩薩の善友と名づくと。是の如き六種波羅蜜多は諸の菩薩の與に師と爲り導と爲り明と爲り炬と爲り光と爲り照と爲り舍と爲り護と爲り歸と爲り趣と爲り洲と爲り渚と爲り父と爲り母と爲ると。過去未來現在の諸佛は皆六種波羅蜜多に依りて功德事業を成辦することを得たり。所以は何ん、是の如き六種波羅蜜多は普ねく能く一切の佛法を攝受すればなり。是の故に善現、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんと欲せば應に六種波羅蜜多を學すべし。

[三]復た次に善現、若し諸の菩薩六種波羅蜜多を學せんと欲せば應に般若波羅蜜多甚深の經典に於て至心に聽聞し受持し讀誦し、義趣を觀察し疑ふ所を決せんことを請ふべし。所以は何ん、是の如き般若波羅蜜多甚深の經典は能く六種波羅蜜多の與に尊と爲り導と爲り生養の母と爲ればなり。善現當に知るべし、若し諸の菩薩他の教に隨はざる行を得んと欲し、他の教に隨はざる地に住せんと欲し、一切有情の疑を斷せんと欲し、一切有情の願を滿せんと欲せば應に是の如き甚深般若波羅蜜多を學すべしと。具壽善現便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は何を以て相と爲すや。佛、善現に告げたまはく、甚深般若波羅蜜多は無礙を相と爲すと。爾の時善現復た佛に白して言さく、頗る因緣

【一】菩薩勝意樂を以て修證せんとするを明すによる。

【二】菩薩の善友を明す。

【三】六度は菩薩の善友たり、而して般若經は六度の尊導なればこれに依るべきを明す。

の甚深般若波羅蜜多無礙の相有りや、餘の一切法も亦有るを得るや。佛、善現に告げたまはく、因縁の故に甚深般若波羅蜜多無礙の相有り、餘の一切法も亦有と說くべし。所以は何ん、一切法は皆甚深般若波羅蜜多の是れ空遠離なるが如くならざること無きを以てなり。具壽善現復た佛に白して言さく、若し一切法皆空遠離ならば云何が有情染有り淨有るや。所以は何ん、空遠離の法は染淨有りと說く可きに非ず、空遠離は能く菩提を證するに非ず、空遠離を離れて別に法の得可き有るに非ざればなり。云何が我れをして是の如き義を解せしむるやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、有情は長夜に我等の心有りて我等に執するや不やと。善現對へて曰はく、是の如し世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、有情の執する所の我及び我所は空遠離なるや不やと。善現對へて曰はく、是の如し世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、豈に有情は我我所に由りて生死に流轉せざるやと。善現對へて曰はく、是の如し世尊と。佛、善現に告げたまはく、是の如き有情は生死に流轉して雜染及び清淨者を施設す。諸の有情は虛妄に我及び我所に執著するに由りて、雜染有りと說く、而かも其の中に於て雜染者無し。諸の有情は妄りに我及び我所に執著せざるに由りて清淨有りと說く、而かも其の中に於て清淨者無し。是の故に善現、一切法は皆空遠離なりと雖も而かも諸の有情亦た染有り淨有りと施設す可し。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば般若波羅蜜多を行ずと名づくと。[四]具壽善現便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、一切法は皆空遠離なりと雖も而かも諸の有情は染有り淨有り。若し諸の菩薩能く是の如く行ぜば則ち色受想行識を行ぜず、世間の天人阿素洛等皆伏すること能はず、普ねく一切の聲聞獨覺所行の行に勝り無勝處に至る。是の諸の菩薩は此の般若波羅蜜多相應の作意に由りて晝夜に安住し方便善巧して無上正等菩提に趣向し疾く無上正等菩提を證すと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し。[五]復た次に善現、意に於て云何、假使ひ此の贍部洲の中に於ける一切の有情前に非ず後に非ず皆人身を得て菩提心を發して壽を盡く

【四】菩薩般若相應の作意に安住して能く無上菩提を證得するを明す。

【五】般若相應の作意に安住して獲る福德を明す。

すまで布施し此の布施を持て菩提に廻向せんに此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。善現對へて曰はく、甚だ多し世尊と。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩有りて下一日に至るまで般若波羅蜜多相應の作意に安住して獲る所の功德は甚だ前よりも多く無量無數なり。所以は何ん、是の如き菩薩如如に甚深般若波羅蜜多相應の作意に安住せば是の如く是の如く一切有情の福田爲るに堪ふればなり。此れに由りて菩薩起す所の慈心には諸の有情類能く及ぶ者無し。唯だ如來應正等覺を除くのみ。[六]是の如き菩薩は勝妙の慧を具し、勝妙の慧に由りて諸の有情の、大苦惱の、刑戮せらるるが如きを受くるを見て大悲心を起し、復た天眼を以て有情類の[七]無間業を成じて無暇處に墮して諸の苦惱を受け、或は[八]見網の覆蔽する所と爲りて正道を得ざるを見、見已て悲愍して大厭怖を生じ普ねく一切の有情世間を緣じて大慈悲相應の作意を起す、我れ當に普ねく一切有情の爲に大導師と作りて衆苦を脫せしむべしと。是の念を作すと雖も而かも此の想に住せず亦た餘想に住せず。是れを菩薩の大慧光明と名づく。此の住に住するに由りて能く一切世間の福田と作り、未だ一切智智を證得せずと雖も而かも菩提に於て已に退轉せず、施主の一切の供養を受くるに堪ふ。是の如き菩薩は善く般若波羅蜜多に住して既に能く畢竟施主の恩を報じ亦た能く一切智智に親近す。是の故に菩薩、虛しく世間の信施を受けざらんと欲し、有情に眞淨の道路を示さんと欲し、有情の爲に大饒益を作さんと欲し、世間の爲に大明照と作らんと欲し、有情を生死の牢獄より脫せんと欲し、有情に清淨の法眼を施さんと欲せば應に常に甚深般若波羅蜜多相應の作意に安住すべし。此の作意に由らば所有る言說皆般若波羅蜜多の理趣と相應し諸の餘の作意の暫くも起るを容るる無し。所以は何ん是の如き菩薩は甚深般若波羅蜜多相應の作意流注し相續すればなり。譬へば人有りて先に未だ曾て有らざる末尼寶珠に後時に遇ひ得て歡喜し自ら慶ぶに緣に遇ひて還て失か大憂惱を生じ常に歎惜を懷いて未だ曾て念を離れず、當に何の計もて此の珠を還得すべきかを思ふ。彼の人是の相應の作意

【六】菩薩の大悲を明し、般若相應の作意に安住して能く有情を饒益するを說く。
【七】無間業、五逆等の重罪、强惡意志の行爲は他事に隔せず、直ちに阿鼻の苦報を受くるを云ふ。
【八】見網。種種の邪見身を纏縛して免脫せしめざれば羅網に譬ふるなり。

に由り此の寳珠を緣じて時として暫くも捨つる無きが如く、菩薩も亦た爾なり、應に常に甚深般若波羅蜜多相應の作意に安住すべし。若し是の如き作意に安住せずんば則ち一切智智相應の作意を喪失すと爲すと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、若し一切法及び諸の作意皆自性を離るれば云何が菩薩は般若一切智智相應の作意を離れざるやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩一切法及び諸の作意皆自性を離ると知らば是の諸の菩薩は般若の一切智智を離れざるなり。所以は何ん、甚深般若の一智智及び諸の作意は自性皆空にして增無く減無ければなりと。具壽善現復た佛に白して言さく、若し深般若波羅蜜多の自性常に空にして增無く減無くんば云何が菩薩は般若波羅蜜多を增上して能く菩提に近づくやと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じて一切法增無く減無しと知らば深般若波羅蜜多に於ても亦た增減無し。若し諸の菩薩能く是の如く知りて一切法の增無く減無きを聞き驚かず怖かず亦た沈沒せずんば是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて已に究竟に到り菩薩の不退轉地に安住して疾く無上正等菩提を證せるなりと。

[九] 具壽善現白して言さく、世尊、般若波羅蜜多に卽せば能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、般若波羅蜜多を離れて法の得可き有りて能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、般若波羅蜜多の空に卽せば能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、般若波羅蜜多の空を離れて法の得可き有りて能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、空に卽せば能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、空を離れて法の得可き有りて能く般若波羅蜜多を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、空に卽せば能く空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、空を離れて法の得可き有りて能く空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、般若波羅蜜多に卽せば能く空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、般若

【九】善現、佛と般若行及び空行に就て問答す。

波羅蜜多を離れて法の得可き有りて能く空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、色受想行識等に卽せば能く般若波羅蜜多を行じ及び空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、色受想行識等を離れて法の得可き有りて能く般若波羅蜜多を行じ及び空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、色受想行識等の空に卽せば能く般若波羅蜜多を行じ及び空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、色受想行識等の空を離れなば能く般若波羅蜜多を行じ及び空を行ずと爲すや不やと。爾らざるなり善現と。

一〇　爾の時善現便ち佛に白して言さく、若し爾れば菩薩は何等の法を以て能く般若波羅蜜多を行じ及び能く空を行ずるやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝法の能く般若波羅蜜多を行じ及び空を行ずる有るを見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝般若波羅蜜多有るを見及び空有るを見るや、是れ諸の菩薩の所行の處なるや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝見ざる所の法是の法得可きや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、得可からざる法は頗し生有りや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、汝が見ざる所得ざる所の法の所有る實相は卽ち是れ菩薩の無生法忍なり。菩薩是の如き忍を成就せば便ち無上正等菩提に於て記を受くることを得るに堪ふ亦た如來無所畏の道と名づく。若し諸の菩薩勤めて此の道を行じて無上正等覺智大智妙智自然人智一切智智及び如來智を得ずとせば是の處有ること無しと。具壽善現復た佛に白して言さく、菩薩は諸法の無生を以て佛菩提に於て記を受くることを得と爲すや不やと。爾らざるなり善現と。世尊、若し爾れば菩薩は云何が菩提の記を受くるやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝法の佛菩提に於て記を受くることを得る有るを見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊。我れ法の佛菩提に於て記を受くることを

【一〇】佛、善現の再問に對して般若及び空所行の法を明す。

得るに堪ふるを見ず。亦た佛菩提に於て能く證する者有るを見ず、證時證處及び此れに由りて證する若しは所證の法皆亦た見ざるなりと。佛、善現に告げたまはく、一切法は不可得なるを以ての故に佛菩提に於て此れは是れ能證此れは是れ所證なりと念言すべからずと。

[二] 時に天帝釋便ち佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多は最も爲れ甚深にして見難く覺り難し、畢竟離の故に。少善根の諸の有情類は能く是の如き甚深般若波羅蜜多に於て書寫聽聞し受持讀誦するに非ずと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。憍尸迦、假使ひ此の贍部洲の中に於ける一切有情悉く皆十善業道を成就する是の如き福聚は能く般若波羅蜜多甚深の經典を書寫聽聞し受持讀誦して獲る所の功德に於て百分の一に及ばず千分の一に及ばず乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばずと。時に苾芻有りて天帝釋に告ぐ、般若波羅蜜多に於て書寫聽聞し受持讀誦する有りて獲る所の功德は仁者に勝るやと。天帝釋言はく、彼の有情類は初めて發心せる時すら尚ほ我れに勝る、況んや般若波羅蜜多に於て書寫聽聞し受持讀誦し精勤修學して理の如く思惟せんをや。苾芻當に知るべし、彼の有情類は卽ち是れ菩薩なり。是の如き菩薩の獲る所の福聚は普ねく一切世間の天人阿素洛等に勝らん、是の如き菩薩の獲る所の福聚は亦た預流一來不還應果獨覺に勝り、亦た菩薩の般若波羅蜜多を遠離して方便善巧して布施淨戒安忍精進靜慮波羅蜜多及び餘の功德を修行するに勝らん。苾芻當に知るべし。若し諸の菩薩說の如く般若波羅蜜多を修行し方便善巧せば是の諸の菩薩は普ねく一切世間の天人阿素洛等に勝り、世間の天人阿素洛等皆應に供養すべし。所以は何ん、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多に於て能く說の如く究竟を行じて隨轉すればなり。是の諸の菩薩は能く一切智智の種性を紹ぎて斷絕せざらしめ、常に諸佛世尊を遠離せず、常に妙菩提の座を遠離せずして常に能く生死の泥に溺るゝ諸の有情類を濟拔す。是の諸の菩薩は是の如く學する時は常に菩薩の學すべき所の法を學して二乘の學すべき所の法を學せず。諸の天神等

【二】帝釋、佛の威神力の加被により、般若經を書寫、聽聞し、受持讀誦して獲る功德の大なることを明す。

常に隨て擁護し四大天王其の所に來至し供養恭敬して咸く是の言を作す、善哉大士、當に勤め精進して菩薩衆の學すべき所の法を學し疾く當に妙菩薩の座に安坐して速に無上正等菩提を證すべし。昔天王の奉りし所の[三]四鉢の如く我れも亦た當に奉るべし。苾芻當に知るべし、是の諸の菩薩は我れ等天帝すら尙ほ其の所に往きて供養恭敬す、況んや餘の天神をや。苾芻當に知るべし、是の諸の菩薩是の如く學する時は一切の如來及び諸の菩薩諸の天龍等常に隨て守護せん。此の因緣に由りて世間の危厄身心の憂苦皆侵害せず、所有る疾病も亦復た起らずと。苾芻當に知るべし、是の諸の菩薩は是の如き等の現法の勝利を獲、後世の功德無量無邊ならんと。時に阿難陀竊に是の念を作さく天主帝釋は自らの辯才もて是の如き菩薩の功德を讃說すと爲すや、是れ如來威神の加被と爲すやと。時に天帝釋、佛の威神を承け阿難陀の心の所念を知り、白って言はく、大德、我が辯才に非ず皆是れ如來威神の加被なりと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、是の如し是の如し、今天帝釋は佛の威神を承けて能く是の如く說く、慶喜當に知るべし、若し時に菩薩深般若波羅蜜多に於て思惟修學せば三千世界の一切の惡魔皆疑怖を生じて咸く是の念を作さん、此の諸の菩薩は中間に於て便ち實際を證して二乘地に墮すとや爲ん、無上正等菩提に趣き妙法輪を轉じて我が境界を空ずとや爲んと。

【三】四鉢。佛成道の初め四天王來りて各一の石鉢を奉りし故事。

第五分修學品第二十一

[一]復た次に慶喜、若し時に菩薩般若波羅蜜多を修學して晝夜に精進して常に捨離せずんば時に魔の眷屬箭の心に入れるが如く惱戰憂惶して自處に住せず。復た次に慶喜、若し時に菩薩般若波羅蜜多を修學し晝夜に精勤して將に究竟に至らんとせば時に魔の眷屬共の所に來至して種種の怖畏す可き事を化作し菩薩の身心をして驚怖せしめ大菩提に於て暫く退せしめて便ち足らんと欲す。復た次に慶喜、諸の菩薩般若波羅蜜多を修學するに非ずんば皆惡魔の擾亂する所と爲らん。若し諸の菩薩先世に此の甚深般若波羅蜜多を聞きて信解心無く毀呰誹謗せば是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を聞きて疑惑猶豫して有と爲し無と爲さば是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩善友を遠離せば惡友攝持して般若波羅蜜多甚深の義處を聞かず、聞かざるに由るが故に知らず見ず、云何が甚深般若波羅蜜多を修學せん。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩邪法を攝受せば爾の時惡魔便ち是の念を作さん。今此の菩薩は我れと伴と爲り無量の人をして正法を棄捨せしめて我が所願を滿ずと。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩般若波羅蜜多甚深の經を說くを聞かん時餘の菩薩に告げん、是の如き般若波羅蜜多の理趣は甚深にして信じ難く解し難し、何ぞ書寫し受持讀誦するを用ひん、我れすら尙ほ其の源底を得ること能はず況んや餘の薄福淺智の者をやと。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩餘の菩薩を輕しめて謂ゆる是の言を作さん、我れは能く眞の遠離行に安住するも汝等は皆無しと。爾の時惡魔歡喜慶快せん。是の

【一】般若修學と惡魔擾亂に就いて明す。

諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し時に菩薩自ら名姓及び修行する所の杜多の功德を恃みて諸餘の勝善法を修する諸の菩薩衆を輕蔑し常に自らは稱讃し、他人は不退轉の諸の行狀相無しと毀呰し而かも自らは有りと謂ひて煩惱業を起さば、爾の時惡魔便ち大いに歡喜して是の如き念を作さん。今此の菩薩は我が境土宮殿をして空ぜざらしめ地獄傍生鬼界を增益すと。是の時惡魔其の神力を助けて轉た威力辯才を增益せしむ。此れに由りて多人共の語を信受し、斯れに因りて彼の惡見に同ずるを勸發す。惡見に同じ已て彼の邪に隨て學し、邪に隨て學し已て煩惱熾盛にして心顚倒するが故に起す所の三業皆能く愛す可からざる果を感得す。此の因緣に由りて惡趣を增長し魔の宮殿をして轉た更らに充滿せしむ。此れに由りて惡魔歡喜踊躍し諸の所作有るは意に隨て自在なり。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し時に菩薩と聲聞獨覺乘を求むる者と更らに相毀蔑し鬪諍誹謗せば爾の時惡魔便ち是の念を作さん、今此の菩薩は菩提に遠ざかると雖も而かも極めては遠からず、惡趣に近づくと雖も而かも甚だしく近からずと。若し時に菩薩と菩薩乘の善男子等と更らに相毀蔑し鬪諍誹謗せば爾の時惡魔便ち是の念を作さん、此の二菩薩は極めて菩提に遠ざかり甚だ惡趣に近づくと。是の念を作し已て歡喜踊躍して其の威勢を增し二朋黨をして鬪諍して息まざらしめ、餘の無量無邊の有情をして皆大乘に於て深心に厭離せしむ。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學するも便ち惡魔の擾亂する所と爲らん。復た次に慶喜、若し諸の菩薩の未だ菩提の不退轉記を得ざるもの、菩提の不退轉記を得たる諸の菩薩の所に於て損害心を起し鬪諍輕蔑し罵辱誹謗せば是の諸の菩薩は爾所の念饒益せざる心を起すに隨て還て爾所の劫に曾て修せし勝行を退し爾所の時を經て善友を遠離し還て爾所の生死の緊縛を受けん。若し大菩提心を棄捨せずんば還て爾所の劫に弘誓の鎧を被、勤めて勝行を修し時として間斷すること無く、然る後乃ち爾所の功德を補はんと。

[二]爾の時慶喜、便ち佛に白して言さく、是の諸の菩薩の起す所の惡心生死の罪苦は要らず流轉して爾所の時を經と爲すや、中間に於て亦た出離するを得と爲すや。是の諸の菩薩の退せし所の勝行は要らず精勤して爾所の劫を經て時として間斷すること無く然して後乃ち補ふと爲すや、中間に於て本に復する義有りと爲すやと。佛、慶喜に告げたまはく、我れ菩薩獨覺聲聞の爲に罪より出で還て善を補ふ法有りと說く。慶喜當に知るべし。若し諸の菩薩此の罪を造りて後心慚愧無く惡を懷きて捨てず法の如く悔過を發露すること能はずんば我れ彼の類は其の中間に於て罪苦より出で還て善を補ふ義無しと說く。若し諸の菩薩此の罪を造りて後深く慚愧を生じ心惡に繫せず尋で能く法の如く悔過を發露して是の如き念を作さん、我れ今已に得難き人身を得たり、何ぞ復た是の如き過惡を起して大善利を失ふことを容れん。我れ應に一切有情を饒益すべし、何ぞ乃ち中に於て反て衰損を作さん。我れ應に一切有情を恭敬すること僕の主に事ふるが如くすべし、何で乃ち中に於て反て憍慢毀辱凌蔑を生ぜん。我れ應に一切有情の捶打訶罵をも忍受すべし、何ぞ彼れに於て反て暴惡の心語を以て報を加ふるを容れん。我れ應に一切有情を和解して相敬愛せしむべし、何ぞ復た惡語言を起勃して彼れと乖諍するを容れん。我れ應に一切有情の長時の履踐を堪耐すること猶ほ道路の如く亦た橋梁の如くすべし、何ぞ彼れに於て反て凌辱を加ふるを容れん。我れ無上正等菩提を求め有情を生死の大苦より拔かんが爲に究竟安樂の涅槃を得せしめん、何ぞ反て之れに加ふるに苦を以てせんと欲するを容れん。我れ應に今より盡未來際まで愚の如く啞の如く聾の如く盲の如く諸の有情に於て分別する所無く假使ひ頭足手臂を斬截し目を挑げ耳を割き鼻を劓り舌を截り鋸もて一切の身分支體を解かんも彼の有情に於て終に惡を起さず。若し我れ惡を起さば卽便ち發す所の無上正等覺の心を退壞して所求の一切智智を障礙し有情を利益安樂すること能はざらんと。慶喜當に知るべし、是の諸の菩薩は我れ中間に罪より出で還て善を補ふ義有り要らずしも爾所の劫數を經るに非ず、惡

【二】佛、二乘の爲に罪より出で還て善を補ふ法を說く。

魔彼れに於て擾亂すること能はず疾く無上正等菩提を證すと說く。復た次に慶喜、諸の菩薩衆と聲聞獨覺乘を求むる者と交涉すべからず、設ひ與に交涉するも共住すべからず、設ひ與に共住するも彼と論議決擇すべからず、此れに因るが故に忿恚心を起し或は復た麁惡の言說を生ぜしめて便ち無上正等菩提を礙へ亦た無邊の菩薩の行法を壞すること勿れ。若し諸の菩薩と菩薩乘の善男子等と共住せば相視て尊重敬事すること應に大師の如くすべし。

[三]復た是の念を作せ、彼れは是れ我れ等の眞淨の善友にして同じく一船に載り同じく趣く所を一にし同じく一道を行じ同じく事業を一にし學時學處及び所學の法若しは是れに由りて學する皆異り有ること無しと。復た是の念を作せ、若し彼の菩薩、雜作意に住せば我れ當に中に於て彼れと同じくして學せず、若し彼の菩薩、雜作意を離るれば我れ當に中に於て常に彼れと同じくして學すべしと。若し諸の菩薩是の如く學する時は疾く所求の一切智智を證さんと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩、[四]盡の爲の故に學し、不生の爲の故に學し、離の爲の故に學し、滅の爲の故に學せば是れ一切智智を學するや不やと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩是の如く學する時は一切智智を學するに非ずと。具壽善現復た佛に白して言さく、何に緣りてか菩薩の是の如く學する時一切智智を學するに非ざるやと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、佛は眞如を證すること極めて圓滿なるが故に說いて如來應正等覺と名づく。是の眞如は說いて盡乃至滅と爲す可しと知るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊、何を以ての故に、眞如は無相にして盡乃至滅と說く可からざるが故なりと。佛、善現に告げたまはく、是の故に菩薩の是の如く學する時は一切智智を學するに非ず、若し諸の菩薩盡の爲の故に學せず乃至滅の爲の故に學せず是の如く學する時は是れ一切智智を學し亦た般若波羅蜜多を學し亦た佛地、力、無畏等の無邊の佛法を學するなり。善現當に知るべし、若し諸の菩薩是の如く學する時は一切の學の究竟彼岸に至り天魔外道も皆伏すること能はず、諸惡を息除して衆善圓滿す、少分の有情のみ能く是の如く學すと。是の故に菩薩、極めて少しの有情數に墮せんと欲せば當に勤めて甚深般若波羅蜜多方便善巧を修學すべし。

【三】佛、一切の學の究竟彼岸を明し、般若方便善巧を修學せんことを勸說す。

【四】盡、不生、離、滅等は消極に偏するもの一切智智を學する所に非ずとす。

第五分根栽品第二十二之一

[二]復た次に善現、若し諸の菩薩是の如く、甚深般若波羅蜜多方便善巧を修學せば[三]相栽倶行の心を起さず、[四]慳悋犯戒瞋恚懈怠散動惡慧猶豫倶行の心を起さず。復た次に善現、若し諸の菩薩是の如く甚深般若波羅蜜多方便善巧を修學せば能く一切の波羅蜜多を攝す。譬へば[五]身見の能く具さに[六]六十二見を攝受するが如く、是の如く般若波羅蜜多は一切の波羅蜜多を攝受す。譬へば命根の遍ねく能く所餘の諸根を攝受し命根滅する時諸根隨つて滅するが如く是の如く般若波羅蜜多は一切の波羅蜜多を攝受す。若し般若波羅蜜多を失はゞ則ち一切の波羅蜜多を失ふ。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多に能く一切殊勝の善法を持ちて能く一切の惡不善法を滅すればなり。是の故に善現、若し諸の菩薩一切の波羅蜜多を攝せんと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。若し諸の菩薩能く般若波羅蜜多を學せば諸の有情に於て最尊最勝なり。復た次に善現、意に於て云何、此の三千大千世界に於ける諸の有情類は寧ろ多しと爲すや不やと。善現對へて曰はく、甚だ多し世尊、贍部洲の中の諸の有情類の其の數すら尚ほ多し況んや三千界をやと。佛、善現に告げたまはく、假使ひ三千大千世界の一切有情皆菩薩と成りて一一皆上妙の樂具を以て壽を盡くすまで一切の有情を供養せんに意に於て云何、是の諸の菩薩は此の因緣に由りて福を得ること多きや不やと。善現對へて曰はく、甚だ多し世尊と。佛、善現に告げたまはく、若し菩薩有りて般若波羅蜜多を修學すること彈指の頃の如くならんに其の福彼れに勝ること無量無邊なり。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は大義の用を具して能く無上正等菩提を攝すればなり。是の故に善現、若し諸の菩薩無上正等菩提を證せんと欲し、一切有情の上首と爲らんと欲し、普ねく一切有情を饒益せんと欲し、一切有情の依怙と爲らんと欲し、一切圓滿の佛法を證せんと欲し、諸佛の行ずる所の境界を行ぜんと欲し、佛の遊戲する所の處に遊

【一】修學を説くに根栽倶行の心を起さざるを説く故に名づく。

【二】般若能く一切の波羅蜜多を攝受するを明し、般若修學して得る功德勝利を説く。

【三】根栽。根と栽培と並行すとする所證能證分別し倶行すとするなり。

【四】慳悋―惡慧等、布施等に反する心用なり。

【五】身見。五見の一。有身見ともいひ、我見と我所見との稱。即ち五蘊が假りに和合して生じたる吾人の身體に對して、常一主宰の靈妙なる我ありと迷執し、また一切の事物は如幻假有にして自他の所屬なきものなるを、顛倒妄計して此は我所有なりと固執する偏見を云ふ。

【六】六十二見。外道が五蘊の中一蘊毎に四種見を起し、二十見各各三世あるが故に六十見となる。この六十見は斷常二見を以て根本とするが故にこの根本二見を合して六十二見と稱すとも云ひ、又梵網、婆沙等に明す本劫本見四十四見末劫末見十八見合して六十二とも云ふ。

戯せんと欲し、諸佛の大師子吼を作さんと欲し、一音を以て三千界の一切有情の爲に正法を宣說して普ねく一切をして大饒益を獲せしめんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし。善現當に知るべし、我れ曾て諸の菩薩の般若波羅蜜多を修學して而も世出世間の功德勝利を得る能はざること有りしを見ざるなりと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、菩薩甚深般若波羅蜜多を修學せば豈に亦た能く聲聞獨覺の功德善根をも得るやと。佛、善現に告げたまはく、聲聞獨覺の功德善根は此の菩薩衆も亦た皆能く得、但だ其の中に於て心住するを樂はざるのみ。[七]勝智見[八]無倒の觀察を以て聲聞獨覺地を超過し彼れの爲に開示して皆證得せしむ。復た次に善現、若し諸の菩薩是の如く學する時は則ち一切世間の天人阿素洛等の眞淨の福田と爲りて諸の世間聲聞獨覺の福田の上に超えて疾く能く一切智智を證得し常に甚深般若波羅蜜多を捨離せず。菩薩若し能く般若波羅蜜多を修行せば當に知るべし已に一切智智に於て不退轉を得聲聞獨覺等の地を遠離して無上正等菩提に親近せりと。善現當に知るべし、若し諸の菩薩是の如き念を作さん、此れは是れ般若波羅蜜多なり、我れ般若波羅蜜多に由りて當に能く一切智智を引發すべしと。是の諸の菩薩は般若波羅蜜多を行ずるに非ず亦た般若波羅蜜多に於て知らず見ざるなりと。若し諸の菩薩是の念を作さゞらん、此れは是れ般若波羅蜜多なり、我れ般若波羅蜜多に由りて當に能く一切智智を引發すべしと。是の諸の菩薩は是れ般若波羅蜜多を行じ亦た般若波羅蜜多に於て能く知り能く見るなり。復た次に善現、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を見ず般若波羅蜜多を聞かず覺らず知らずんば諸法を見聞覺知せず亦た分別せざるに於て、是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。時に天帝釋是の念言を作さく、若し諸の菩薩般若波羅蜜多を修行せんすら尙ほ人中の善利を獲得し及び世間最勝の壽命を得と爲す、況んや無上正等覺の心を發し或は能く甚深般若波羅蜜多を聽聞せんをや。是の諸の有情は世間敬愛す、當に能く一切の有情を[九]調御すべしと。是の念を作し已つて卽便ち微妙の香花を化作して如來及び諸の菩薩に捧げ散す。

【七】勝智見。事理をさとり知る殊勝なる見解。
【八】無倒。一切の顚倒を離れたる正見をいふ。
【九】調御。調伏制御なり。ととのへをさむること。

既に散華し已つて〔一〇〕是の願を作して言はく、若し諸の菩薩無上正等菩提を求趣せば我が所生の善根功德を以て願くは彼の佛法速に圓滿することを得、願くは彼の所求の一切智法及び無漏法速に圓滿することを得んと。是の願を作し已つて便ち佛に白して言さく、若し菩薩乘の善男子等已に無上正等覺の心を發さば我れ終に一念異意を生じて其れをして大菩提心を退轉せしめず、我れ終に一念異意を生じて諸の菩薩をして大菩提を厭ひて聲聞獨覺等の地に退住せしめず、我れ終に一念異心を起して諸の菩薩をして大悲相應の作意を退失せしめず。若し諸の菩薩已に大心を發さば我れ彼の心倍す復た增進せんことを願ひ、彼の菩薩生死の中の種種の苦を見已つて世間の天人阿素洛等を利樂せんと欲するが爲に種種堅固の大願を發起せんことを願ふ、我れ既に自ら度せり亦た當に精勤して未だ度せざる者を度すべし、我れ既に自ら脫せり亦た當に精勤して未だ脫せざる者を脫すべし、我れ既に自ら安せり亦た當に精勤して未だ安せざる者を安ずべし、我れ既に自ら究竟涅槃を證せり亦た當に精勤して未だ證せざる者をして皆同じく究竟涅槃を證得せしむべしと。

〔一一〕世尊、若し有情初發心の菩薩の功德に於て深心に隨喜せば幾所の福をか得ん、久しく發心して諸の勝行を修せる菩薩の功德に於て、不退轉地の菩薩の功德に於て、〔一二〕一生所繫の菩薩の功德に於て深心に隨喜せば幾所の福をか得んと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、〔一三〕妙高山王は兩數を知る可けんも此の有情類の隨喜俱心の生ずる所の福德は量を知る可からず、乃至三千大千世界は兩數を知る可けんも此の有情類の隨喜俱心の生ずる所の福德は量を知る可からずと。時に天帝釋復た佛に白して言さく、若し諸の有情諸の菩薩に於て初發心より乃至佛を得るまでの功德善根に隨喜を生せず或は復た彼の隨喜功德に於て聞かず知らずんば當に知るべし皆是れ魔の執持する所、魔の黨著する所魔の朋黨にして魔の天界に歿して此の間に來生せるなり。所以は何ん、若し諸の菩薩菩提心を發して菩薩行を修し不退轉を得て究竟位に至り能く、彼れに於て隨喜心を起す有らば定めて能く衆の魔の眷

〔一〇〕是の願。無上菩提を求趣する菩薩をして之が圓滿を得せしめんと願ふ。

〔一一〕有情の隨喜俱心の所生の福德を明す。

〔一二〕一生所繫の菩薩。一生補處の菩薩なり。一生を經れば佛住を補ふべき等覺の位階の在る菩薩。

〔一三〕妙高山王等。須彌山の量を知るを云ふ。

屬を破壞して疾く能く一切智智を證得すればなり。若し諸の有情深心に佛法僧寶を敬愛して所生の處に隨つて常に佛を見法を聞き僧に遇はんと欲せば諸の菩薩の功德善根に於て應に深く隨喜して菩提に廻向して執著を生ぜざるべし、若し能く是の如くせば疾く無上正等菩提を證して有情を利樂し魔の軍衆を破せんと。爾の時佛、天帝釋に告げて言はく、是の如し是の如し、汝が所說の如し、憍尸迦、若し諸の有情、諸の菩薩の功德善根に於て深心に隨喜して菩提に廻向せば速に能く諸の菩薩行を圓滿して疾く無上正等菩提を證せん。若し諸の有情諸の菩薩の功德善根に於て深心に隨喜して菩提に廻向せば是の諸の有情は大勢力を具し常に能く諸佛世尊に奉事し、深經典に於て善く義趣を知り、所生の處に隨て一切世間恭敬供養して惡色を見ず惡聲を聞かず惡香を嗅かず惡味を嘗めず惡觸を覺せず惡法を思はず惡趣に墮せず人天の中に生じて恒に勝樂を受けん。何を以ての故に、憍尸迦、是の諸の有情は能く無量の菩薩の功德に於て深心に隨喜して菩提に廻向し善根增進して疾く能く一切智智を證得し無量無數の有情を饒益して無餘般涅槃界に住せしむればなり。是を以ての故に、憍尸迦、菩薩乘に住せる善男子等は諸の菩薩の功德善根に於て皆應に隨喜して菩提に廻向し無邊の諸の有情類を利樂すべしと。

〔一四〕爾の時善現便ち佛に白して言さく、心既に幻の如し、云何が菩薩は能く無上正等菩提を證せんと。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝幻の如き心有るを見ると爲すや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、汝幻を見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、若し汝幻を見ず幻の如き心を見ずして若し幻無く幻の如き心無きに處せば汝是の心能く菩提を得る有りと見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊と。佛、善現に告げたまはく、意に於て云何、若し幻を離れ幻の如き心を離れて、汝是の法能く菩提を得る有りと見るや不やと。善現對へて曰はく、不なり世尊、我れ都て心に

【一四】一切法畢竟離なるを明し、畢竟離法の般若能く畢竟離法の無上菩提を得れば、無上菩提を得んと欲せば般若を修學すべきを說く。

即離せる法を見て何等の法は若しは有り若しは無しと說かず。一切法は畢竟離なるを以ての故に是れ有り是れ無しと施設す可からず。若し法有無を施設す可からずんば則ち能く菩提を得と說く可からず。無所有の法は能く菩提を得るに非ざるが故に。此れに由りて般若波羅蜜多も亦た畢竟離なり。修遣すべからず亦復た引發する所有るべからず。無上菩提も亦た畢竟離なり、云何が諸の菩薩衆深般若波羅蜜多に依りて能く菩提を證すと說く可けん。是の故に般若波羅蜜多は應に能く無上正等菩提を證すと說く可からず。離法は離法を得ざるが故にと。佛、善現に告げたまはく、善哉善哉、是の如し是の如し、甚深般若波羅蜜多無上菩提は俱に畢竟離なり。甚深般若波羅蜜多は畢竟離なるが故に畢竟離の無上菩提を得。若し深般若波羅蜜多畢竟離に非ずんば應に般若波羅蜜多に非ざるべし。是の故に善現、甚深般若波羅蜜多に依止せずんば大菩提を得るに非ず。離法は能く離法を得るに非ずと雖も而かも菩提を得て甚深般若波羅蜜多に依止せざるに非ず。是の故に菩薩無上正等菩提を得んと欲せば應に勤めて甚深般若波羅蜜多を修學すべしと。

卷の第五百六十五

第五分根栽品第二十二之二

[一]爾の時善現便ち佛に白して言さく、此の諸の菩薩は甚深の義を行ずと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、此の諸の菩薩は甚深の義を行ず、善現當に知るべし、此の諸の菩薩は能く難事を爲すと、謂ゆる行ずる所の義復た甚深なりと雖も而かも聲聞獨覺地の法に於て能く證を作さずと。具壽善現復た佛に白して言さく、我れ佛の所說の義を解する如くんば此の諸の菩薩の作す所は難からず、彼れ能く難事を爲すと說くべからず。所以は何ん、此の諸の菩薩の證する所の深義は旣に不可得なればなり。能證の般若波羅蜜多も亦た不可得、證法證者證處證時も亦た不可得なり。若

【一】般若の甚深不可得にして無分別なるを明す。

し諸の菩薩是の如き語を聞きて心沈沒せず亦た憂悔せず驚かず怖かずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。此の諸の菩薩は是の如く行ずる時衆相を見ず亦復た我れ般若波羅蜜多を行じて無上正等菩提に近づき聲聞獨覺等の地を遠離すと見ず。此の諸の菩薩は是の如き事に於ても亦た分別せず。譬へば虛空の是の念を作さゞるが如し、我れ彼の事を去ること若しは遠く若しは近しと。所以は何ん、虛空は動無く分別無きが故なり。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、是の念を作さず、聲聞獨覺は我れを去ること爲れ遠く無上菩提は我れを去ること爲れ近しと。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は一切法に於て分別無きが故なり。譬へば幻士の是の念を作さゞるが如し、幻質幻師は我れを去ること爲れ近く傍觀衆等は我れを去ること爲れ遠しと。所以は何ん、幻化せらるゝ者は分別無きが故なり。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、是の念を作さず、聲聞獨覺は我れを去ること爲れ遠く無上菩提は我れを去ること爲れ近しと。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は一切法に於て分別無きが故なり。影像等の喩へも應に知るべし亦た然なりと。譬へば如來應正等覺の一切法に於て愛無く憎無きが如し。所以は何ん、如來は永く一切の分別愛憎等を斷ずるが故なり。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、一切法に於て愛無く憎無し。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は一切の分別皆永く斷ぜるが故なり。譬へば如來の變化する所の者の如し。所作有りと雖も而かも分別無し、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く所作の事業を成辦すと雖も而かも分別無し。譬へば巧匠の男女等の種種の機關を造るが如し此の諸の機關は動作有りと雖も而かも分別無し。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、種種の作すべき所の事を作すと雖も而かも分別無しと。時に舍利子、善現に謂て言はく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ずるに堅固法を行ずと爲すや不堅固法を行ずと爲すやと。善現報へて言はく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば不堅固法を行じて堅固法を行ぜずと。

[二]時に無量の欲界の天子有りて是の念言を作さく、若し諸の菩薩能く無上正等覺の心を發さば般若

【二】菩薩能く般若を行ずれば諸天等に敬禮護念され、惡魔の留難無きを明す。

波羅蜜多甚深の義趣を行ずと雖も而かも實際に於て能く證を作さず聲聞及び獨覺地に墮せず、此の因緣に由りて甚だ爲れ希有なり能く難事を爲す、一切の世間皆應に敬禮すべしと。具壽善現、諸の天子の心の所念を知り便ち之に告げて言はく、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じて實際を證せず聲聞及び獨覺地に墮せざるは甚だ希有なるに非ず未だ難事と爲さず。若し諸の菩薩、一切法及び諸の有情は畢竟非有にして皆得可からずと知りて而かも無上正等覺の心を發し精進の甲を被て無量無邊の有情を度して無餘般涅槃界に入らしめんと誓はば乃ち甚だ希有にして能く難事を爲すなり。天子當に知るべし、若し諸の菩薩、諸法及び諸の有情皆得可からずと知ると雖も而かも無上正等覺の心を發し精進の甲を被て諸の有情類を調伏せんと欲すと爲すは虛空を調伏せんと欲して堅固の鎧を被て虛空と戰はんと爲す有るが如し。何を以ての故に、諸の天子、虛空離なるが故に有情も亦た離、有情離なるが故に鎧甲も亦た離、有情離なるが故に饒益事も亦た離、有情離なるが故に五蘊も亦た離、有情離なるが故に一切法も亦た離なればなり。若し諸の菩薩是の如き語を聞きて心沈沒せず亦た憂悔せず驚かず怖かずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなりと。爾の時世尊、善現に告げて曰はく、何の因緣の故に是の諸の菩薩は是の如き語を聞きて心沈沒せず亦た憂悔せず驚かず怖かざるやと。具壽善現白して言さく、世尊、一切法は皆遠離なるを以ての故に、無所有なるが故なり。所以は何ん、是の諸の菩薩は一切法に於て若しは能沈等、若しは所沈等、若しは沈等の處、若しは沈等の時、若しは沈等の者、此れに由りて沈む等皆無所得にして一切法得可からざるを以ての故なり。若し諸の菩薩是の如きの事を聞きて心沈沒せず亦た憂悔せず驚かず怖かずんば是れ般若波羅蜜多を行ずるなり。若し諸の菩薩是の如く行ずる時は諸の天帝釋大梵天王世界の主等皆共に敬禮せんと。佛、善現に告げたまはく、若し諸の菩薩能く是の如く甚深般若波羅蜜多を行ぜば但だ恒に諸の天帝釋大梵天王世界の主等のみ皆共に敬禮を爲すに非ず、是の諸の菩薩は亦た此れを過ぎて極光淨天若しは遍

淨天若しは廣果天若しは淨居天及び餘の天龍阿素洛等皆共に敬禮を爲し亦た十方無量無數無邊世界の諸佛菩薩皆共に護念を爲さん。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は常に諸佛諸菩薩衆及び諸の天龍阿素洛等に、憶念守護せられ功德善根念念に增長して疾く無上正等菩提を證せんと。善現當に知るべし、是の諸の菩薩は已に菩薩の不退轉位に住し、假使ひ十方殑伽沙等の諸佛世界の一切の有情皆變じて魔と爲り、是の諸の魔衆各復た爾所の惡魔を化作し此の諸の惡魔皆無量無數の神力有らんに是の諸の惡魔其の神力を盡すも此の諸の菩薩に留難し其れをして甚深般若波羅蜜多を行ぜず及び菩提に於て或は退轉有らしむること能はずと。

善現當に知るべし、[三]若し諸の菩薩二法を成就せば一切の惡魔留難すること能はずと。何等をか二と爲す、一には一切法空なりと觀察し、二には一切の有情を捨てざるなり。復た次に善現、若し諸の菩薩二法を成就せば一切の惡魔障礙すること能はず。何等をか二と爲す、一には說の如く皆悉く能く行じ、二には常に諸佛に護念せらるるなり。善現當に知るべし、若し諸の菩薩是の如き二種の勝法を成就せば諸の天神等常に來りて禮敬し親近供養し請問勸發して是の如き言を作さん、善哉大士、汝能く如實に深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して疾く能く諸佛の智地に安住し、一切有情の依怙無き者には能く依怙と作り、救護無き者には能く救護を作り、舍宅無き者には能く舍宅と作り、投趣者無き者には能く投趣を作り、洲渚無き者には能く洲渚を作り、歸依無き者には爲に歸依と作り、闇冥者の與には能く光明を作り、聾盲者の與には能く耳目を作る。何を以ての故に、善男子、若し能く甚深般若波羅蜜多に安住し方便善巧して疾く無上正等菩提を證せば一切の惡魔留難すること能はざればなり。

[四]善現當に知るべし、若し諸の菩薩能善く甚深般若波羅蜜多に安住せば則ち十方無量無數無邊世界の諸佛世尊に大衆の中に處して自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎せらるること我が今大衆の

【三】二法成就を說く、二法とは法空と不捨衆生となり。

【四】自然に所讚の色相功德あるを說く。

中に在りて自然に[五]寶幢菩薩及び餘の現に不動佛の所に住して梵行を淨修し深般若波羅蜜多に住せる諸の菩薩等の名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎するが如くならんと。[六]爾の時善現復た佛に白して言さく、一切の如來應正等覺は皆衆の中に於て自然に一切の菩薩の名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎するや不やと。佛言はく、不なり。若し諸の菩薩已に無上正等菩提に於て不退轉を得深般若波羅蜜多を行じて方便善巧せば是の諸の菩薩は諸の如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎するを蒙らんと。具壽善現復た佛に白して言さく、頗し菩薩有りて未だ無上正等菩提に於て不退轉を得ずして而かも如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎することを蒙るや不やと。佛言はく、亦た有り、謂ゆる諸の菩薩無上正等菩提に於て未だ不退を得ずと雖も而かも般若波羅蜜多を修し方便善巧せば是の諸の菩薩も亦た如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎することを蒙ること、菩薩有りて不動佛の菩薩爲りし時修せし所に隨て而かも學し、行ぜし所は而かも住して般若波羅蜜多を修行して方便善巧し、復た菩薩有りて寶幢菩薩等修せし所に隨ひて而かも學し行ぜし所に而かも住して般若波羅蜜多を修行して方便善巧せば、是の諸の菩薩は無上正等菩提に於て未だ不退を得ずと雖も而かも如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎するを蒙るが如し。復た次に善現、諸の菩薩般若波羅蜜多を行じ[七]一切法無生性の中に於て深く信解すと雖も而かも未だ無生法忍を證得せず、一切法畢竟空性に於て深く信解すと雖も而かも菩薩の不退轉地に於て未だ自在を得ず、諸法皆寂靜性に住すと雖も而かも未だ不退轉地に入るを得ざること有らんに是の諸の菩薩も亦た如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相の功德を歡喜稱揚讚歎するを蒙らん。善現當に知るべし、若し諸の菩薩諸の如來應正等覺大衆の中に在りて自然に名字種姓色相功德を歡喜稱揚讚歎するを蒙むれば是の諸の菩薩は二乘地を超えて大菩提に近づき或は已に不退轉の記を受くるを得、或は當に不退轉の記を受くべきに近づけりと。

【五】釋尊は寶幢菩薩や阿閦(不動)佛の所の諸菩薩を嘆す。
【六】菩薩の能く其の名字種姓色相の功德を歡喜稱揚讚歎さるる所以を說く。
【七】法の無生を信ずるも體認を完うせず。

第五分 付囑品[一]第二十三

[二]復た次に善現、若し諸の菩薩般若波羅蜜多の所有る義趣を說くを聞きて深く信解を生じて惑無く疑無く迷はず悶へず但だ是の念のみを作さん、佛の所說の理趣の如きは必然に定めて顚倒に非ずと。是の諸の菩薩は決定して當に不動佛の所及び諸の菩薩摩訶薩の所に於て廣く般若波羅蜜多を聞き深義趣に於て能く信解を生ずべし。既に信解し已て勤めて梵行を修し當に不退轉地に住することを得、是の地に住し已て疾く菩提を證すべし。善現當に知るべし、若し諸の菩薩但だ般若波羅蜜多を聞くのみすら尚ほ無邊の功德勝利を獲、況んや深く信解して說の如く修行せんをや。是の諸の菩薩は一切智に近づき眞如に安住して疾く菩提を證し法要を宣說すと。爾の時善現便ち佛に白して言さく、法の眞如を離れて別に得可き無し、何の法か一切智に近づき眞如に安住すと說き、誰れか菩提を證し誰れか法要を說くと爲さんと。佛、善現に告げたまはく、是の如し是の如し、法は眞如を離れては都て得可からず、何等の法か一切智に近づいて能く眞如に住し疾く菩提を證し法要を宣說すと說かん、眞如の自性すら尚ほ得可からず、況んや餘法の能く所作有る有らんをや。世俗に隨ふが故に是の如き說を作すのみと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、是の如き般若波羅蜜多の理趣は甚深にして極めて信解し難し。若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ諸法皆得可からずと知ると雖も而かも無上正等菩提を求め有情の爲に法要を宣說せんと欲するは甚だ爲れ難事なり。諸の菩薩衆此の語を說くを聞きて心沈沒せず惑無く疑無く迷はず悶へざる是の如き等の事は甚だ爲れ希有なりと。[三]爾の時善現、帝釋に謂て言はく、汝が所說の如く諸の菩薩衆是の如き語を聞きて心沈沒せず惑無く疑無く迷はず悶へざる是の如き等の事甚だ希有なりとは、憍尸迦、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行じて法の皆空にして都て所有無きを觀ぜば誰れか沈み誰れか沒し誰れか惑ひ誰れか疑ひ誰れか

【一】付囑。本品に於て般若經を阿難に遺囑するが故に名づく。

【二】般若信解の難事及びその功德勝利を明す。

【三】善現は空に依りて帝釋の難事希有とするを斥く。

迷ひ離れか聞へん。是の故に此の事は未だ希有と爲さず。然るに有情は愚癡にして顚倒し諸法皆空なりと通達すること能はざるが爲の故に菩提を求め、宜說方便善巧せんと欲する極めて爲し難きに非ずと。天帝釋言はく、尊者善現の諸の所說有るは空に依らざる無し。是の故に所言常に滯礙無きこと箭を以て仰いで虛空を射るに若しは近き若しは遠き倶に滯礙無きが如しと。時に天帝釋便ち佛に白して言さく、我れ尊者善現と說く所は如來の實語に順ふ法語と爲すや、法に於て法に隨て正說せりと爲す耶と。[四]爾の時世尊、天帝釋に告げたまはく、汝善現と諸の言ふ所有るは皆如來の實語に順ふ法語なり、法に於て法に隨て皆正說せりと爲す。何を以ての故に、憍尸迦、具壽善現の所有る辯才は空に依りて而かも施設せざるなきが故なり。所以は何ん、具壽善現は一切法皆畢竟空なりと觀ずれば尙ほ般若波羅蜜多すら得ず、況んや能く般若波羅蜜多を行ずる者を得んや。尙ほ無上正等菩提すら得ず、況んや能く無上正等菩提を證する者を得んや。尙ほ一切智智すら得ず、況んや能く一切智智を證する者を得んや。尙ほ眞如すら得ず、況んや能く眞如を證して如來を成ずる者を得んや。尙ほ無生性すら得ず、況んや能く無生性を證する者を得んや。尙ほ菩薩すら得ず、況んや能く佛菩提を證する者を得んや、尙ほ十力四無所畏すら得ず、況んや能く十力四無所畏を成ずる者を得んや。尙ほ法すら得ず、況んや能く說法する者を得んをや。憍尸迦、具壽善現は一切法に於て[五]遠離住無所得住に住せり。[六]諸の菩薩の住する所の般若波羅蜜多微妙の行住に比ぶるに百分の一に及ばず、千分の一に及ばず、乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。憍尸迦、是の諸の菩薩の住する所の般若波羅蜜多微妙の行住は如來住を除き餘の菩薩及び諸の聲聞獨覺等の住に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲り。是を以ての故に、憍尸迦、若し諸の菩薩一切有情衆の中に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲らんと欲せば當に般若波羅蜜多に住すべしと。

【四】般若の行住の最勝たる所以を明す。

【五】遠離住等。有所得を離るゝなり。

【六】善現の自在なるも菩薩の行住微妙に及ばず。

[七]爾の時衆中の無量無數の三十三天法を聞きて歡喜し各天上の微妙の香花を取りて世尊及び諸の菩薩に奉散し、六百の苾芻は倶に座より起ちて右膝を地に著け佛に向ひて合掌するに佛の神力の故に各掌中に於て微妙の香花自然に盈滿す。是の苾芻衆踊躍歡喜して各此の花を以て佛の上に散じ奉る。現に散花し已て同じく發願して言はく、我れ等斯の勝善根力を用て願くは常に甚深般若波羅蜜多微妙の行住に安住して速に無上正等菩提に趣かんことをと。

[八]爾の時世尊卽便ち微笑して佛の常法の如く其の面門より種種の光を放ちたまふに靑黃赤白紅紫碧綠金銀頗胝にして無邊の諸佛の國土を傍照し上梵世に至り下[九]風輪に徹し、漸く復た還り來て佛を繞り右に轉じ三匝を經已て頂上より入る。時に阿難陀卽ち座より起ち佛を禮し合掌して言さく、世尊、何の因何の緣もて此の微笑を現じたまふやと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、[一〇]此の諸の苾芻は當來世の星喩劫の中に於て皆作佛することを得べし同じく散花と名づけ十號を具足し聲聞僧の數一切皆等しく佛壽も亦た二十千劫に等しく、所住の處に隨て五色の花を雨さん。此の因緣に由るが故に我れ微笑す。若し諸の菩薩最勝住に安住するを得んと欲せば當に般若波羅蜜多に住すべし。

若し諸の菩薩如來住に安住するを得んと欲せば當に般若波羅蜜多に住すべし。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩精進して甚深般若波羅蜜多を修行して究竟せしめば是の諸の菩薩は先世に或は人中より沒し已て還て此の處に生じ、或は覩史多天上より沒して人間に來世せるなりと。所以は何ん、是の如き二處は般若波羅蜜多を行じ易くして餘處に非ざるが故なり。慶喜當に知るべし、如來は現に、若し諸の菩薩の精進して甚深般若波羅蜜多を修行し身命財に於て顧る所無くんば定めて無上正等菩提に於て不退轉を得るを見ると。復た次に慶喜、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多を聽聞し受持し讀誦し書寫して菩薩乘に住せる善男子等に示現勸導讃勵慶喜せば是の諸の菩薩は曾て過去無量の佛所に於て諸の善根を種ゑたるなり。唯だ聲聞獨覺等の所のみに非ず。復た次に慶喜、若し諸の菩薩般

【七】帝釋諸天散花供養す。
【八】佛、微笑を現じ、その因緣を明す。
【九】風輪。此世界の最下底をいふ。
【一〇】第十八姉妹品の因緣に對應す。

若波羅蜜多を修學して驚かず怖かず受持讀誦し繫念思惟し若しは法若しは義若しは文若しは意旨善く通達して隨順し修行せば是の諸の菩薩は則ち現に我れ等如來應正等覺を見ると爲すと。復た次に慶喜、若し諸の菩薩是の如き甚深般若波羅蜜多の所有る義趣を說くを聞きて深く信解を生じ毀謗を生ぜず沮壞す可からずんば是の諸の菩薩は已に曾て無量の諸佛を供養し諸の佛所に於て多く善根を種ゑ亦た無量の善友の攝する所と爲れるなり。[二]復た次に慶喜、若し諸の有情能く如來應正等覺の勝福田に於て種うる所の諸の善根もて定めて當に或は聲聞果或は獨覺果或は如來果を得べしと雖も、而かも無上正等菩提を證せんには要らず般若波羅蜜多甚深の義趣に於て善く達して礙り無く精進して諸の菩薩行を修行し極めて圓滿ならしむ。是の故に慶喜、我れ般若波羅蜜多甚深の經典を以て汝に付囑す。應に正しく受持讀誦し通利して忘失せしむること莫れ。慶喜當に知るべし、[三]此の般若波羅蜜多甚深の經典を除き諸餘の我が說く所の法を受持するに設ひ忘失する有らんも、其の罪尙ほ輕し。若し般若波羅蜜多甚深の經典に於て善く受持せずして下一句に至るまで忘失する所有らば其の罪甚だ重しと。慶喜當に知るべし、若し般若波羅蜜多甚深の經典に於て下一句に至るまで能善く受持して忘失せずんば福を獲ること無量なり。若し般若波羅蜜多甚深の經典に於て善く受持せずして下一句に至るまで忘失する有らば獲る所の重罪は前の福の量に同じ。是の故に慶喜、我れ般若波羅蜜多甚深の經典を以て慇懃に汝に付す。當に正しく受持讀誦し通利して理の如く思惟し廣く他の爲に說き分別開示し受持者をして究竟して文義意趣を解了せしむべし。所以は何ん、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に於て受持讀誦し究竟通利し理の如く思惟し、廣く他の爲に說き分別開示し其れをして了し易からしめば是の諸の菩薩は則ち爲れ過去未來現在の諸佛の甚深の法藏を受持して廣く有情の爲に宣說開示するなり。慶喜當に知るべし、若し有情類殷淨心を起し現に我が所に於て種種上妙の供具を持て供養恭敬して懈倦無からんと欲せば當に般若波羅蜜多に於て至心に聽聞し受持讀誦し精勤

【二】佛、慶喜に般若經典を付囑し、これが受持に於ける功罪を明す。

【三】般若受持を說く嚴重なり。

修學し理の如く思惟し廣く有情の爲に分別解說すべし。或は復た書寫して種種に莊嚴し供養恭敬して暫くも捨つるを得ること勿れ。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多を供養恭敬尊重讃歎せば則ち爲れ現前に我れ及び十方三世の諸佛を供養恭敬尊重讃歎するなりと。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を聞きて殷淨心を起して恭敬し愛樂せば卽ち過去未來現在の諸佛の無上正等菩提に於て殷淨心を起して恭敬し愛樂するなり。慶喜、汝[三]若し我れを愛樂し我れを捨てずんば亦た當に般若波羅蜜多甚深の經典を愛樂し捨てず、下一句に至るまで忘失せしむること勿るべし。[四]慶喜、我れ是の如き般若波羅蜜多甚深の經典を說いて付囑する因緣は設ひ一劫乃至殑伽沙數の大劫を經るも亦た盡くすこと能はず。要を擧げて之を言はば我れは既に是れ汝等の大師なるが如く甚深般若波羅蜜多も當に知るべし亦た是れ汝等が大師なりと。三世の佛は是れ諸の天人阿素洛等の無上の大師なるが如く甚深般若波羅蜜多も當に知るべし亦た是れ世間の天人阿素洛等の無上の大師なりと。汝等天人阿素洛等は我れを敬重す、亦た當に甚深般若波羅蜜多をも敬重すべし。是の故に慶喜、我れ無量の善巧方便を以て汝に般若波羅蜜多甚深の經典を付す。汝當に受持して忘失せしむること無かるべし。我れ今此の甚深般若波羅蜜多を持て諸の天人阿素洛等無量の大衆に對し、汝に付囑す、應に正しく受持して忘失せしむること勿るべし。慶喜、我れ今實言もて汝に告ぐ、諸の淨信有る善男子等、若し佛法僧寶三世諸佛の無上菩提を捨てざらんと欲せば定めて甚深般若波羅蜜多を捨つべからず。是の如きを名づけて、我れ等諸佛の諸の弟子を教誡教授する法と爲す。慶喜當に知るべし、若し愛樂して般若波羅蜜多を聽聞し受持讀誦し究竟通利し理の如く思惟し書寫解脫せば疾く無上正等菩提を證せんと。所以は何ん、諸佛の無上正等菩提は皆般若波羅蜜多に依りて生ずることを得るが故なり。是の故に慶喜、若し諸の菩薩無上正等菩提を得んと欲せば當に勤め精進して般若波羅蜜多を修學すべし。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は是れ諸の菩薩摩訶薩の母にし

【三】釋尊を愛樂し捨てざるは般若を愛し捨てざるなり。

【四】佛、慶喜に般若經典付囑の因緣を明す。

て能く菩薩をして疾く菩提を證せしむればなり。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩法滅せんと欲する時般若波羅蜜多を護持せば則ち爲れ三世諸佛の一切智智を護持するなり、亦た爲れ三世諸佛の無上の法寶をも護持するなりと。[一五]慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩勤めて六種波羅蜜多を學せば疾く無上正等菩提を證せんと。是の故に慶喜、我れ六種波羅蜜多を以て更らに汝に付囑す。當に正しく受持して忘失せしむること勿るべし。所以は何ん、是の如き六種波羅蜜多は是れ三世の佛の無盡の法藏なればなり。慶喜當に知るべし、十方三世の諸佛世尊の說きたまふ所の法要は皆是れ六種波羅蜜多無盡の法藏の流出する所なり。十方三世の佛及び弟子は皆是の如き無盡の法藏に依り精勤修學して已正當に無上正等菩提を證して已正當に無餘涅槃に入れり。復た次に慶喜、假使ひ汝、聲聞乘の人の爲に聲聞法を說きて此の法に由るが故に三千大千世界の有情一切皆阿羅漢果を得れも猶ほ未だ我が弟子の事を作すと爲さず。我れ汝の事に於て未だ甚しく隨喜せず。汝若し能く菩薩乘の人の爲に一句も甚深般若波羅蜜多相應の法を宣說せば卽ち名づけて我が弟子の事を作せりと爲す。我れ此の事に於ては深く隨喜を生ず。[一六]復た次に慶喜、假使ひ三千大千世界の一切の有情俱時に阿羅漢果を證得せんに彼の成就する所の施戒修性の諸の福業事は、意に於て云何、寧ろ多しと爲すや不やと。慶喜對へて曰はく、甚だ多し世尊と。佛、慶喜に告げたまはく、若し聲聞有りて能く菩薩の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣說して一晝一夜を經・展轉して乃至彈指の頃を經るに是の聲聞人の獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。何を以ての故に、此の聲聞人の獲る所の福聚は一切の聲聞獨覺の諸の善根に超過せるが故なり。復た次に慶喜、若し菩薩有りて聲聞人の爲に聲聞法を說かんに假使ひ三千大千世界の一切の有情此の法に由るが故に悉く皆阿羅漢果を證得せば、意に於て云何、是の如き菩薩の獲る所の福聚は寧ろ多しと爲すや不やと。慶喜對へて曰く、甚だ多し世尊と。佛、慶喜に告げたまはく、若し菩薩有りて諸の有情の爲に般若波羅蜜多相應の法を宣說して一晝夜を經、展轉し

【一五】佛、更に慶喜に六度を付囑す。

【一六】般若相應の法を宣說して獲る福聚の大なることを明す。

て乃至彈指の頃を經んに是の如き菩薩の獲る所の福聚は甚だ前よりも多し。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多相應の法施は一切の聲聞獨覺相應の法施及び彼の二乘の諸の善根に超過するが故なり。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩是の如き善根を成就し憶念して復た無上正等菩提に於て退轉有りとせば是の處有ること無しと。

第五分[一] 見不動佛品第二十四

[二]爾の時如來四衆に圍繞せられて般若波羅蜜多を讃説し阿難陀に付し受持せしめ已て復た一切の苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦天龍藥叉健達縛等の大衆の會中に於て神通力を現じ、衆をして皆不動如來應正等覺の聲聞菩薩の大衆に圍繞せられて大海の動す可からざるが如き會の爲に正法を宣説するを見及び彼の土の嚴淨の相を見せしむ。其の聲聞僧は皆阿羅漢にして諸漏已に盡きて復た煩惱無く眞自在を得、心善く解脫し慧善く解脫して調慧馬の如く亦た大龍の如し。已に所作を作し已に所辦を辦じ、諸の重擔を捨てて己利を逮得し諸の有結を盡くし正智もて解脫し心自在なる第一究竟に至れり。其の菩薩僧は一切皆衆の望みて識る所、陀羅尼及び無礙辯を得、無量の不可思議不可稱量殊妙の功德を成就せり。佛神力を攝めて此の四衆天龍藥叉健達縛等をして復た彼の不動如來應正等覺聲聞菩薩及び餘の大衆並に彼の佛土の嚴淨の相を見ざらしむ。彼の佛の衆會及び嚴淨土は皆此の土の眼根の所照に非ず。所以は何ん、佛神力を攝めたまへば彼の遠境に於ては見緣無きが故なりと。爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、不動如來應正等覺の國土衆會を汝更らに見るや不やと。阿難陀言はく、我れ復た彼の事を見ず、此の眼の所行の境に非ざるが故にと。[三]時に佛復た阿難陀に告げて言はく、彼の如來の衆會國土は此の土の眼の所行の境界に非ざるが如く當に知るべし諸法も亦復た是の如し、眼根等の所行の境界に非ず。慶喜當に知るべし、法は法を行ぜず、法は法を見ず、法は法を知らず、法は法を證せずと。慶喜當に知るべし、一切の法性は能行者無く、能見者無く、能知者無く、能證者無く動ずる無く作す無しと。所以は何ん、一切法は皆作用無く能取所取倶に虛空の如く性遠離なるを以ての故に、一切法は不可思議にして能所の思議皆幻士の如く性遠離なるを以ての故に、一切法は作受者無く光影等の如く堅實ならざるを以ての故に。慶喜當に知るべし、若し諸の善

【一】佛力を以て不動如來の大衆に圍まれるを示すが故に名づく。
【二】佛、慶喜に般若を付囑し、神通力を以て佛土の嚴淨相を見せしむ。
【三】更に般若修學に就いて明す。

薩能く是の如く行ぜば般若波羅蜜多を行ずと名づけ諸の法相に於て執著する所無し。若し諸の菩薩能く是の如く學せば般若波羅蜜多を學すと名づけ一切法に於て取捨する所無し。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩、一切の波羅蜜多速に疾く圓滿して一切法究竟の彼岸に至るを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學すべし。所以は何ん、是の如く學する者は諸學の中に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲ればなり、一切世間を利益安樂す。慶喜當に知るべし、若し諸の菩薩能く是の如く學せば依怙無き者には爲に依怙と作り、諸佛世尊は般若波羅蜜多を修學するを開許し稱讃したまふと。慶喜當に知るべし、諸佛菩薩は此の學を學し已て此の中に安住して能く右の手若しは右の足の指を以て擧げて三千大千世界を取て他方に擲げ置き或は本處に還へさんに其の中の有情は知らず覺らず損する無く怖るる無し。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多の功德威力は思議す可からざればなり。過去未來現在の諸佛及び諸菩薩は此の般若波羅蜜多を學して去來今及び無爲法に於て悉く皆無礙の智見を獲得す。是の故に慶喜、我れは能く甚深般若波羅蜜多を學するは諸學の中に於て最爲り勝爲り尊爲り高爲り妙爲り微妙爲り上爲り無上爲りと說く。慶喜當に知るべし、諸の甚深般若波羅蜜多の量の邊際を取らんと欲する者有らば愚癡者の虛空の量及び邊際を取らんと欲するが如し。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多の功德は無量無邊際なるが故なり。慶喜當に知るべし、我れ終に甚深般若波羅蜜多は[四]名身等の如く量邊際有りと說かずと。所以は何ん、名句文身は是れ有量の法、甚深般若波羅蜜多の功德勝利は有量の法に非ざればなり。名身の事は能く般若波羅蜜多の功德勝利を量るに非ず亦た般若波羅蜜多の功德勝利は是れ彼の所量に非ずと。[五]具壽慶喜便ち佛に白して言さく、何の因緣の故に甚深般若波羅蜜多は說いて無量と爲すやと。佛、慶喜に告げたまはく、甚深般若波羅蜜多は性無盡の故に性遠離の故に說いて無量と爲す。慶喜當に知るべし、三世の諸佛は皆般若波羅蜜多を學し究竟圓滿して無上正等菩提を證得し諸の有情の爲に宣說開示す

【四】名身等。分別のために名、語を列ね現はすが故に有量有相有限なり。

【五】般若を無量となす因緣を明す。

るも而かも此の般若波羅蜜多は常に滅盡無し。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は太虛空の如く盡す可からざるが故なり。諸の甚深般若波羅蜜多を盡さんと欲する有らば即ち爲れ虛空の邊際を盡さんと欲するなり。是の故に慶喜、甚深般若波羅蜜多は說いて無盡と爲し、無盡に由るが故に說いて無量と爲すと。爾の時善現是の念言を作さく、此の處の甚深を我れ當に佛に問ふべしと。是の念を作し已て便ち佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は如來何が故に說いて無盡と爲したまふやと。佛、善現に告げたまはく、甚深般若波羅蜜多は猶ほ虛空の如く盡す可からざるが故なりと。[六]具壽善現復た佛に白して言さく、云何が菩薩は般若波羅蜜多を引發するやと。佛、善現に告げたまはく、諸の菩薩衆は應に諸の色受想行識皆無盡なりと觀ずべきが故に般若波羅蜜多を引發し、應に無明乃至老死皆無盡なりと觀ずべきが故に般若波羅蜜多を引發す。是の如く善現、諸の菩薩衆は應に是の如く般若波羅蜜多を引發することを作すべし。善現當に知るべし、諸の菩薩衆は是の如く[七]十二緣起を觀察して[八]二邊を遠離し、是の如く十二緣起の中無く邊無きを觀察す。是の諸の菩薩は妙觀と共ならず、謂ゆる要らず妙菩提の座に安坐して方に能く是の如く如實に、十二緣起の理趣甚深なること太虛空の如く、盡す可からざるが故にと觀察して便ち能く一切智智を證得す。善現當に知るべし、若し諸の菩薩虛空の如き無盡行相を以て深般若波羅蜜多を行じて如實に十二緣起を觀察せば聲聞及び獨覺地に墮せずして疾く無上正等菩提を證すと。善現當に知るべし、諸の菩薩衆の若し無上正等菩提に於て退轉する者有らば、皆是の如き作意方便善巧に依らず、如實に、諸の菩薩衆の深般若波羅蜜多を行ずるを知らざるに由る、云何が應に無盡行相を以て般若波羅蜜多を引發して如實に十二緣起を觀察すべきか。善現當に知るべし、諸の菩薩衆の若し無上正等菩提に於て退轉する者有らば皆般若波羅蜜多方便善巧を引發するを遠離するに由ると。善現當に知るべし、諸の菩薩衆若し無上正等菩提に於て退轉せざる者は一切皆般若波羅蜜多方便善巧を引發するに由ると。是の諸の菩薩は

【六】菩薩の般若を引發する所以を明す。

【七】十二緣起。十二因緣、十二支ともいふ。三界の迷の因果を十二に分ちて衆生輪廻のさまを示すとする。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の稱。

【八】二邊。有邊と無邊をいふ。又苦邊と樂邊となり。

是の如き方便善巧に依りて深般若波羅蜜多を行じ。虚空の如き無盡行相を以て如實に十二縁起を觀察するに由る。是の如く縁起法を觀察する時法の因無くして生ずる有るを見ず、法の性相常住なる有るを見ず、法の有作受者有るを見ず。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ虚空の如き無盡行相を以て如實に十二縁起を觀察し般若波羅蜜多を引發して能く疾く一切智智を證得す。善現當に知るべし、若し時に菩薩如實に十二縁起を觀察して般若波羅蜜多を引發せば是の時菩薩は都て色受想行識を見ず、此の佛の世界を見ず、彼の佛の世界を見ず、法の能く此彼の諸佛の世界を見る有るを見ず。若し諸の菩薩能く是の如く甚深般若波羅蜜多を行ぜば是の時惡魔極めて憂惱を生ずること毒箭に中れるが如し。譬へば人有りて父母の卒喪するに身心苦痛するが如く惡魔も亦た爾なりと。[九] 具壽善現便ち佛に白して言さく、一惡魔のみ諸の菩薩の深般若波羅蜜多を行ずるを見て極めて憂惱を生ずること毒箭に中れるが如しと爲すや、遍ねく三千大千世界の一切の惡魔も皆亦た是の如しと爲すやと。佛、善現に告げたまはく、三千大千世界に遍滿せる一切の惡魔、諸の菩薩の深般若波羅蜜多を行ずるを見ば極めて憂惱を生じ毒箭に中れるが如く各本座に於て自ら安んずること能はず。所以は何ん、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多に住せば世間の天人阿素洛等其の短を伺求するも皆得ること能はず亦復た擾亂し退壞すること能はざればなり。是の故に善現、若し諸の菩薩、無上正等菩提を證せんと欲せば當に勤めて甚深般若波羅蜜多に安住すべし。若し諸の菩薩能く勤めて甚深般若波羅蜜多に安住せば則ち能く布施淨戒安忍精進般若波羅蜜多を修滿せん。若し諸の菩薩能く正しく甚深般若波羅蜜多を修行せば便ち能く一切の波羅蜜多方便善巧を具足し、修滿し諸の魔事起るも皆能く如實に覺知して遠離せん。是の故に善現、若し諸の菩薩正しく方便善巧を攝受せんと欲せば應に正しく甚深般若波羅蜜多を修行すべし。[一〇] 若し時に菩薩甚深般若波羅蜜多を修行し引發せば是の時無量無邊世界の諸佛世尊皆共に是の菩薩を護念して應に是の念を作すべし、彼の諸の如來應正等覺も亦

【九】菩薩の般若行を見て惡魔憂惱を生ずることを明す。

【一〇】更に般若行者の能く諸佛に護念され、その獲る所の福聚の大なるを說く。

た般若波羅蜜多より一切智を生ずと。是の念を作し已て復た應に思惟すべし、諸の如來應正等覺の如く證すべき所の法は我れも亦た當に證すべしと。是の如く善現、若し諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を修行し引發して是の思惟を作さば彈指の頃を經て生ずる所の福聚も、有所得の諸の菩薩衆の殑伽沙數の如き大劫を經て布施を修行して獲る所の功徳に勝らん、何に況んや能く一日半日に於てせんをや。是の諸の菩薩は久しからずして當に不退轉地に住して常に如來應正等覺の共に護念する所と爲るべし。諸の菩薩衆若し諸佛の護念する所と爲らば定めて無上正等菩提を證して聲聞獨覺等の地に墮ちず、諸の惡趣に於て決定して生ぜず、常に天人に生じて諸佛を離れざるべし。若し諸の菩薩甚深般若波羅蜜多を修行し引發して諸佛の功徳を憶念し思惟せば彈指を經る頃にすら尚ほ無邊の功徳勝利を獲、況んや一日を經若しは一日を過ぎ勇猛精進して甚深般若波羅蜜多を修行し引發して諸佛の功徳を憶念し思惟せんをや。香象等の諸の菩薩衆の不動佛の所にて常に梵行を修して般若波羅蜜多を離れざるが如くならんと時に薄伽梵是の經を說き已て無量の菩薩摩訶薩衆慈氏菩薩而かも上首と爲り、具壽善現舍利子等の諸の大聲聞並に諸の天龍健達縛等の一切の大衆、佛の所說を聞きて皆大いに[二]歡喜し信受して奉行しき。

【二】正法を得て心喜び之を信奉するにあるも、般若自在の生活に大歡喜中に正行正命に活躍するに至るを眞に聽き、能く奉ずるものと云ふべし。

第六分解說

大般若の首卷より第五百六十五卷に至る五會は前に述ぶる如く第一會大本、第二會大品、第三會大鈔、第四會小品、第五會小略として廣略の別あるも同種經典たり。之に反して第六會以下は般若義に於ては共通するも、各會獨立の内容組織を有す。第六分は舊に勝天五般若として大正藏に 231 第八 (687a-726a) 收め、縮藏月八 (53b-91a) に載する所、印度優禪尼國の王子月婆首那 Upasunya (陳言高空) の譯せるもの、譯者は魏齊を經て梁武に抑留せられ總監知外國使命となれり、會々太淸二年(548)于闐沙門求那跋陀羅、此經の梵文十六品を賚らして建業に達す。首那敬戀して畢命弘宣せんことを企て、授けられしも、侯景の亂により譯する能はず。陳の文帝天嘉六年(565)に至り始めて譯出して七卷とす。原本は Suvikrānta vikrāmiparipri-cchā prajñā pāramitā と云ひ、通達、顯相、法界、念處、法性、平等、現相、無所得、證勸、述德、現化、陀羅尼、勸誡、二行、讃歎、付囑の十六品より成る。

大般若にありては第五百六十六卷より第五百七十三卷に至る八卷 (220 第七 921a—963c) に載する所、十七品あり。今新舊二本比較を略表すれば

二本比較

A 勝天王般若			B 第六分		
一、通達	一、	(231 第八 687a—687c28)	一、緣起	五六六	(220 第七 921—922b)
同		(同 —690c25)	二、通達		(同 —925c)
二、顯相		(同 —693c16)	三、顯相	五六七、	(同926a—929b)
三、法界	二、	(同 —697b14)	四、法界	五六七…五六八、	(同 —933b)
四、念處		(同 —700b27)	五、念住	五六八、	(同 —936b)
五、法性	三、	(同 —706b5)	六、法性	五六九、	(同936c—942a)

六、平　　等	四、	(同　—708b3)		七、平　　等	五七〇、	(同942b—944b)
七、現　　相		(同　—711b8)		八、現　　相		(同　—947b)
八、無所得	五、	(同　—714b4)		九、無所得	五七一、	(同　—950c)
九、證　　勸		(同　—716b25)		一〇、證　　勸		(同　—953a)
一〇、述　　德	六、	(同716c1—718b5)		一一、顯　　德	五七二、	(同　—954c)
一一、現　　化		(同　—719b28)		一二、現　　化		(同　—656a)
一二、陀羅尼		(同　—721a6)		一三、陀羅尼		(同　—957b)
一三、勸　　誡	七、	(同　—722a)		一四、勸　　誡	五七二—五七三、	(同　—959b)
一四、二　　行		(同　—723c9)		一五、二　　行	五七三、	(同　—961c)
一五、讚　　歎		(同　—724a3)		一六、讚　　歎		(同　—963a)
一六、付　　囑		(同　—725c2)		一七、付　　囑		(同　—963c)

上表に依りて明かなるが如く緣起一品を開出せる外、新譯多く舊譯と異ならず、單に原文に於て一致せるのみならず、舊譯月婆首那譯を參照せることを察せしむ。本經は至元勘同錄には梵本缺とせるものにて、廿葉(正[illegible])には之を缺き前篇に編入せらる、後出經と見るべき一理由を具ふ。本經は元より初出般若經と見るべきものにあらざるも、般若經意を著しく逸出するものにあらず、粗ぼ同一時限に屬するものとす。帝釋、最勝天王を主として問答せしめ、それが前佛受記の因緣深きを語る。即ち般若信受の因緣よりして之を信受せる宿緣深厚を語る點が授記經典に傚れるを示す。又小品等の善現を中心とせるに本經には諸天子、十方來の菩薩の外、舍利弗阿難を點綴せるに止むることが通途の經典體に歸せるを表はすと云ふべし。且つ法性眞如實際に重きを置き、それが般若不可得無所住たるを主張しながら、有無の法相を說き、動もすれば敎義の分別を示さんとするも亦前五分の古般若と異る點と云ふを得べし、最後に各品の大要を摘示して第六會の解說と爲す。

第一、緣起品　比丘、菩薩、諸天、大衆十方より來詣して說法の序緣とする。

第二、通達品　一法によりて能く一切法に通達するを明す殊に般若を修學すれば十波羅蜜に圓滿することを詳にす。

第三、顯相品　最勝天の問に對し佛は般若の相を五大等の相を以て喩說す。
第四、法界品　般若修學の菩薩の法界に通達する所以を明し、菩薩示現の諸相に及ぶ。
第五、念住品　般若行の菩薩の四念處を主として十二頭陀行等を說き、その供養する諸佛の威神功德を述ぶ。
第六、法性品　佛・法性の甚深微妙不思議なるを明す。法性眞如より之を行する菩薩の自在二利成滿の功德を說き、佛說への讃歎を捧ぐ。
第七、平等品　法性平等の義を明し對機說法の相を詳にす。
第八、現相品　菩薩能く般若を行し善巧方便により種々神通變化して有情を度することを明す。
第九、無所得品　一切法は文言を離れ不可得平等なるを明す。不可得なるが故に授記あり。般若により菩提心を發し不退轉を得べく、不放逸正念を明し、有無を分別し、正法を宣揚し陀羅尼功德を示す。
第十、證勸品　轉輪王正法を聽き歡喜供養す。最勝、菩提道を說き化益の爲に色像を示現する所以を述ぶ。
第十一、顯德品　般若を行するは時處無量なるを示し、菩薩の道非道を分ち進みて一切法これ菩薩道なることを明かにす、後に佛、曼殊最勝と數番の問答ありて法義を詳にす。
第十二、現化品　佛身の有情利益を說き辯才、不入陀羅尼の義を明らかにす。
第十三、陀羅尼品　菩薩の陀羅尼證得を喩說し陀羅尼種々功德を明し佛陀供養の般若供養を眞とし最とするを示す。
第十四、勸誡品　般若を信受する功德甚大、毀謗の罪愆も重大なるを說く。
第十五、二行品　菩薩の行般若が敎化となるを說き、甚深、廣大、功德を境界とし自性、方處、諸住、一異、利樂の五不可思議を主とし、對機方便量りなきも三十二相八十隨好はその一示現として列擧す。
第十六、讃歎品　曼殊室利、妙色天子、善名天子、大梵天王等各讃偈を奉る、佛重ねて般若の功德を說く。
第十七、付囑品　阿難に付囑し受持せしむ一萬二千菩薩、五百天子釋梵執金剛等各この深般若を護持すべきを誓ふ。

第六分緣起品第一[一]

是[二]の如[三]く我れ聞きぬ、一時、薄伽梵[四]、王舍城の鷲峯山の頂に住りたまへり。大苾芻衆四萬二千人と俱なりき。皆阿羅漢にして諸[五]漏已に盡きて復た煩惱無く眞自在を得、心善く解脫し慧善く解脫し、調慧馬の如く亦た大龍の如し。已に所作を作し已に所辦を辦じ諸の重擔を棄てて己利を逮得し諸の有[六]結を盡し正智もて解脫して心自在なる第[七]一究竟に到れり。阿難陀の獨り學地に居して預流果を得たるをば除く。所謂具壽解憍[八]陳那、大迦葉波、笈[九]防鉢底、羯[一〇]麗筏多、大[一一]采菽氏、大[一二]迦多衍那、畢[一三]蘭陀筏蹉、舍利子、滿慈子、薄俱羅、鄔[一四]波羅、羅怙羅、無[一五]滅、善現而かも上首爲り。復た七萬二千の菩薩摩訶薩有り、皆已に甚深の法性に通達し調順にして化し易く妙行平等にして無礙陀羅尼門を得、一切有情の眞淨の善友なり。能く不退微妙の法輪を轉じ世間を哀愍して法藏を護持す。已に曾て無量の如來を供養し三寶を紹隆して能く絕えざらしめ、諸佛の甚深の境界に通達して[一六]一生所繫の法王の眞子なり。常に能く佛の轉じたまふ正法輪を紹ぎて世間に處すと雖も而かも染する所無し。是の如き等の無量の功德を具し、此の佛國より或は他方より法を聽かんが爲の故に佛所に來詣す。所謂寶相菩薩、寶手菩薩、寶印菩薩、寶髻菩薩、寶冠菩薩、寶峯菩薩、寶海菩薩、寶焰菩薩、寶幢菩薩、寶藏菩薩、金藏菩薩、淨藏菩薩、德藏菩薩、定藏菩薩、智藏菩薩、日藏菩薩、月藏菩薩、如來藏菩薩、蓮華藏菩薩、金剛藏菩薩、解脫月菩薩、普賢菩薩、普音菩薩、普戒菩薩、普行菩薩、普眼菩薩、廣眼菩薩、蓮華眼菩薩、智慧菩薩、上慧菩薩、勝慧菩薩、蓮華慧菩薩、金剛慧菩薩、日光菩薩、月光菩薩、智光菩薩、智德菩薩、賢德菩薩、華德菩薩、日稱菩薩、月稱菩薩、慈無染菩薩、妙音菩薩、大音王菩薩、師子吼菩薩、師子遊戲菩薩なり。賢首菩薩等の十六賢菩薩、慈

【一】 一會の大衆、十方來の菩薩を列ねて說經の序緣とするが故に名づく。
【二】 比丘、菩薩、諸天、大衆の來詣を明す。
【三】 如是我聞、證信序、持經者この般若を正しく信ずるを示す。
【四】 薄伽梵(Bhagavān)。有德、巧分別と譯す。敎主の佛なり。
【五】 諸漏。三界の欲色無色煩惱。
【六】 有結。二十五有の結果を生ずる原因たる煩惱をいふ。
【七】 第一究竟。根本的基礎。
【八】 憍陳那 (Kauṇḍinya)。五比丘の筆頭、佛最初の弟子なり。
【九】 笈防鉢底(Gavāmpati)。比丘の名。牛相と譯す、解律第一。
【一〇】 羯麗筏多(Revata)。比丘の名。
【一一】 大采菽氏。摩訶目揵連(Mahāmaudgalyāyana)の譯。佛十大弟子の一。
【一二】 大迦多衍那 (Mahākātyāyana)。舊稱大迦旃延。佛十大弟子の一。
【一三】 畢蘭陀筏蹉(Pilinda-vatsa)。比丘の名。餘習と譯す。

氏菩薩等の賢劫の諸菩薩、觀自在菩薩、妙吉祥菩薩而かも上首爲り。復た無量の四大王衆天有り四大天王而かも上首たり。復た無量の三十三天有り帝釋天王而かも上首爲り。復た無量の夜摩天有り蘇夜摩天王而かも上首爲り。復た無量の覩史多天有り珊覩史多天王而かも上首爲り。復た無量の樂變化天有り善化天王而かも上首爲り。復た無量の他化自在天有り自在天王而かも上首爲り。復た無量の梵衆等の天有り大梵天王而かも上首爲り。復た無量の淨居天有り大自在天而かも上首爲り。是の如き天王諸の眷屬を將ひ法を聽かんが爲の故に佛所に來詣す。復た無量の阿素洛王有り、所謂具力阿素洛王、堅蘊阿素洛王、雜威阿素洛王、暴執阿素洛王而かも上首爲り、各無量百千の眷屬を領し法を聽かんが爲の故に佛所に來詣す。復た無量の大力龍王有り、所謂無熱龍王、猛意龍王、海住龍王、工巧龍王而かも上首爲り、各無量百千の眷屬を領し法を聽かんが爲の故に佛所に來詣す。復た無量の藥叉大神人非人等並に諸の眷屬有りて法を聽かんが爲の故に佛所に來詣す。時に鷲峯山の縱廣四十[17]踰繕那量なるも大衆は地及び虛空に充滿して間隙有ること靡し。

[18]爾の時世尊[19]師子座に處したまへり。無量の大衆前後に圍遶して供養尊重恭敬讚歎し一心に合掌して尊顏を瞻仰す。是に於て如來神通力を現じて面門より種種の色光を出し普ねく十方無邊世界を照らして希有の事を現じたまふに還て佛所に至り[20]右遶三匝して面門に歸す。[21]是の時東方に此の佛土を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り、名づけて莊嚴と曰ひ、佛を普光[22]如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵と號づく。時に現に彼れに在して安隱に住持し諸の菩薩摩訶薩衆の爲に一乘相應の正法を宣說したまへり。彼の佛の世界は尙ほ二乘の名すら有るを聞かず、況んや精勤して其の法を修する者有らんをや。彼の諸の菩薩は皆無上正等菩提に於て不退轉を得、彼の諸の有情は[23]段食を假らず但だ解脫靜慮[24]等至を資とす。彼の界は日月等の光を待たず唯だ佛身の光晝夜に照らすのみ。其の土は毒刺礫な谿谷山陵有ること無く地の平なるこ

【一四】鄔波離 (Upali)。持律第一の比丘。もと悉達太子の執事たりし人。近取、近執と譯す。
【一五】無滅。阿那律 (Aniruddha) の譯。佛十大弟子の一。
【一六】一生所繫。一生補處なり。
【一七】踰繕那—舊に由旬と云ふ。
【一八】佛奇瑞を現じてその因緣を明す。
【一九】師子座。如來の座の尊稱。
【二〇】右遶三匝。所尊を恭敬する爲に仰望の至誠を表する儀禮なり。
【二一】十方の世界及びこれに居る佛、菩薩の名を擧ぐ。
【二二】如來等。如來乃至佛薄伽梵を佛の十號となす。
【二三】段食。觸食、思食、識食と共に四食の一。肉菜等の有形の食物を云ふ。分段數量をなすが故なり。
【二四】等至。定七名の一。三摩鉢底 (Samapatti) の譯。

と掌の如し。彼れに菩薩有り名づけて離障と曰ふ。既に此の光を見て心に踴躍を懷き諸の菩薩摩訶薩衆と前んで佛所に詣り雙足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して白して言さく、世尊、何の因何の緣にて而かも此の瑞有ると。時に普光佛、離障に告げて言はく、西方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り、名づけて[二五]堪忍と曰ひ、佛を釋迦牟尼如來と號づけ十號具足す。現に菩薩摩訶薩衆の爲に大般若波羅蜜多を說きたまへり。彼の因緣に由るが故に斯の瑞を現ずと、離障菩薩聞き已て白して言さく、我れ今堪忍世界に往きて釋迦如來を觀禮供養して正法を聽受せんことを請ふ、唯だ願くは聽許したまへと。時に普光佛、離障に告げて言はく、今正しく是れ時なり汝宜しく速に往くべしと。離障許しを蒙り歡喜踊躍し卽ち無量の菩薩衆と俱に[illegible]に來至し佛足を頂禮し右遶三匝して退きて一面に坐しぬ。

[二六]南方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り淸淨花と名づけ、佛を日光と號づけ十號具足す。彼れに菩薩有り名づけて日藏と曰ふ。西方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り名づけて寶花と曰ひ、佛を功德光明と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り功德藏と名づく。北方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り名づけて淸淨と曰ひ、佛を自在王と號づく、彼れに菩薩有り名づけて廣聞と曰ふ。東南方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り名づけて火焰と曰ひ、佛を甘露王と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り不退轉と名づく。西南方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り淸淨巧德と名づけ、佛を智炬と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り名づけて大慧と曰ふ。西北方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り名づけて悅意と曰ひ、佛を妙香王と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り功德聚と名づく。東北方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り莊嚴と名づけ、佛を智上と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り名づけて常喜と曰ふ。上方に此を去ること十殑伽沙數

【二五】堪忍。娑婆(Sahā)の譯。勘忍土又は忍土ともいふ。

【二六】東方に例して南方等他方を例ふ。

の世界を過ぎて佛の世界有り名づけて[二七]不動と曰ひ、佛を金剛相と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り名づけて寶幢と曰ふ。下方に此を去ること十殑伽沙數の世界を過ぎて佛の世界有り月光明と名づけ、佛を金剛寶莊嚴王と號づけ十號具足す、彼れに菩薩有り名づけて寶信と曰ふ。是の如き一切皆東方の如しと。

【二七】不動—不動が國號となり寶幢菩薩と倶に上方に屬す。

第六分　通達品第二

〔一〕時に天王有り名づけて最勝と曰ふ。座より而かも起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して白して言さく、世尊、我れ少疑有り今佛に問ひたてまつらんと欲す、若し聞許を蒙らば乃ち敢て陳請せんと。是に於て佛、最勝天に告げて言はく、天王、如來應正等覺は疑問する所に隨て當に爲に之を決すべしと。時に最勝天既に佛の許しを蒙り踊躍歡喜して便ち佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は一法を修學して能く一切法に通達するやと。佛、最勝に告げたまはく、善哉善哉、能く如來に是の如き深義を問へり。諦かに聽け、諦かに聽きて善く之を思念せよ、汝の所疑の如き當に爲に開釋すべしと。最勝天曰はく、唯然願くは聞きたてまつらんと。

爾の時世尊、最勝に告げて曰はく、天王當に知るべし。諸の菩薩摩訶薩の一法を修學して能く一切法に通達すとは所謂般若波羅蜜多なり。〔三〕若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く布施淨戒安忍精進靜慮般若方便善巧妙願力智波羅蜜多に通達す。〔四〕天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く布施波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(イ)妙法施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる淨心を以て希願する所無く、他の爲に法を說くも名利を求めず但だ苦を滅せんが爲のみ。我れ能く彼れの爲に法を說くと見ず、彼れ聽くと見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(ロ)無畏施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる有情を觀ずること猶ほ父母兄弟親戚の如く一切の樂をして咸く我れに親附せしむ。何を以ての故に、無始の時より來た六趣に流轉して皆爲れ親戚たり。若し諸の有情怖畏の難に在らば尙ほ身命を以てすら而かも之を救拔す、況んや應に彼れに於て惱害を加ふべきをや。我れ能く彼れに無畏を施すを見ず、彼れの受くるを見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩

【一】一法によりてよく一切法に通達するを明すが故に名づく。
【二】佛、最勝王の問に對して、菩薩の能く一法を修學して一切法に通達することを明す。
【三】菩薩般若を修學せば能く六度十度などに通達するを明す。
【四】第一に般若を修學して能く布施波羅蜜多に通達するを明す。
(イ)般若……妙法施波羅蜜多。
(ロ)般若……無畏施波羅蜜多。

摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(ハ)資生施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる有情の須つ所に隨ひ資具を種種に施し其れをして十善業道を受行せしめ、我れ能く彼れに資具を施すを見ず、彼れの受くるを見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(ニ)亡報施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる施を行ずる時果報を望まず、菩薩は法爾として自ら應に布施すべく、我れ能く亡報施を行ずるを見ず、施報を見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(ホ)大悲施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる有情の貧窮老病にして救濟者無きを見ては大悲心を起して而かも誓願を發す、我れ無上正等覺を得ん時諸の有情の爲に歸依處と作り、有情の爲の故に少善根を以て菩提に廻向し、亦た我れ能く救濟を受くる者を救濟すと分別せずと。二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修行せば則ち能く(ヘ)恭敬施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる有情の須つ所の物に隨て尋で自ら敬奉して疲倦せしめず、我れ能く恭敬施を行ずるを見ず、彼れの受くるを見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(ト)尊重施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる有情に於て師僧想或は父母想の尊重心を起して施すに若し財物無くんば惠むに善言を以てし、我れ能く尊重施を行ずるを見ず、彼れの受くるを見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(チ)供養施波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる制多若しは僧の住處を見ば則ち應に掃灑して諸の花香及び燈明等を以て供養を爲すべし。若し尊像正法の毀缺せるを見ば卽ち應に精勤して修治し供養すべし。若し僧衆を見ば應に飲食臥具醫藥を以て之を供養すべし、我れ能く供養施を行ずるを見ず、彼れの受くるを見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く(リ)無依施波羅蜜多を行ずるなり、謂ゆる施を行ずる時是の念を作さず、願くは此の施を以て天人に生じ、天人の王と作りて富貴にして樂を受くることを得んと。乃至無上正等菩提も亦

(ハ)般若……資生施波羅蜜多。
(ニ)般若……亡報施波羅蜜多。
(ホ)般若……大悲施波羅蜜多。
(ヘ)般若……恭敬施波羅蜜多。
(ト)般若……尊重施波羅蜜多。
(チ)般若……供養施波羅蜜多。
(リ)般若……無依施波羅蜜多。

た取求せず。無所得の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く布施波羅蜜多に通達すと名づく。

[五] 天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く淨戒波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂はゆる諸の菩薩は是の思惟を作す、佛は淨教[六]毘奈耶の中に於て[七]別解脫相應の戒經を說きたまへり。菩薩は應に學すべくして[八]戒相及び[九]能受持を見ず[一〇]戒見に著せず亦た我にも著せず二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は是の思惟を作す、諸佛の無上正等菩提は唯だ淨戒を受持するのみに非ず、便ち要らず遍ねく菩薩の戒行を學するに應じて戒性清涼寂靜にして起らざることを得、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は是の思惟を作す、云何が持戒せば能く煩惱を斷ずるや。煩惱は三種あり、謂ゆる貪瞋癡なり、此れに又た各三あり、即ち上中下なり。此の煩惱を斷ずるには應に[一一]對治を知るべし、貪增上の者は不淨觀を修し具足して身の[一二]三十六物を觀じ、瞋增上の者は[一三]慈悲觀を修し、癡增上の者は[一四]緣起觀を修す。[一五]能觀及び所觀の法を見ず、二無く別無し。自性離の故に。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は是の思惟を作す、云何が應に正しく不正の思惟を遠離すべきと。謂ゆる諸の菩薩は是の心を起さず、我れは寂靜行、離行、空行を行ずるに諸餘の沙門婆羅門等は皆喧雜に處して空行を樂はずと。[一六]この別無きを見て自性離なるを知らば即ち能く不正の思惟を遠離す。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は諸法離なりと知ると雖も而かも深く業罪を畏れ、佛の所說の如く應に淨戒を持ちて諸の福業乃至般若波羅蜜多を修すべし。少罪の中に於ても應に大怖を懷きて

【五】第二に般若を修學して能く淨戒波羅蜜多に通達するを明す。

【六】毘奈耶（Vinaya）制止、律とす。

【七】別解脫。波羅提木叉たる戒條を陳ぬるものを云ふ。

【八】戒相。戒の持犯を定むる細目なり。

【九】能受持。受戒には能持か不かを問ひ能持を約し、犯し易きを能く持つを尙ぶ。

【一〇】戒見、戒行持ち得たりと自高心を抱くを云ふ。今般若の學人にはかゝる偏執なきなり。

【一一】對治。煩惱を斷ずること。これに厭患對治、斷對治、持對治、遠分對治の四種あり。

【一二】三十六物。人の身に三十六の不淨物あり。涅槃經所說に依れば、一に外相の十二、二に身器の十二、三に內含の十二となす。

【一三】慈悲觀。瞋恚は自己增上に發す、對手の拔苦與樂を主とするが慈悲觀にして能く瞋恚を治す。

【一四】無明愚癡を根本として十二緣起等生死相續するを觀る。

【一五】能觀者の人我も所觀の諸法も無二なり無別なり。

【一六】喧寂の分別を離れたる自性妙離なり。

與に同じく止まらざるべし。世尊は譬へば毒藥の多少倶に害するが如しと說きたまふを以てなり。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は常に怖畏を生じて信行相應し設ひ[一七]空閑處に獨り無侶を守らんに沙門等有りて金銀及び吠瑠璃眞珠等の寶を齎持し以て菩薩に寄するに中に於て貪著取心を起さずして是の思惟を作す、世尊は常に說きたまへり、寧ろ當に身肉を割きて之を噉ふべきも而かも他財に於て與へざるを取ら弗と。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は持戒堅固にして若し諸の惡魔及び魔の眷屬妙色形を以て逼りて菩薩を試むるも、菩薩は彼れに於て心動搖せずして是の思惟を作す、世尊は常に說きたまへり、色等の諸法は夢の如く幻化なりと、二無く別無し、自性離の故に。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を修學せば則ち能く淨戒波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は勤めて持戒すと雖も而かも人天の王位を希求せず。[一八]身は三過を離れ語に四失無く意に三愆を免る。是の如く持戒して我れ持つと見ず戒相を見ず。二無く別無し。自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く淨戒波羅蜜多に通達すと名づく。

[一九]天王云何が諸の菩薩は般若波羅蜜多を修學して能く安忍波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く安忍波羅蜜多を行ずるなり。謂ゆる諸の菩薩は常に[二〇]內忍を學して憂悲苦惱皆悉く隨はず、亦た外忍を學して若し他に打罵欺奪凌辱せらるるも終に瞋を生ぜず、亦た法忍を學して世尊の、甚深の實性は法無く我無く生無く寂靜なれば卽ち是れ涅槃なりと說きたまふが如き、是の如き說を聞きて心驚怖せずして是の思惟を作す、是の法を學せずして云何が能く所求の無上正等菩提を得て能く盡未來まで諸の有情類を利益安樂せんと。審諦に貪瞋癡の毒を思惟す、是の如き一一は何れの處に於て起り、何の因緣もて生じ、何の因緣もて滅するやと。如實に觀察して都て能生・所生、能滅、所滅有るを見ず。是の如き忍心相續して斷ぜず、

【一七】空閑處。阿蘭若（Āranya）の譯。村を去ること三百步若くは六百步、靜にして比丘の修行に適する場所をいふ。

【一八】身三過は殺盜淫なり、語に四失は妄語綺語兩舌惡、意に三愆は貪瞋癡なり。合して十惡なり。

【一九】第三に般若を修學して能く安忍波羅蜜多に通達するを明す。

【二〇】內忍。內情意を抑制して憂苦に擾されず。

晝夜諸位に常て間隙無く、所忍の境に於て簡擇の心無し。謂ゆる國王父母師長に於て我れは應に忍を修し餘は害を加ふ可しと。菩薩の忍を行ずるは報恩、名利、仁義、怖畏、慚愧の爲ならず。菩薩は法爾として應に忍を行ずべきが故なり。若し他のもの加害撾打罵辱侵奪欺凌するも心傾動せず、菩薩若し王臣等の位に處し貧賤人有りて毀罵恥辱せんに縱に卒暴にして輒(たやす)く威刑を示さず、謂ゆる我れ尊に居す法應に訶罰すべしと。但だ是の念を作すのみ、我れ往昔佛世尊の所に於て弘誓願を發せり、一切有情を我れ皆濟拔して無上正等菩提を得せしめんと。今若し瞋を起さば便ち本願に違ふ。譬へば良醫の是の如き誓を發すが如し、世間の盲醫は我れ悉く之を療せん、若し自ら失明するも豈に他の疾を愈さんやと。是の如く菩薩は他の闇を除かんが爲に自ら瞋恚を起して安んぞ能く彼れを救はんやと。我れ能く忍ぶと及び忍ぶ可きとを見ず、二無く別無し、自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く安忍波羅蜜多に通達すと名づく。

三 天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く精進波羅蜜多を行ずるや。謂ゆる諸の菩薩は未だ滅せざるを滅せしめ、未だ度せざるを度せしめ、未だ脫せざるを脫せしめ、未だ安せざるを安せしめ、未だ覺せざるを覺せしむ。菩薩の是の如く精進を行ずる時諸の惡魔有り留難を作さんが爲に菩薩に謂て曰はく、汝善男子、此の行を修して空しく勤苦を受くること莫れ。何を以ての故に、我れ往昔に於て曾て此の行を修し未だ滅せざるを滅せしめ、未だ度せざるを度せしめ、未だ脫せざるを脫せしめ、未だ安せざるを安せしめ、未だ覺せざるを覺せしめしも空しく勤苦を受けしのみにて都て實利無かりき。我れ昔より來た多くの菩薩を見るに此の行を修學して並に皆退轉せり。汝廻心して二乘道を修し二乘の果を取りて自ら滅度す可しと。菩薩聞き已て即便ち覺知し惡魔に告げて言はく、汝道に復りて去れ、我が心堅固なること猶ほ金剛の若(ごと)し、汝の謬言もて能く退壞する所に非ず。汝固より留難して長夜に自ら苦めりと。魔此の言を聞きて便ち沒して現ぜず。若し

【三】第四に般若を修學して能く精進波羅蜜多に通達するを明す。

餘の菩薩未だ般若波羅蜜多を得ざるも前五種の波羅蜜多を修して百千劫を經るに菩薩是の如く精進を行ずる時は尙ほ能く超過す、況んや二乘地をや。是の如く菩薩般若波羅蜜多を成就せば佛法を成就して衆惡皆離る。精進を行ずること速かならず遲からずと雖も而かも能く殊勝の大願を發起して我れをして身、如來と等しく頂上の肉髻眉間の白毫を感ぜしむ。佛法輪を轉じたまふに我れも亦た是の如し。譬へば眞金の衆寶もて瑩飾せば則ち嚴淨と爲るが如く菩薩の精進も亦復た是の如し、諸の垢穢を離れ謂ゆる懶惰懈怠疲極を離れて自ら不正の思惟を知覺せず、此れに由りて便ち能く勝淸淨の福德智慧を得て而かも共に莊嚴し身疲勞せず心厭怠無く、一切の道を障ふる惡不善法は皆滅除せしめ、所有る助道向涅槃の法は悉く增長せしめ、少惡すら起らず何に況んや其の多きをや。假使ひ十方殑伽沙界の中に滿てる大火無間獄の如くならんに此の世界の外に但だ一有情の應に度す可き者あらば、菩薩は彼の爲にすら尙ほ中より過ぐ、況んや多くの有情をや。此の諸の菩薩は是の念を作さず、無上菩提は得可きこと易からず、菩薩の修行は[三二]頭然を救ふが如くなるに要らず百千那庾多劫を經。斯の如き重擔は實に荷負すること難しと。但だ是の思を作すのみ、過現の諸佛は皆此の行を修して大菩提を證せり、我れも亦た是の如く正しく應に修習すべし、寧ろ百千劫地獄の中に處するも諸の有情をして皆度脫することを得、終に棄捨せずして速に涅槃に趣かしめんと。菩薩は是の如く精進を行ずる時心自ら高うせず他に於て下うせず、能行及び所行の法を見ず、一一無く別無し。自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く精進波羅蜜多に通達すと名づく。

[三三]天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く靜慮波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く靜慮波羅蜜多を行ずるなりと、謂ゆる諸の菩薩は大乘の中に於て深く善根を種ゑ生生世世多く妙行を修し善友に親近して貧賤邪見等の

【三二】頭然。然は燃なり、頭髮の燃ゆること。急速救ふべきもの、危急に喩ふ。

【三三】第五に般若を修學して能く靜慮波羅蜜多に通達するを明す。

家に生ぜず常に婆羅門刹帝利大姓に生じ、正しく三寶を信じて善法を增長し有善根に因りて是の如き念を作す、有情の長夜に諸趣に流轉して苦輪息まざるは皆貪愛に由ると。菩薩念じて厭離心を起し、虛妄の分別に從て有りと知る。世尊は經中に種種に方便して欲の過患は猶ほ鉤の如く矛の如く刀の如く蛇の如く泡の如く沫の如く臭穢不淨轉轉無常なりと說きたまへり。云何が智人此の法に貪著して卽ち鬚髮を剃り出家修道して未だ見ざるを見たりと爲し、未だ得ざるを得たりと爲し、未だ證せざるを證せりと爲さん。若しは世俗諦若しは勝義諦を受持すと說くを聞かば如實に修行して法の如く觀察す、謂ゆる正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定にして喧雜を遠離し名聞に徇はず亦復た供養恭敬を求めず、身心精進して常に懈息する無く、此の心多く[二四]何れの境を行ずるかを思惟す、善と爲ん惡と爲ん、無記と爲ん耶と。若し惡境を行ぜば速に便ち止息し、若し無記を行ずるも亦た應に之を捨つべく、若し善境を行ぜば卽ち勤め精進して策して殊勝の善根を增長せしめ、惡不善法を對治せんと欲するが爲には[二五]三十七妙菩提分を引く。[二六]惡不善法とは謂ゆる貪瞋癡なり。貪に復た三有り、謂ゆる上中下なり。上品貪とは[二七]欲境の名を聞きて身を擧げて踊躍し深心に歡喜して欲の過を觀ず、厭離生ぜず非理に追求して慚愧有ること無し。無慚愧とは謂ゆる若し獨り行きて諸所經遊せば恒に欲境を思ひ心心相續して曾て暫くも捨つる無く、唯だ妙好のみを見て過患を知らず、父母師尊、彼の欲する所を訶するも都て愧恥無く覺らずして爭を起すなり。是の如きを名づけて無慚愧の者と爲す。此の類は命終して當に惡趣に墮すべし。中品貪とは欲境を離るゝ時欲心起らず。下品貪とは但だ共に言笑して欲情便ち薄くるなり。瞋に亦た三有り。上品瞋とは猜恚若し發らば心惛く目亂れて或は無間を造り或は正法を謗り或は復た餘の諸の重罪業を造り五無間に過ぐること多く百千倍なり。中品瞋とは瞋恚を以ての故に諸惡を造ると雖も尋で卽ち悔ひを生ずるなり。下品瞋とは心嫌恨無く但だ口に訶毀するのみにて卽便ち追悔するなり。癡も亦た三品なり

【二四】善惡無記三性の何れなるかを考ふるなり。
【二五】三十七妙菩提分。三十七道品なり。
【二六】三毒に關して說く。
【二七】五欲境。色聲香味觸等の名のみに既に飛び着き、後悔ひ離れざるを上品貪欲と云ふ。

理の如く應に知るべし、是の觀を作すと雖も而かも諸法は皆幻夢響像光影陽焰變化及び[二八]尋香城の如く虛妄不實顚倒なりと知るが故に、外境界を滅し內心寂靜なるを見るも、能行及び所行の法を見ず、二無く別無し。自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く靜慮波羅蜜多に通達すと名づく。

[二九]天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く般若波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く般若波羅蜜多を行ずるなりと。謂ゆる諸の菩薩は正智もて色受想行識を觀じて色の生を見ず、色の集を見ず、色の滅を見ず、受想行識も亦復た是の如し。何を以ての故に、自性皆空にして眞實有ること無く、但だ虛假有りて名字を施設するのみなればなり。而かも般若波羅蜜多を行じ諸の有情を化するに、終に爲に無業無果を說かず。諸法は皆幻夢響像光影陽焰變化及び尋香城の如く我有情命者生者養者士夫補特伽羅無しと知ると雖も而かも常に[三〇]有業有果なりと宣說す。菩薩是の如く般若波羅蜜多を修行せば惡魔の眷屬便りを得ること能はず。何を以ての故に、是の諸の菩薩善友に親近し菩提を成助し世間法を離れ諸の如來の甚深の正法に於て歡喜し讃歎するに諸天魔梵及び餘の沙門婆羅門等は、佛の正智を除きては能く及ぶ者無ければなり。能行及び所行の法を見ず、二無く別無し、自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く般若波羅蜜多に通達すと名づく。

[三一]天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く方便善巧波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く方便修善巧波羅蜜多を行ずるなりと。謂ゆる諸の菩薩は方便善巧して無上正等菩提に廻向す。若し世間勝妙の花果を見ば常に持て諸佛菩薩に供養し[三二]日夜六時に曾て暫くも廢する無く、斯の勝善を以て菩提に廻向す、花果樹を見るも亦復た是の如し、若し如來の[三三]契經中甚深の法義を說くを聞かば歡喜して信受し愛樂誦持し轉

【二八】尋香城。乾闥婆(Gandharva) 城の譯。蜃氣樓なり。

【二九】第六に般若を修學して能く般若波羅蜜多に通達するを明す。

【三〇】有業有果、實我、實人なり、從つて個人的意志も行爲も果報も實在せざるも現實には意業も業果報も存するとするを云ふ。

【三一】第七に般若を修學して能く方便善巧波羅蜜多に通達するを明す。

【三二】日夜六時。晝夜六時に同じ、晝三時、夜三時なり。晝三時は晨朝、日中、日沒なり、夜の三時は初夜、中夜、後夜なり。

【三三】契經。修多羅 (Sūtra) の譯。佛の經典のこと。契は契當の義にて上は眞理に契ひ下は衆生の心に適ふが故に契といふ。

じて他の爲に說き、斯の妙善を以て菩提に廻向す。若し如來の〔三四〕制多形像を見ば卽ち種種の香華を持て供養して有情類の破戒香を離れて淨戒香を得ること猶ほ諸佛の如くなるを願ひ、塗地を掃灑しては諸の有情の威儀齊整するを願ひ、花蓋覆罩せば諸の有情の煩熱惱を離るゝを願ひ、僧の住處に入りては、諸の有情の皆圓寂に入るを願ひ、僧の住處を出でては諸の有情の皆魔境を出づるを願ひ、僧門を開くを見ては便ち是の願を作す、出世智を以て諸の有情の爲に未開の門を啓いて皆悟入せしめんと。若し關の閉づるを見ば有情の爲に關の〔三五〕三有或は〔三六〕四惡趣を閉づるを願ひ、若し安坐することを得ば諸の有情の菩提の座に坐するを願ひ、若し〔三七〕右脇に臥せば諸の有情の皆〔三八〕圓寂を證するを願ひ、坐臥より起ちては諸の有情の諸の起惑を離るゝを願ひ、若し時に足を洗はゞ諸の有情の塵垢を遠離するを願ひ、若し時に佛を禮し制多を右遶せば諸の有情の皆當に作佛すべきを願ひ、天人恭敬するも以て喜びと爲さず、若し外道邪見にして化し難き有らば便ち是の念を作す、我れ彼の師彼の慢の持する所と爲るも必ず肯信せずして且らく同學と作り或は弟子と爲り彼の衆に處すと雖も〔三九〕戒行多聞諸の外道に勝り、因て以て降伏して尊事せられて師と爲り言必ず信受せられ、其の邪法を毀ちて正涅槃を說き如來淸淨の法敎に入り、梵行靜慮等持を精修し勝神通を得て廣く妙善を修せしめんと。〔四〇〕多欲の者を見ては化して女人の第一端正と作り其れをして愛著せしめ。倏忽の頃に無常を示現し、色變じ膖脹爛壞の臭處に深く憎惡し厭離心を起さしめ、卽ち本形に復して菩薩の像と爲り、因て爲に甚深の法要を說いて無上正等覺の心を發し大乘を修行して無上果を成ぜしむ。大乘者の善知識を離れ勤め精進して二乘道を學すと雖も而かも其の果に於て證得すること能はずして大乘無上の法利を失ふを見ては、彼の根性を觀じて爲に大乘を說き其れをして廻心して無上道に入らしめ、未だ發心せざる者は化して發心せしめ、若し已に發心せるは勸めて堅固ならしむ。持戒人の少輕の罪を犯し陳悔を解せずして懈退愁憂し此れに由りて勝道を進修すること能はざるを見ては便

【三四】制多。制底(Caitya)なり。塔、廟、寺宇、伽藍等をいふ。
【三五】三有。欲有、色有、無色有。三界の存在なり。
【三六】四惡趣。地獄、餓鬼、傍生、修羅なり。
【三七】右脇臥。如來入滅に頭北面西右脇に臥せりと云ひ、右を地に着けて歸入する。
【三八】圓寂。涅槃安靜なり。
【三九】戒行多聞等の勝德によりて、同學も先師も降伏して受法せしむべしとなり。
【四〇】女身示現化益を明す。

ち爲に法を說き速に[四一]悔除せしめ、心愁憂を離れて勝道を進修せしむ。是の諸の菩薩摩訶薩衆は少欲喜足にして專ら法利を求め有情の爲に如來を供養するを說き、此れに由りて便ち[四二]六到彼岸を成ず。說法供養是れを布施波羅蜜多と爲し、行の言に違はざる是れを淨戒波羅蜜多と爲し、諸の天魔等壞亂すること能はざる是れを安忍波羅蜜多と爲し、心心相續して勞倦を覺えざる是れを精進波羅蜜多と爲し、專心一念にして異境を緣ぜざる是れを靜慮波羅蜜多と爲し、說法供養して我我所を離るゝ是れを般若波羅蜜多と爲す。能行及び所行の法を見ず二無く別無し、自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く方便善巧波羅蜜多に通達すと名づく。

[四三]天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く妙願波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く妙願波羅蜜多を行ずと。謂ゆる諸の菩薩諸の所願有るは世間の爲ならず、受くる所の快樂も亦た已が爲ならず。求めて三界を出で二乘道を修し涅槃を證し樂ふて但だ是の願を作すのみ、一切の有情皆無餘般涅槃界に入り我が身最後に乃ち正覺を成じ、未だ發心せざる者は化して發心せしめ、若し已に發心せるは大行を修せしめ、已に大行を修せるは菩提を得せしめ、已に菩提を得たるは說法を勸請し、展轉して乃至般涅槃して復妙七寶を以て[四四]窣堵波を起て[四五]設利羅を置きて供養を興し無量衆をして福を獲ること無邊ならしめんと。復た願を發して言はく、諸の有らゆる世界の佛正覺を成ずるに悉く天魔及び諸の外道而かも爲に擾亂する無く、自智に由りて無上心を發すも、外緣を假りて發すと雖も而かも退せざらんことを願ふと。又た當に願すべし、我れ常に世間に處して有情を成熟し利樂を獲せしめん。願くは新發意の諸の菩薩等若し如來の甚深の法を說きたまふを聞かば如實に悟入して心驚怖無からんことを。願くは諸の有情大智慧を得て皆善く無邊の佛道、無邊の佛境、無邊の大悲に通達して無邊の諸の有情類を饒益せんことをと。是の諸の菩薩は多く自身恒に穢國に處して淨土に生ぜざらんことを願ふ。

【四一】悔除。懺悔し除罪するなり。
【四二】六到彼岸。六波羅蜜、六度なり。
【四三】第八に般若を修學して能く妙願波羅蜜多に通達するを明す。
【四四】窣堵波(Stūpa)。塔なり。
【四五】設利羅(Śarīra)身骨、體、骨分なとと譯す。佛又は聖者の遺骨をいふ。

何を以ての故に、病者有らば乃ち醫藥を假るも若し其の疾無くんば醫藥の無用なるが如し。菩薩の是の如き妙願を發す時能行及び所行の法を見ず、二無く別無し、自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩が般若波羅蜜多を修學して能く妙願波羅蜜多に通達すと名づく。

四六 天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く力波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く力波羅蜜多を行ずと。謂ゆる諸の菩薩は能く天魔を伏し諸の外道を摧きて福德智慧力を具足するが故に一切の佛法修行せざる無く、一切の佛境證見せざる無く、神通力を以て一毛の端を用て贍部洲或は四洲界或は大千界乃至十方無量殑伽沙等の世界を擧げて還て本處に置くに而かも損する所無く、或は神力を以て虛空の中に於て種種の資を取りて有情類に施し、能く十方無邊世界の諸佛の說法に於て聞持せざる無く、能行及び所行の法を見ず、二無く別無し、自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩が般若波羅蜜多を修學して能く力波羅蜜多に通達すと名づく。

四七 天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修學して能く智波羅蜜多に通達するや。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學せば則ち能く智波羅蜜多を行ずと。謂ゆる諸の菩薩は五蘊の生は實の生に非ず滅は實の滅に非ずと觀察し、五蘊は皆畢竟空にして我有情命者生者養者士夫補特伽羅無しと思惟するも愚夫は顚倒して虛妄に執著し、如實に諸蘊の我に非ず蘊の中我無きを知らず、如實に我の諸蘊に非ず我の中蘊無きを知らず、斯れに由りて諸趣の生死に輪廻すること旋火輪の如く愚夫は妄執す。然るに一切法の自性は本空にして生無く滅無く、緣合するを生と謂ひ緣離るゝを滅と謂ふも、實に生滅無し。性無に非ざるが故に生ずと說く可からず、性有に非ざるが故に滅すと說く可からず。是の諸の菩薩は一切境に於て一法も通達せざる者有ること無く、此の智波羅蜜多を修行するに二乘の道掩蔽すること能はず、智を以て觀察するに初發心より乃至涅槃まで

【四六】第九に般若を修學して能く力波羅蜜多に通達するを明す。

【四七】第十に般若を修學して能く智波羅蜜多に通達するを明す。

皆悉く明了にして能く一法を以て一切境を知り、一切境に達して一法をも離れず。所以は何ん、眞如は一なるが故なり。是の諸の菩薩は此の智を修する時、能修及び所修の法を見ず、二無く別無し自性離の故に。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を修學して能く智波羅蜜多に通達すと名づく。是れを菩薩一法を修學して能く一切法に通達すと名づくと。

第六分顯相品第三

[一]爾の時最勝復た座より起ち偏へに右肩を覆ひ右膝を地に著け合掌して佛に向ひ白して言さく、世尊、甚深般若波羅蜜多は何を以て相と爲すやと。是に於て世尊、最勝に告げて曰はく、天王當に知るべし、地水火風空等の相の如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如しと。是の時最勝便ち佛に白して言さく、世尊、云何が甚深般若波羅蜜多は地水火風空等の相の如きやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、普遍廣大にして度量す可きこと難し、是れを地相と爲す。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し。何を以ての故に、諸法の眞如は普遍廣大にして測量し難きが故なり。[二]天王當に知るべし、一切の藥草は地に依りて長生す。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、普ねく能く一切の善法を生長す。天王當に知るべし、譬へば大地は之を增すも喜ばず之を減ずるも憂へざるが如し、[三]我我所を離れて二相無きが故に。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、讃歎するも增さず毀訾するも減ぜず、我我所を離れて二相無きが故に。又た大地は世間の往來に足を擧ぐるも足を下すも之に依らざる無きが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、若しは善趣を求むるも若しは涅槃に向ふも依止せざる無し。又た大地は種種の寶を出すが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、世間種種の功德を出生す。又た大地は蟲蟻蚊虻種種の苦事傾動すること能はざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、我我所を離れて都て分別無く傾動す可からず。又た大地は若し師子龍象等の聲を聞くも終に驚怖すること無きが如く甚深般若波羅蜜多も亦た是の如し、一切の天魔及び外道等恐懼すること能はず。何を以ての故に、我有るを見ず法有るを見ず自性空なるが故なり。[四]天王當に知るべし、譬へば水大の高きより下きに赴き水族の歸する所なるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復

【一】佛、最勝の問に對して般若の相を五大等の相を以て喩説す。

【二】地相を明す。

【三】我我所。我は自我自身。我所は我の所有物、我によつて執着せらるるもの。

【四】水相を明す。

た是の如し、眞法界より世間に流趣して一切の善法の依止する所となる。又た水大の能く草木を潤して花果を生ずるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、諸の[五]等持を潤して助道法を生じ一切智を成じて佛法の果を得て一切の有情を利益安樂す。又た水大の草木の根に漬きて能く傾拔し流に隨て去らしむるが如く、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く一切の見趣煩惱習氣の根本を滅して永く復た生ぜざらしむ。又た水大の性本清潔にして垢無く濁無きが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、體煩惱無きが故に清潔と名づけ、能く諸の惑を離るゝが故に無垢と名づけ、一相にして異るに非ざるが故に無濁と名づく。人の夏熱きに水の清涼に遇ふが如く熱惱の有情是の如き甚深般若波羅蜜多を聞くことを得ば必ず清涼を獲て諸の熱惱を離る。人の渇を患ふるに水を得ば乃ち止むが如く出世法を求めて深般若波羅蜜多を得ば思願便ち止む。又た泉池の甚深にして入り難きが如く是の如き般若波羅蜜多諸佛の境界は甚深にして入り難し。又た世間坑埳の處水皆平等なるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、諸の獨覺聲聞[六]異生に於て皆悉く平等なり。又た淨水の垢穢を洗除して清淨を得せしむるが如く是の如く菩薩般若波羅蜜多に通達せば諸の煩惱を離れて卽ち清淨を得。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は自性清淨にして諸の惑を離るゝが故なり。[七]天王當に知るべし。譬へば火大の一切の樹木藥草を燒くと雖も而かも我れ能く物を燒くと念言せざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く永く一切の煩惱及び諸の習氣を滅すと雖も而かも我れ能く永く滅すと念言せず。又た火大の悉く能く一切の物類を成熟するが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、皆能く一切の佛法を成熟す、又た火大の悉く能く諸の濕物類を枯竭するが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し皆能く諸漏瀑流を枯竭して永く起らざらしむ。又た火聚の雪山の頂に住まるに能く遠く一踰繕那を照らし乃至能く十踰繕那を照らすと雖も而かも是の念無きが如し、我れ能く遠きを照らすと、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、聲聞獨覺菩薩を照らすと雖も而

【五】等持。三摩地(Samādhi)の譯。また正心行處ともいふ。定七名の一。

【六】異生。凡夫の異名。凡夫は聖者に異る生類にして、また五趣等の異類の生を受くるが故に此名あり。

【七】火相を明す。

かも亦た我れ能く彼れを照らすと念ぜず。又た禽獸の夜火光を見て恐怖し遠く避くるが如く薄福の異生聲聞獨覺若し般若波羅蜜多を聞かば恐懼して捨離す。甚深般若波羅蜜多は名を聞くすら尙ほ難し、況んや能く修學せんをや。夜遠く渉りて正路を迷失するに若し火光を見ば大歡喜を生じ聚落有りと知りて疾く往きて之に趣き便ち安隱にして永く怖畏無きに至るが如く、生死の曠夜に福徳人有り一若し般若波羅蜜多を聞かば大歡喜を生じて受持讀誦し永く煩惱を離れて心安樂を得。世間の火は貴賤皆同じきが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、聖者異生平等にして皆有り。婆羅門及び刹帝利咸く火を供養するが如く諸佛菩薩は咸く皆甚深般若波羅蜜多を供養す。又た小火も能く三千大千世界を燒くが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、若し一句を聞かば則ち能く無量の煩惱を焚燒すと。[八]天王當に知るべし、譬へば風大の能く一切の物類をして增長せしむるが如く、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く一切の世出世間の善法をして增長せしむ。又た風大の若し增盛する時は普ねく能く一切の物類を摧滅するが如く、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、若し修して增盛せば遍ねく能く生死の煩惱を摧滅す。又た風大の能く鬱熱をして皆清涼を得せしむるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く煩惱鬱熱の有情をして清涼涅槃の常樂を證得せしむ。又た風大の飄颺して停まらざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、一切法に於て都て住する所無しと。天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は垢を離れ著無く寂靜にして無量無邊の智慧もて平等に諸法の實性に通達し、太虛空の性の住する所無きが如く境界の相を離れ尋伺等を超え、心及び心所都て分別無く生無く滅無し、自性離る故に。[九]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて有情を利樂し世間に希有なること猶ほ日月の一切受用するが如し。謂ゆる涼月の能く熱惱を除くが如し。甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、能く一切の煩惱熱毒を除く。又た明月の世間の見んと樂ふが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、一切の聖賢の見んと樂ふ所な

【八】風相を明す。

【九】日月の相を明す。

り。又た〔一〕白月の日日增長するが如く、諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ぜば初發心より乃至所求の無上正等菩提を證得するまで漸漸に增長す。又た〔二〕黑月の日日減盡するが如く諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ぜば煩惱隨眠漸漸に減盡す。又た滿月は諸の婆羅門刹帝利等咸く讃歎する所なるが如く、若し善男子善女人等深般若波羅蜜多を行ぜば世間の天人阿素洛等の皆讃歎する所なり。又た月の行きて四洲界に遍ずるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、色心等に於て處として遍ぜざる無し。又た淨月の常に自ら莊嚴するが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、性本淸淨にして恒に自ら莊嚴す。何を以ての故に、本性は染を離れ生無く滅無く一切法に遍じて自性離なるが故なり。譬へば盛日の衆の闇を破すと雖も而かも我れ能く彼れを破すと念言せざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、無始の一切の隨眠を破すと雖も而かも我れ能く彼れを破すと念言せず。又た烈日の蓮華を開くと雖も而かも我れ能く彼れを開くと念言せざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、菩薩摩訶薩の心を開くと雖も而かも我れ能く彼を開くと念言せず、又た麗日の十方を照らすと雖も而かも我れ能く遍照すと念言せざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、無邊を照らすと雖も而かも照相無し。東方に赤明相現ずるを見ば則ち是れ久しからずして日輪の當に出づべきが如く若し般若波羅蜜多を聞かば當に知るべし是の人は佛を去ること遠からずと。贍部洲の諸の善士女若し日の出づるを見ば大忻慶を生ずるが如く若し時に世間に深般若波羅蜜多の名字出現する有らば一切の聖賢皆大いに歡喜せん。又た日の出づるに月及び星の光皆悉く現ぜざるが如く若し諸の菩薩般若波羅蜜多を行ぜば外道二乘の所有る功德悉く現ぜず。又た日の出づるに方に坑坎高下の處を見るが如く若し諸の菩薩般若波羅蜜多を行ぜば世間乃ち邪正の道を知らん。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多の自相は平等にして生無く滅無く性遠離なるが故なりと。〔三〕天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて多く空行を修し住著する所無く、明道を修習して闇障を滅除

【一】白月。一日より十五日まで月の盈ち行く時。
【二】黑月。十六日より末日まで月の尺き行く時。
【三】蓮華相を喩說す。

し、惡友を遠離して諸佛に親近し、心心相續して念佛斷ずる無く、平等に通達して法界に隨順し、神通もて遊戲して十方の國に遍ずと雖も而かも身本土に住して都て動搖せず、諸佛の法を攝ずること猶ほ現に見るが如く、世間世法に在りと雖も染まざること猶ほ淤泥の處に出づる所の蓮華のごとしと。是の如き菩薩は生死に處すと雖も甚深般若波羅蜜多巧便力の故に而かも染著せず。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は生無く滅無く自相平等にして性遠離を見ず著せざるが故なり。又た蓮華の水滴を停めざるが如く是の如く菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば乃至少惡も亦た曾くも住せず。又た蓮華の所在の處に隨て香氣馥馥たるが如く是の如く菩薩深般若波羅蜜多を行じ若しは人間に在り或は天上に居するに、城邑聚落悉く戒香を具せん。又た蓮華の稟性清潔にして婆羅門等咸く寶として愛する所なるが如く是の如く菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば天龍藥叉健達縛等菩薩諸佛咸く愛敬する所なり。又た蓮華の初めて開發せんと欲するに能く衆の心を悅ばしむるが如く是の如く菩薩は深般若波羅蜜多を行ずるに含笑して先に言ひ嚬蹙を遠離し衆をして歡喜せしむ。又た蓮華は夢中に見る者も亦た是れ吉相なるが如く諸の人天等乃至夢中に菩薩の深般若波羅蜜多を行ずるを聞見するも亦た是れ吉相なり。況んや眞に聞見せんをや。又た蓮華の初めて生位を始むるに人非人等咸く愛護する所なるが如く是の如く菩薩の始めて般若波羅蜜多を學するに諸佛菩薩釋梵天等共に衛護する所なりと。天王意に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば是の如き心を興さんと。我れ當に理の如く一切の波羅蜜多に通達して有情を敎化して佛法を圓滿し菩提樹下の金剛座に坐して無上正等菩提を證得し、妙法輪を轉じて[三]十二種微妙の行相を具すべし。世間の沙門婆羅門等天魔釋梵の轉ずる能はざる所なり。十方無量無數無邊世界の一切有情を化度し生死海より平等に濟拔して般若波羅蜜多に安置し、歸依無き者には爲に歸依と作り、救護無き者には爲に救護と作り、佛を見たてまつらんと欲する者には佛を見たてまつることを得せしめ、師子吼を作して神通に遊戲し佛の功

【三】十二種微妙の行相。四諦に各示勸證の三行相あり、合せて十二行相となす。即ち三轉法輪十二行の相をいふ。

德を歎じて衆をして渇仰せしめ、其の心清淨にして終に動搖せず。意諂曲無く邪念を遠離し所謂る二乘の法を念ぜず。諸の隨眠を盡くして復た煩惱無く、身僞行無く邪威儀を離れ、口諂言無く如實に而かも說き、恩を受けて常に感じ輕恩に重く報ひ、心に憾みを懷かず口恒に軟語せんと。是の如く清淨の心を修習して能汚及び所汚の法を見ず、二無く別無し、自性離の故に。[一四]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて如來三種の清淨を信解すと。謂ゆる諸の菩薩は是の思惟を作す、契經の中には如來の身淨を說けり、所謂る法身、最寂靜身、無等等身、無量身、不共身、金剛身なりと。此れに於て決定して心に疑惑無き、是れを如來の身淨を信解すと名づく。復た次に思惟すらく、契經の中には如來の語淨を說けり、異生の爲に作佛すと授記するが如く亦た菩薩の爲にも作佛の記を授くと。是の如き語の理相違せざるを信ず。所以は何ん、如來は永く一切の過失を離れ諸の隨眠を盡して復た煩惱無く寂靜清淨なればなり。若し天魔梵及び諸の沙門婆羅門等能く如來の語業の失を得とせば是の處有ること無し。是れを如來の語淨を信解すと名づく。復た次に思惟すらく、契經の中には如來の意淨を說けり、諸佛世尊の心に思ふ所の法は聲聞獨覺菩薩天人及び餘の有情の能く知る者無し。何を以ての故に、如來の心は甚深にして入り難く諸の尋伺を離れて思量の境に非ず無量無邊にして虛空界に同じければなりと。是の如く信知して心に疑惑せざる、是れを如來の意淨を信解すと名づく。[一五]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作す、佛の所說の如く諸の菩薩摩訶薩諸の有情の爲に重擔を荷負し堅固にして退する無く怖かず疲れず次第に布施淨戒安忍精進靜慮般若方便善巧願力智波羅蜜多を修行せば佛法の無障無礙無邊無等不共の法を成就し所言決定し其の性勇猛にして如來の廣大の事業を成就せんと。是の諸の菩薩摩訶薩は彼の事の中に於て惑無く疑無くして深心に信受せん。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作す、佛の所說の如く諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行

【一四】般若行に於ける如來の身語意三淨の信解に就て明す。

【一五】次に般若行の菩薩の諸思念を明す。

ぜば究竟して妙菩提の座に安坐して能く無礙清淨の天眼天耳他心宿住隨念漏盡智通を得、一念の頃に於て平等智を以て三世に通達して如實に一切世間を觀察せん、是の如き有情は身惡行、語惡行、意惡行を具して聖賢を毀謗し邪見に由りて邪業を造り、身壞命終して當に惡趣に墮すべし。是の如き有情は身妙行、語妙行、意妙行を具して聖賢を稱讃し正見に由りて正業を造り、身壞命終して當に善趣に生ずべしと。如實に有情界を觀察し已て是の念言を作す、我れ昔發願して菩薩道を行ぜり、自覺覺他せば此の願應に滿すべしと。是の諸の菩薩は彼の事の中に於て惑無く疑無くして如實に信受すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩成佛の所を名づけて覺處と爲し、能く自ら覺るが故に名づけて正覺と爲し、能く有情を覺らしむるを正遍覺と名づくと。天王當に知るべし、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて如來の世に出興したまふを信知し一切有情を利益安樂すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば一乘を說くを聞きて能く深く信受す。何を以ての故に、諸佛の所說は眞實にして虛しからざればなり。種種の餘乘は皆佛乘より出づ。贍部洲に種種の城邑聚落有りと雖も並に此の洲に屬するが如く、是の如く諸乘に種種の名相差別有りと雖も皆佛乘に屬す。此の諸の菩薩は復た是の念を作す、諸佛世尊の方便善巧して種種に法を說きたまふは皆實にして虛しからず。何を以ての故に、諸佛の說法は衆の相性に隨て三乘を說きたまふと雖も而かも實には一道のみなればなりと。此の諸の菩薩は復た是の念を作す、諸佛世尊の凡そ說きたまふ所の法は音聲深遠眞實にして虛しからず、何を以ての故に、釋梵天等の少功德有るすら尙ほ復た能く深遠の音聲を出す、何に況んや如來の無量億劫に積集したまふ功德の聲深遠ならざらんやと。此の諸の菩薩は復た是の念を作す、如來の說法は衆根に違はず上中下品を皆成就せしむ。有情は各獨り我が爲にのみ說きたまふと謂へり、而るに佛は本來說く無く示す無しと。此の諸の菩薩は是の如き事に於て惑無く疑無くして深心に信解す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多

を行じ微細の心を得て是の如き念を作す、世間は常に大火有りて熾然たり謂ゆる貪瞋癡火煙闇と爲る、云何が當に一切有情をして此の世間より皆出離することを得せしむべき。若し能く諸法の平等に通達して染著心無くんば名づけて出離せりと爲すと。如實に法は幻夢等の如しと知り善く因緣を觀じて分別せず。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作すと。諸法は本無なるも而かも業果なり、諸佛菩薩の凡そ發言したまふ所は我れ應に意を知り、既に意を知り已て卽ち義を思量し、義を思量し已て卽ち眞實を見、眞實を見已て有情を濟度すべしと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して衆の爲に法を說くと。謂ゆる諸法は我有情命者生者養者士夫補特伽羅意生儒童作者受者知者見者無しと說く。是の如く諸法は空無所有にして自在性に非ず虛妄分別なり、因緣合するが故に生ずる無くして生ずるに似たり。天王當に知るべし、若し諸法は我有情乃至見者無しと說かば理に稱ふ說と爲す、若し諸法は空無所有にして乃至生ずるに似たりと說かば亦た理に稱ふ說なりと。天王當に知るべし、夫れ其の說法は法相に隨順す是れを理に稱ふと名づく、若し諸の所說法相に違はず法と相應し能く平等に入りて義理を顯現せば巧便の說と名づくと。[一六]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば無礙辯を得と、謂ゆる若しは無著辯、若して無盡辯、若しは相續辯、若しは不斷辯、不怯弱辯、不驚怖辯、不共餘辯、無邊際辯、一切天人所愛重辯なり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば淸淨辯を得と、謂ゆる不斷喝辯、不迷亂辯、不怖畏辯、不憍慢辯、義具足辯、味具足辯、不拙澁辯、[一七]應時分辯なり。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに大衆の威德の畏れを遠離せるが故に辯斷喝せず、堅く住し明了にして智を怯れざるが故に辯迷亂せず、菩薩は衆に處すること師子王の如く恐懼無きが故に辯怖畏せず、煩惱を離るゝが故に辯憍慢ならず、無義を說かず法相に契ふが故に辯義具足す、善く書論を解し文字を知るが故に辯味具足す、

【一六】般若行の菩薩の得る諸辯を明す。

【一七】應時分辯。丁度都合よき說明なり。

多劫に巧便の語を積習するが故に錯謬誤ならず、是の如く法を說くに善く三時の謂ゆる熱雨寒に順ひ、說善亂無くして亦た三分の謂ゆる初中後に順ひ、說雜を交へず、斯れに由るが故に稱應時分と說く。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じて得る所の語辭は衆をして歡悅せしむと、謂ゆる化する所に隨て多く愛語を爲し含笑先だちて言ひ顰蹙を遠離し、詞を發すに義有りて能く如實に稱ひ、諸の所說有るは人を欺侮せず、所言決定して種種に樂說し、柔軟の語を以て衆をして歡悅せしめ、容色寛和にして他をして親附せしめ、義に隨て說くに聞く者悟解し、利益の爲の故に法相に稱て說き、平等に爲に說いて心偏黨無く、虛妄の言を離れて決定の說を作し、種種に樂說するに衆の根性に隨ひ、此の因緣に由りて衆をして歡悅せしむ。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて大威德を成ずと。所以は何ん、法器に非ざる者は聞くことを得ざるが故なりと。[一八]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、是の諸の菩薩は其の心平等なり。云何が器に非ざる者の爲に說きたまはざるやと。佛言はく、天王、甚深般若波羅蜜多は本性平等にして是れ器なりと見ず器に非ずと見ず、能說を見ず所說を見ず、有情は虛妄にして器非器を見、說不說を見る。所以は何ん、甚深般若波羅蜜多は生無く滅無く分別無きこと、猶ほ虛空の如く一切に遍滿すればなり、有情も亦た爾なり生無く滅無し。聲聞獨覺菩薩如來も亦復た是の如し。名字無き法に名字を假立して是れ有情なりと謂ひ、是れ般若なりと謂ひ、能說なりと謂ひ、所說有りと謂ひ、聽者及び所說の法有りと謂ふも勝義諦の中にては皆同一相にして所謂無相なり、都て差別無し。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて威德重きが故に常に樂說すと雖も非器は聞かず、天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は非器の諸の有情の爲に說かず、外道惡見者の爲に說かず、憍慢にして信ぜざる者の爲に說かず、法を求めて貿易する者の爲に說かず、名利を貪愛する者の爲に說かず、嫉妬慳悋の者の爲に說かず、生れながら盲聾瘂の者の爲に說かずと。所以は何ん、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅

【一八】 法器及び非器に就いて說く。

蜜多を行ずるに心慳悋無く深法を祕せず有情類に於て慈悲無きに非ず、亦た諸の有情類を棄捨せず、然かも有情類は宿善根を植ゑて如來を見及び正法を聞くことを得るなり。如來は法に於て本より說く心無く亦た作意して此れと爲し彼れと爲さず、但だ障り重き者如來に近づくと雖も而かも見聞せざるのみ。菩薩も亦た爾なりと。爾の時最勝復た佛に白して言さく、何等の有情、諸佛菩薩の說法を聞くに堪ふるやと、佛言はく、天王、若し正信を具して根性純熟せば法器爲るに堪ふ。過去の佛に於て曾て善根を種ゑ、心諂曲無く威儀齊整し名利を求めず善友に親近し、利根聰明にして文を說き義を知り法の爲に精進して聖者に違はざる、此れ等の有情は諸佛菩薩の說法を聞くに堪ふ。[一九]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は能く法師と作りて善巧に法を說くと。云何が巧みに說くや。謂ゆる諸の有情を饒益せんが爲の故に、佛法を說くと雖も而かも佛法意に得可からずと說き、一切の波羅蜜多を說くと雖も而かも一切の波羅蜜多を竟に得可からずと說き、菩提を說くと雖も而かも菩提竟に得可からずと說き、煩惱を斷ずと說くと雖も而かも煩惱意に得可からずと說き聲聞[二〇]四向四果を說くと雖も而かも聲聞四向四果竟に得可からずと說き、獨覺の爲しは向若しは果を說くと雖も而かも獨覺の若しは向若しは果竟に得可からずと說き、我見を斷ずと說くと雖も而かも我見竟に得可からずと說き、業果有りと說くと雖も而かも業果竟に得可からずと說く。所以は何ん、名字の所得は皆實法に非ざればなり。法は名字に非ず言の境界に非ず。法は思議す可からず心の量る所に非ざるが故に。名字は法に非ず、法は名字に非ず、但だ世俗虛妄の假名を以て說く所有りて名字無き法を說いて名字と爲すのみ。名字は是れ空、空は無所有、無所有とは眞の勝義に非ず、勝義に非ざる者は卽ち是れ虛妄にして愚夫の法なり。天王當に知るべし、是れを菩薩善巧に說法すと名づくと。諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便力を以て無礙辯を得、衆の相性に隨て宜しく是の如き甚深般若波羅蜜多を說き諸の有情をして如實に悟入せしむべしと。

【一九】　菩薩の善巧の說法を明す。

【二〇】　四向四果、預流、一來、不還、羅漢の四果と各各之に向ふ道にある四向となり。

第六分法界品第四之一

[一]爾の時最勝復た座より起ち偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を學して法界に通達するやと。是に於て佛、最勝天に告げて言はく、善哉善哉、諦かに聽け諦かに聽きて極めて善く作意せよ。吾れ當に汝が分別し解說すべしと。最勝天言はく、唯然、願くは說きたまへ、我れ等樂聞したてまつらんと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を學して妙慧行るが故に善友に親近し、勤精進を發して諸の障惑を離れ、心淸淨なることを得て恭敬尊重し、密行を樂習して諸見を遠離し、如實の道を修して法界に通達すと。天王當に知るべし、是の諸の菩薩は妙慧なるが故に善友に親近し歡喜して敬事すること猶佛の想の如く、親近するを以ての故に諸の障惑を離れ一切の惡不善法を滅除して善根を生長す。旣に煩惱を滅して障法を遠離せば身語意業皆淸淨なることを得。淸淨なるに由るが故に便ち敬重を生じ敬重の心を以て密行を修習す。密行を修するが故に諸見を遠離し、諸見を離るゝが故に正道を修行し、正道を修するが故に能く法界を見ると。[二]爾の時最勝復た佛に白して言さく、世尊、云何が名づけて法界と爲すやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、法界は卽ち是れ不虛妄性なりと。世尊、云何が不虛妄性なるやと。天王、卽ち是れ不變異性なりと。世尊、云何が不變異性なるやと。天王、卽ち是れ諸法の眞如なりと。世尊、何をか諸法の眞如と謂ふやと。天王當に知るべし、眞如は深妙にして但だ智もて知る可く言能く說くに非ず。何を以ての故に、諸法の眞如は諸の文字を過ぎ語言の境を離れて一切の語業行はること能はざるが故に、諸の[三]戲論を離れ諸の分別を絕し、此れ無く彼れ無く相を離れて相無く、[四]尋伺の境を過ぎ、想無く相無く[五]二境を超過し、愚夫を遠離して愚夫の境を過ぎ、諸の魔事を超えて

【一】般若を學して菩薩の法界に通達する所以を明す。

【二】法界の義趣を明す。

【三】戲論。謬れる見解のこと。愛論（情意的迷執）見論（理知的迷執）をいふ。

【四】尋伺。尋求と伺察にて、舊には覺觀といふ。尋は麤觀對象に於てその義理を麁く尋求する、伺は一歩進んで一層細かに伺察する精神作用をいふ。

【五】二境。此彼、內外、相想等分別の世界を云ふ。

諸の障惑を離れ、識の了する所に非ず住するも住する所無し。寂靜の聖智及び無分別と[六]後得智の境とは我我所無く求むるも得可からず、取る無く捨つる無く染無く著無く清淨にして垢を離れ最勝第一にして性常に變ぜず、若しは佛出世し若しは出世せざるも性相常住なり。天王當に知るべし、是れを法界と爲すと。諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて法界を修證するに多く百千種の難行苦行あるも諸の有情をして皆通達することを得せしむ。天王、是れを實相般若波羅蜜多眞如實際無分別相不思議界と名づけ亦た[七]眞空及び一切智一切相智不二法界と名づくと。[八]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、世尊、云何が是の如き法界を能く證し能く得るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、出世般若波羅蜜多及び後に得る所の無分別智もて能く證し能く得と。世尊、證得の義何の異りが有ると。天王當に知るべし、出世般若波羅蜜多もて能く實の如く見るが故に名づけて證すと爲し、後の智もて通達するが故に名づけて得と爲すと。爾の時最勝復た佛に白して言さく、佛の所說の如く慧を聞思修せば豈に實相般若波羅蜜多に通達し而かも復た出世般若波羅蜜多及び後に得る所の無分別智有りて能く證し能く得と說かざらんやと。[九]佛言はく、爾からず。所以は何ん、實相般若波羅蜜多は甚深微妙にして聞慧麁淺なるは見るを得ること能はず、是れ勝義なるが故に思ふも量ること能はず、出世法なるが故に修するも行ずること能はざればなり。天王當に知るべし、實相般若波羅蜜多は甚深微妙にして異生二乘の見ること能はざる所なりと。何を以ての故に、彼れは生盲の衆色を見ず、嬰兒の七日日輪を見ざるが如く尙ほ見ることすら能はず、況んや能く證得せんをや。譬へば夏熱きに人有り西に行ぎて曠野に在るが如し、復た一人有り西より而かも至り、前の人に問ひて曰はく、我れ今熱くして渴せり、何處にか清水樹蔭有りて憂の濟るを見る可きを知れりやと。彼の人答へて曰はく、此れより東に行きて當に二路有るべし、一は左、二は右なり、宜しく右路より漸次に前行すべし、淸き泉池及涼しき蔭樹有りと。天王、意に於て云何、彼の熱渴者

【六】後得智。第一義智は寂靜湛然無分別なり、證後差別界を見るを後得智と云ふ。分別を假設するも我我所執あることなし。

【七】眞空は不二法界なり。平等(一切智)と差別(一切相智)とが不二なるなり。

【八】法界證得の義を明す。

【九】慧を聞思修するも實相般若に通達し得ざるを喩說す。

は是の如き泉及び樹名を聞くと雖も、往趣するを思惟するのみにて即ち熱渇を除きて清涼を得るや不やと。不なり世尊、彼れは至りて池に入りて洗飲し樹に息へば方に熱渇を離れて乃ち清涼を得んと。佛言はく、天王、是の如し是の如し、慧を聞思修するも實相般若波羅蜜多に通達すること能はず。天王當に知るべし、言ふ所の曠野は即ち生死に喩へ、人は有情に喩へ、熱は業惑に喩へ、渇は貪愛に喩へ、東來人は諸の菩薩に喩へ、[一〇]左路は即ち正直に非ざる道に喩へ、右路は一切智道に於て諸の菩薩衆の深般若波羅蜜多を行じて善く生死の正直の路を知るに喩へ、泉は般若波羅蜜多に喩へ、樹は大悲に喩へしなり。諸の菩薩摩訶薩は[一一]二法を行ずるが故に異生及び二乘道を遠離すと。[一二]天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は形相無しと雖、而かも巧說するが故に諸の有情をして能く證し能く得せしむと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く如實に力無所畏不共法空なりと知り、亦た如實に諸の戒定慧解脫解脫智見蘊空なりと知り、亦た如實に內空外空及び內外空空空大空勝義等空なりと知る。諸法皆空ならざる無しと知ると雖も而かも空相も亦た得可からずと知りて空相を取らず空見を起さず空相に執せず空に依止せず。菩薩は是の如く執著せざるが故に空に於て墮せずと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて諸相を遠離すと。謂ゆる都て內外の諸相を見ず、戲論相を離れ分別相を離れ、尋求相を離れ貪著相を離れ、境界相を離れ攀緣相を離れ諸の能知及び所知相を離ると。爾の時最勝便ち佛に白して言さく、若し諸の菩薩摩訶薩衆深般若波羅蜜多を行じて能く是の如く諸法の無相を觀ぜば、佛薄伽梵は復た云何が觀じたまふやと。[一三]佛言はく、天王、諸佛の境界は思議す可からず。何を以ての故に、境界を離るゝが故なり。一切の有情、佛境を思量せば心則ち狂亂して此彼を知らず。何を以ての故に、虛空性に同じく思量す可からず、求むるや得可からず、尋伺の境を離るればなり。諸の菩薩衆深般若波羅蜜多を行ずるに尙ほ異生の境等の思量し得可き有るをすら見ず、況んや佛の境界をや。亦た一切の妙

【一〇】左路。左道、非正直道、邪道とす。國語の左(直なり)右(曲る)と反對なり。
【一一】二法。般若と大悲との世間二法なり。
【一二】般若行に於ける諸法無相觀を明す。
【一三】諸佛の境界の不可思議を明す。

願に依止せず、種種に布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を行ずと雖も而かも彼の果に於て都て著する所無く諸の功德乃至涅槃に於ても亦た依著せず。何を以ての故に、我我所を離れ二無く別無く自性離なるが故なりと。[一四]佛是の如き甚深般若波羅蜜多大法門を說きたまふ時此の三千大千世界をして六種に變動せしめたまへり。妙高山王、[一五]目眞隣陀山、大目眞隣陀山、金剛輪圍山、大金剛輪圍山、香山、寶山、黑山、大黑山皆悉く振動す。無量百千の諸の菩薩衆皆上服を脫ぎて佛の爲に座に敷くに其の座高廣なること妙高山の如く、無量百千の釋梵護世の諸天等合掌恭敬して衆の妙華の謂ゆる妙音華、大妙音華及び吉祥華、大吉祥華、青黃赤白紅紫の蓮華を散ず。時に鷲峯山の縱廣四十踰繕那量にして積みし華遍滿して如來の膝に至る。無量の天子虛空の中に住して諸の天樂を奏し是の如き言を唱ふ、再び佛の世に興るを覩、[一六]再び轉法輪を聞く、善哉、贍部洲の一切有情類は功德を勤修し多く善根を種ゑて是の如き甚深般若波羅蜜多を聞くことを得、況んや復た當來に能く信ずる者有らんをや。當に知るべし、是の如き一切の有情は悉く諸佛如來の境界を行ずと。復た無量百千の龍王有り即ち神力を以て普ねく大雲を興し香雨を降澍して鷲峯山に灑ぎ遍ねく三千大千世界に及ぼすに諸の聽法者は唯だ香の潤ほすを覺りて霑濡するを見ず、無量の龍女悉く佛前に於て合掌讃歎す。復た無量の[一七]健達縛神有り妙樂音を以て佛を供養し、諸の藥叉衆は諸の妙花を散じ、阿素洛等は供養恭敬す。十方無量無邊佛土の無數の如來應正等覺の[一八]眉間の毫相は皆光明を放ちて此の三千大千世界の幽暗の處を照らすに大明鷲峯山に遍じ其の光赫奕たらざる無く、斯の事を作し已て各本界に還り右遶三匝して佛の頂の中に入れり。無量百千の婆羅門衆及び刹帝利長者居士は各種種の塗香末香幢蓋幡華を以て佛を供養せり。爾の時會中の七十二億の菩薩摩訶薩は無生法忍を得、無量百千の諸の有情類は遠塵離垢して淨法眼を生じ、無量百千の諸の有情類は皆無上正等覺の心を發せり。

[一九]爾の時最勝復た佛に白して言さく、甚深般若波羅蜜多は既に語言を絕し諸の文字を離るるに云何

【一四】佛が般若說法の際に起りし六種震動などの瑞相を明す。

【一五】目眞隣陀。巴に文茶隣陀 (Mucchalivda)。龍の名とす。

【一六】再聞。初聞鹿苑轉法輪に對して大乘般若法輪を再と云ふ。

【一七】健達縛神(Gandharva)尋香、食香、嗅香などと譯す。帝釋の俗樂神なり。

【一八】眉間の毫相。白毫相なり。三十二相の一。佛の眉間に白玉の毫あり、淸淨柔輭にして細香の如く、右旋宛轉し常に光明を放つをいふ。

【一九】般若の法相不可得を說き、これに隨順すべきを明す。

が菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて諸の有情の爲に是の如き法を說くやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて諸の有情の爲に是の如き法を說くは佛法を修習せんが爲なるも而かも諸の佛法は畢竟得可からず、諸の波羅蜜多を成熟せんが爲なるも而かも諸の波羅蜜多は畢竟得可からず、淸淨佛菩提の爲なるも而かも佛菩提は畢竟得可からず、離滅涅槃の爲なるも而かも離滅涅槃は畢竟得可からず、四沙門果の爲なるも而かも四沙門果は畢竟得可からず、獨覺菩提の爲なるも而かも獨覺菩提は畢竟得可からず、我取を斷除せんが爲なるも而かも我及び取は畢竟得可からず。是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて心に一切の法相を分別せず、我、能分別、所分別皆得可からず、般若波羅蜜多に隨順せば生死に違はず、生死に在りと雖も般若波羅蜜多に違はずんば法相に隨順すと。爾の時最勝便ち佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は云何が甚深の法相に隨順して世俗に違はざるやと。佛言はく、天王、菩薩、甚深般若波羅蜜多に隨順して色受想行識を遠離せず、欲界色界無色界を遠離せず、法を遠離せずして而かも取著無し、般若波羅蜜多に隨順して道を遠離せず。何を以ての故に、大方便善巧力を具するが故なりと。是に於て最勝復た佛に白して言さく、何をか菩薩の方便善巧と謂ふやと。[30]佛言はく、天王、謂ゆる四無量なり。諸の菩薩摩訶薩は大慈悲喜捨心を具するが故に常に能く所化の有情を利樂す、是れを菩薩の方便善巧と爲すと。世尊、云何が此の四は大と名づくるやと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて無邊の慈を具す、無分別慈、諸法性慈、不休息慈、無惱害慈、廣饒益慈、平等性慈、遍利樂慈、出世間慈、是の如き等の類を名づけて大慈と爲すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ、諸の有情の種種の苦を具して歸依處無きを見ては濟拔せんと欲するが爲に菩提心を發して正法を勤求し、旣に自ら得已て有情の爲に說き、諸の慳貪者には敎へて布施を行ぜしめ、無戒破戒なるには敎へて戒を受持せしめ、性暴惡なる者には敎へて忍辱を行

【三〇】菩薩の善巧方便を明す。

ぜしめ、懶惰懈怠なるには教へて精進を行ぜしめ、散亂心の者には教へて靜慮を行ぜしめ、諸の愚癡者には教へて妙慧を學せしめ、有情を度せんが爲には種種極苦の難事に遭ふと雖も終に大菩提心を捨離せず。是の如き等の類を名づけて大悲と爲す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作す、三界の熾火は我れ已に出離せるが故に歡喜を生ず、久しく相纏繫せる生死の繩は我れ已に斷截せるが故に歡喜を生ず、生死海に於ける尋伺取相は我れ已に永く出でしが故に歡喜を生ず、無始より竪てし所の憍慢の幢は我れ已に摧折せるが故に歡喜を生ず、金剛智を以て煩惱の山を破し永く散滅せしめしが故に歡喜を生ず、我れ自ら安隱にして復た他を安隱ならしめ愚癡黑暗貪瞋慢等の煩惱の繫縛に久しく寐ねし世間今始めて覺むるを得たるが故に歡喜を生ず、我れ今已に一切の惡趣を免れ復た能く惡趣の有情を濟拔して出離することを得せしむるが故に歡喜を生ず、有情は久しく生死に於て迷亂して出道を知らず、我れ今濟拔して正路を開示して皆一切智城の畢竟安樂に至ることを得せしむるが故に歡喜を生ずと。是の如き等の類を名づけて大喜と爲すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ普ねく一切の眼の見る所の色、耳の聞く所の聲、鼻の嗅く所の香、舌の甞むる所の味、身の覺る所の觸、意の了する所の法に於て著せず離れずして捨心を起す、是の如き等の類を名づけて大捨と爲すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如き四大無量を成就す、此れに由りて名づけて方便善巧と爲すと。

卷の第五百六十八

第六分法界品第四之二

[一]爾の時最勝復た佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて有情

【一】菩薩示現の諸相を明す。

を度せんが爲に諸の相を示現するやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は得可からず、諸の菩薩相も亦た得可からず、但だ方便善巧の威力に由りて有情類の爲に入胎乃至涅槃種種の化相を示現するのみ。何を以ての故に、諸天は常なりと計して墮落無しと謂へり。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して彼の執を破せんが爲に入胎を示現し、因りて彼の天をして無常の念を起さしむ。世間の最勝最高無等にして欲に於て染まざるすら尙ほ墮落有り況んや餘の天衆にして而かも常なるを得んを耶。是の故に皆應に復た放逸なる勿れ、勤加精進し繫念修道せよ。日輪すら尙ほ隱沒有るを見るが如くば卽ち螢火は久住することを得ざるを知る。復た諸天の放逸にして樂に著して正法を修せず情を恣にして遊戲する有り菩薩と同じく天宮に處すと雖も往ひて禮拜せず法を諮受せずして各是の念を作す、今は且く樂を受け明に菩薩(のもと)に詣りて當に法要を受くべしと。共に相謂て言はく、我れと菩薩と常に此に同じく住す、修行何ぞ晩からんと。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多を行じ勤修精進して頭然を救ふが如く放逸行を破して墮落を示現す。是の如き示現に二因緣有り、一には諸天をして放逸を離れしめんが故に、二には有情をして咸く見ることを得せしめんが故なり。世間復た下劣の有情有り、善根少きが故に佛の無上覺を成じて妙法輪を轉ずるを見るに堪へず。菩薩彼の爲に嬰兒を示現し及び童子を作りて後宮に遊戲す。菩薩若し餘の像を作して法を說くも後宮の女人は則ち信樂せず。是の故に嬰兒童子を示現す。高行人の常に能く俗を離るる有らば菩薩は彼れの爲に出家を示現す。復た天人有りて是の如き念を作さん、端坐し樂を受けては聖道を得ずと。菩薩は彼れの爲に苦行を示現し亦た苦行外道を降伏せんが爲に種種の難行苦行を示現す。復た天人有りて長夜に發願す、菩薩の菩提座に行詣せん時、我れ等天人常に供養を獻ぜんと。菩薩は彼れの爲に菩提座に詣る。無量の天人旣に供養し已らば一切の菩提の因緣を獲得す。復た天人有りて是の如き念を作す、惡魔外道ありて正法を障礙せん、願くは菩薩菩提

座に坐して惡魔及び諸の外道を降伏し正信有らん者に皆法を見せしむることを得んと。是の故に菩薩正覺を成じ已るに三千世界の虛空の中に遍せる種種の音聲は而かも讃歎して曰はく、佛日世に出でて螢光隱沒すと。諸の天人等咸く是の言を作さく、願くは我れ未來に無上覺を成ずること今の菩薩の證する所の菩提の如くにして此の有情の爲に菩提座に坐せんことをと。天人等有りて是の如き言を作さく、願くは大師の一切智一切相智無師智自然智を成じたまふを見んと。是の諸の有情は出離を求めずと雖も而かも根性純熟す。是れ深法器なり。是の有情の爲には三轉十二行相の無上法輪を示現す。復た天人の圓寂を樂聞する有らば菩薩彼れの爲に涅槃を示現す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く是の如き種種の化相を現ずと。[三]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて終に無暇の處に生ぜずと。何を以ての故に、福德無き人は般若波羅蜜多の勝名字を聞かざるが故なり。是の諸の菩薩は又復た常に一切の惡業を離れ終に佛の所說の戒を毀犯せず、心嫉妬無く身語失無く、已に過去無量の佛所に於て多く善根を種ゑ、勝福德智慧の方便を具し、大願を成就して心寂靜を樂しみ、勤行精進して諸の懈怠を離る。天王當に知るべし、是の諸の菩薩は惡業有りて地獄趣に墮すること無し、十善業道常に現行するが故に。是の諸の菩薩は破戒有りて傍生趣に墮すること無し、常に能く受くる所の戒を護持するが故に。是の諸の菩薩は嫉妬有ること無く餓鬼趣に墮せず邪見の家に生れず常に善友に値ひて惡友を遠離す。何を以ての故に已に過去無量の佛所に於て深く善根を種ゑたればなり。是の故に生ずる處富貴自在にして皆正見を具す。是の諸の菩薩は受くる所に隨て身諸根を缺かずして佛法の器を成ず。何を以ての故に、過去世に於て諸佛を供養し正法を聽聞して大衆を禮敬すればなり。是の故に生處常に諸根を具し形相端嚴にして佛法の器を成ず。是の諸の菩薩は邊地に生ぜず、根鈍愚癡にして善惡、語言の義趣を知らざるは佛法の器に非ず、沙門婆羅門等を識らざるなり。何を以ての故に、菩薩生を受くれば

【三】般若行の菩薩無暇の處に生ぜざることを明す。

必ず中國に在るか、利根にして智慧あり言辭の辯了し善く語義を知るは、是れ佛法の器にして善く沙門婆羅門等を知ればなり。何を以ての故に、菩薩は宿世に勝福德智慧の力を具するが故に[三]終に長壽天に生ぜず、他を利すること能はず、佛を見ざるが故なり。是の諸の菩薩は多く欲界に生じ出世を示現して有情を利樂す。何を以ての故に、勝方便善巧力を具するが故なり。菩薩は無佛の世界に生ぜず。[四]此の處は佛無く說法者無く、正法を聞かず僧を供養せず。[五]所以は何ん、菩薩の生處には必ず三寶を具する宿願強きが故なり。是の諸の菩薩は惡世界を聞きて深く厭離を生じ寂靜を修行して心懈怠ならず、精進熾然として一切の善を以て諸の惡法を滅す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩阿薩は深般若波羅蜜多を行ずるに是の如き等の種種の因緣を以て終に無暇の處に生ぜずと。[六]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ乃至夢中にも尙ほ大菩提心を忘失せず、況んや覺時に於て當に忘失有るべけんや。何を以ての故に、一切の善法は此の心より生ずればなり。卽ち是れ無上正等覺の心なり。若し此の心無くんば則ち佛有ること無く、佛無くんば法無く、法無くんば僧無し。此の心に由るが故に三寶有り及び天人有りて善を修して樂を受くることを得。是の諸の菩薩は常に諂詐を離れ質直柔和にして其の心淸淨なり。諸の佛法に於て猶豫を生ぜず、聽受せんと欲する者には深義を祕せず、諸の嫉妬を離れ[七]三塗の業を遠ざけ、初中後に於て變易相無く、行言に違はず大乘法を護り同學者を見て深く恭敬を生じ、勸勵修習して大乘を稱讚し說法師に於て常に佛の想を生じ善友に親近して惡友を遠離す。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して是の如き菩提の心を成就し、此の心に依因して宿住智を得。何を以ての故に、已に曾て無量の諸佛を供養し正法を護持して淸淨戒を修し、惡業を遠離して障礙永く無く、心常に歡喜して心勤め修學し心散亂せず、心智失はざればなり。所以は何ん、是の諸の菩薩は曾て無量の諸佛を供養せるに由りて則ち正法を重んずればなり、法を重んずるに由るが故に廣く他の爲に說き、正法を護らんが爲に

【三】長壽天。福德大なるが如きも之を八難處の一とす無佛の土にして菩薩行成就せざればなり。

【四】此の處。無佛世界。

【五】所以。無佛世界に生ぜざる理由。

【六】菩薩般若を行じて大菩提心を忘失せざることを明す。

【七】三塗。塗は途の義。一に火途、地獄趣の猛火に燒かるる處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に刀途、餓鬼趣の刄劍杖を以て逼迫せらるる處。

は身命を惜しまず身語意業悉く皆清淨なり。業清淨となり已て障礙を離るることを得。障礙を離るるが故に心常に歡喜す、心歡喜するが故に則ち勤め精進し、心性正直にして智の圓滿を念ず。智を念ずるに由るが故に過去生の一十百千乃至無數を知る。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて如實に過去の生處を了知す。既に宿世を了して善友に親近し、善友に由るが故に諸の佛所に於て[八]三事失はず、謂ゆる聞見念なり。常に樂ふて法を聽き僧寶を供養し、一切時に於て曾て空しく過すこと無く、佛菩薩の所にて常に深く恭敬禮拜し供養する時暫くも捨つる無く、行住坐臥多聞を離れず。天王當に知るべし、是の諸の菩薩は淨戒を持つが故に常に般若波羅蜜多の功德名字を聞き常に勤め修習して菩提分を助け曾て三解脫門を遠離せず、一切時に於て四無量を修し常に無上一切智の名を聞く。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ此の因緣に由りて善友に親近すと。[九]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに乃至夢中にも惡友に近づかず、況んや覺時に於て彼れに親近せんをや。所以は何ん、諸の菩薩摩訶薩は破戒の人、邪見に著する人、不律儀の人、邪命を行ずる人、無義語の人、懶惰に住する人、生死を樂ふ人、菩提に背く人、俗務を愛する人に於て常に憐愍すと雖も而かも共住せずと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ是の如き法に由りて惡友を遠離すと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く如來の[一〇]十身差別を得と。云何が十と爲す、一には平等身、二には清淨身、三には無盡身、四には善修身、五には法性身、六には離尋伺身、七には不思議身、八には寂靜身、九には虛空身、十には妙智身なり。爾の時最勝便ち佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ何の位にて能く如來の十身を得るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるに初地の中に於て平等身を得。何を以ての故に、法性に通達せば諸の邪曲を離れて平等を見るが故なり。第二地の中にて清淨身を得、何を以て

【八】三事。聞くと見ると念ずるとなり。

【九】菩薩の般若行に於て惡友を遠離することを明す。

【一〇】十身。般若を行じて十地に十身を成就す、義意下文を見よ。

の故に、犯戒の失を離れて戒淸淨なるが故なり。第三地の中にて無盡身を得。何を以ての故に、欲貪瞋を離れて勝定を得るが故なり。第四地の中にて善修身を得、何を以ての故に、常に勤めて菩提分を修習するが故なり。第五地の中にて法性身を得、何を以ての故に、諸の諦理を觀じて法性を證するが故なり。第六地の中にて離尋伺身を得。何を以ての故に、緣起の理を觀じて尋伺を離るるが故なり。第七地の中にて不思議身を得、何を以ての故に、方便善巧して智行滿ずるが故なり。第八地の中にて寂靜身を得。何を以ての故に、諸の煩惱戲論の事を離るるが故なり。第九地の中にて虛空身を得。何を以ての故に、身相盡くる無く、一切に遍ずるが故なり。第十地の中にて妙智身を得。何を以ての故に、一切種智は修して圓滿するが故なりと。是に於て最勝復た佛に白して言さく、佛と菩薩の身と豈に差別無きやと。[一]佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、身は差別無きも功德は異り有り。其の義云何、謂ゆる佛と菩薩の身とは差別無し。所以は何ん、一切法は同一性相なるを以てなり。功德異るとは謂ゆる如來身は諸の功德を具するも菩薩は爾らず。吾れ當に汝が爲に略して譬喩を說くべし、譬へば寶珠の若しは莊飾を具し莊飾を具せざるも其の珠異ること無きが如し。佛菩薩の身も亦復た是の如し。功德異り有るも法性に別無し。所以は何ん、如來の功德は一切圓滿して十方を盡くし有情界に遍じ淸淨にして垢を離れ障礙永く無し。菩薩の身は功德未だ滿ぜず餘障有るが故なり。譬へば白川の滿ち未だ滿たざる有るも川性異り無きが如く二身も亦た然なり。是の如き諸身悉く皆堅固にして破壞す可からざること猶ほ金剛の若し。所以は何ん、[二]三毒に穢れず世法に染まず、惡趣人天の者も過ること能はず悉く皆生老病死を遠離し、能く外道を伏して魔の境界を超え、獨覺及び聲聞乘に趣かず、是の因緣を以て破壞す可からざるなり。[三]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて善能く奬導するに世間の天人阿素洛等咸く皆信用すと。譬へば人有り善く奬導を爲すに若しは諸の國王若しは王と等しきものは長者居士咸く之を信用せんが如

【一】 佛と菩薩は身無差別なるも功德に於て異有ることを喩說す。

【二】 三毒。一に迷心を以て一切順情の境に對して厭く無きものを貪毒。二に迷心を以て一切違情の境に對して忿怒を起すものを瞋毒。三に心性闇鈍にして事理の法に迷ふものを癡毒と云ふ。

【三】 菩薩の能く般若を行じて行路の邪正を知り、有情を奬導し出離を得せしむることを明す。

し。此の諸の菩薩も亦復た是の如し、聲聞獨覺菩薩如來皆悉く共に許して善く獎導すと爲す。善く獎導するに國王大臣婆羅門等咸く共に尊敬するが如く此の諸の菩薩も亦た復た是の如し。天龍藥叉阿素洛等の有學無學の供養する所なり。險しき曠野の行人疲倦せるに善く獎導して能く安隱ならしむるものに遇はんが如し。此の諸の菩薩も亦復た是の如し。巧便を以て有情を獎導し生死に於て安隱に出づることを得せしむ。諸の貪人の富める長者に依りて方に險難を出づるが如く。一切の外道及び婆羅門は生死の中に於て此の菩薩に依りて乃ち出離することを得。大長者の無量の資財は一切の人の受用する所と爲るが如く此の菩薩も亦復た是の如し、生死の有情の共に受用する所なり。大長者の險難を過ぎんと欲せば必ず多くの伴を假りて飲食資糧皆悉く具足し爾して乃ち能く度るが如く此の諸の菩薩も亦復た是の如し、世間生死の險道を出でんと欲せば必ず福慧を以て諸の有情を攝して方に世間を度りて一切智に至る。人の遠く行くに多く寶物を齎すが如し、利を得んが爲の故に、此の諸の菩薩も亦復た是の如し、生死海より一切智に趣くに要らず廣く福慧の珍財を修集す、速に一切智を證得せんが爲の故に。世間の人の財を求めて厭くこと無きが如く此の諸の菩薩も亦復た是の如し、樂うて勝法を求め曾て厭心無し。獎導者は四事他に勝る、財富み位高く伎能くし言信ぜらるるが如く此の諸の菩薩も亦復た是の如し、諸の功德に富み位曾高に處し法に於て自在にして言ふ所異ること無し。人の善く導きて大城に至るが如く此の諸の菩薩も亦復た是の如し有情を獎導して一切智に至らしむ。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて善く行く可きと行く可からざるとの路を知る、所謂邪正曲直安危水有る水無き若しは留難有る或は出離の道皆善く通達す。是の諸の菩薩は[一四]無倒の路を知り、凡そ示導する所衆根に違はず、大乘人の爲には無上道を說きて獨覺及び聲聞道を說かず、獨覺人の爲には獨覺道を說きて菩薩及び聲聞道を說かず、聲聞人の爲には聲聞道を說きて獨覺及び菩薩道を說かず、我に著せる者の爲には無我道を說き、法に著せる

【一四】無倒。一切の顚倒を離れたる正見。

者の爲には法空道を說き、[一五]二邊に著せる者には爲に中道を說き、迷亂者の爲には[一六]止觀道を說きて迷亂せざらしめ、戲論者の爲には眞如道を說きて戲論せざらしめ、生死に著せる者には涅槃道を說きて世間を出でしめ、迷途者の爲には正直道を說きて邪路を遠ざけしむ。天王、是れを諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて邪正の路を知り有情を獎導して出離することを得せしむるを名づくと。

【一五】 二邊。中道を離れて一方に傾くを邊といふ。有邊、無邊の稱。

【一六】 止觀。止(Samatha)とは停止の義、心を攝し妄念を停めて一境に止住せしめること。觀(Vipasyana)とは觀達の義、靜的に整齊した心境に一切事象に動的に[illegible]觀照無礙なるをいふ。禪定と智慧といふに同じく、二者は體と用との關係にあり、不離一對の法である。

第六分念住品第五

[一]爾の時最勝復た座より起ち偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて能く是の如く路非路を知らば心何に縁りて住するやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば心正しく亂ること無しと。所以は何ん、是の諸の菩薩は善く身受心法念住を修し凡そ遊行する所の城邑聚落利養を聞說するも心貪染せず、佛世尊の戒經の中の說の如く善く自ら憶念して諸の煩惱を離るればなり。天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて[二]身念住を修するや。謂ゆる此の菩薩は如實智を以て一切の身と相應する惡不善法を遠離す。此の身を觀察するに足より頂に至るまで唯だ種種の不淨過失のみ有りて我無く樂無く常無し。敗壞せば腥臊臭穢にして筋脈連持するのみ。斯の如き惡色誰れか當に喜見すべきと。是の如く觀じ已らば身中の貪欲身に執する我見皆復た生ぜず、此れに由りて便ち能く諸の善法に順ふ。天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて[三]受念住を修するや。謂ゆる此の菩薩は是の思惟を作す、諸の受は皆苦なるも有情は顚倒して妄りに樂想を起し、異生は愚癡にして苦爲れ樂なりと謂へり。聖者のみ但だ一切皆苦なりとし、苦を斷滅せんが爲には應に精進を修すべし亦た當に餘に勸めて此の法を勤修せしむべしと說くと。是の觀を作し已て恒に受念に住し、受に隨て行ぜず修行して受を斷じ亦た他をして學せしむ。天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて[四]心念住を修するや。謂ゆる此の菩薩は是の思惟を作す、此の心無常なるも愚なるは常住なりと謂ひ、實に苦なるを樂なりと謂ひ、無我なるを我なりと謂ひ、不淨なるを淨なりと謂へり。此の心は住まらずして速に疾く轉ずること易く隨眠の根本、諸の惡趣の門なり。煩惱の因緣もて善趣を壞滅す。是れ信ず可からず貪瞋癡の主なり。一切法に於て

【一】般若行の菩薩の修する念處に就て明す。

【二】一に身念住を明す。

【三】二に受念住を明す。

【四】三に心念住を明す。

心を前導と爲す。若し善く心を知らば悉く業法を解せん。種種の世法は皆心に由りて造るも心は自ら種種の過失、若しは善若しは惡皆心に由りて起ると見ず。心性速に轉ずること[五]旋火輪の如く、飄忽として停まらざること[六]風野馬の如く、水瀑の起るが如く、火の能く燒くが如しと。是の如き觀を作して念をして動ぜざらしめ、心をして隨はしめ已て心行に隨はず、若し能く心を伏せば則ち業法を伏するなり。天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて[七]法念住を修するや。謂ゆる此の菩薩は能く如實に世間の所有る惡不善法を知る。謂ゆる貪瞋癡及び餘の煩惱なり。諸の煩惱に於て應に對治を修すべし。謂ゆる貪欲瞋恚愚癡及び餘の煩惱の對治差別を修し如實に知り已て即ち廻らして念を起す、彼の法を行ぜず亦た他をして離れしめんと。天王、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて境に於て念を起すや。謂ゆる此の菩薩は若し色聲香味觸境に遇はば便ち是の念を作す、云何が此の眞實ならざる法に於て而かも貪愛を生ずる。此れは乃ち異生愚癡の著する所、即ち是れ不善なり。世尊の說の如きは愛すれば即ち著を生じ著せば即ち迷謬し、此れに由りて善法惡法を知らず、是の因緣を以て惡趣に墮すと。菩薩は是の如く自ら漏失せず境界に著せず他をして亦た爾ならしむ。[八]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて[九]阿練若を念ず、謂ゆる此の菩薩は是の思惟を作す、阿練若處は是れ無諍人の居止する所、寂靜の住處なり。天龍藥叉他心智者悉く能く我の心心所法を知れば此に住して邪思惟を起すべからずと。此の思惟に由りて即ち捨離することを得、法に於て正念にして勤めて之を修行す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作す、城邑聚落は諸の喧雜多く出家人の行く可き所の處に非ず則ち往くべからず、所謂酤酒婬女王宮博奕歌舞是の如き等の處は皆之を遠離せんと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ利養の名を聞きて正憶念を起し謂ゆる是の念を作す、彼の福を生ぜんが爲に應に此の財を受くべしと。貪愛に由らずして受け已て悋惜し妻

【五】旋火輪。一點火轉すること速にして輪と見ゆ、故に轉ずる疾きに喩ふ。
【六】風野馬。かげろふの飛ぶに似たりとなり。
【七】四に法念住を明す。
【八】以下菩薩の頭陀行に就いて明す。
【九】阿練若（Araṇya）。閑靜處、寂靜處等と譯す。比丘の住處、清閑にして修行に適する處をいふ。

子を養育するも、我れ是の如き財物行りと言はずして而かも普周ねく一切の貧窮に給せん。是の如く行ずる者は人の讚歎する所、終に我及び我所に計著せざるなり。復た是の念を作す、人皆我が惠施は名聞なりと稱ふ。世間は無常にして須臾にして磨滅す。云何が智人常無く實無きに恒に主無しとせざらん。彼れに隨て行ぜば我我所に執するなりと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて佛世尊の所說の禁戒を念じ謂ゆる是の念を作す、三世の諸佛は皆此の戒を學して無上覺を成じ大涅槃を證したまへりと。是の如く知り已て精勤修學すと。〔一〇〕天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて有情を化し及び自ら修習せんが爲に少欲喜足にして〔一一〕糞掃衣を著、心常に清潔にして信力堅固なり。寧ろ身命を失ふも戒に於て犯さず、心憍慢を離れて城邑に遊行し、弊衣を服ると雖も而かも恥を生ぜず、懈怠を遠離して常に精進を修し、所作未だ辦ぜずんば終に中止せず、糞掃衣に於て過患を見ず朽ち故り弊壞するも終に輕鄙する無く但だ其の德を取るのみ。離欲を失へる者乃ち此の衣を服るも如來の讚むる所にして慳貪の著を息む。亦た自ら我れ能く此れを服るを讚めず、他に於て服ざるも終に毀言無し。此の如く行ずる人は諸天禮敬し佛に讚歎せられ菩薩は護持し婆羅門等は恭敬供養せん。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く是の如き清淨の妙行を修すと。爾の時最勝便ち佛に白して言さく、高行の菩薩深般若波羅蜜多を行ずるに何すれぞ此の糞掃衣を著るを用ふる耶と。佛言はく、天王、諸の大菩薩は世間を護らんが故に糞掃衣を著るなり。所以は何ん、世間若し此の衣服を著るを見ば惡を滅して善を生ずればなり。天王、意に於て云何、菩薩の高行は何すれぞ世尊に如かんやと。最勝白して言さく、百千萬億乃至鄔波尼殺曇分の亦た一にも及ばず。何を以ての故に、佛は是れ法王にして一切智を具し一法も能く照らさざる有ること無きが故なり。天王、意に於て云何、佛の一切の天龍藥叉人非人等に對して〔一三〕杜多の功德を示現し若しは行じ及び常に讚歎するは此れ何の爲す所ぞや。最

【一〇】著糞掃衣を明す。

【一一】糞掃衣。納衣の稱。人の棄てて顧みざる糞掃に等しき賤物を取捨して法衣となす故に名づく。比丘之を着するを十二頭陀行の一とす。

【一三】杜多（Dhuta）。頭陀ともいひ、陶汰、斗藪、修治、洗浣などと譯す。煩惱の塵垢を拂ひ去りて佛道を求むること。これに十二種の行あり。

勝白して言さく、世尊、度す可き諸の有情類及び初發心の諸の菩薩等の未だ煩惱を斷ぜざるを教化せんと欲するが爲に對治を說くことを爲すと。佛言はく、是の如し是の如し。天王、高行の菩薩の養持衣を著るも亦復た是の如し。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して有情を饒益す。[一四]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに世間の爲の故に但だ[一五]三衣のみを畜ふと。何を以ての故に、心足れるを喜べるが故に更に多く求めず卽ち是れ少欲なるなり。求乞せざるが故に聚積する所無く、聚積せざるが故に則ち喪失すること無し。喪失無きが故に則ち憂苦せず、憂苦無きが故に則ち煩惱を離る。煩惱を離るるが故に則ち著する所無し。著する所無きが故に則ち滿盡くと爲す。[一六]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ諸の有情を饒益せんと欲するが爲の故に諸の城邑に入りて鉢を持ちて乞食すと。何を以ての故に、是の諸の菩薩は大悲、心に熏じ諸の有情の多く窮苦有るを觀ては富樂せしめんと欲して彼れの供養を受くればなり。城邑に入る時威儀齊整ひ心正しくして亂れず、善く諸根を攝し徐ろに歩みて行き前視すること六肘、左右を顧ず法の如くにして乞食し[一七]次第に往きて貧家を超えず、稱量して食を取り終に[一八]長く受けず、所得の中に於て更に一分を開き擬して貧乏に施し福田に供養す。何を以ての故に、信施消し難く福を生ぜんが爲の故なり。[一九]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに但だ一坐食のみにして移動せず。何を以ての故に、菩薩は一たび妙菩提の座に坐せば魔來りて嬈亂するも亦た移動せず、出世の定慧智法空實際眞如如理理道一切種智に於て皆移動せず。何を以ての故に、一切智法は一たび坐して得るが故なり。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多を行ずるに但だ一坐食するのみ。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸の有情の爲に乞食を示現すと。[二〇]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ常に勤めて阿練若行を修學すと。謂ゆる梵行を修し諸根の中に於て過失を起さず、多聞の力正行を修するに堪ふ

【一四】 但三衣を明す。
【一五】 三衣。僧の著るべき三種の衣服卽ち三種の袈裟なり。僧伽梨（大衣）、鬱多羅僧（七條）、安陀會（五條）の稱。
【一六】 乞食及び節量食を明す。
【一七】 次第。有財有德者のみを飛びとびに求めず。
【一八】 長く。餘剩分を云ふ。
【一九】 一坐食を明す。
【二〇】 住阿練若處を明す。

ろを樂ひ、我の怖畏を離れ身に計著せずして常に寂靜を行ず。是の諸の菩薩は正法の中に於て常に出家を樂ひ、[二二]三輪戒を持て善く法相を知り、如來の所說の少壯老の爲の三種人の誡悉く能く了達し、外境を緣ぜずして專ら白心を念じ、世法を訶毀して出世を讃歎し、諸根を調伏して慧境を取らず、阿練若に於て無難の處に居し、城邑の乞食遠からず近からず、淸き泉水有りて盥洗便易なり、花果林豐かにして惡禽獸無く、巖穴寂靜空閑にして人罕なり。是の如き勝處に而かも爲に居止し曾て聞きし所の法晝夜三時に勤加讃誦するに聲高下を離れ、心、外を緣ぜずして專念に憶持す。婆羅門等其の處に來至せば顧み命じて坐せしめ觀喜して慰問し、其の根性を觀じて爲に正法を說き觀喜し信受し修行することを得せしむ。是の如く方便善巧を具足して我心を遠離す。無我を以ての故に阿練若に於て怖畏を生ぜず、怖畏を離るるが故に樂ひて寂靜を行ず。菩薩は是の如き巧方便力もて示現して阿練若行を修行す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ善く諸行を觀じて是の思惟を作すと。一切の飮食は淸淨香潔なるも身火之に觸るれば卽ち不淨爛壞臭處を成ず。愚夫無智にして此の身及び諸の飮食に愛著す。若し聖智に依りて如實に觀察せば卽ち厭惡を生じて樂著を起さずと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の思惟を作すと、多く瞋恚を行ぜば便ち惡業を起す、我れ今當に瞋心を離れて道に趣き眞實に思惟して徒らに口說するに非ざるべしと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如き念を作すと、若し法の生ずる有るは卽ち是れ因緣なり、因緣の法は又緣より起る。云何が智者は此の虛妄の因緣生の法に於て而かも罪愆を作らん。菩薩は身中に障善の法有らば卽ち自ら除斷す、若し他の障善の法を斷ずること能はずんば心便ち捨を生じて無明を起さず。[二三]云何が名づけて障善の法と爲す、謂ゆる佛法僧寶及び淸淨戒を恭敬せず、同學の老少幼小を敬はず自ら高うして彼れを淩ぎ五欲に趣向して涅槃に背捨し而かも我見或は有情見乃至知者見見者見を起し、空に執して斷見を

【二二】　三輪戒。身口意の三業に對する戒律なり。

【二三】　菩薩の所謂障善法を明す。

起し、有に執して常見を起し、賢聖を遠離して愚夫に親近し、持戒人を捨てて破戒者に依り、惡友に親附して善友を遠離し、甚深の法を聞きて便ち毀謗を生じ、身器[illegible]にして諸善根無く、心諂曲を具し煩惱に覆はれて利養に貪著し五慢具さに生ず、一に貢高慢、二に種族慢、三に見勝慢、四に國土慢、五に徒衆慢なり、惡を見て便ち助け善に遇ひて而かも捨て、美しき女人童稚外道を畜へて阿練若行を修習するを樂はず、節食を解せず師長を遠離し、復た讀誦すと雖も時節を知らず、善を見て重んぜず惡を見て怖れず、象の鉤無く馬の轡勒無きが如く放逸にして制せず、瞋忿を生ずるを憙び心慈念無く、苦を見て愍まず、[三]疾に遇ふも瞻ず死に於て怖れず、大火聚に處するも都て出づるを求めず、作すべきを作さず作すに非ざるを反て作し、思はざるを而かも思ひ思ふべきを思はず、望むに非ざるを而かも求め出でざるを出づると謂ひ、路に非ざるを路なりと謂ひ未だ得ざるを得たりと謂ひ、重惡を樂習して大善を遠離し、大乘及び大乘人を毀謗して小道及び小を學する者を讃歎し、多く闘亂を樂ひ麁惡の言を好み、心慈悲無く他をして怖畏せしめ、言を出せば麁獷、情に一實無く、戲論に樂著して捨つること能はず。是の如き等の事を障菩法と名づくと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ空行を修習して戲論法を滅するに是の思惟を作すと。所觀の境界は皆悉く空無、能觀の心も亦復た有に非ず、能所觀の二種の差別無し、諸法は一相にして所謂無相なりと。是の如く思惟して內外相を遣し、身心を見ず亦た法を見ず次第に相續して止觀を修學す。觀とは謂ゆる如實に法を見るなり、止とは謂ゆる一心にして亂れざるなり。菩薩は是の如く觀行を修し已て卽ち淨戒を得。戒清淨なるが故に行亦た清淨なり。是れを菩薩、深般若波羅蜜多の觀行清淨を行ずと名づくと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ如來の無上の法藏を護持し正法を聽受するは法を護らんが爲の故にして利養の爲ならず、三寶の種の斷絕せざらんが爲の故にして恭敬の爲ならず、大乘行を守護せんと欲するが爲の故にして名譽の爲な

【三】疾を瞻るは看病なり。

らず、歸依無き者に歸依を得せしめ、救濟無き者に救濟を得せしめ、安樂無き者に安樂を得せしめ、慧眼無き者に慧眼を得せしめ、小乘を修する者には聲聞道を示し、中乘を學する者には獨覺道を示し、大乘を行ずる者には無上道を示し、是の如く法を聽くは無上智の爲にして終に下劣の乘を得んが爲ならずと。[二四]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて善く種種毘奈耶の法を知ると。謂ゆる毘奈耶、毘奈耶の行、毘奈耶の甚深、毘奈耶の微細、淨と不淨と失有り失無き、別解脫本、聲聞の毘奈耶、菩薩の毘奈耶なり。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行ずるに是の如き等の毘奈耶の法に於て皆悉く善く知るなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて善く一切の威儀戒行を知り善く聲聞獨覺菩薩の受持する所の戒を學し、既に戒行を修して若し威儀の衆意に稱はざるを見ば則ち應に捨離して非處を行ぜず。若し沙門の威儀戒行具足し淸白なる有らば即ち之に親近し、若し婆羅門餘行を異學せば則ち捨離するを勸めて毘奈耶を修せしむ。是の如きを修習せば戒行成滿して心に巧僞無く嫉妬便ち滅し、自ら布施を行じ亦た他に勸めて行ぜしめ、布施を讃歎して他をして修學せしめ、他の布施するを見て心に隨喜を生じ、是の念を作さず、我れには施して餘には非ざれと。但だ應に思惟すべし、諸の有情類は多く貧乏飢寒困苦有り、願くは彼れ財を得て現世安樂にして正法を聞くが故に後世安樂ならんことをと。我れ應に今世に精勤して道を修すべし、願くは有情と同じく出離することを得んことをと。是れを菩薩嫉妬心無しと名づく。諸の有情に於て皆平等を得て若し布施淨戒安忍精進靜慮般若乃至一切相智を行ぜば普ねく有情の爲に其の心二無し。何を以ての故に、修する所の法は有情の與に共に境界と爲らんことを念じ速に道を得せしめ、生死の火に於て自ら既に出づることを得亦た有情の同じく出離するを得ることを願へばなり。天王、譬へば長者の六子幼稚なるを並びに皆愛念して偏黨心無きが如し。長者外に在りて其の宅火起るに、意に於て云何、爾の時長者頗し是の念有りて其の六子に於て先後に救ふや不やと。

【二四】種種毘奈耶を明す。毘奈耶は律なり、制止なり。

不なり世尊、何を以ての故に、其の父は子に於て心平等なるが故なり。天王當に知るべし、菩薩も亦た爾なり、愚夫は生在の六趣生死の火宅に貪著して出離を知らず、是の諸の菩薩は平等心を以て種種に方便し誘化し出でしめて皆悉く閑寂界の中に安置す。〔三五〕天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ法に於ても亦た等しく、正法を護らんが爲に如來を供養し、種種の供具もて如來を供養し、如實に修行して如來を供養し、一切有情を利益安樂して一切有情の善法を守護し、有情に隨順して善能く化導し、菩薩道を行ずるに行言に違はず、心驕傲無くして無上覺を求めん。若し能く是の如くせば乃ち名づけ諸佛を供養すと爲すことを得。資財を以てせずして而かも供養を爲すなり。何を以ての故に、法は是れ佛身なればなり。若し法を供養せば即ち佛を供養するなり。諸佛世尊は皆如實に修行するに從て來りたまへり。悉く有情を利益安樂せんが爲に其の善法を護りて有情に隨順す。若し爾らずんば本誓願に違ひ懶惰懈怠にして菩提の心を成就すること能はず。何を以ての故に、菩薩の趣く時の無上菩提と有情とは共なればなり。若し有情無くんば云何が能く無上菩提を得ん。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ正法を修行して如來に供養するを眞の供養と名づくと。是の如き供養は我慢を拔除し俗務を遠離して鬚髮を剃落し其の父母兄弟親戚に於て相關預せざること猶ほ已に死せるが如く、形狀衣服並に常に異り、應器を執持して城邑に遊入す、若し親里旃荼羅が家に至るも亦た我慢を摧きて下意乞食し謂ゆる是の念を作す、我が命は他に屬せり、彼の施食に由りて我が命は存濟すと。是の因緣を以て能く我慢を除き、復た是の念を作す、我れ今應に師友等の意を取りて歡喜を生ぜしむべし、昔未だ聞かざる法を聞くことを得んが爲の故に。若し他人の瞋忿鬪諍せるを見ば即ち應に忍辱下意して之を避くべしと。菩薩は是の如く我慢を拔除す。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに堅き正信を生ずと。何を以ての故に、諸の功德多く宿世に種ゑし所の善根力強く、善因具足して正見成就し、外

〔三五〕般若行の菩薩の諸佛を供養するを明す。

縁を信ぜず內心清淨にして餘師に依らず心行調直にして諂詐を遠離し、諸根聰利にして般若波羅蜜多を具足し、諸の[二六]蓋障を離れて其の心淸淨に、惡友を遠離して善友に親近し、善言を尋求して懈怠を生ぜず、所說の法を聞きて佛の功德を知ればなりと。[二七]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、唯だ願くは大慈哀愍して爲に如來の功德大威神の相を說きたまへと。佛、最勝に告げたまはく、天王、汝今諦かに聽き善く思へ、吾れ當に汝が爲に佛の功德威神の少分を說くべしと。最勝白して言さく、唯然、願くは說きたまへ、我れ等樂聞したてまつらんと。佛言はく、天王、如來は無邊の大慈を具足して遍ねく有情有情界を照らし乃至十方盡虛空界を攝して亦た皆遍ねく照らすに測量す可からず、如來の大悲は聲聞獨覺及び諸の菩薩に皆有ること無き所なり。何を以ての故に、[二八]不共法なるが故なり。十方世界に一有情も如來の大悲の能く照さゞる所無し。如來の說法は究竟して無盡なり。普ねく十方の諸の有情類の爲に無量劫を經て種種の因緣もて諸の法要を說くも亦た盡くす可からず。若し有情界の種種の言辭一切の句義もて難問するも如來は一彈指の頃に一一の有情の各に分別を爲すに能く壞する者無し。如來の得たまへる所の無礙の靜慮の境界は甚深にして測量する者無し。假使ひ一切世界の有情皆菩薩の十地に住することを得て多く百千劫勝等持に入るも如來の定境を測量すること能はず。如來の身量は無邊際なり。何を以ての故に、樂見する所に隨つて一念の頃に於て能く無邊の異類の身を現ずるが故なり。如來の天眼は最勝淸淨なり。一切の世界の一切の有情の色相の差別及び餘の物類の種種の不同を如來は皆見ること[二九]掌中の阿摩洛果を觀るが如く諸の人天の眼の及ぶ能はざる所なり。如來の天耳は最勝淸淨なり。一切有情の音聲の差別及び餘の物類の所有る音聲を一念に悉く聞きて其の義を解了す。如來は復た淨他心智有り。一切の世界の一切の有情の一一の思惟作業受果の無邊の差別佛の四威儀を一念の頃に於て皆悉く了知す。何を以ての故に佛は常に定に在りて散亂無きが故なり。天王當に知るべし、佛は失念無く心散亂せず根異緣無し

【二六】蓋障。煩惱の異名なり。

【二七】佛の功德威神の相を明す。

【二八】不共法。自他別別に感生したる法のこと。如來無量の意業により他の及ばざる勝德を成就せる力を云ふ。

【二九】掌中の阿摩洛果。阿摩洛果(Āmalaka)はマンゴー果のこと。一目瞭然なるを喩へて云へる語なり。

と。何を以ての故に、煩惱習を離れ畢竟清淨にして垢無垢なればなり。有情有る者は失念し散亂し根異雜有り、如來世尊は過無く雜を離れ、一切法自在平等なるを得、常に等持及び等至に在るが故に。如來は但だ一種の威儀のみに住して一等持より金剛喩に進入し、諸の人天等皆悉知ること能はず、況んや復た如來の無量劫を經て無量無邊の勝行を修習するに而かも人天の能く了知する者有らんをや。何を以ての故に、如來の功德は度量す可からず思議す可からず稱る可からざるが故なりと。爾の時最勝便ち佛に白して言さく、我れ聞く、如來は三無數劫に修行して成佛したまへりと。云何が今無量劫の修を說きたまふやと。佛言はく、天王、其の義は爾らず。何を以ての故に、菩薩の趣く所の無上菩提は無量の功力もて乃ち成辦することを得ればなり。爾許の劫數を經ずして而かも能く法の平等理に證入するに非ず。修、究竟に至れば乃ち成佛すと稱ふと。是に於て最勝白して言さく、世尊、善哉善哉、快く法要を說き善能く一切有情を勸發して善根を種植し業障を遠離し佛果を欣樂して菩薩行を修せしめたまへり。若し有情類如來の功德威神を聞くことを得ば心に敬喜を生じて信受讃歎せん。當に知るべし久しからずして佛の功德威神の法器を成ぜんと。況んや復た能く受持讀誦し書寫供養して他の爲に解說する有らば彼の獲る所の福は思議す可からずと。[30] 佛言はく、天王、是の如し是の如し、彼の有情類は如來に奉持し已に善根を種ゑて多劫數を經たるなり。若し過去に於て多佛を供養せば乃ち佛の功德威神を聞くことを得。天王當に知るべし、若し善男子善女人等心に疑惑無く七日の中に於て澡浴し潔淨にして新淨の衣を著け花香もて一心正念に前に說く所の如き如來の功德及び大威神を供養せば爾の時如來慈悲護念し身を現じて見せしめ、願をして滿足せしむ。若し少しく花香等の事を闕く有らんも但だ一心に功德威神を念ぜば將に命終せん時必ず見佛することを得んと。[31] 爾の時最勝復た佛に白して言さく、頗し有情の是の如き如來の功德及び大威神を說くを聞きて信心を起さずして而かも毀謗すること有りや不やと。佛言はく、亦た有り、謂ゆる有

【三〇】有情の能く佛の功德威神を供養せば獲る所の福大なるを明す。

【三一】有情の若し佛の功德威神を毀謗する者有らば受くる所の苦大なるを明す。

情有りて是の如き如來の功德威神の法門を說くを聞きて不善の心を起して瞋忿し毀謗し說法師に於て惡友の想を生ぜば彼れ後に捨命して必ず地獄に墮して多劫に苦を受けん。若し諸の有情是の如き如來の功德及び大威神を說くを聞きて歡喜して信受し讚歎憶念し說法師に於て善友の想を生ぜば彼れ後に捨命して定めて人天に昇り展轉勝進して乃至成佛せんと。[二二]爾の時世尊[二三]廣長舌相を出して自ら面輪を覆ひ、次に頭頂を覆ひ、次に遍身を覆ひ、次に師子座を覆ひ、次に菩薩衆を覆ひ、次に聲聞衆を覆ひ、然して後乃ち釋梵護世人非人等一切の大衆を覆ひ、還て舌相を收めて大衆に告げて言はく、如來世尊は是の舌相有り豈に常に妄語すべけんや。汝等大衆我が所說に於て皆應に信受して長夜に安を獲べしと。是の法を說きたまふ時衆中の八萬四千の菩薩は無生忍を得、無量の有情は遠塵離垢して淨法眼を生じ、無數の有情は皆無上正等覺の心を發せり。

【二二】世尊廣長の舌相を示現し給ふ。

【二三】廣長舌相。三十二相の一。大舌相ともいひ、佛の廣く長き舌のことにて、虛妄なきことをあらはす相也。

第六分法性品第六

[一]爾の時最勝復た座より起ちて偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、希有なり世尊、若し諸佛の微妙の功德及び大威神を說きたまはば諸佛如來は何に因りて此の微妙の功德及び大威神を得たまへるや、唯だ願くは世尊、分別し解說したまへと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、如來の所行及び所得の果は甚深微妙にして思議す可からずと。最勝白して言さく、佛何の法を行じたまふを說いて深妙不可思議と爲すやと。佛言はく、如來の法性の因果は甚深微妙にして思議す可からず、功德威神及び所說の法の他事を利樂するも亦復た是の如しと。最勝復た言さく、云何が法性は甚深微妙にして思議す可からざるやと。佛言はく、天王、如來の法性は有情類の[二]蘊界處の中に在りて無始より來た展轉して相續し煩惱に染まず本性清淨にして諸の[三]心意識も緣起すること能はず餘の尋伺等も分別すること能はず邪念思惟も緣慮すること能はず、邪念を遠離し無明生ぜず、是の故に[四]十二緣起に從はず、說いて無相と名づく。所作の法に非ず生ずる無く滅する無く邊り無く盡くる無く自相常住なり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く法性の淸淨なることと是の如しと知りて染まる無く著する無く垢穢を遠離して諸の煩惱より超然として解脫す。此の性を即ち諸の佛法の本と名づく。福德智慧は之に因りて起る。本性明淨にして思議す可からずと。天王、我れ今當に譬喩を說くべし、汝應に諦かに聽きて善く之を思念すべしと。王言さく、世尊、唯然、願くは說きたまへと。佛、最勝に告げたまはく、譬へば[五]無價の如意寶珠の裝飾瑩治して皎潔愛す可く、體極めて圓淨にして垢濁有ること無く墮ちて淤泥に在り時を經ること已に久しきも人有り拾得するに歡喜して之を取り勤加守護して墮落せしめざるが如

【一】佛、法性の甚深微妙不可思議を明す。

【二】蘊界處。五蘊、十八界十二處、をいふ。

【三】心は一心、本識、意は末那にして前前相續の意識、審かに我とする執見たり、識は分別に伴ふ六識八識等とす。

【四】十二緣起。十二支、十二因緣に同じ。三界の迷の因果を十二に分ちて衆生輪廻のさまを示したるもの。

【五】無價。至上の價値あるものの稱。

く、法性も亦た然なり。煩惱に在りと雖も染む所と爲らずして後復た顯現す。天王、諸佛は悉く有情の本性淸淨なるも[六]客塵の煩惱に覆蔽せられて悟入すること能はずと知れり。是の故に菩薩は深般若波羅蜜多を行じて應に是の念を作すべし、我れ當に精勤して有情の爲に甚深般若波羅蜜多を說き其の煩惱を除いて悟入することを得せしむべし。一切の有情は本性皆淨なり、當に尊敬を起すべく輕凌すべからず、應に大師に同じく法の如く供養すべしと。此の諸の菩薩は是の念を作すに由りて便ち能く般若の大悲を生起す。菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行ぜば卽ち能く不退轉地に證入せん。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて復た是の念を作す、此の諸の煩惱は無力無能、自體虛妄にして淸淨法に違へり。何を以ての故に、一切智に背きて生死に順ずるが故なりと。淸淨の法性は諸法の本と爲るも自性は本無し。虛妄の煩惱は皆邪念顚倒に從て生ず。天王當に知るべし、譬へば四大は虛空に依りて立つも虛空は依る無きが如し。煩惱も亦た爾なり、法性に依るも法性は依る無しと。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ如實に觀知して違逆を起さず、隨順するを以ての故に煩惱生ぜず。是の諸の菩薩は煩惱を觀察し染著を生ぜずして謂ゆる是の念を作す、若し自ら染著せば云何が法を說いて他をして出離せしめんと。是の故に菩薩は著心を斷滅し如實に敎を說いて有情の縛を解く。是の諸の菩薩は復た是の念を作す、若し生死の中一煩惱の能く有情を益する有らば我れ則ち攝受せん、然るに是の事無し。故に應に斷滅すべしと。是の諸の菩薩は復た是の念を作す昔諸佛の深般若波羅蜜多を行じて諸の煩惱を斷じたまひしが如く我れも亦た應に爾すべし。何を以ての故に、諸佛如來も昔[七]因地に在りて亦た是の如く學して菩提を成じたまひしが故なりと。是の諸の菩薩は此の二緣に由り方便善巧して法性を觀知す、是の如き法性は無量無邊なるも諸の煩惱の隱覆する所と爲り、生死の流れに隨て六趣に沈沒し長夜に輪轉す。有情に隨ふが故に有情性と名づくと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ厭離心を起して五境の欲を除き

【六】客塵。煩惱のこと。煩惱に定住せずして眞智により拂拭せらるるものなれば客といひ、微細にして數多ければ塵と名くるなり。

【七】因地。因位なり。果上の對、未だ佛果を得ざる菩薩の地位。

諸の分別を滅して無上道を修すと。是の時此の性を名づけて出離と爲し、一切の苦を超ゆるが故に寂靜と名づく。是れ究竟の法、世の樂ひて求むる所の一切種智にして常住微妙なり。是の法性に因りて能く自在を得て法王の位を受くるなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ初中後位に法性を觀察するに一切平等本來寂靜にして諸法の罣礙する所と爲らざること猶ほ虛空の色の礙と爲らざるが如し。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて如實に諸佛の所說の一切の妙行如量の修行を觀知するも法性の功德は具さに說く可からず、二相は一異の境に過ぐる有ること無く平等一相にして肆何行ぜず、菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行ずるに能く二相の我相法相を除く。一切の異生は執の縛する所と爲りて法性を識らず見ず得ざるなり。是の諸の菩薩深般若波羅蜜多を行ぜば則ち能く是の如き法性に通達し諸の有情に在りて二無く別無し。何を以ての故に、諸法の眞如は異相無きが故なり。[八]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに此の法性に依りて諸の善根を修し[九]三有に來入して有情を饒益し、無常を現ずと雖も而かも眞實に非ずと。何を以ての故に、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて如實に眞の法性を觀知するが故に方便大悲願力を具足して有情を捨てざればなり。二乘異生は既に是の如き大悲願力無し、是の故に圓淨の法性を見ず如實に有情を饒益すること能はざるなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く是の如き眞淨の法性を觀じ、一切の聖者は如實に能作者無く所修の法無く能行者無く所行の法無く心所無く業無く異熟無く苦無く樂無しと悟入す。是の如く證する者は平等を得と名づく。遠離に異る無く廣大に隨順して我我所無く高無く下無く眞實無盡常住明淨なり。所以は何ん、一切の聖法は此れに由りて成熟し是の性に因るが故に聖者を顯現す。諸佛如來の無邊の功德不共の法は此の性に從て生じ、是の性に由りて出で、一切の聖者の[一〇]戒定慧品は此の性に從て生じ、諸佛菩薩の甚深般若波羅蜜多は此の性に從て出づればなり。是の性は寂靜にして諸の名相

【八】菩薩の法性觀知を明す。

【九】三有。有は因果空しからずして存在する義。欲界、色界、無色界をいふ。

【一〇】戒定慧。戒律、禪定、智慧の略稱。この三は互にあひよりて證果を得せしむるが故に三學と名く。

を過ぐ。性は是れ眞實にして[一一]顚倒を遠離す。性變異せざるが故に眞如と稱し、是れ聖智の境なるが故に勝義と名づく。有に非ず無に非ず常に非ず斷に非ず、生死に非ず涅槃に非ず染に非ず淨に非ず、一を離れ異を離れ相無く名無し。[一二]天王當に知るべし、此の諸の菩薩は復た是の念を作すと、法性の[一三]離相と諸法の離相と二無く別無しと。何を以ての故に、諸法の離相は即ち法性の離相。法性の離相は即ち有情の離相、有情の離相は即ち法界の離相、法界の離相は即ち諸法の離相なればなり。是の如き離相は求むるも得可からず。[一四]法性の眞如と有情の眞如と二無く別無く、有情の眞如と法性の眞如と二無く別無く、法性の眞如と諸法の眞如と二無く別無く、諸法の眞如と諸佛の眞如と二無く別無く、法性の眞如と三世の眞如と相違逆せず、過去の眞如と未來の眞如と相違逆せず、未來の眞如と現在の眞如と相違逆せず、現在の眞如と過去の眞如と相違逆せず、三世の眞如は即ち蘊界處の眞如、蘊界處の眞如は即ち染淨の眞如、染淨の眞如は即ち生死涅槃の眞如、生死涅槃の眞如は即ち一切法の眞如なり。天王當に知るべし、眞如は名づけて無異無變無生無諍と爲す。自性眞實にして無諍を以ての故に說いて眞如と名づくと。如實に諸法の不生を知見するなり。諸法は生ずと雖も眞如は不動なり。眞如は諸法を生ずと雖も而かも眞如は不生なり。是れを法身と名づく。淸淨不變なること虛空の[一五]無等等なるが如し。一切の三界に一法も能く及ぶ所の者有ること無く、遍ねく有情身の與に等しき者無し、淸淨にして垢を離れ本來不染、自性明淨、自性不生、自性不起、心意識に在るも心意識に非ず、性は即ち是れ空無相無願にして虛空界の諸の有情に遍じて一切平等に處し、無量無邊にして異らず別ならず、色受想行識に非ず色受想行識を離れず、地水火風大に非ず地水火風大を離れず、無生にして生を離れず、生死に逆ふと雖も涅槃に順はず、眼も見ること能はず、耳も聞くこと能はず、鼻も嗅ぐこと能はず、舌も嘗むること能はず、身も覺すること能はず意も知ること能はず、心意識に在らず心意識を離れず。[一六]天王當に知るべし、是れを法性と名づく

【一一】顚倒。眞理に違ふことにて、迷ひをいふ。
【一二】法性の離相を明す。
【一三】離相。有爲生滅の相を離るること。
【一四】法性の眞如に就て明す。
【一五】無等等。虛空の一切を超越せる廣大なる(無等)も亦一切平等なる(等)に例して佛のことに用ふ。諸佛は世の衆生に對比するに、よく等しきものなく(無等)、而も諸佛所證の法身は彼比同一なる(等)が故に稱す。
【一六】菩薩の色身示現を明す。

と。諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く此の法性に通達するを以ての故に清淨を修行して能く三千大千世界の諸の贍部洲の城邑聚落に於て色身を示現す。現ずる所の身は色に非ず相に非ずして而かも色相を現じ、六根の所行の境界に非ずと雖も而かも有情を化して常に休息無く、爲に此の身の無常無我是れ苦にして淨に非ざるを說く。諸の有情に寂靜性有りと知るが故に爲に無量種の身を示現し方便善巧して彼れをして化を受けしむ。一切の身は都て作者無く亦た受者無きこと木石等の如しと知りて而かも有情の爲に清淨行を說く。[一七]菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行じて法性に通達せば卽ち自在を得、移動有ること無くして而かも智業を起し神通に遊戲して種種に示現し、自在に安住して而かも能く種種の威儀を示現し、自在に能く一切相智に趣いて皆悉く一切の法性に通達す。天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は是の如く自在なること是れ無盡相なり。遍ねく一切處に色無きに色を現じ、自在に遍ねく諸の有情心を觀じて如實の心性を見、自在に憶念し無邊無數劫に相續して斷ぜず、自在に變化して解脫相に住し、自在に漏盡するも有情の爲の故に漏盡を證せずして自在に出世す。是れ聖智の境にして自在甚深なり、聲聞獨覺は測量すること能はず、自在堅牢にして魔も壞すること能はず、菩提の座に坐して成就せる佛法は最も爲れ第一にして自在に隨順して妙法輪を轉じ、自在に一切の有情を調化して自在に位を受けしめ法を得ること自在なりと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ如實に甚深の法性に通達して是の自在を得是の自在を修せば卽ち一切の靜慮解脫等持等至を得て三界に繫せずと。所以は何ん、一切の虛妄の分別煩惱繫縛顚倒の執相を遠離すればなり。若し生を受けんと欲せば生に於て自在にして繫縛を遠離せん、若し滅を現ぜんと欲せば滅に於て自在にして其の生處に隨て恒に大乘を攝して佛法を成熟せん。能く十方に於て佛法を推求するも竟に得可からずして一切法は同一佛法にして常に非ず斷に非ずと知らん。何を以ての故に、此の法を推求するも得可からざるが故なり。如實の理は求むるも

【一七】般若行の菩薩の得る自在に就て明す。

得可からざるを以て此の法は有りと說き無しと說く可からず。亦た名相は此の境界に過ぐる無し。若し名相を離るれば卽ち是れ平等なり、若し法平等なれば卽ち執著無し。執著す可き無きは是の法眞實なり。若し眞實に著せば卽ち是れ虛妄なり、著せざるを以ての故に卽ち虛妄に非ず、滯著する所無き心は卽ち無礙なり、無礙なれば卽ち無障、無障なれば卽ち無諍なり、若し法無諍なれば卽ち虛空に同じく三界に繫せず。若し一切處に繫屬する所無くんば是の法は色無く相無く形無し。若し法色無く相無く形無くんば、應に知るべし是の法は彼の境界に隨て能知を離れ亦た所知を離ると。何を以ての故に、是の中少法も覺る可く、少法も能く覺る有ること無ければなり。是れを菩薩深般若波羅蜜多を行じて平等に通達すと名づく。

[一八]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて大慈大悲大喜大捨を發起するを觀察するに、都て我を見ず有情を見ず乃至知者見者を見ず、布施を行ずと雖も而かも捨する所無く、淨戒を持つと雖も而かも戒相を離れ、安忍を修すと雖も而かも心盡くる無く、精進を修すと雖も而かも其の相を離れ、靜慮を修すと雖も而かも所寂無く般若を修すと雖も而かも所緣無く、念住を修すと雖も而かも取る所無く、正斷を修すと雖も而かも心平等なり、神足を修すと雖も而かも戲論を離れ、根力を修すと雖も而かも有情の諸根を分別せず及び愆失を離れ、[一九]覺支を修すと雖も分別無く、[二〇]道支を修すと雖も而かも功用無く、[二一]淨信を修すと雖も而かも所著無く、自然の智慧もて諸法の平等智心を憶念し、諸の妙定を修するに分別の心無く、妙慧を觀察するに止息の心無く、[二二]奢摩他を修するに所見の心無く、[二三]毘鉢舍那を修するに所念の心無く、佛隨念を修するに法界平等の心に通達し、法隨念を修するに所住の心無く、僧隨念を修するに本心淸淨なり、有情を敎化するに分別を起さず、法界の心もて一切法を攝し、虛空の如き心もて佛土を嚴淨し、無所得心もて無生忍を得、無進退心もて不退轉を得、相心を遠離して有相を見ず、三界平等心もて菩提の座を莊嚴し、無所覺心もて一切法を知り、法輪を轉ずと雖も說聽を

【一八】船若行の菩薩の觀法に就て明す。

【一九】覺支。七覺支を修するも眞生正法を擇ぶ研究にして分別知識にあらず。

【二〇】道支。八正道を修するは念念正信の步みにして別に成績功用を積むものにあらず。

【二一】淨信は明るく進むもので安心や固執にあらず。

【二二】奢摩他(Samatha)。止息、寂靜、能滅などと譯す。

【二三】毘鉢舍那(Vipasyana)。觀、觀察と譯し、正見、了見、能見などと義譯す。

見ず、涅槃を現ずと雖も而かも生死の本性平等なりと知るなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如く法を觀ずるに能觀を見ず所觀を見ずして即時に能く遊戲自在を得と。何を以ての故に、自心淸淨にして能く一切有情淸淨なりと見るが故なり。天王當に知るべし譬へば虛空の一切に遍滿するが如く是の諸の菩薩の深般若波羅蜜多を行ずる心も亦た是の如しと。此の法を說く時衆中の八萬四千の天人倶に無上正等覺の心を發し、三萬二千の菩薩は無生法忍を得、八萬四千の有情は遠塵離垢して淨法眼を得、一萬二千の苾芻は諸漏永く盡きたり。

〔二四〕爾の時佛、最勝天に告げて言はく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じて心淸淨なるを得ること深く大海の如く福德智慧は測量す可からず、能く世に諸の功德の寶を現出す。有情之を用ふるも乃至菩提まで竭盡有ること無し。菩薩の福德も亦復た減ぜざること猶ほ大海の多く衆寶を出すが如し。菩薩の智慧は甚深にして入り難く聲聞獨覺の能く渉る者無し。亦た大海に小獸の入らざるが如く菩薩の智慧は廣大無邊なり。何を以ての故に、著する無く住する無く色無く相無ければなり。菩薩の智慧は初めより後に至り次第に轉た深し、初めは菩提心にして後は一切智なり。菩薩の法も爾なり。煩惱惡友と共住せず。世間の智慧若し菩薩の智慧海の中に入らんに一相一味にして謂ゆる無相なり、一切智の無分別味に趣く。菩薩の智慧もて一切法を觀ずるに增減するを見ず。何を以ての故に、平等の深法性に通達するが故なり。菩薩の所有る大慈悲力は本願に違はず、一切の聖者の所依の處にして諸の有情の爲に永劫法を說くも竭盡有ること無し。天王、菩薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如き甚深の法性に通達す。〔二五〕天王、菩薩の善能く世俗諦の法に通達せるは諸色を說くと雖も而かも實有に非ず、此の色を推求するも終に取著せず、受想行識も亦復た是の如し。地界を說くと雖も而かも實有に非ず、地界を推求するも終に取著せず、水火風空識界も亦復た是の如し。眼處を說くと雖も而かも實有に非ず、眼處を推求するも終に取著せず、耳鼻舌身

【二四】菩薩の般若を行じて得る福德智慧の廣大無邊なるを明す。

【二五】世俗、勝義の二諦を明す。

意處も亦復た是の如し。色處を說くと雖も而かも實有に非ず、色處を推求するも終に取著せず、聲香味觸法處も亦復是の如し。復た我を說くと雖も而かも實有に非ず、此の我を推求するも終に取著せず、有情乃至知者見者も亦復た是の如し。世間を說くと雖も而かも實有に非ず、世間を推求するも終に取著せず、世法を說くと雖も而かも實有に非ず、世法を推求するも終に取著せず。佛法を說くと雖も而かも實有に非ず、佛法を推求するも終に取著せず。菩提を說くと雖も而かも實有に非ず、菩提を推求するも終に取著せず。天王當に知るべし、凡そ言說有るは世俗諦と名づく、此れ眞實に非ず。若し世俗無くんば卽ち勝義諦なりと說く可からず。是の諸の菩薩は世俗諦に通達して勝義諦に違はず。通達するに由るが故に一切法は生無く滅無く成無く壞無く此れ無く彼れ無しと知りて語言文字戲論を遠離すと。天王當に知るべし、勝義諦とは言を離れし寂靜聖智の境界にして變壞法無く若しは佛出世し若しは出世せざるも性相常住なり。是れを菩薩勝義に通達すと名づくと。[二六] 爾の時最勝便ち佛に白して言さく、若し一切法生無く滅無く自性空離ならば云何が佛有りて世間に出現し及び法輪を轉じ、云何が菩薩は無生法に於て而かも生ずる有りと見るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸法は滅する無し、是の故に生ずる無しと。何を以ての故に、性不變なるが故なり。但だ世俗に依りて生滅有りと見るのみ。皆是れ虛妄にして眞實の有に非ず。若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ、方便善巧して因緣法を見ば世俗諦の空無所有なるを知り堅實なるを見ず、有るに非ずして有るに似たること幻の如く夢の如く響の如く像の如く光影の如く陽焰の如く變化事の如く尋香城の如く搖動して安らかならざるは因緣より起る。是の諸の菩薩は妙般若を以て諸法空を觀じ、――廣說乃至――因緣より起る。是の思惟を作さん、此れ等の諸法は今生ずる有り住する有り滅する有るを見る。[二七] 何の因緣もて生じ何の因緣もて滅すると。既に思惟し已て卽ち如實に無明の因緣の故に諸行を生じ、行に依りて識を生じ――廣說乃至――有に由るが故に生ず。生ず

【二六】一切法の本性不變を明し、生滅の因緣を喩說す。

【二七】無明に緣て生じ、無明滅して業生死苦有も亦滅することを說く。

れば卽ち老有り、老の故に死及び愁歎苦憂惱有りと知る。是の故に修行して爲に無明を斷ず。無明若し斷ぜば餘の十一支展轉して隨て滅すること身若し命等を斷ずれば隨て滅するが如し。天王當に知るべし、邪見の外道は解脫を求めんが爲に但だ死のみを斷ぜんと欲して生を斷ずるを知らず、若し法生ぜずんば卽ち滅有ること無し。譬へば人有り塊を師子に擲つに師子人を逐はば而かも塊自ら息むが如し。菩薩も亦た爾なり。但だ其の生のみを斷ぜば而かも死自ら滅す。犬は唯だ塊のみを逐ひて人を逐ふを知らず塊終に息まず、外道も亦た爾なり、生を斷ずるを知らず終に死を離れず。菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行ずるに善く因緣もて諸法の生滅するを知る。

二八 天王當に知るべし諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに緣生法の空無所有なるを知りて我慢を起さず、富貴の家に生じては豪富尊貴の二慢を起さず、貧賤の家に生じては自ら宿業甚だ清淨ならずして果を得ること下劣なりと知りて心に厭離を起し便ち出家を求めて是の如き念を作す、我が此の身の如きは雜業の所得なれば更に淨業を修して自らをして淸淨ならしめ、他をして亦た爾ならしめん、自ら旣に求度し亦復た他を度せん、自ら出離を求め亦た他の縛を解かんと。是の因緣を以て便ち精進を起して懈怠を遠離するに障道の惡法皆應に斷除すべく、助道の法皆應に增長すべし。勤修精進して是の思惟を作さん、我れ重擔を負へり、當に自ら一切の煩惱を滅すべく有情を度脫するに懈怠すべからずと。是の諸の菩薩は師長に親近し、多聞少聞有智無智持戒破戒俱に佛の想を生じて恭敬同學す。我れ今師に依りて學習し修善未だ滿ぜずんば應に滿足せしむべく、煩惱未だ盡きずんば應に斷じて盡きしむべく、善法を守護して不善を捨離し、一切智を具して世間を憐愍せん、大悲福田煩惱寂靜の天人師は是れ我が大師にして善く勝利を得たまへり。一切の天人皆法主に事へて以て大師と爲すと。是の諸の菩薩は是の思惟を作す、佛は淨戒を說きたまへり、設ひ身命の爲にも亦た毀犯せず、世尊の說の如く佛の敎に隨順して卽ち佛婆羅門等に種種の飮食を供養せん。信心もて施與するは法

【二八】菩薩の自行化他を明す。

の如く受用して彼の人をして果報を空無ならしめず、食者施者倶に利益を得んと。婆羅門等は沙門の名を以て而かも菩薩に於て福田の想を作す、菩薩は應當に理の如く量の如く正法を修行して卽ち沙門の功德福田の功德を顯現せしむべし。菩薩は是の如く自行化他して未だ嘗て休廢せず。[二九]是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如く修行せば則ち能く一切世間に隨順す、瞋忿者を見ては下卑の心を生じ、憍慢者を見ては無我の想を起し、邪曲者を見ては正直の想を起し、誑語者を見ては如實の言を起し、惡言者に於ては常に愛語を說き、剛强者を見ては柔和を示現し、毒害者を見ては則ち慈忍を生じ、邪法者を見ては則ち大慈を生じ、苦惱者を見ては則ち大悲を生じ、慳嫉者を見ては則ち布施を行ぜんと。此の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如く世間智に隨順するが故に淨佛土を生ぜん。何を以ての故に、戒を持ちて缺くる無く諸の雜穢を離れて平等心を修し、有情の所に於て大善利を具して名利に著せず、清淨信有りて希望する所無く、勤行精進して懈怠を生ぜず、諸の靜慮を修して散亂の法を離れ、微妙の慧を以て而かも多聞を修し、諸根缺くる無く利智を具足し、常に大慈を修して瞋惱を遠離す。是の因緣を以て淨佛土を生ずるなりと。

[三〇]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、佛の所說の如き戒等の法を修して淨佛土を生ずるに備修を要すと爲すや、一を修するに隨て淨佛土を生ずと爲すやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩有りて前に說く所の種種の法の中に於て[三一]一行を淨修せば卽ち衆法を備ふ、是の如き一行も亦た淨土を生ずと。何を以ての故に、一一の行中衆行を具するが故なり。是の諸の菩薩淨佛土を生ずるに胎汚せられず。何を以ての故に、是の諸の菩薩は佛像を造作し僧園を修營し、佛制多の前にて香泥を地に塗り燒香供養し、或は妙華を布き、或は香湯を以て佛像を灌洗し、僧園內に於て泥塗を掃灑し、父母師僧に慈心もて供侍し、同學善友及び諸の沙門を平等心を以て恭敬供養し、此の善根を持て有情と共に無上正等菩提に廻向し、諸の有情をして皆清淨なることを得せしむれば

【二九】淨佛土を生ずる因緣を明す。

【三〇】菩薩の能く精進して佛の正教行に隨順することを明す。

【三一】一行淨修は衆法を具す、これ一一衆行を具するによる、卽ち如何なる行事も平等法性を圓顯するが故なり。

なり。菩薩は是の如く即ち離欲することを得。何を以ての故に、心取著無く朋黨に染まず、諸の境界に背き愛縁を遠離し、妙欲境に於て心愛染せず、佛の所說の戒を如實に修行し、四供養に於て少欲にして[三二]趣に身を支ふることを得るに足るを喜び、心常に怖畏すれば恒に寂靜遠離の法を樂ふ。是の如き菩薩は俗事に著せずして即ち淨命を得、僞りの威儀欺詐の語意無く、謂ゆる施主の前にて終に[三三]僞現ぜず、[三四]安庠として徐に歩み、前を視ること六肘、左右を顧ず。邪命の威儀は施主無き時は即便ち縱誕す。又た施主に對して利養を爲さず、出でては彼の意に順ひて細語美言し施主無き時は語れば便ち麁鄙他の施を行ずるを見ては心實に貪を起し、而かも[三五]須ひずと言ひて得ざれば便ち惱む、語れば少欲を現ずるも心は貪利多し。是の諸の菩薩は是の如き等の利を求むるの相無く、若し施主を見るも終に[三六]三衣弊壞し[三七]什物闕少し或は醫藥を須つと發言せず。又た施主に對して終に某甲の施主我れに此物を施すと發言せず。彼の人我が持戒多聞大悲心淨きを讃はんに、爾讃歎すと雖も我れ此の德無しといひて唯だ勸めて善を修して施主の恩を報ずるのみ。是の諸の菩薩は白衣に對し自讃毀他して名利を求めず、餘人に施すを見るも瞋惱を生ぜず、終に諂曲にして以て財を取らず、詐りて親善し他を害して物を取らず、他の辱を希ひ戲弄して財を取らず、施主の施を擬するに若しは讃ぜらるる人或は說法者或は復た大衆たり、或は未だ[三八]別擬せず或は施未だ決せずんば菩薩は終に中に入りて分を取らず。若し施財を受くるも終に此れは是れ我が物此れは是れ我が有なりと執著せず。尋で當に諸餘の沙門或は婆羅門師僧父母及び餘の貧乏に廻施して平等に受用し、若し財物盡くるを以て憂と爲さず、少日得ざるも心苦惱無し。是の諸の菩薩の若しは他の施を受け若しは他に廻施するに二つながら俱に淸淨なり。行淸淨なるが故に心疲勞せず。何を以ての故に、是の諸の菩薩は有情を利せんが爲に久しく生死に處するも而かも厭患せず、若し魔事有りて衆の苦、逼切せんも心退轉無し。若し人二乘の道を行ぜんと欲せば即ち爲に法を說いて劬勞を憚らず、菩薩自ら

【三二】趣得支身。僅に身命を支ふれば善しとす。

【三三】施主の處で精進殊勝の如き僞善態度せぬことなり。出家受施人この下を精讀すべし。

【三四】托鉢行乞の法の如くするなり。

【三五】出家は所有なければ必要のものは須と云ふべし。然るに不須と云ふから與へざれば得ずして憂惱す。これ虛假の相なり。

【三六】三衣。僧の著るべき三種の衣服、即ち三種の袈裟なり。僧伽梨(大衣)、欝多羅僧(七條)、安陀會(五條)の稱。

【三七】什物。什は十にして常用のものをいふ。道具、雜器などの稱。

【三八】誰々に何何をと配するを別擬と云ふ。

菩提分の法を修して終に厭倦無ければなり。此の諸の菩薩是の如く精進せば則ち能く佛の正しき教行に隨順せるなり。何を以ての故に、此の諸の菩薩は放逸を遠離して心常に謹愼し、善く自ら身を攝して諸の惡を造らず語意も亦た爾なり。現在に處すと雖も恒に未來を懼れ、諸の惡法を斷じて永く起らざらしめ、言必ず理に附き常に法教を說いて非法は言はず、雜穢の業を棄てて純淨の行を修し佛の教を毀らず煩惱不淨の法を遠離すればなり。是れ則ち如來の正教を護持するなり。諸の惡不善は皆之を斷離す。此の諸の菩薩は是の如く清淨の佛教に隨順し若し有情を見ば舒顏含笑して嚬蹙を遠離す。所以は何ん、心穢濁を離れ諸根清淨に瞋恚の垢を離れて內に恨結無ければなり。菩薩是の如く卽ち多聞を得て生死を觀察せば能く如實に貪瞋癡の火の燒然し迷亂するを知り亦た如實に有爲無常一切行苦諸法無我なるに世間有情の耽著し戲論するを覺り、又た如實に一切法中唯だ涅槃のみ有りて最も爲れ寂靜なりと覺り、他の法を說くを聞きては卽ち能く義を思ひ、傳へて以て人に授け大慈悲を發し堅固の念を起す。若し法を聞かずんば卽ち思修する無し。是の故に聞慧は衆字の本の如く一切の智慧之に因りて生ずるなり。旣に多聞を得ば則ち正法を護る。[三九] 若し未來世に正法の滅せん時諸の有情有りて勤め修行せんと樂ふも法炬に値はず人の爲に甚深の法要を說く無くんば菩薩爾の時卽ち爲に甚深般若波羅蜜多を宣暢して諸の有情をして戒定慧を修せしめ因て讚めて曰はく汝善男子、能く是の如き正法の滅せん時に於て菩提心を發して無上覺を求め、一切有情を利樂せんと欲するが爲に是の如き般若波羅蜜多甚深の經典、三世諸佛の所行の處を汝若し勤修せば大覺は遠きに非ず。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多と大菩提とは相離れざるが故なり。人の穀を種ゑて其の苗已に秀づるが如く、當に知るべし是の人果を獲ること久しからずと。菩薩も亦た爾なり。大菩提を求め般若波羅蜜多を聞くことを得ば當に知るべし佛を去ること決定して遠きに非ずと。善男子等若し甚深般若波羅蜜多を捨離し更に餘經に依りて無上覺を求めて若し能く證得すること有りと

【三九】菩提を求むるもの般若に依らざる可からざるを明す。

せば必ず是の處無けん。譬へば王子の其の父の王を捨て更に餘人に就きて求めて太子と爲るも決して得可からざるが如く、菩薩も亦た爾なり。一切智を求むるは必ず般若波羅蜜多に因る。若し餘經に依るも定めて得ること能はず。譬へば犢子の若し乳を須ひんと欲せば必ず其の母に依る、若し餘の牛に就かば則ち得可からざるが如く菩薩も亦た爾なり、大菩提を求むるには要らず般若波羅蜜多に依る。若し餘法に依らば必ず證すること能はず。[四〇]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多に親近するは爲れ法王子にして相好嚴身の諸根缺くる無く佛の行處を行じ佛の所覺を覺り、一切の苦惱の有情を救護し、善能く佛の說きたまふ所の教に通達して常に梵行を修し染濁を遠離して諸佛の一切智城を守護すと。是の諸の菩薩は爲れ法王子にして釋梵護世皆共に尊重せん。何を以ての故に、菩薩道を得已て不退を得るに一切の惡魔傾動すること能はず、佛法に安住して一切空平等の理に通達し、外緣を信ぜず。是の如く佛法に安住して智慧聲聞獨覺等と共ならず、世間に超過して無生忍に住すればなり。是の諸の菩薩は能く如實に一切有情の貪瞋癡品の上中下の異りを知り亦た如實に善及び堅固心品の差別を知る。如實に知り已て各各爲に諸の對治門を說いて是の如く善能く有情類を化す。是の諸の菩薩は若し有情の應に佛身を見て得度すべき者有らば即ち佛身を現じて爲に法を說き、菩薩身を見て得度する者には菩薩身を現じて爲に法を說き、獨覺身を見て得度する者には獨覺身を現じて爲に法を說き、聲聞身を見て得度する者には聲聞身を現じて爲に法を說き、若し釋梵婆羅門刹帝利長者居士等の身を見て得度する者には即ち皆之を現じて爲に法を說く。菩薩は是の如く深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸の有情を化して度脫することを得せしむ。是の諸の菩薩は心性慈和正直軟善にして諸の諂曲嫉妬垢穢無く心常に清淨にして麤惡の語を離れ、多く忍辱を行じて有情に親狎す。菩薩是の如く深般若波羅蜜多を行ずるに在處安樂なり。所以は何ん、正見及び淸淨見、淸淨の行を具足して所行の境界と心と相應すればなり。若し心相違せば惡不善法に

【四〇】般若行の菩薩の能く方便善巧して有情を化益攝受することを明す。

して境界は穢處、斯れ則ち行ぜざるなり。是の諸の菩薩は是れ同學の人深心に歡喜せん。若しは財若しは法皆共に受用して唯だ佛道のみを行じ唯だ佛のみ師と爲さん。菩薩は是の如く在處安樂にして諸の攝法を具して有情を攝す。利益施若しは安樂施若しは無盡施を以て諸の有情を攝し、利益語若しは有義語若しは如法語若しは不異語を以て諸の有情を攝し、財利益平等若しは身利益平等若しは命利益平等若しは資具利益平等を以て諸の有情を攝するなり。天王當に知るべし、利益施とは卽ち是れ法施、安樂施とは卽ち是れ財施、無盡施とは卽ち正道を示すなり、利益語とは善法を生ぜしむるなり、有義語とは正理を見せしむるなり、如法語とは佛の教に隨順するなり、不異語とは如實の法を說くなり、財利益平等とは飮食す可きこと及び衣服等とを謂ひ、身利益平等とは己身を攝衞し利益するを以て他をして亦た爾ならしむるなり、命利益平等とは諸の珍寶を名づけて外命と爲すを謂ひ、資具利益平等とは象馬等の一切の淨財を謂ふ。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行ずるに自行は他と皆悉く同等なり。是の諸の菩薩は生を受くること端正にして常に能く寂靜の威儀不僞の威儀淸淨の威儀を修習し衆の見んと樂ふ所なり。內外溫善にして觀る者厭くこと無く能く人の意を悅ばしめ、一切有情の咸く愛重する所なり。其の見る者有らば皆善心を發し、瞋恚者は見て心則ち和解せん。此の諸の菩薩は是の如く端正にして依止と爲るに堪へ等しく有情を護り煩惱をして滅せしめ、能く有情を引いて生死より出離せしめ、無邊の曠野にて能く有情を度し、世間險難にして眷屬無き者には爲に親友と作り、煩惱の病者には爲に良醫と作り、救護無き者には爲に救護を作り、歸依無き者には爲に歸依と爲り、無明の有情には爲に法炬と作る。[四一]是の如き菩薩は諸の有情の爲に依止する所と作り、善く衆の病を療すること藥樹王の如し。樹王有り名づけて善見と爲す。根莖枝葉及び諸の花果色香味觸皆能く病を療するが如く此の諸の菩薩も亦復た是の如し、初發心より乃至究竟まで常に有情の爲に煩惱の疾を療す。菩薩多く福德智慧有りて諸の衆病皆愈ゆるを見聞する有

【四一】菩薩の能く有情の所依たること宛も藥樹王の能く療病するが如し。

らば是の諸の菩薩は功德相應せるなり。力の堪ふる所に隨て三寶を供養し、疾病有る者には皆醫藥を施し、若し飢渴せるを見ば即ち飲食を施し若し寒凍せる者には即ち衣服を施し、罵辱惱亂には心を盡して承事し、同學法の人には合掌恭敬し、僧の住處を造るには園田を給施し、資財有るに隨て時時に施與し、所有る僕吏には法の如く理を斟み、名德の梵志沙門正行を修する者有るを聞かば時時に諮覲す。此の諸の菩薩は能く衆善を生じ巧方便有りて有情を化度し、此の佛土に住して身動揺せず而かも無邊の諸佛世界の佛菩薩の所に遊んで正法を諮受し、或は現じて無量の如來を供養し、或は現じて助菩提分を修習し、或は現じて初めて成佛せる者を供養し、或は現じて自身等正覺を成じ、或は現じて衆の爲に妙法輪を轉じ、或は涅槃を現じて大饒益を作し、或は應に度すべき者には爲に化身を現じて皆見ることを得て利樂を獲得せしむ。是の如き種種の佛事を作すと雖も而かも作意せず亦た分別無しと。[四二] 爾の時最勝便ち佛に白して言さく世尊、云何が此の諸の菩薩は種種の化を作すに分別心無きやと。佛言はく、天王、譬へば日月の一切を照らすと雖も而かも我れ光明を發して能く照らす所有りと分別せず、然かも有情類は自業の勢力もて日月の晝夜巡照せるを感得するが如く、此の諸の菩薩も亦復た是の如し。化身を現ずと雖も而かも分別無し。何を以ての故に、有情各宿世の善業有ればなり。菩薩は昔有情を度する願を發せり、此の願力に由りて彼の念ずる所に隨て即ち化身を現ず。故に分別無し。此の諸の菩薩は方便善巧して能く是の如き有情を化する事を作して速に無上正等菩提に趣く。何を以ての故に、此の諸の菩薩は布施圓滿し持戒淸淨にして穿缺雜はる無く戒品淸淨にして諸の聲聞及び獨覺等に過ぎ、安忍精進靜慮般若巧便妙願力智及び諸の如來の不共の功德を具足して諸の聲聞獨覺地に超ゆるが故なり。天王當に知るべし、菩薩は初地乃至十地に深般若波羅蜜多を行じ是の如き行を修して能く無上正等菩提を證せんと。[四三] 是の法を說く時二萬の天子遠塵離垢して淨法眼を生じ、三萬の菩薩は無生忍を得、八萬四千の諸天及び人は倶に無

【四二】菩薩の種種化身を現ずるも分別心無きことを明す。

【四三】佛の上來の說法に對して、諸天大衆の供養及び諸菩薩の讃歎を明す。

上正等覺の心を發し、無量百千の諸の健達縛及び緊捺洛は鷲峰山を遶りて歡喜して合掌し、衆の妙華を雨らして佛を供養す。十方無量殑伽沙等の諸佛世界に各無量の菩薩有りて來集し讃歎す。如來世尊は善く諸の菩薩の爲に甚深般若波羅蜜多を説きたまふ。是の般若波羅蜜多に因りて人天の〔四四〕四向四果有り、及び獨覺道と菩提と有り、亦た菩薩の十地十度、如來の十力四無所畏四無礙解大慈大悲大喜大捨十八佛不共法一切相智一切智等無邊の佛法有ることを得て皆般若波羅蜜多に由りて成辦することを得。世間の事は皆虚空に依るも虚空は依る無きが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し。衆法の本と爲るも而かも自らは依る無し。願くは我れ等をして當來世に於て諸の菩薩摩訶薩等の爲に般若波羅蜜多を宣説すること今世尊の説きたまふ所の如く異ること無からしめたまへと。是の語を作し已て諸の香花を持て如來及び諸の衆會に奉散す。時に無量の鷲峰山中の舊住の天神及び餘の集れる者有り空中にて讃めて曰はく、希有なり世尊、我れ等無量の諸佛を憶念し已に曾て此の鷲峰山の中に於て、諸の大衆の爲に般若波羅蜜多を宣説せること今の如くにして異ること無かりきと。〔四五〕爾の時最勝便ち佛に白して言さく、空中の天神は寧ろ智慧有りて佛の境界の久近の差別を知り、無量の佛已に曾て此に於て般若波羅蜜多を宣説したまへりと言ふやと。佛言はく、天王、此の天神衆は皆是れ不可思議に安住して解脱せる菩薩なり。是の故に、能く過去佛の境の久近の差別を知れり。天王、我れ昔菩薩爲りし時も亦た曾て彼の天神趣の中に生じて無量の佛を見たてまつりて無上正等菩提を證得し、諸の衆會の爲に妙法を宣説し乃至涅槃まで我れ常に敬禮し合掌讃歎せり。何を以ての故に、彼の天神趣の壽量は長遠にして往昔の無邊の事を見聞せしが故なりと。

〔四六〕爾の時衆中に一りの天子有り名を光德と曰ふ。即ち座より起ちて偏へに左肩を覆ひ、右膝を地に著け合掌して佛に向ひ白して言さく、世尊、諸佛菩薩は應に淨土に居すべきに云何が世尊は此の穢惡充滿せる堪忍世界に出現したまふやと。佛、光德に告げたまはく、天子當に知るべし、諸佛如來

【四四】四向四果。見道以後の小乘の修行の階位。向とは果に向ひて修行する間をいひ、預流向、一來向、不還向、阿羅漢向を四向と稱す。果は即ちその得果をいひ、預流果、一來果、不還果、阿羅漢果を四果となす。

【四五】天神能く過去佛の境界の久近の差別を知るを明す。

【四六】諸佛所居の處に雜穢無く皆これ淨土なることを明す。

の所居の處は皆雜穢無く、卽ち是れ淨土なりと。是に於て如來神通力を以て此の三千大千世界をして地の平なること掌の如くにして琉璃の所成とならしめ、諸の山陵堆阜荊棘無く、處處に皆寶聚香花の軟草泉池の八功德水、七寶の階陛花果の草木有りて咸く菩薩の不退の法輪を說き、諸の異生聲聞獨覺無く、菩薩有りて十方より來ると雖も餘の聲を聞かず、唯だ常に甚深般若波羅蜜多を說くを聞くのみ。處處の蓮華は車輪の量の如く青紅赤白衆寶もて莊嚴せり。諸の花臺の中に皆菩薩有り結跏趺坐して大乘を思惟す。此の如來を見るに大集會に處し菩薩衆の爲に甚深の法を說きたまへり。無量百千の釋梵護世は供養讚歎し恭敬して圍遶せり。爾の時光德斯の事を見已て踊躍歡喜して佛を讚歎して言はく、甚希なり世尊、希有なり善逝、如來の所說は眞實にして虛しからず、諸佛如來の所居の處は皆雜穢無く卽ち是れ淨土なり。佛の所說の如きは其の義二無し。有情は薄福にして淨を見て穢と爲す。世尊、若し善男子善女人等般若波羅蜜多の功德名字を聞くことを得るすら甚だ爲れ希有なり、況んや能く書寫し受持讀誦し他の爲に演說せんをやと。[四七] 佛、光德に告げたまはく、天子當に知るべし、若し善男子善女人等無量の大劫に無礙心を以て諸の有情に種種の財物を施さんに善男子善女人等有りて淸淨の信を以て此の經を書寫して他人に轉施し受持讀誦して獲る所の功德は甚だ前よりも多し。何を以ての故に、財施は竭くること有るも法施は無窮なればなり。何を以ての故に、財施は但だ能く世間の果を得るのみ、人天の業果は會て得て還て失はれ、今暫らく得と雖も而かも後必ず退けばなり。若し法施を以てせば未だ會て得ざる所謂涅槃を得定めて退義無し。設ひ三千大千世界の有情を敎化して皆十善業道に安住せしむること有らんも、若し善男子善女人等淨信心を以て甚深般若波羅蜜多を受持讀誦して他の爲に演說せば功德彼れに勝ること無量無邊なり。何を以ての故に、一切の善法は皆般若波羅蜜多に由りて生ずることを得るが故なり。設ひ三千大千世界の有情を敎化して皆四向四果獨覺菩提を證得せしむること有らんも、若し善男子善女人等淨信心を

【四七】般若に依つて獲る功德の最勝を明し、般若を以て佛轉法輪の處となすことを說く。

以て般若波羅蜜多を受持し讀誦し書寫せんに功德前に勝ること無量無數なり。何を以ての故に、聲聞獨覺は皆般若波羅蜜多に由りて生ずることを得るが故なり。諸の菩薩法は皆般若波羅蜜多より出現することを得、此の般若波羅蜜多に因りて佛有りて世に出でたまふ。是の故に般若波羅蜜多所在の處に隨て當に知るべし卽ち是れ妙菩提の座なりと。亦た是れ如來轉法輪の處なりと。善男子等は應に此の處には常に如來應正等覺有すと念ずべし。何を以ての故に、一切の諸佛は皆般若波羅蜜多に由りて生ずることを得るが故なり。若し人如來の形像を供養して獲る所の功德は甚深般若波羅蜜多を供養するには如かず。何を以ての故に、三世の諸佛は皆般若波羅蜜多に由りて有ることを得るが故なりと。

第六分平等品第七

[一]爾の時最勝復た座より起ちて偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊の說きたまふ如き法性の平等とは何をか平等と謂ひ、何の法に等しきが故に名づけて平等と爲すやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、等しく諸法の自性寂靜にして生ぜず滅せざるが故に平等と名づけ、一切の煩惱虛妄の分別自性寂靜にして生ぜず滅せざるが故に平等と名づけ、名相分別の自性寂靜にして生ぜず滅せざるが故に平等と名づけ、諸の顚倒を滅し[二]攀緣を起さざるが故に平等と名づけ、能緣心滅し無明有愛即ち俱に寂靜にして貪愛滅するが故に復た我及び我所に執せざるが故に平等と名づけ、我我所の執永く滅除するが故に、名色寂靜なるが故に平等と名づけ、名色滅するが故に、邊見生ぜざるが故に平等と名づけ、斷常滅するが故に、身見生ぜざるが故に平等と名づく。[三]天王當に知るべし、能執所執、一切の煩惱障碍の法は身見に依りて生ずと、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して能く身見を滅せば一切の隨眠及び諸の煩惱皆永く寂靜にして作爲亦た息まん。譬へば大樹の根株を拔除するに枝條葉等枯死せざる無きが如く、人の首無くんば命根等絕ゆるが如く、隨眠煩惱も亦復た是の如し、若し身見を斷ぜば餘は皆永く滅せん。若し人能く諸法無我を觀せば能執所執皆永く寂滅す。[四]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、云何が我見起らば眞理を障ふるやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、五取蘊に於て妄りに我有りと謂はば、即ち我見を起すなり。眞實の法は自性平等にして能所の執無く我見と相違す。是の故に障と爲ると。天王當に知るべし、是の如き我見內に在らず外に在らず兩間に在らず都て住する所無きを名づけて寂靜と爲すと。即ち是れ平等にして我見を遠離す。平等に通達するを眞實空と名づく。

【一】法性の平等の義を明す。

【二】攀緣。猿が米枝を飛び廻って休むことなきが如く、心、外境のために轉ぜられて靜平を得る能はざるをいふ。

【三】一切の煩惱、身見に依りて生ずるを明す。

【四】眞實法は自性平等にして我見は之が障たることを明す。

此の空無相無願を觀察するに自性寂靜にして生ぜず滅せず取せず著せず我見を遠離す。故に平等と名づく。天王當に知るべし、言ふ所の我とは來る無く去る無く眞實有ること無く虛妄分別の法にして妄より生じ亦た是れ虛妄なり。若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して是の如き法を觀ぜば虛妄を遠離す。是の故に名づけて寂靜平等と爲すと。天王當に知るべし、能執所執を名づけて熾然と爲し、離るゝを寂靜と名づけ、諸の煩惱障を名づけて熾然と爲し、離るゝを寂靜と名づくと。若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して能く如實に能執所執諸の煩惱を知りて滅せば善法を增すと爲し、能所の執及び諸の煩惱を斷じて生ず可きを見ず滅す可きを見ざるが故に平等と名づけ、一切種の波羅蜜多を修して魔障を遠離し修す可きを見ず離る可きを見ざるが故に平等と名づけ、菩薩常に菩提分の法に緣りて聲聞獨覺の作意を起さず、菩提分に於ては聲聞獨覺に異相を見ざるが故に平等と名づけ、一切智に緣りて心休息せず常に空行を修し大悲力に由りて有情を捨てざるが故に平等と名づく。[五]天王當に知るべし、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じて方便善巧せば一切法に於て心に自在を緣ずと。心に無相を緣じて菩提を修せば、無相及び菩提の異を見ざるが故に平等と名づけ、心に無願を緣じて三界を捨てずんば無願及び三界の異を見ざるが故に平等と名づく。身の不淨を觀じて心淸淨に住し、行の無常を觀じ心に生死を緣ずるも而かも厭捨せず、有情の苦を觀じて涅槃の樂に住し、法の無我なるを觀じて有情に於て大悲心を起し、常に有情の爲に不淨藥を說きて貪病を見ず、常に大慈を說きて瞋病を見ず、常に緣起を說きて癡病を見ず、[六]等病者の爲には無常の藥を說きて等病及び無常の異を見ず、是の如く菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一切法に於て心に自在を緣ず。[七]離貪法を緣じては爲に聲聞を化し、離瞋法を緣じては爲に獨覺を化し、離癡法を緣じては爲に菩薩を化し、一切色を緣じては如來淸淨の妙色を得んことを願ふ、無所得の故に、一切聲を緣じては諸佛微妙の音聲を得んと爲す、無所得の故に。一切香を緣じては諸佛淸淨

【五】菩薩の能く般若を行じて方便善巧せば一切法に於て心に自在を緣ずるを明す。

【六】等病者、貪瞋癡三毒等しき缺點あるものを云ふ。

【七】離貪等の法緣に三乘四車を說く。

の戒香を得んことを願ふ、無所得の故に。一切味を縁じては如來味中第一の大士夫相を得んことを願ふ、無所得の故に。一切觸を縁じては如來柔軟の手掌を得んことを願ふ、無所得の故に。一切法を縁じては如來寂靜の心を得んことを願ふ、無所得の故に。諸の布施を縁じては佛の相好身を成就することを得と爲し、諸の淨戒を縁じては嚴淨佛土を圓滿することを得と爲し、諸の安忍を縁じては諸佛の大梵音聲を得及び諸佛の淨光明身を得んことを願ひ、諸の精進を縁じては有情を度して常に間斷無きを爲し、諸の靜慮を縁じては廣大の神通を成就せんと欲するを爲し、諸の般若を縁じては一切の妄見煩惱を斷ずるを爲し、諸の大慈平等無礙を縁じては諸の有情皆安樂を得と爲し、諸の大悲を縁じては正法を護りて有情を生死の大苦より救拔するを爲し、諸の大喜を縁じては說法無礙自在にして有情を悅樂するを得と爲し、諸の大捨を縁じては有情の煩惱結縛隨眠に執見せざるを爲す。[八]天王當に知るべし、若し諸の菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して二事を見ずんば平等行と名づくと。四攝法を縁じては爲に有情を化し、慳嫉過を縁じては爲に資財を捨てゝ布施を修行し、破戒の失を縁じては爲に如來の大精進力を成じ、散亂の失を縁じては爲に如來寂靜の勝定を得、惡慧の失を縁じては爲に如來無礙の智慧を成じ、二乘の法を縁じては爲に無上大乘を成就せんと欲し、諸の惡趣を縁じては爲に一切有情を濟拔せんと欲し、諸の善趣を縁じては爲に諸の人天の果の皆當に敗壞すべきを知らしめんと欲し、諸の有情を縁じては爲に都て堅實無く唯だ虛妄のみ有りと了達せしめ、佛隨念を縁じては爲に助道の勝定を成就するを得、法隨念を縁じては爲に諸法の祕藏に通達することを得、僧隨念を縁じては爲に和合衆の心退轉無く、捨隨念を縁じては爲に愛著無く、戒隨念を縁じては爲に淨戒を得、天隨念を縁じては爲に菩提を成じて諸天讃歎し、自身相を縁じては爲に佛身を得、自語相を縁じては爲に佛語を得、自意相を縁じては爲に諸佛の平等心を得、有爲法を縁じては爲に佛智を成じ、無爲法を縁じては爲に寂靜を得。[九]天王當に知るべし、若し諸の菩薩深般若波羅

【八】菩薩の平等行に就て明す。

【九】菩薩の方便善巧說法を明す。

蜜多を行じ方便善巧して一心一行も空過すること有ること無く而かも一切智智に廻向せずんば是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して遍ねく法を緣ずと雖も而かも能く著せざるなり。是の故に名づけて方便善巧と爲すと。一切法を觀ずるに大菩提に趣向せざる無しとは譬へば三千大千世界の出す所の諸物は皆有情の受用の爲ならざる無きが如く、是の如く菩薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して緣ずる所の境界は菩提に趣向するを饒益せざる無し。譬へば衆色は〔一〇〕四大種に因らざる者有ること無きが如く是の如く菩薩の緣ずる所の境界は一法も菩提に趣かざること有ること無し。何を以ての故に、菩薩の修行は皆外緣に因りて成立することを得ればなり。謂ゆる諸の菩薩は慳嫉者に因りて布施波羅蜜多を成就し、背恩者に因りて淨戒波羅蜜多を成就し、悪性者に因りて安忍波羅蜜多を成就し、懈怠者に因りて精進波羅蜜多を成就し、散亂者に因りて靜慮波羅蜜多を成就し、愚癡者に因りて般若波羅蜜多を成就するなり。若し諸の有情菩薩を損惱せば菩薩は彼れに因りて瞋恚を伏斷す。菩薩若し善法を修行して菩提に向ふ者を見ば已が子の心を生ず。是の如く菩薩は讃むるも喜びを生ぜず毀るも瞋を生ぜず、樂無き者を見ては大慈心を起し、苦有る者を見ては大悲心を起し、樂有る者を見ては大喜心を起し、苦無き者を見ては大捨心を起し、化し難き者に因りて奢摩他を發し、化し易き者に因りて毘鉢舍那を發し、信行する者に因りて知恩の智を起し、若し有情の外惡緣勝り外善緣劣れるを見ば則ち勤めて守護し、若し力に因りて强勝なる者有るを見ば種種に方便して教法を受けしめ、〔一一〕若し智慧開悟せる有情を見ば則ち爲に甚深の法要を宣說し、若し有情の廣說すれば乃ち悟るを見ば則ち爲に次第に諸法を宣說し、若し諸の有情の文字に執著せるには爲に句義を說いて開曉することを得せしめ、若し已に止を學せるには爲に妙觀を說き、若し已に觀を學せるには爲に寂止を說き、若し持戒に執せるには爲に地獄を說き、持戒して執する無きには則ち之を說かず、若し聞慧に執せるには爲に思修を說き、若し等持に執せるには爲に般若を說き、若し

【一〇】四大種、地水灯風のこと。

【一一】以下特に對機說法の相を明す。

阿練若を愛樂する者有らば即ち彼れの爲に心の遠離法を說き、若し佛の功德を樂聞する者有らば即ち彼れの爲に無上の聖智を說き、貪欲者の爲には不淨法を說き、瞋恚者の爲には慈悲法を說き、愚癡者の爲には緣起法を說き、等分者の爲には種種の法を說く、或は不淨を說き、或は慈悲を說き、或は緣起を說き、已に調伏せる者には爲に淨戒勝定の妙慧を說き、佛乘に入りて化を受くべき者には爲に次第に波羅蜜多を說き、抑挫を以て化を受くべき者には先に其の辭を折りて後爲に法を說き種種の言もて而かも化を受くべき者には、即ち彼れの爲に因緣譬喩を說きて開解することを得せしめ、深法を以て化を受くべき者には爲に般若波羅蜜多方便善巧無我無法を說き、諸見に著せる者には爲に法空を說き、尋伺多き者には爲に無相を說き、有爲に著せる者には爲に無願を說き、諸蘊に著せる者には爲に如幻を說き、諸界に著せる者には爲に無性を說き、諸處に著せる者には爲に如夢を說き、欲界に著せる者には爲に熾然を說き、色界に著せる者には爲に行苦を說き、無色界に著せる者には爲に諸行無常を說き、化し難き有情には爲に聖種を讃じ、化し易き有情には爲に靜慮及び無量心を說き、若し生天すと聞きて化を受くる者には爲に快樂を說き、聲聞法に因りて化を受くる者には爲に聖諦を說き、獨覺法に因りて化を受くる者には爲に緣起を說き、菩薩法に因りて化を受くる者には爲に淨心を說き、大慈悲法修行の菩薩には爲に福慧を說き、不退の菩薩には爲に淨土を說き、一生所繫の菩薩には爲に嚴菩提座を說き、佛說を以て化を受くべき者には爲に其の相續次第を而かも說く。天王當に知るべし、是の如き菩薩は淸淨の甚深般若波羅蜜多を修行し方便善巧して諸の自在を得說法利益して空過有ること無しと。是の菩薩の自在法を說く時三萬の天人倶に無上正等覺の心を發し五千の菩薩無生忍を得たり。[二]爾の時世尊即便ち微笑したまへり。諸佛法爾として希微笑を現じたまふ時種種の色光面門より出づ。靑黃赤白紫頗胝迦普ねく十方無邊世界を照らして希有の事を現じ還て佛所に至り右遶三匝して佛頂の中に入る。時に舍利子、斯の瑞相を覩て心に[三]猶

[二] 佛、微笑の瑞相を示現したまふ。

[三] 猶豫。疑ふこと。

豫を懷き卽ち座より起ちて偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊何の因緣有りて此の瑞相を現じたまふかと。[一四]爾の時佛、舍利子に告げて言はく、此の最勝天は已に曾て過去無量無數無邊の大劫に諸佛の所に於て一切の波羅蜜多を修行し諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多を守護せり。此の因緣に由りて今我れに値ひて般若波羅蜜多を諮受することを得たり。未來世に於ても復た無量無數の大劫を經て無上菩提の資糧を修習し然る後所求の無上正等菩提を證得して十號具足せん。佛を功德莊嚴と名づけ、土を最極嚴淨と名づけ、劫を清淨と名づけん。其の土豐樂にして人衆熾盛ならん。純ら菩薩僧のみにして聲聞衆無く、彼の土の大地は七寶もて合成し、衆寶もて莊嚴し、平坦なること掌の如く、香花軟草而かも之を嚴飾せん。諸の山陵堆阜荊棘無く幢幡花蓋もて種種に莊嚴せん。大都城有り名づけて難伏と爲す。七寶の羅網其の上に彌覆し、金繩交絡して角に金鈴を懸け晝夜六時に空天に樂を奏し及び種種の天の妙香花を散じ其の土の人衆歡娛して樂を受け勝妙なること彼の他化天宮に超えん。人天の往來相隔礙せず、三惡趣及び二乘の名無く、彼の土の有情は唯だ佛智のみを求む。其の佛は恒に諸の大菩薩の爲に種種清淨の法要を宣說し、無量無邊の菩薩の眷屬は邪見の執破戒の邪命無く亦た盲聾瘖瘂背僂及び根缺等の諸の醜惡事無く、二十八相其の身を莊嚴せん。彼の土の如來は壽八小劫にして諸の人天衆は中夭する者無し。佛は是の如き無量の功德有り。若し法を說かんと欲せば先に光明を放つ。諸の菩薩衆は斯の光に遇ひ已て卽ち世尊將に法を說きたまはんと欲すと知り、我れ等今宜しく應に往いて聽くべしと。[一五]時に天、佛の爲に師子座を敷くに其の量高廣にして百踰繕那、無量の供養を莊嚴せん。世尊座に昇りて法を說きたまふに彼の諸の菩薩は聰明利根にして一たび聞かば領悟して我我所を離る。資具飲食は念ずるに應じて卽ち至らんと。佛、最勝に受記の法を說きたまふ時五萬の天人深心に歡喜して俱に無上正等覺の心を發して皆未來に彼の佛土に生ぜんことを願ふ。爾の時最勝、佛の所說を聞き歡喜踊躍して

【一四】佛、舍利子の問に對して瑞相示現の因緣を明す。

【一五】佛、師子座に昇り說法したまふ。

未曾有なることを得虛空に上昇すること七[二六]多羅樹なり。時に三千界六種に變動し、諸の天の伎樂鼓せざるに自ら鳴り衆の天花を散じて以て佛及び大菩薩最勝天王を供養す。時に彼の天王空より下りて佛の雙足を禮し退きて一面に坐しぬ。

【二六】多羅樹(Tala)。樹名なり。印度では之を以て尺度の稱に用ひ、一多羅樹の高さを七仞(四十九尺)と定む。

第六分現相品第八

時に舍利子、最勝に問ひて言はく、菩薩は甚深般若波羅蜜多を修行し方便善巧して法性に通達するに、爾の時卽ち應に菩提座に坐して無上正等菩提を證得し妙法輪を轉じて有情衆を度すべし。何に緣りて先に苦行を現ずること六年、天魔を降伏して後正覺を成じたまへるやと。最勝答へて曰はく、大德當に知るべし、菩薩の甚深般若波羅蜜多を修行し方便善巧して法性に通達せるには實に苦行無し。外道を伏せんが爲の故に之を示現せしのみ。而かも彼の天魔は是れ欲界の主にして稟性調善實に壞すべからず。有情を化せんが爲の故に降伏を示せるなり。謂ゆる諸の外道は自ら能く苦行を修すること第一なりと稱ふ。是の故に菩薩は示現して能く彼れに過ぐる苦行を修す。[二]謂ゆる諸の有情は或は菩薩の一膝を屈して立てるを見、或は菩薩の兩手を擧げて立てるを見、或は菩薩の日を視て而かも立てるを見、或は菩薩の[三]五熱に身を炙ぶれるを見、或は菩薩の其の身を倒懸せるを見、或は菩薩の棘刺に臥し或は牛糞に臥し或は石に坐し或は復た地に臥し或は其の板に臥し或は杵上に臥し或は灰土に臥せるを見、或は菩薩の唯だ板衣のみを著、或は芒衣を著、或は草衣を著、或は樹皮を著、或は茅衣を著、或は復た露形、或は面日に向ひ日に隨ひて轉ずるを見、或は菩薩の唯だ稗子のみを食し、或は復た麥を食し、或ば草根を食し、或は樹葉或は花或は果を食し、或は薯蕷或は芋或は藕或は豆或は穀或は麻或は米を食し、或は六日に一食し、或は水を飲むこと日を度り、或は一日に於て一滴の酥、或は一滴の蜜、或は一滴の乳を食し、或は食する所無く、或は恒に熟眠せるを見る。是の如き等の種種の苦行を現じ六年を經るに一として虧失する無し。然かも實に菩薩は斯の苦行無く有情を度するに應じて而かも自ら菩薩有りて是の如く苦行を現ずるを見る。時に六十那庾多の諸の天人衆有りて、此の事を見るに因りて三乘に安住し、復た天人有りて宿の善根力もて深く

【一】菩薩の能く般若を行じ善巧方便して種種の神通變化を示現して有情を度することを明す。先づ六年の苦行示現の因緣を明す。

【二】苦行の諸相を列ぬ。

【三】五熱。外道の苦行。五體を火に熱すること。

大乘を樂はゞ則ち菩薩の七寶の臺に坐し身心動ぜず舒顏含笑し勝等持に入り時六年を經て方に定より起つを見、天人衆有りて深く大乘を樂ひて聽聞せんと欲せば則ち菩薩の端坐して法を說きて六年を經るを見る。大德當に知るべし、是の如く菩薩は方便善巧して深般若波羅蜜多を行じ能く天魔を降して諸の外道を伏し一切の有情を大悲もて化度し、旣に六年を經て定より起ち世法に隨順して無垢河に詣り、洗浴し出で已て河邊に於て立つに、牧牛女有り、百乳牛を搆きて以て一牛に飮ませり此の牛乳を搆きて用て乳糜を作りて菩薩に奉獻す。復た六億の天龍藥叉健達縛等有りて各種種香美の飮食を持て來り奉獻し、咸く是の言を作す、大士正士、惟だ願くば我が飮食の供養を受けたまへと。菩薩之を愍みて皆悉く爲に受く。時に牧牛女天龍藥叉健達縛等互に相見えず。各菩薩の獨り其の供を受くるを見るのみ。時に無量の諸の天人等有り供を受くるを見るに因りて咸く道を悟ることを得たり。是の故に菩薩爲に之を示現するも菩薩爾の時實には洗浴せず亦た彼の人天等の供を受けざるなり。[四] 大德當に知るべし、是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧し示現して菩提座に行詣すと。時に地居天有り名づけて妙地と曰ふ。天神衆と周遍ねく掃飾し灑ぐに香水を以てし散ずるに妙花を以てす。時に此の三千大千世界の四大天王は自天衆を領し天の妙花を雨らして菩薩を供養す。天主帝釋、時分天王は自天衆を領し虛空の中に住して天の樂音を奏して菩薩を讃歎す。善足天王は自天衆を領し七寶の網を持て世界を彌覆するに其の網の四角に紫の金鈴を懸け皆衆寶を雨して菩薩を供養す。善化天王は自天衆を領し紫の金網を持て世界を彌覆し諸の天樂を作し種種の花を雨して菩薩を供養す。自在天王は自天衆を領し、諸の龍藥叉健達縛等は各種種上妙の供具を持て菩薩を供養す。堪忍界の主大梵天王は旣に菩薩の菩提座に詣れるを見て卽ち一切の梵天衆に告げて言はく、汝等當に知るべし、今此の菩薩は堅固の甲冑もて而かも自ら莊嚴し本誓に違はず心厭怠無く諸の菩薩行皆已に滿足し、無量の有情を化する法に通達し、諸の菩薩地皆自在なることを得、諸の

【四】菩薩般若を行じ方便善巧し、示現して菩提座に詣で、諸天大衆これが供養をなすことを明す。

有情に於て其の心清淨に、善く一切の根性の差別を知り、如來の甚深の祕藏に通達し、一切の魔の事業を超覺し、諸の善本を集めて外緣を待たず、一切の如來の共に護念する所、普ねく含識の爲に解脫の門を開き、大將導師として魔の軍敵を摧き、大千界に於て獨り勇猛を稱ふ、善く法藥を施して大醫王爲り、解脫灌頂して法王位を受け、智慧の光を放ちて普ねく一切を照らし、[五]八法に染まざること譬へば蓮華の如く、諸の[六]總持門に通達せざる無く、深廣にして測り難きこと猶ほ大海の若く安固にして動ぜざること妙高山の如く、智慧清淨にして諸の垢濁無く、內外皎潔なること末尼珠の如く、諸の法相に於て皆自在を得、梵行清白にして已に究竟に到れり。是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して有情を度せんが爲に菩提座に詣り結跏趺坐して魔怨を降伏し、十力四無所畏四無礙解及び十八佛不共法等無量無邊の諸佛の功德を成ぜんが爲に大法輪を轉じて師子吼を作し、法を以て普ねく一切の有情に施して各宜しき所に隨て皆滿足せしめ、諸の有情の法眼淸淨ならんが爲に無上法を以て外道を降伏し、諸佛の本願成就し一切法に於て自在を得たるを示さんと欲す、汝等往いて菩薩を供養すべし。大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧し示現して菩提座に行詣せりと。[七]時に雙足下に於ける[八]千輻輪相各無量微妙の光明を放ちて普ねく地獄傍生鬼界を照らすに其の中の有情の斯の光に遇ふ者は卽ち皆苦を離れて身心安樂なり。時に龍宮內に大龍王有り[九]迦履迦と名づく、斯の光に遇ひ已て大歡喜を生じ諸の龍に告げて言はく、此の妙光明來りて我れ等を照らし、我れ等の輩をして身心安樂ならしむ。我れ往昔に於て曾て此の光を見しに時に如來有して世に出興したまへり。今旣に此の微妙の光明有り定めて世間に佛有して出現したまふを知る。宜しく共に種種の香花、衆妙の珍財幢幡花蓋を嚴辦し諸の伎樂を作し往詣して供養すべしと。是に於て龍王諸の眷屬を將ひ供具を齎持し普ねく大雲を興して香雨を降灑し、菩薩のもとに往詣して諸の伎樂を作し供養を施設し、菩薩を右遶して讚歎して言はく、微妙の光明普ねく歡樂

【五】八法。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の稱。この八種の法は人の心を煽動するが故に八風とも云ふ。

【六】總持門。陀羅尼門(Dhāraṇī)の譯、種種の善法或は廣大無量の義理を集め持して散失せざらしむること。

【七】佛、千輻輪相を示現したまひ、龍王及びその眷屬これを供養讚歎するを明す。

【八】千輻輪相。佛三十二相の一。佛の足趺の下にある千の輻輪狀の文これ諸法の圓滿なるをあらはす相であるといふ。

【九】迦履迦。迦羅迦(Kālaka)なり。黑と譯し、龍の名なり。

せしむ。決定して最勝の佛の出でたまひしこと疑ひ無し。種種の奇瑞大地を莊嚴し、生ずる所の草木悉く變じて寶と成り、江河皆靜にして風浪の聲無し、此に準へて定めて佛の世に出でたまへるを知る。釋梵日月の光明現ぜず、惡趣淸淨にして佛の出でたまへること疑ひ無し。譬へば人少くして父母を失ひ、年既に長大にして忽然として還て得るに歡喜踊躍して自ら勝ふること能はざるが如く一切世間の佛の出現したまふを覩て各共に歡喜するも亦復た是の如し。我れ等過去に曾て諸佛を供養したてまつり今法王人中の師子に値ふ。是れ則ち我れ等生れて空しく過ぎざるなりと。大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して菩提樹の下にて草を受けて座に敷き、右遶七匝し正念にして端坐するに下劣の有情は是の如き相を見、諸の大菩薩は八萬四千の天子有りて各別に一大師子座を敷けるを見る。諸の師子座は衆寶もて合成し〔一〇〕七寶の羅網其の上に彌覆し、各四角に於て妙なる金鈴を懸け、幢幡寶蓋處處に羅列す。菩薩は遍ねく此の八萬四千の師子座上に倶に各安座せるも而かも諸の天子は互ひに相見ず、各菩薩獨り我が座に坐して無上正等菩提を證得せりと謂へり。是の因緣を以て深く歡喜を生じ無上覺に於て皆不退を得たり。〔一一〕大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して眉間の毫相より大光明を放ちて普ねく三千大千世界を照らすに諸の魔の宮殿皆威光を失ふ。時に諸の魔王咸く是の念を作さく、何の緣を以ての故に此の光明有りて我れ等の威光の宮殿を映蔽するや。詎に菩薩の菩提座に坐して將に無上正等菩提を證せんとするに非ざるやと。念じ已て共に方を觀ずるに、菩薩の菩提樹下の金剛座に坐せるを見る。見已て驚愕して魔軍の無量百千種種の形貌なるを召集す。種種の仗種種の幢幡を持ち種種の聲を出し能く聞く者をして竅穴毛孔より普ねく皆流血せしむ。菩薩爾の時大悲力を以て魔軍の衆をして聲を出すこと能はざらしむ。是れを菩薩の深般若波羅蜜多を行じて方便善巧すと名づくと。大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して過去無量俱胝劫に精進して布施淨

〔一〇〕七寶の羅網。七寶とは古代印度で最も愛重せられた七種の勝れた寶玉即ち金、銀、瑠璃、玻瓈、硨磲、赤珠、瑪瑙。羅網とは寶珠を連ね綴りて網の如くなせる莊嚴具なり。

〔一一〕佛、眉間の白毫相を示現し、諸魔を歸伏せしめたまふを明す。

戒安忍精進靜慮般若を修行し慈悲喜捨、念住、正斷、神足、根力、覺支、道支、寂止、妙觀、三明八解、皆悉く圓滿せるを憶念し、念じ已て卽ち金色の右手を申べ自ら其の頂乃至遍身を摩でて是の如き言を作す我れ有情の衆苦を濟拔して大悲を起さんと欲すと。時に諸の魔王及び彼の眷屬、菩薩の語を聞きて卽ち皆顚仆す。菩薩爾の時大悲力を以て諸の魔衆をして空中の聲を聞かしむ。汝能く無畏を施し一切を救護する淨戒の大仙に歸依す可しと。魔及び眷屬此の聲を聞き已て猶ほ伏して地に在り是の如き言を作さく、唯だ願くは大仙我が命を救濟したまへと。是の時菩薩深般若波羅蜜多に依り方便善巧して大光明を放つに其の遇ふ者有らば皆怖畏を離れ、魔及び眷屬は斯の神變を覩て恐怖歡喜の二事交々懷けり。[二]大德當に知るべし、是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸の有情の所見をして各別ならしむと。謂ゆる是の如きを降魔なりと見る有り、或は有情の斯の事を見ざる有り、或は菩薩但だ草座に居せるのみと見、或は菩薩師子臺に處せりと見、或は菩薩地に在りて坐せりと見、或は空中にて師子座に坐せりと見る。菩提樹を見るに其の相も亦た別なり、謂ゆる或は是れを樺鉢羅樹と見、或は是れを天圓彩樹と見る有り、或は此の樹衆寶もて合成すと見、或は此の樹の高さ七多羅なりと見、或は此の樹八萬四千踰繕那量にして師子座有り四萬二千踰繕那量、此の樹の下に在りて菩薩之に坐せりと見、或は菩薩空中に遊戲すと見、或は菩提樹下に坐せりと見る。是の如く菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して種種の神通變化を示現して諸の有情を度す。[三]大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して菩提座に坐するに十方各殑伽沙の如き界の無量無數無邊の菩薩皆悉く來集して虛空の中に住し種種の聲を發して菩薩を安慰し身をして安樂ならしめ心に歡喜を生ず。善哉大士、勇猛精進して速に疾く廣大の吉祥を成辦し心金剛の如く怖懼を生ずる勿く、神通に遊戲して有情を利樂し能く一刹那に一切智を證すと。是の如き菩薩は菩提座に處するに魔來りて擾亂するも都て瞋を生ぜず、一刹那の心もて方便

【二】菩薩の能く方便善巧して諸の有情の所見をして各別ならしむることを明す。

【三】諸菩薩、菩提座に坐する菩薩を讃歎す。

善巧して能く般若波羅蜜多の理趣と相應し、已に究竟に至りて一切に通達して知見覺せし所なりと。

[一四]大德當に知るべし、是の如き菩薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して菩提座に坐するに十方各殑伽沙の如き界の所有る諸佛異口同音に讃めて言はく、善哉善哉、大士、乃ち能く自然智、無礙智、平等智、無師智に通達して大悲もて莊嚴せりと。大德當に知るべし、是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して能く是の如き種種の示現を作す。諸の有情類或は菩薩の今菩提を得るを見、或は菩薩の久しく已に成佛せるを見、或は但だ一世界中の四大天王のみ各鉢を奉獻するを見る有り、或は復た十方各殑伽沙の如き界の四大天王の各鉢を奉獻するを見る。爾の時菩薩有情の爲の故に總て衆の鉢を受けて掌中に重疊し手を以て之を挼で合して一と成らしむるに諸の四天王各相見ず、皆世尊獨り我が鉢のみを受けたまへりと謂へり。爾の時便ち六萬の天子有り、宿願力に乘じ先に來りて供を獻ず、彼れ過去に於て是の願を作して言はく、若し此の菩薩の當に成佛すべき時は願くは我れ等の最初の供養を受けんことをと。是の法を説く時三萬の菩薩無生忍を得たり。復た三萬六千の菩薩有り皆無上正等菩提に於て不退轉を得、八萬の人天は遠塵離垢して淨法眼を生じ、無量無邊の諸の有情類は倶に無上正等覺の心を發せり。大德當に知るべし、[一五]爾の時菩薩は深般若波羅蜜多に依り方便善巧して將に示現して大法輪を轉ぜんと欲すと。[一六]堪忍界の主持髻梵王時に應じて便ち六十八萬の諸の梵天衆と佛所に來至し雙足を頂禮し合掌恭敬して右遶七匝し而かも三請して言はく、唯だ願くは大悲もて我れ等を哀愍し大法輪を轉じたまへ。唯だ願くは大悲もて我れ等を哀愍し大法輪を轉じたまへ。唯だ願くは大悲もて我れ等を哀愍し大法輪を轉じたまへと。既に三請し已つて卽ち大師子座を化作す。其の座高廣にして四萬二千踰繕那量、種種に莊嚴して堅固安隱なり。時に十方界に各無量の天主帝釋有り皆如來の爲に師子座を敷くに量及び莊嚴も亦復た是の如し。菩薩爾の時神通力を現じ彼の諸天をして各菩薩の其の座上に坐して法輪を轉ずるを見せしむ。菩薩既に此の師

【一四】次に諸佛の讃歎を明す。

【一五】菩薩神通力を示現して諸天大衆等の爲に大法輪を轉じたまふを明す。

【一六】堪忍界。娑婆世界なり。

子座に坐して無邊境三摩地門に入り、大光明を放ちて十方面各殑伽沙等の如き世界を照らし、復た彼の界をして六種に變動せしむるに其の中の有情の衆苦暫くにして息みて身心安樂に、亦た暫くにして貪瞋癡等の惡不善法を遠離して慈心相向ふこと猶ほ母子の如し。時に此の三千大千世界の間隙一毛孔の如きも有ること靡く天龍藥叉健達縛阿素洛掲路茶緊捺洛〔一七〕莫呼洛伽人非人等其の中に充滿せり。若し諸の有情の苦の法を聞きて化を受くべき者は佛の苦を說きたまふを聞き、無我寂靜遠離無常苦空の法を聞きて化を受くべき者は亦復た是の如し。幻の如しと聞きて化を受くべき者は幻の如しと說くを聞き、夢響像光影陽焰變化尋香城の法を聞きて化を受くべき者は亦復た是の如し。空無相無願解脫門を聞きて化を受くべき者は佛の空無相無願を說きたまふを聞く。時に有情類或は如來の一切法は因緣より生ずと說きたまふを聞き、或は蘊を說きたまふを聞き、或は界を說きたまふを聞き、或は處を說きたまふを聞き、或は苦を說きたまふを聞き、或は集を說きたまふを聞き、或は滅を說きたまふを聞き、或は道を說きたまふを聞き、或は念住正斷神足根力覺支道支を說きたまふを聞く有り、或は寂止妙觀を說きたまふを聞く有り、或は諸の聲聞法を說きたまふを聞く有り、或は諸の獨覺法を說きたまふを聞く有り、或は諸の菩薩法を說きたまふを聞く有り。是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して示現し種種に法輪相を轉じ、諸の有情の根性の差別に隨て各利樂を得深心に歡喜せしむ。〔一八〕時に舍利子、最勝に謂て言はく、天王、菩薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧する所有る境界は極めて為れ甚深にして思ひ難く議し難く知り難く入り難しと。最勝報へて言はく、大德、菩薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧する功德勝事は無量無邊にして我が今說く所の百分千分乃至鄔波尼殺曇分の其の一をも得ず。唯だ如來のみ有りて乃ち能く盡說したまふ。我が今說く所の彼の少分も皆如來の威神の力を承けたり。何を以ての故に、諸佛の境界は思議す可からざればなり。一生所繫の諸の菩薩衆其の功德を說くも尙ほ盡すこと能はず、況んや餘の菩薩をや。

〔一七〕莫呼洛伽(Mahoraga)。八部衆の一。大蟒神をいふ。

〔一八〕諸佛の境界は甚深にして不可思議なるを明す。

大德當に知るべし、諸佛の境界は寂靜にして、戯を離れ分別智及び後所得の能く了する所無しと。

一九 大德當に知るべし、若し菩薩摩訶薩諸佛の境界に證入することを得んと欲せば應に般若波羅蜜多を學し方便善巧して健行三摩地、如幻三摩地、金剛喩三摩地、金剛輪三摩地、無動慧三摩地、遍通達三摩地、不緣境界三摩地、師子自在三摩地、三摩地王三摩地、功德莊嚴三摩地、寂靜慧三摩地、普超越三摩地、無染著三摩地、嚴莊嚴王三摩地、無等等三摩地、等覺三摩地、正覺三摩地、悅意三摩地、歡喜三摩地、淸淨三摩地、火焰三摩地、光明三摩地、難勝三摩地、常現前三摩地、不和合三摩地、無生三摩地、通達三摩地、最勝三摩地、超過廣境三摩地、一切智慧三摩地、幢相三摩地、大悲三摩地、安樂三摩地、愛念三摩地及び不見法三摩地等に通達すべしと。大德當に知るべし、若し菩薩摩訶薩能く般若波羅蜜多を學して方便善巧せば、便ち能く究竟して此れ等無量無邊殑伽沙數の三摩地門に通達して乃ち能く諸佛の境界に證入し其の心安隱にして怖畏する所無きこと師子王の禽獸を畏れざるが如し。何を以ての故に、若し菩薩摩訶薩是の如き等の諸の三摩地を修せば凡そ行ずる所有るは皆怖畏無ければなり。其の前を見るも一の怨敵有らず。何を以ての故に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して心緣ずる所無く亦た住する所無ければなり。譬へば人有りて無色界に生ずるに八萬大劫唯だ一識のみ有りて住する處有ること無く亦た緣ずる所無きが如く是の如く菩薩深般若波羅蜜多を行じて方便善巧するに心緣ずる所無く亦た住する所無し。何を以ての故に、是の諸の菩薩は心、無行處を行ぜず、心、無想處を想はず、心無緣處を緣ぜず、心、無著處に著せず、心、無亂處を亂さず、心、高下無く心、違順無く憂無く喜無く分別無く分別を離れて二〇奢摩他毘鉢舍那を離れ、心、智に隨はず、心自ら住せず亦た他に住せず、眼に依りて住せず、耳鼻舌身意に依りて住せず、色に依りて住せず、聲香味觸法に依りて住せず、心內に在らず亦た外に在らず兩間に在らず、心、法を緣ぜず亦た智を緣ぜず、三世に住せず離世に住せざれ

【一九】以下、菩薩の能く般若を行じ、方便善巧して佛の境界に證入することを明す。

【二〇】奢摩他毘鉢舍那。奢摩他(Samatha)は寂靜、能滅などと譯す。毘鉢舍那（一二一頁註三）は觀、觀察と譯す。

ばなり。大德當に知るべし、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一法をも取らず而かも諸法に於て智見礙ふる無し、心行淨なるが故に。一切法皆悉く無垢なりと見るも見相を取らず見分別無く諸の戲論を離ると。大德當に知るべし、是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一切の肉眼天眼慧眼法眼佛眼と相應せず相應せざるに非ず、亦復た一切の天耳他心宿住神境漏盡の諸智と相應せず相應せざるに非ずと。大德當に知るべし、甚深般若波羅蜜多方便善巧と一切法と皆相應するに非ず相應せざるに非ず。諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一切法に於て平等智を得て能く一切有情の心行を觀じ、一切の染淨を皆如實に知り、佛の十力四無所畏四無礙解及び十八佛不共法等無量無邊の諸佛の功德に於て皆失念せず。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して功用の心無くして一切法に達し、心意識無くして常に寂定に在り、寂定を起さずして有情を敎化し、佛事を化作して常に休息せず、諸佛の法に於て無礙智を得て心染著無し。譬へば化佛の如來を化作するが如し。所化の如來は心意識無く身無く身業無く語無く語業無く意無く意業無く而かも能く一切の佛事を施作して有情を饒益す。何を以ての故に、佛の神力の故なり。是の如く菩薩の深般若波羅蜜多を行ずるは方便善巧の化作する所にして身無く身業無く語無く語業無く意無く意業無く功用の心無くして常に佛事を作し有情を饒益す。何を以ての故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸法は皆幻の如しと通達して心分別無く而かも諸の有情は恒に法を說くを聞けばなり。大德當に知るべし、是の諸の菩薩の所有る智慧は有爲に住せず無爲に住せず、諸蘊及び諸の界處に住せず、內外及び兩の中間に住せず、善惡及び世出世に住せず、染淨有漏無漏有爲無爲に住せず、三世及び離三世に住せず、虛空擇非擇滅に住せずと。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して常に是の如く心住する所無しと雖も而かも能く諸法の性相に通達し無礙智無功用の心を以て諸の有情の爲に諸法の常在寂靜を宣說して敎化の事休息有

ること無し。是の諸の菩薩は宿願力強く無功用の心もて他の爲に法を說く。是の諸の菩薩は深般若波羅蜜多方便善巧に由りて常に怖畏無し。何を以ての故に、[三]執金剛神若しは行き若しは立ち若しは坐し若しは臥するに恒常に隨逐して守護するが故なり。大德當に知るべし、若し菩薩摩訶薩是の如き甚深般若波羅蜜多を說くを聞きて心驚怖せず惑無く疑無くんば當に知るべし已に菩提の記を得たりと。何を以ての故に、般若波羅蜜多を信受せば方便善巧して佛の境界に近づけばなり。此の一心を以て卽ち能く一切の佛法に通達し、佛法に達するが故に有情を利樂し、有情と佛法との異りを見ず。何を以ての故に、有情と佛法と理二無きが故なりと。

【三】執金剛神。跋闍羅波膩(Vajrapāṇi)の譯。手に金剛杵を執りて佛法を守護する神。

卷の第五百七十一

第六分無所得品第九

[一]爾の時會中に菩薩摩訶薩有り名づけて善思と爲す。最勝に問ひて曰はく、佛は天王に菩提の記を授けたまひし耶と。最勝答へて曰はく、我れ記を受くと雖も而かも猶ほ夢等の如しと。爾の時善思復た最勝に問はく、天王記を受けて何をか得たる所と爲すと。最勝答へて言はく、我れ記を受くと雖も而かも所得無しと。善思復た言はく、所得無しとは何の法を得ざるやと。最勝報へて言はく、所得無しとは謂ゆる我を得ず有情を得ず乃至知者見者を得ず、諸蘊及び諸の界處を得ず、若しは善非善、若しは雜染若しは淸淨、若しは有漏若しは無漏、若しは世間若しは出世間、若しは有爲若しは無爲、若しは生死若しは涅槃是の如き等皆得る所無しと。善思又た問はく、[二]若し所得無くんば記を授けて爲すを用ふるやと。最勝答へて言はく、所得無きを以ての故に記を受くることを得と。善思復た問はく、若し天王の所說の義の如くんば便ち二智有り、一は得る所無く、二は受記を得と。最勝答へて言はく、若し二智有れば則ち受記無し。所以は何ん、佛智は二無ければなり。諸佛世尊は不二の智を以て菩薩に記を授けたまへりと。善思又た言はく、若し智不二ならば云何が而かも記を授け記を受くる有るやと。最勝答へて言はく、授記と受記と其の際二無しと。善思復た言はく、二際無くば云何が記有りやと。最勝答へて言はく、二際無きに達せば卽ち記有りと爲すと。善思復た問はく、天王、今何の際の中に住して受記を得たりやと。最勝答へて言はく、我れ我際に住し有情際乃至知者見者際の中に住して受記を得たりと。善思復た問はく、此の我際等は當に何に於て求むべきやと。最勝答へて言はく、當に諸佛の解脫際に於て求むべしと。善思又た問はく、佛の解脫際は復た何に於て求むるやと。最勝答へて曰はく、當に無明有愛の際に於て求むべしと。善思又た問

【一】一切法は文言を離れ、不可得平等なることを明す。

【二】所得なくば受記無用ならずやと云ふに無所得なるが故に受記ありとす。

はく、無明有愛は復た何に於て求むるやと。最勝答へて言はく、當に畢竟不生の際に於て求むべしと。善思又た問はく、此の不生の際は復た何に於て求むるやと。最勝答へて曰はく、此の際は當に無知の際に於て求むべしと。善思又た問はく、無知の際とは卽ち知る所無きなり。云何が此の際は當に彼れに於て求むべきやと。最勝答へて曰はく、若し知る所有れば求むるも得可からず、知る無きを以ての故に彼の際に於て求むるなりと。善思又た問はく、此の際は言を離る、云何が求む可きやと。最勝答へて言はく、語言斷ずるを以て是の故に求む可しと。善思又た問はく、此の語言は云何が斷ずるやと。最勝答へて言はく、諸法は義に依りて語に依らざるが故なりと。善思又た問はく、云何が義に依るやと。最勝答へて曰はく、義相を見ざるなりと。善思又た問はく、云何が見ざるやと。最勝答へて曰はく、分別を起さざるなり　義は是れ所依、我は爲れ能依なりと、此の二事無きが故に見ずと名づくと。善思又た問はく、若し義を見ずんば此れ何をか求むる所なると。最勝答へて曰はく、見る無く取る無きが故に名づけて求むと爲すと。善思又た問はく、法求む可くんば卽ち爲れ求むること有るなりと。最勝答へて曰はく、是の義は然らず、未だ法を求めずんば實に求むる所無し。何を以ての故に、若し實に求む可くんば卽ち爲れ法に非ずと。善思又た問はく、何者か是れ法なると。最勝答へて曰はく、法は文字無く亦た語言を離ると。善思又た問はく、文言を離るる中何者か是れ法なると。最勝答へて曰はく、性文言を離れ心行處滅是れを名づけて法と爲す。一切の法性は皆說く可からず、其の說く可からざるも亦た說く可からす。若し說く所有らば卽ち是れ虛妄、虛妄の法の中には都て實法無しと。善思又た問はく、諸佛菩薩常に言說する所有るは皆虛妄なる耶と。最勝答へて曰はく、諸佛菩薩は始めより終に至るまで一字をも說かず云何が虛妄ならんと。善思又た問はく、若し說く所有らば當に何の咎か有るべきと。最勝答へて曰はく、語言の咎有りと。善思又た問はく、語言何の咎なると。最勝答へて曰はく、思議の咎有りと。善思又た問はく、

何の法答無きやと。最勝答へて曰はく、有說無說二相を見ざる是れ則ち答無きなりと。善思又た問はく、答は何をか本と爲すと。最勝答へて言はく、能執を本と爲すと。善思又た問はく、執は何をか本と爲すと。最勝答へて曰はく、著心を本と爲すと。善思又た問はく、著は何をか本と爲すと。最勝答へて曰はく、虚妄の分別を本と爲すと。善思又た問はく、虚妄の分別は何を以て本と爲すやと。最勝答へて曰はく、攀縁を本と爲すと。善思又た問はく、何をか攀縁する所なると。最勝答へて曰はく、色聲香味觸法に攀縁すと。善思又た問はく、云何が縁ずる無きと。最勝答へて曰はく、若し愛取を離るれば則ち縁ずる所無し。是の義を以ての故に如來は常に諸法は平等にして攀縁す可からずと說きたまへりと。此の法を說く時五千の苾芻遠塵離苦して淨法眼を生じ、復た一萬二千の菩薩有りて無生忍を得、無量無邊の諸の有情類は倶に無上正等覺の心を發せり。

[三] 爾の時最勝卽ち座より起ちて偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、諸の善男子善女人等深般若波羅蜜多を聞かば云何が未だ菩提心を發さざる者は卽ち能く發心し皆悉く成就して不退轉を得、常勝進を行じて退墮する無きやと。佛言はく、天王、諦かに聽け諦かに聽きて極めて善く作意せよ。當に汝が爲に說くべしと。最勝白して言さく、善哉大聖、唯然願くは說きたまへ、我れ等樂聞したてまつらんと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し善男子善女人等、深般若波羅蜜多を聞き純淨の意を以て菩提心を發し正信具足して賢聖に親近し、正法を樂聞して嫉慳を遠離し、常に寂靜を修して好みて惠施を行じ、心に限礙無くして諸の穢濁を離れ、正しく業果を信じて心猶豫せず、如實に黑白の業果を了知して設ひ身命の爲にも終に惡を作さず、是の善男子善女人等是の如く甚深般若波羅蜜多を修行せば則ち能く十惡業道を遠離して心常に十善業道に繫念す。是の善男子善女人等は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して若し沙門婆羅門等の正しく精進を行じ戒品清潔に多聞にして義を辨するを見ば常に正念を起して心性調柔に寂靜にして亂る

【三】以下、般若を聞く者の能く菩提心を發して不退轉を得ることを詳述す。

る無く恒に愛語を爲し、勤めて諸善を修して衆惡を遠離し、自らに於て高うせず他に於て蔑せず、麁惡の語を離れ無義の言を遠ざけ、念住を捨てず其の心調直にして能く暴流を斷じ、善く毒箭を拔きて諸の重擔に於て悉く能く棄捨し、無暇を超出して後有を越度せん。是の善男子善女人等は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して此の菩薩を見ば則ち應に親しく附依して善友と爲すべし。時に此の菩薩は方便善巧して其の宜しき所に隨て爲に法を說かん。汝等當に知るべし、能く施を行ずる者は當に富樂を得べく、淨戒を受持せば尊貴にして天に生じ、正法を聽聞せば大智慧を獲んと。復た之に告げて言はん、此れは是れ布施、此れは布施の果、此れは是れ慳悋、此れは慳悋の果、此れは是れ淨戒、此れは淨戒の果、此れは是れ犯戒、此れは犯戒の果、此れは是れ安忍、此れは安忍の果、此れは是れ忿恚、此れは忿恚の果、此れは是れ精進、此れは精進の果、此れは是れ懈怠、此れは懈怠の果、此れは是れ靜慮、此れは靜慮の果、此れは是れ散亂、此れは散亂の果、此れは是れ妙慧、此れは妙慧の果、此れは是れ愚癡、此れは愚癡の果、此れは身の善業、此れは身善業の果、此れは身の惡業、此れは身惡業の果、此れは語の善業、此れは語善業の果、此れは語の惡業、此れは語惡業の果、此れは意の善業、此れは意善業の果、此れは意の惡業、此れは意惡業の果、此の法は應に作すべく、此の法は作すべからず、若し是の如く修せば長夜の樂を感じ是の如く修せずんば長夜の苦を獲んと。是の善男子善女人等は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧し善友に親近して是の如く次第に法を說くを聞くことを得ん。時に此の菩薩是れ法器なりと知らば則ち爲に甚深般若波羅蜜多を宣說せん、謂ゆる空無相無願無作無生無滅無我有情——廣說乃至——知者見者なり。復た爲に甚深の緣起を宣說せん、謂ゆる此の法有るに因りて彼の法生じ、此の法滅する時彼の法隨て滅すと。謂ゆる無明に緣りて行あり、行に緣りて識あり、識に緣りて名色あり、名色に緣りて六處あり、六處に緣りて觸あり、觸に緣りて受あり、受に緣りて愛あり、愛に緣りて取あり、取に緣りて有あり、

有に緣りて生あり、生に緣りて老死愁歎苦憂惱あり。若し無明滅すれば則ち行滅し乃至生滅すれば則ち老死愁歎苦憂惱滅せんと。時に此の菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して復た是の說を作さん、眞實の理の中には一法も生す可く滅す可き有ること無し。何を以ての故に、世間の諸法は皆因緣に生ずればなり。我有情作者受者無く、因緣和合するを諸法生ずと說き、因緣離散するを諸法滅すと說く。一實法の生滅を受くる者無し、虛妄の分別のみ。三界の中に於ては但だ假名有るのみ。業煩惱に隨て果の異熟せるを受く。若し般若波羅蜜多を以て如實に觀察せば則ち一切法は生ずる無く滅する無く作す無く受くる無し。若し法作す無ければ是れ亦た行も無し、則ち諸法に於て心著する所無し。謂ゆる色受想行識に著せず、眼處乃至意處に著せず、色處乃至法處に著せず、眼界乃至意界に著せず、色界乃至法界に著せず、眼識界乃至意識界に著せざるなり。時に此の菩薩は復た是の說を作さん、諸法は自性皆畢竟空寂靜遠離にして取る無く著する無し。是の善男子善女人等是の如き說に因りて常勝進を行じて而かも退墮すること無しと。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸佛を見たてまつらんことを樂ひ正法を聞かんことを樂ふて卑賤に墮せず、所生の處に隨て見、佛を離れず、正法を聽受し衆僧を供養して常に諸佛を見たてまつり、勇猛精進して正法を志求し、有爲妻子僕使に著せず、資生の具に於ても亦た貪著せず諸欲に染まず、常に正教に依りて佛隨念を修し、俗を捨てて出家し敎の如く修行し轉じて他の爲に說き、他の爲に說くと雖も而かも報を求めず、聽法の衆を見て常に大慈を起し、有情類に於て恒に大悲を起し、廣く多聞を學して身命を惜しまず、常に遠離を樂ひ少欲にして足れるを喜び、但だ義理のみを採り言詞滯らず、說法修行も專ら己が爲にせず、有情類の無上の樂謂ゆる佛菩提大涅槃界を得んが爲にす。[四]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧し是の如く修行して放逸を遠離し勇猛精進して諸根を攝護し、若し眼色を見るも色相に著せずして如實に此の色

【四】般若行に於ける不放逸を明す。

の過患を觀察す、耳聲鼻香舌味身觸意法も亦た爾なり。若し諸根を縱にせば名づけて放逸と爲し若し能く攝護せば不放逸と名づく。是の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して身心を調伏し他意を將護するを不放逸と名づけ、貪欲を遠離し心善法に順ひ、尋伺瞋癡不善の根本身語の惡業及び二邪命一切の不善皆悉く遠離するを不放逸と名づく。是の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ心常に正念なるを不放逸と名づく。是の菩薩摩訶薩は一切法は信を上首と爲し、正信の人は惡趣に墮せずと知る。心に惡を行ぜざれば賢聖の讃むる所なり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して法の如く修行し所生の處に隨て常に佛に値ひたてまつることを得二乘を遠離して正道に安住し大自在を得て大事を成就す。謂ゆる諸の如來の正智解脫なりと。是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して安樂を求めんと欲し常に勤めて一切智道に隨順す。天王當に知るべし、[五]今此の大衆の是の如き甚深般若波羅蜜多を聞くことを得るは已に過去無量の大劫に於て諸佛を供養して善根を修集せるなりと。是の故に應に當に勤加精進して退失せしむること勿るべし。若し天人等能く諸根を制して五欲に著せず世間を遠離して常に[六]出世を修し三業清淨にして助道法を習はば不放逸と名づく。諸の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して正信具足し心放逸ならず勤めて精進を修し勝法を得せしむるを不放逸と名づく。[七]諸の菩薩摩訶薩正信を具し心放逸ならず精進し正念ならんと欲せば當に般若波羅蜜多を學すべし、是の念智に因りて能く疾く所求の無上正等菩提を證得せん。諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して正信を具足し心放逸ならず勤めて精進を修せば卽ち正念を得ん、是の念智を用て有るを知り無きを知らん。[八]云何か有無なる。若し正行を修して正解脫を得る是れを名づけて有りと爲し、若し邪行を修して正解脫を得る是れを名づけて無しと爲す。眼等の六根、色等の六境は世俗には有りと爲し勝義には無しと爲し、精進の菩薩の能く菩提を得る是れを名づけて有りと爲し、懈怠の菩薩の菩提を得ると

【五】現世に般若を聞くを得るは過去世よりの因緣なり。

【六】消極的には厭世逃避なるも積極的には現實を打破する進歩向上を云ふものなり。

【七】正念の義を明し、その能く有無を知ることを說く。

【八】有無を分別する所に佛教の法相を明にす。

は是れを名づけて無しと爲す。五取蘊は皆虚妄の分別より生ずと說く是れを名づけて有りと爲し、世俗の法は因緣に由らず自然に而かも生ずと說く是れを名づけて無しと爲す。色は無常苦敗壞の法なりと說く是れを名づけて有りと爲し、若し常樂にして敗壞の法に非ずと言ふは是れを名づけて無しと爲す。受想行識も亦復た是の如し。無明に緣りて行ある是れを名づけて有りと爲し、若し無明を離れて而かも行生ずとは是れを名づけて無しと爲す。乃至生に緣りて老死愁歎苦憂惱あるも亦復た是の如し。施して大富を得る是れを名づけて有りと爲し、貧窮を得るとは是れを名づけて無しと爲す。淨戒を受持して善趣に生ずることを得る是れを名づけて有りと爲し、惡趣に生ずとは是れを名づけて無しと爲す。乃至慧を修して能く聖を成ずるを得る是れを名づけて有りと爲し、愚夫と作るとは是れを名づけて無しと爲す。若し多聞を修して能く大智を得る是れを名づけて有りと爲し、愚癡を得るとは是れを名づけて無しと爲す。若し正念を修して能く出離を得る是れを名づけて有りと爲し、得ざるを無しと爲す。若し邪念を行じて出離を得ざるは是れを名づけて有りと爲し、能く得るを無しと爲す。我我所を離れて能く解脫を得る是れを名づけて有りと爲し、我我所に執して能く解脫を得る是れを名づけて無しと爲す。若し虛空は一切處に遍ずと言ふは是れを名づけて有りと爲し、五蘊の中眞實我有りと言ふは是れを名づけて無しと爲す。如實に智を修して能く解脫を得る是れを名づけて有りと爲し、若し邪智に著して能く解脫を得る是れを名づけて無しと爲す。我等の見を離れて能く空智を得る是れを名づけて有りと爲し、我等の見に著して能く空智を得る是れを名づけて無しと爲すと。[九]天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して世の有無を知り、能く平等を修し、諸法は因緣に從て生ずと了達し、世俗の故に有るも常見を起さずして因緣の法を知り、本性皆空なるも斷見を生ぜず諸佛の敎に於て如實に通達すと。[一〇]天王當に知るべし、佛は菩薩の爲に略して四法を說きたまふと。謂ゆる世の沙門婆羅門等及び長壽天の多く常見

【九】有無に處する正法道を說く。

【一〇】四法を說く。

を起すには彼の執を破らんが爲に行の無常を說き、諸の天人の多く樂に貪著する有り、其れを破らんが爲の故に一切苦を說き、外道邪見にして身に我有りと著するには彼の執を破らんが爲に身に我無しと說き、增上慢の者の眞涅槃を謗るには是の故に爲に涅槃寂靜を說く。無常を說ける者は其れをして究竟の法を志求せしめ、苦を說ける者は生死に於て願求を遠離せしめんが爲、無我を說ける者は空門を顯して其れをして了達せしめんが爲、寂靜を說ける者は無相に達して諸相の執を離れしむるなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して是の如く修學せば諸の善法に於て終に退墮すること無く速に無上正等菩提を成ずと。

[二]爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ何等の行を修して正法を護持するやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて行言に違はず師長を尊重し、正法に隨順して心行調柔に、志性純質にして諸根寂靜に、一切の惡不善法を遠離して勝善根を修せば正法を護ると名づくと。天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて身語意の三業に慈悲を修し利譽に徇はず戒を持つこと淸淨にして諸見を遠離せば正法を護ると名づくと、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて心憂悲癡怖に隨て行ぜずんば正法を護ると名づけ、慚愧を修習するを正法を護ると名づけ、說法修行皆聞きし所の如くなるを正法を護ると名づくと。[三]天王當に知るべし、三世の諸佛は正法を護らんが爲に陀羅尼を說き天王及び人王等を擁護し正法を護りて世間に久住せしめ、諸の有情の與に大饒益を作すと。陀羅尼に曰はく、

呾姪他　阿虎洛　屈洛罰底　虎刺挐涉　寠茶　者遮　者遮折　尼阿莽　若刹多　刹多刹　延多刹也莎訶　陝末尼羯洛　郞魯郞魯罰底迦　羅跋底迦阿薔蕎底尼莎刹尼　社闍　社闍末底　阿罰始尼　罰皂罰多　罰多　奴婆理尼　部多奴悉沒栗底　提罰多奴悉沒嘌底　莎訶

【二】菩薩般若を行じ、能く正法を護持する所以を明す。

【三】陀羅尼の功德を明す。

天王當に知るべし、此の大神呪は能く一切の天龍藥叉健達縛阿素洛揭路茶緊捺洛莫呼洛伽人非人等一切の有情をして皆安樂を得せしむと。此の大神呪は三世諸佛、正法を護り及び天王幷びに人王等を護りて安樂を得せしめんが爲に方便力を以て之を宣說す。是の故に天王及び人王等、正法をして世に久住せしめんが爲の故に、自身の眷屬安樂を得んが故に、國土の有情災難無からんが故に各應に精勤し至誠もて誦念すべし。是の如くせば則ち怨敵災難魔事法障をして皆悉く銷滅せしめ、斯れに由りて正法世間に久住して諸の有情の爲に大饒益を作さん。是の般若波羅蜜多大神呪を說く時諸天宮殿山海大地皆悉く振動し八十千の諸の有情類有りて俱に無上正等覺の心を發せり。[一三]時に最勝天踊躍歡喜し七寶の網を以て佛の上を彌覆し合掌恭敬して復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ何等の法を修して能く無上正等菩提に於て心移動せざるやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ精勤して修習し無礙の大慈、無厭の大悲もて大事を成辦し勤加精進して空等持を學し亦た能く精勤して平等智を修し、方便善巧して如實に淸淨の大智に通達し、三世平等の妙理を明了して障礙有ること無く、三世の佛の所行の正道を履まば、天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ是の如き法を修して能く無上正等菩提に於て心移動せずと。[一四]爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ何等の法を修すれば諸の如來の不思議事を聞きて驚かず怖かず亦た憂惱せざるやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩妙慧妙智を具足し修行し善友に親近して深法を樂聞し、諸法は皆幻等の如しと了知し、世は無常にして生ずれば必ず滅に歸すと悟り心住著無きこと猶ほ虛空の若くんば、天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ是の如き法を修し諸の如來の不思議事を聞くも驚かず怖かず亦た憂惱せずと。[一五]爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ何等の法を修すれば一切處に於て能く

【一三】菩薩の般若を行じて無上菩提に於て心移動せざる所以を明す。

【一四】菩薩の般若を行じて如來の不思議事を聞くも驚怖憂惱せざる所以を明す。

【一五】一切處に於て能く自在を得る所以を明す。

自在を得るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ五神通を修して無礙の諸の解脫門靜慮無量の方便般若波羅蜜多を具足せば一切處に於て能く自在を得と。[一六]爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜば何等の門を得るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずれば妙智門を得て則ち能く一切の有情の諸根の利鈍に悟入し、妙辯門を得ては則ち能く諸法の句義を分別し、總持門を得ては一切の語言音聲に了達し、無礙門を得ては能く諸法畢竟無盡なりと說くと。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて是の如きの門を得と。[一七]爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずれば何等の力を得るやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずれば寂靜力を得、大悲を成就するが故に。精進力を得、不退を成就するが故に。多聞力を得、大智を成就するが故に。安忍力を得、有情を愛護するが故に。信樂力を得、解脫を成就するが故に。修行力を得、出離を成就するが故に。菩提心力を得、我見を斷除するが故に。大悲力を得、有情を化導するが故に。無生忍力を得、十力を成就するが故に。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに是の如き等の種種の勝力を得と。是の法を說く時五百の菩薩は無生忍を得、八千の天子は不退轉を得、一萬二千の諸の天子衆は遠塵離垢して淨法眼を生じ、四萬の天人は倶に無上正等覺の心を發せり。

【一六】般若を行じて得る諸門を明す。

【一七】般若を行じて得る諸力を明す。

第六分證勸品第十

[一]佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、過去無量不可思議無數の大劫に佛有り名を功德寶王と曰ふ。十號圓滿せり。國を寶嚴と名づけ、劫を善觀と名づく。其の土豐樂にして諸の疾惱無く、人天往來するに相限礙せず、地の平かなること掌の如く諸の山陵堆阜瓦礫荊棘毒刺無く遍ねく細草を生じ、柔軟にして紺青なること孔雀の毛の如く量纔に四指、足を下せば便ち靡き歩を擧ぐれば隨て昇り、瞻博迦花、悅意花等及び餘の軟草周遍に莊嚴せり。暑からず寒からず四序調適にして吠琉璃寶以て其の地を成ず。時に諸の有情の心性調善にして三毒煩惱の制伏行はれず。彼の佛世尊の聲聞の弟子一萬二千那庾多數、菩薩の弟子は六十二億なり。時に人の極めて壽きは三十六億那庾多歲なるも、[二]或は復た中天あり。城有り名づけて無垢莊嚴と曰ふ。其の城の南北は百二十八踰繕那量、東西は八十踰繕那量、城の厚さは十六踰繕那量なり。門堞樓觀皆七寶もて成り、十千の園苑以て嚴飾と爲し、十千の小城周匝に圍繞す。四園苑有り妙花もて莊嚴し、悅意功德の孔雀遊戲し四時の中に於て歡娛適樂す。四大池有りて七寶もて岸と爲し縱廣正等にして半踰繕那、純ら紫金を以て階道と爲し、其の底に遍ねく妙好の金沙を布けり。池中に水有り八功德を具す、寶花彌覆として其の中に間列し鳧鴈鴛鴦の衆鳥遊集し岸に列れる諸樹白檀赤檀[三]尸利沙等の上に鸚鵡舍利の衆鳥有りて翔集し遊戲せり。轉輪王有り名を治世と曰ふ。七寶具足し四大洲に王たり。已に曾て無量の諸佛を供養し諸佛の所に於て深く善根を植ゑ大菩提心もて不退轉を得たり。內宮の眷屬七十千人形貌端嚴にして承事せる寶女は咸く無上正等覺の心を發せり。彼の轉輪王は千子を具有せり、大力勇健にして能く怨敵を摧き二十八大丈夫相を具し亦た無上正等覺の心を發せり。爾の時功德寶王如來諸の聲聞及び菩薩衆を將ひ復た無量の天龍藥叉健達縛阿素洛揭路茶緊捺洛莫呼洛伽人非人等の與に前後圍繞

【一】轉輪王等佛所に詣でて正法を聞く。

【二】三本無復中天に作る。然るに下文人身無常と云ふが故に今或は中天人身無常といふが故に今或に中天ありとするを正しとす。

【三】尸利沙(Śirīṣa)。樹名、合歡樹のこと。

せられて將に無垢莊嚴大城に入らんとす。時に彼の輪王七寶導從し其の千子內宮の眷屬と城を出でて奉迎し禮敬して請入し、種種微妙の供養を營設す。爾の時世尊及び諸の眷屬供養を受け已つて本處に還らんと欲す。治世輪王、七寶等と與に城を出でて奉送し畢て即ち宮に還れり。時に輪王忽ち自ら歎じて曰はく、人身は無常にして富貴は夢の如し、諸根缺けずして正信すること甚だ難し、況んや如來に値ひて妙法を聞くことを得んをや。希有なること[三]優曇華の如しと爲すやと。時に彼の千子其の父王の世尊を渇仰し正法を樂聞せるを知りて即ち爲に[五]牛頭栴檀の廣大の妙臺を創造し、七寶もて嚴飾す。其の臺一兩にして贍部洲に直す。此の臺の南北の長さ十三踰繕那、東西復た廣さ十踰繕那にして衆寶もて四角の大柱を莊嚴し、其の臺の下に千寶輪有り。成じ已て共に持ちて其の父に奉獻す。時に王受け已て之を讃めて言はく、善哉善哉、快よく我が意を知れり、佛所に詣りて正法を聽受せんと欲すと。千子爾の時復た臺の內に於て師子座を造りて父王を安處し、諸の宮人をして前後を圍繞せしむ。其の臺の四面に妙なる金鈴を垂れ諸幡蓋を懸け七寶の網を覆へり。復た種種珍異の香花を散じ無價の香を燒き香泥を塗飾せり。時に王の千子各一輪を捧ぐるに猶ほ鵝王の空に騰りて佛のみもとに詣るが若く、安詳として地に置きて如來の所に往く。到り已て世尊の雙足を頂禮し右繞七匝して退きて一面に立てり。時に彼の輪王內宮の眷屬と寶臺より下り、王は寶蓋を去り及び內眷屬は皆瓔珞を卸ぎ前みて佛所に詣り雙足を頂禮し右繞七匝し退きて一面に坐しぬ。爾の時功德寶王、治世に告げて言はく、大王、今正法を聞かんが爲の故に此に來至せる耶と。時に轉輪王即ち座より起ち衣服を整理して白して言さく、世尊、何等をか名づけて聞く時の正法と爲んやと。佛、王を讃めて曰はく、汝今乃ち能く天人衆利樂を得んが爲の故に深正法を聞かんとす。諦かに聽け、諦かに聽きて善く之を思念せよ。當に大王の爲に分別し解說すべしと。治世、佛に白さく、唯然、願くは聞きたてまつらんと。爾の時世尊、彼の王に告げて曰はく、大王當に知る

【三】優曇華 (Udumbara) なり、義譯して瑞應華、靈瑞華といふ。三千年に一度開く花也。此花開けば世に轉輪王出づといひ、又佛在世の時此花開くといふ靈瑞殊勝な華なり。

【五】牛頭栴檀 (Go-śīrṣa-candana)。赤栴檀なり。印度の牛頭山（摩羅耶山）に產する香木。

べし、諸の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して達する所の一切平等の法性を名づけて正法と爲す、謂ゆる四念住四正斷四神足五根五力七等覺支八聖道支空無相無願等の達する所の一切平等の法性を名づけて正法と爲すと。〔六〕爾の時治世復た佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して大乘の中に於て恒に勝進を得て而かも退墮せざるやと。佛、治世に告げたまはく、大王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若般羅蜜多を行じ方便善巧して正信力に因りて勝進を得。何者か正信なる。謂ゆる諸法の不生不滅本性寂靜なるを知りて常に能く正行の人に親近し、作すべからざる法は終に造作せず心散亂を離れて正法を聽受し、彼れの說くを見ず、我れの聽くを見ず、正行を勤修して疾く神通を得、能く有情類を化するに堪ふる所有るも而かも終に我れ神通有りて能く有情を化し彼れの我が化を受くるを見ず。何を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して都て我を見ず有情を見ざればなり。二處平等なれば則ち勝進を得て而かも退墮せざるなり。大王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して諸根を攝護して取著せしめず、資生の具に於て無常想を起し、法は寂靜にして命は假借せるが如しと知ると。大王當に知るべし、是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ大乘の中に於て心放逸ならずと。大王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して其の夢の中に於てすら尙ほ菩提の心を忘れず、諸の有情を化して佛道を修せしめ、諸の善根を持て有情類に施して無上正等菩提に廻向し、佛の神力を見て歡喜し讚歎すと。大王當に知るべし、是の如き菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して速に無上正等菩提を成ずと。是の故に大王當に勤めて精進し尊貴の位に處して放逸を生ずること莫るべし。若し菩薩摩訶薩法を求めんと欲せば五欲に著すること勿れ。何を以ての故に、一切の異生は欲に於て厭くこと無く聖智を得る者は則ち能く之を捨つればなり。人身は無常にして壽量短促なり。大王、今應に善く了知して世間を厭離して出世道を

【六】佛、續いて轉輪王等に般若を說く。

求むべし。大王、應に如來を供養して獲る所の善根を以て四事に廻向すべし、一には自在無盡、二には正法無盡、三には妙智無盡、四には辯才無盡なり。此の四廻向と深般若波羅蜜多と同じくして皆無盡なり。大王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧し應に淨修して身語意の戒を持つべしと。何を以ての故に、聞思修を引發せんと欲するが爲の故に方便力を以て諸の有情を化し、般若力を以て衆魔を降伏し、願力を成就して行言に違はざればなり。[七]時に轉輪王、佛の所說の甚深般若波羅蜜多を聞きて歡喜踊躍して未曾有なることを得、即ち寶冠を取り自ら瓔珞を解き長跪敬捧して如來を供養し、四大洲を捨てて皆以て佛に奉り、此の福を以て常に梵行を修し深般若波羅蜜多を學して決定心を以て有情類の爲に無上正等菩提に趣向せんことを願へり。王宮の女人は佛の說法を聞きて皆歡喜を生じ菩提心を發し、各上衣を脫ぎ寶の瓔珞を解きて功德寶王如來に奉施す。王は寶臺師子座等を以て又た佛に奉上して出家せんことを求む。[八]時に彼の如來、治世を讃めて曰はく、王能く是の如くせり。甚だ善哉と爲す。今行ずる所昔の願に違はず、應に勤めて布施淨戒安忍精進靜慮般若を修習すべし。過去の諸佛は此の法を修せしが故に無上正等菩提を成ずることを得たり。未來の諸佛も亦復た是の如くならんと。爾の時治世復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩布施を修行するに深般若波羅蜜多と異ると爲すや異らざるやと。佛、治世に告げたまはく、夫れ布施する者若し般若波羅蜜多無くんば但だ施の名のみを得るも到彼岸に非ず、要らず般若波羅蜜多に由りて乃ち名づけて施到彼岸と爲すことを得。淨戒忍辱精進靜慮般若も亦た爾なり。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は性平等なるが故なりと。彼の佛此の甚深の法を說きたまひし時王便ち無生法忍を證得せり。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに應に彼の王の如く正法を勤求すべしと。時に彼の輪王は即ち然燈佛、千子は即ち是れ賢劫千佛なりと。

【七】轉輪王、佛說を聞きて歡喜し供養す。

【八】佛、轉輪王を讃し、正法勤求者の範と爲す。

九 爾の時最勝便ち佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行ずるに修行して速に大菩提道を成ずるやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して慈等の心を修し諸の有情に於て損惱を爲さず勤めて一切の波羅蜜多及び四攝事四無量心菩提分の法を行じ、神通方便善巧を修學して一切の善法修滿せざる無し。若し諸の菩薩是の如く修行せば則ち能く速に大菩提道を成ずる。一〇 菩提道とは所謂信心清淨心諂曲を離るる心、平等を行ずる心、無畏を施す心にして諸の有情をして咸悉く親附せしめ、勤めて布施を行じて果報盡くる無く、淨戒を受持して而かも障礙無く、安忍を修行して諸の忿恚を離れ、勤加精進して修行成じ易く、勝靜慮有りて散亂を起さず、般若を具足して能善く通達し、大慈有るが故に有情を饒益し、大悲有るが故に終に退轉無く、大喜有るが故に能く彼の心を悦ばしめ、大捨有るが故に分別を起さず、三毒無きが故に諸の荊棘を離れ、色聲香味觸に著せざるが故に諸の戲論を滅し、煩惱無きが故に怨敵を遠離し、二乘の念を捨てて其の心廣大に、一切智を具して能く衆寶を出すなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して是の如く修行せば則ち能く速に大菩提道を成ずと。

一一 爾の時最勝復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるに何の色像を現じて有情類を化するやと。佛、最勝に告げたまはく、天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して現ずる所の色像は決定相無し。何を以ての故に、諸の有情の心の所樂に隨て菩薩即ち是の如き色像を現ずればなり。或は金色を現じ、或は銀色を現じ、或は頗底迦色を現じ、或は吠琉璃色を現じ、或は石藏色を現じ、或は杵藏色を現じ、或は眞珠色を現じ、或は青黃赤白色を現じ、或は日月火焔色を現じ、或は帝釋色を現じ、或は梵王色を現じ、或は霜雪色を現じ、或は雌黃色を現じ、或は朱丹色を現じ、或は雨花色を現じ、或は瞻博迦花色を現じ、或は 一二 蘇末那花色

【九】大菩提道を成ずる修行法を明す。

【一〇】菩提道の義を明す。

【一一】有情を化度する爲に現ずる色像に就て明す。

【一二】以下蓮華なり。(Sumanā (將開蓮) Utpala (青蓮花) Padma (赤蓮花) Kumuda (黃蓮花) Puṇḍarīka (白蓮花)。

を現じ、或は嗢鉢羅花色を現じ、或は鉢持摩花色を現じ、或は拘某陀花色を現じ、或は奔茶利花色を現じ、或は功德天色を現じ、或は鵝孔雀色を現じ、或は珊瑚寶色を現じ、或は如意珠色を現じ、或は虛空界色を現じ、人天等に隨て各彼の類を現ずるなり。天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は十方面の殑伽沙等の諸の世界中の一切有情の色像の差別に隨て悉く能く示現すと。何を以ての故に、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して遍ねく能く一切の有情を攝化し乃至一切有情を捨てざるが故なり。何を以ての故に、一切有情の心行各別なればなり。是の故に菩薩は種種に示現す。所以は何ん、是の菩薩摩訶薩は過去世に於て大願力有りて諸の有情の見て化を受けんと樂ふに隨て卽ち爲に見んと欲する所の身を示現すること、明鏡の中本影像無きも質の好醜に隨て種種に悉く現じ、然かも此の明鏡も亦た我が體明淨にして能く衆色を現ずと分別せざるが如し。是の如く菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して功用の心無く樂ふに隨て示現し、而かも我れ能く身を現ずと分別せざるなり。天王當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一坐の中に於て諸の聽衆の心に見んと樂ふ所に隨て說法の身を菩薩卽ち能く示現して爲に說く。謂ゆる或は佛を見し、或は菩薩を見はし、或は獨覺を見はし、或は聲聞を見はし、或は梵王を見はし、或は帝釋を見はし、或は大自在を見はし、或は毘瑟拏を見はし、或は護世を見はし、或は輪王を見はし、或は沙門を見はし、或は異道を見はし、或は婆羅門を見はし、或は刹帝利を見はし、或は吠舍を見はし、或は戍達羅を見はし、或は長者を見はし、或は居士を見はし、或は寶臺の中に坐せるを見はし、或は蓮花の上に坐せるを見はし、或は地に在るを見はし、或は空に騰れるを見はし、或は法を說けるを見はし、或は寂定を見はす。[一三]天王當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して有情を度せんが爲に一形類及び一威儀として而かも能く甚深般若波羅蜜多を現ぜざること無し。猶ほ虛空の形無く相無く十方界に遍じて處として有らざること無きが如く、又た

[一三] 般若の三相、本在等を虛空と對比して說く。

虚空の諸の戲論を離るるが如く、甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し。諸の語言を過ぐ。又た虚空の世の受用する所なるが如く甚深般若波羅蜜多も一切の聖凡皆共に受用す。又た虚空の諸の分別を離るるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、分別心無し。又た虚空の能く衆色を現ずるが如く甚深般若波羅蜜多も亦た能く一切の佛法を容受す。又た虚空の衆色を容受するが如く、甚深般若波羅蜜多も亦復た能く一切の佛法を現ず。又た虚空は一切の草木衆藥の花實之に依りて增長するが如く甚深般若波羅蜜多は一切の善根之に依りて增長す。又た虚空は常に非ず斷に非ず語言の法に非ざるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し、常に非ず斷に非ず諸の語言を離れ、世間の沙門婆羅門等乃至釋梵も甚深般若波羅蜜多を思測すること能はずと。[四]天王當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は一法も譬喩と爲る可き有ること無しと。若し善男子善女人等般若波羅蜜多を信受せば獲る所の功德思議す可からず。若し此の功德に色形有らば太虚空界も容るる能はざる所なり。何を以ての故に、甚深般若波羅蜜多は世出世一切の善法を生ずればなり。若しは天人衆、若しは天人王、四向四果及び諸の獨覺、菩薩の十地波羅蜜多、諸佛の無上正等菩提、一切種智、力無所畏并びに十八佛不共法等は皆甚深般若波羅蜜多に依りて成辦することを得ざる無しと。是の法を說く時五萬の菩薩不退轉を得、一萬五千の諸の天子衆は無生忍を得、一萬二千の諸の天人衆は遠塵離垢して淨法眼を生じ、殑伽沙等の諸の有情類は俱に無上正等覺の心を發せり。諸天は宮中にて衆の伎樂を作し、復た種種天の妙香花を散じて如來及び深般若に供養し、復た無量の天龍藥叉健達縛阿素洛揭路茶緊捺洛莫呼洛伽人非人等有りて亦た種種の花及び寶物を散じて如來及び深般若に供養せり。時に天龍等異口同音に合掌恭敬して俱に佛を讃じて曰はく、善哉善哉、快よく是の如き甚深般若波羅蜜多を說きたまへりと。

【四】般若の一法も、譬喩爲る可きもの無く不可思議なることを明す。

巻の第五百七十二

第六分顯德品第十一

[一]爾の時曼殊室利菩薩摩訶薩座より而かも起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して白して言さく、世尊、諸の菩薩摩訶薩は幾劫數を經て深般若波羅蜜多を行じ、幾佛を供養して而かも能く如來の所說の甚深般若波羅蜜多を[二]對揚すること最勝天王の如くなる者ぞと。佛、曼殊室利菩薩摩訶薩に告げて言はく、善男子、此の如きの事は思議す可からず、若しは無量百千大劫衆の行を修集し諸の善根を種うるに非ざれば甚深般若波羅蜜多の功德名字を聞くを得ず。善男子、十方各殑伽沙の如き界の其の中の所有る諸の殑伽沙は尙ほ數を知る可からんも是の菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜多を行ずるに經る所の劫數、幾佛を供養するかは俱に知る可からず。善男子、過去無量無數無邊の思議し難き劫に佛有りて世に出でたまへり。名を多聞と曰ひ、十號具足せり、劫を增上と名づけ、國を日光と名づく。多聞如來、諸の菩薩摩訶薩の爲に淸淨の法門を說いて言はく、善男子、汝應に精勤して諸の善法を修し身命を顧ること勿るべしと。時に彼の會中に一菩薩有り、精進力と名づく。卽ち座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊の說きたまふ所は、汝應に精勤して諸の善法を修し身命を顧ること勿るべしとなり。我れ佛の所說の義を解する如くんば諸の菩薩摩訶薩は宜しく應に懈怠して善法を修せざれば乃ち能く速に無上菩提を證すべし。所以は何ん、若し諸の菩薩勤めて衆善を修せば是れ則ち生死に久住して有情を利樂すること能はざるなり。然るに諸の菩薩は深般若波羅蜜多を行じて煩惱を伏斷するも久しく生死に住して終に自ら速に涅槃を證することを爲さず但だ諸の有情を利樂せんが爲の故に、菩薩は生死に處するを以て樂しみと爲し、涅槃を以て樂しみと爲さざるなり。何を以ての

【一】般若を行ずるに經る所の劫數、幾佛を供養して能く佛の對告衆爲り得るや、俱に不可知なるを明す。

【二】對揚。佛說法の會座にて、佛に對して問答等を提起し、以て佛意を顯揚發動して利益を成辨すること。

故に、諸の菩薩摩訶薩は有情を化するを以て樂しみと爲すが故なり。謂ゆる樂ふ所に隨て方便善巧して法門を說授して安樂を得せしむ。若し善を勤修せば便ち速に漏を盡くして一切有情を利樂すること能はず。是の故に菩薩は生死の諸の苦惱多きを觀察して大悲心を起し有情を捨てずして本願を成就す。世尊、諸の菩薩摩訶薩は方便力を具して生死に久住するも無量無邊の如來を見、無量無邊の正法を聽受し、無量無邊の有情を化導することを得。是の故に菩薩は是の如きの事の爲に生死を厭はず涅槃を樂はざるなり。世尊、諸の菩薩摩訶薩若し生死を觀て而かも厭怖を起して涅槃を欣樂せば則ち非道に墮して一切有情を利樂し如來の甚深の境界に通達すること能はず。[三]云何が非道なる。謂ゆる聲聞及び獨覺地を樂ひ有情類に於て大悲心無きなり。所以は何ん、聲聞獨覺の所行の道は諸の菩薩摩訶薩の道に非ざればなり。何を以ての故に、聲聞獨覺は生死を厭怖して涅槃を欣樂し福德智慧を具足すること能はざればなり。是の義を以ての故に菩薩道に非ずと。時に多聞佛卽便ち精進力を讃歎して言はく、善哉善哉、汝が所說の如し、諸の菩薩摩訶薩は應に自行を修すべく、非道を習ふこと勿れと。時に精進力白して言さく、世尊、何をか菩薩の自ら行ずる所の道と謂ふやと。

[四]多聞佛言はく、菩薩は一切の福慧を成就し、大悲力を以て有情を捨てず、聲聞及び獨覺地を遠離し、無生忍を得て三界を捨てず、希望する所無く善根を生長し方便善巧して一切の波羅蜜多を修行し、智慧力を以て分別心無く善根を生長し、盡智の無盡の功德を成就し、諸法は一として生す可き無しと知ると雖も而かも方便して生を現じ、有情は一として實に有ること無しと知ると雖も而かも方便して化導し、一切法は皆自性を離ると知り、諸の佛土は猶ほ虛空の如しと觀ずるも而かも能く巧便して佛土を嚴淨し、一切佛の法身は像無しと知るも方便して相好莊嚴を示現し、諸の有情の心の好樂する所に隨て卽ち能く方便して之を授與し、菩薩の身心は常に寂靜なりと雖も而かも諸法を說いて有情を化導し、亦た巧便を以て喧雜を遠離し、諸の寂定を修して自性空を知り、悉く能く甚

【三】菩薩道に反する非道を說く。

【四】菩薩の自ら行ずる所の道を明す。

深の智慧に通達して能く方便を以て他の爲に法を說き、聲聞獨覺乘の果を證せずして如來所證の解脫を勤求し菩薩の一切の道行を捨てず。善男子、是れを菩薩の自ら行ずる所の道と名づくと。曼珠室利、時に精進力の彼の如來に從て菩薩の行ずる所の境界を說きたまふを聞きて未曾有なることを得たり。[五]尋いで卽ち復た多聞佛に白して言さく、希有なり世尊、我れ佛の所說の義を解する如くんば菩薩は方便善巧を具足し、一切法を觀ずるに是れ道に非ざること無し。譬へば虛空の衆色を含容するが如く是の如く菩薩の大方便を具して行ずる所の道は一切法を攝す。又た虛空は一切の草木花果香樹之に因りて生長し、是の如き諸物は虛空界に於て染汚すること能はず瞋喜せしめざるが如く、是の如く菩薩は大方便甚深般若波羅蜜多を具し、一切法は皆悉く是れ道なりと觀ず、謂ゆる異生法、若しは聲聞法若しは獨覺法、若しは菩薩法、若しは如來法なり。何を以ての故に、是れ諸の菩薩の通達する所なるが故なり。譬へば大火の若し草木に遇はば必ず退還する無く、是の諸の草木は皆順ひて火を益して其の光明を發するが如く、是の如く諸法は皆菩薩道に順はざること無きが故に菩薩道と名づく。譬へば金剛の自體堅密にして刀も斫ること能はず、火も燒くこと能はず、水も爛らすこと能はず、毒も損すること能はざるが如く是の如く菩薩の方便の智慧は獨覺聲聞及び諸の外道、一切の煩惱も壞すること能はざる所なり。水淸珠の能く濁水を淸むるが如く是の如く菩薩の甚深般若波羅蜜多は能く有情の一切の煩惱をして悉く淸淨なることを得せしむ。譬へば良藥の妙寶神珠は毒と共に居らず能く衆毒を消すが如く是の如く菩薩は深般若波羅蜜多を行じ方便善巧して一切の煩惱と共に居らず而かも能く一切の煩惱を斷滅す。是の因緣を以て所有る諸法は皆是れ菩薩摩訶薩道なり。曼珠室利、彼の精進力の是の法を說く時八千の菩薩は俱に無上正等覺の心を發し、二百の菩薩は無生忍を得たり。曼珠室利、彼の精進力は卽ち是れ今の最勝天王なりと。

[六]爾の時曼珠室利菩薩復た佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行

【五】前に非道と道とを分示するも、進みて一切法皆是れ菩薩道なることを明す。

【六】菩薩の般若を行じて堅固力を得、正法を護持する所以を明す。

じ堅固力を得て正法を護持するやと。佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩ならば寧ろ身命を棄つるも正法を捨てず、他に於て謙下して憍慢を起さず、卑賤恥辱に其の心能く忍び、飢渇せる有情に好き飲食を施し、危難に在る者には能く無畏を施し、諸の疾病に於て法の如く療治し、貧匱の有情に財寶を豐かならしめ、諸佛の靈廟は修理し嚴飾し、惡事は掩遏して善事は光揚し、憂苦の有情には則ち安樂を施さん、是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ堅固力を得て正法を護持すと。[七]曼珠室利復た佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて能く心を調伏するやと。佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて他事に預らず先に思ひて後に行ひ、心性調直にして諂曲の行を離れ、自ら矜高せずして意常に柔軟ならば是の菩薩摩訶薩は能く心を調伏すと。[八]曼珠室利復た佛に白して言さく、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて能く心を調伏せば當に何の趣に生ずべきやと。佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて能く心を調伏せば或は天上に生じ或は人中に生ぜん。若し天上に生ぜば則ち帝釋と爲り或は梵王堪忍界の主と作り、若し人趣に生ぜば轉輪王と作り或は餘の王長者居士と作り、天上人中にて常に佛に値ふことを得ん。是の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じ能く心を調伏して是の如き趣に生ずるなりと。[九]曼殊室利復た佛に白して言さく、世尊、正信は何の法を流出するやと。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、正信は眞善友を得るを流出すと。世尊、多聞は何の法を流出するやと。佛言はく、多聞は妙慧を流出すと。世尊、布施は何の法を流出するやと。佛言はく、布施は大富を流出すと。世尊、淨戒は何の法を流出するやと。佛言はく、淨戒は善趣を流出すと。世尊、安忍は何の法を流出するやと。佛言はく、安忍は一切の有情を容受するを流出すと。世尊、精進は何の法を流出するやと。佛言はく、精進は能く一切の佛法を辦ずるを流出すと。世尊、靜慮は何の法を流出するやと。佛言はく、靜慮は一切

【七】般若を行じて能く心を調伏する所以を明す。

【八】更に心を調伏せし菩薩の生ずべき趣を明す。

【九】以下、佛と曼殊室利の問答を擧ぐ。

の散動を遠離するを流出すと。世尊、般若は何の法を流出するやと。佛言はく、般若は一切の煩惱を遠離するを流出すと。世尊、聽法は何の法を流出するやと。佛言はく、聽法は一切の疑網を遠離するを流出すと。世尊、正問は何の法を流出するやと。佛言はく、正問は法に於て決定の勝智を流出すと。世尊、居靜は何の法を流出するやと。佛言はく、居靜は禪定及び諸の神通を流出すと。世尊、正作は何の法を流出するやと。佛言はく、正作は聖道を流出すと。世尊、無常聲は何の法を流出するやと。佛言はく、[10]無常聲は境に於て擁護する所無きを流出すと。世尊、苦聲は何の法を流出するやと。佛言はく、苦聲は無生を流出すと。世尊、無我聲は何の法を流出するやと。佛言はく、無我聲は我我所の執を滅除するを流出すと。世尊、空聲は何の法を流出するやと。佛言はく、空聲は寂靜を流出すと。世尊、正念は何の法を流出するやと。佛言はく、正念は聖見を流出すと。世尊、身心遠離は何の法を流出するやと。佛言はく、身心遠離は一切の妙定神通を流出すと。世尊、聖道は何の法を流出するやと。佛言はく、聖道は聖果を流出すと。世尊、勝解は何の法を流出するやと。佛言はく、勝解は一切の解脫を成就するを流出すと。世尊、佛生ずれば何の法を流出するやと。佛言はく、佛生ずれば一切の菩提分の法を流出すと。[11]爾の時最勝前んで佛に白して言さく、云何が佛は生ずるやと。佛、最勝に告げたまはく、無上正等覺の心を發すが如きなりと。世尊、云何してか無上正等覺の心を發すやと。佛言はく、天王、大悲を生ずるが如きなりと。世尊、云何してか大悲を生ずるやと。佛言はく、一切の有情を捨てざるなりと。世尊、云何が有情を捨てざるやと。佛言はく、應に三寶を捨てざるが如くすべしと。世尊、誰れか能く三寶を捨てざると。佛言はく、一切の煩惱無き者なりと。[12]爾の時最勝便ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、希有なり善逝、諸佛の秘密は甚深微妙なり、法は無生無滅本來寂靜なりと說くと雖も而かも善惡の業果を破壞せずして斷常を遠離す。世尊、頗し有情有りて是の如き法を聞かば淨信を起さずして毀謗を生ずるや不やと。

【一〇】諸行無常とせば行境に執着なく擁護せらることゝなる。

【一一】以下、佛と最勝の問答。

【一二】般若を行じて佛恩を知り、善友に親近して佛行を修し佛菩提を證すべきを明す。

佛言はく、亦た有りと。世尊、是の如き有情は過去世に善業を修行せしに因りて人身を受くることを得たるも惡友に近づき是の深法に於て敬信すること能はずして毀謗の心を生ぜば則ち爲れ過去の善業に辜負するなり。諸佛の恩德は實に爲れ深重にして假使ひ人有りて己が血肉を以て諸佛を供養するも報ゆること能はず、佛の恩を以ての故に我れ等今善根を增長して大法樂を得大自在に住して天人に恭敬せらる。世尊、諸の菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜多を行じて應に佛の恩を知り、善友に親近して當に佛行を修し佛菩提を證すべしと。是の法を說く時衆中の二萬五千の菩薩は無生忍を得、四萬五千の諸の人天衆は倶に無上正等覺の心を發し、一萬二千の諸の天子衆は遠塵離垢して淨法眼を生じぬ。

第六分現化品第十二

[一]爾の時善思菩薩最勝天王に白して言さく、佛の所化身は更らに能く化するや不やと。最勝答へて曰はく、今世尊に對して以て明證を爲さん、佛の所化身は更らに能く殑伽沙數の無量の化佛を化作し種種の色像神通もて法を說いて有情を利樂す。所以は何ん、諸佛の往昔の願力清淨なるが故に能く是の如くすと。善思菩薩復た是の言を作さく、天王は善能く甚深の法を說く、謂ゆる佛の往昔の願力淸淨なりと。唯だ願くは天王、佛の神力を請け深般若波羅蜜多をして世間に久住して常に隱滅無からしめんことをと。最勝報へて曰はく、善思當に知るべし、甚深般若波羅蜜多は一切の如來常に共に守護したまふと。何を以ての故に、文字もて甚深般若波羅蜜多を宣說したまへばなり。是の如き文字は起らず盡きず常に隱滅無し。其の顯す所の義も亦た起盡せず常に隱滅無し。此れに由りて諸佛の甚深般若波羅蜜多も亦た隱滅無し。何を以ての故に、法は不生なるが故なり。若し法生ずる無くんば亦た則ち滅する無し。卽ち是れ諸佛の秘密の教なり。是の如き妙理は如來出世し若しは出世したまはざるも性相湛然たり。名づけて眞如と曰ひ亦た法界と名づけ亦た實際と名づく。因緣に隨順して違逆せざる是れを正法と爲す。其の性常住にして永く隱滅無しと。[二]善思菩薩復た天王に問はく、更らに何等の人か能く正法を護るかと。最勝答へて言はく、若し一切法に違逆せざる者は能く正法を護る。所以は何ん、正理に違はずして常に諍論無くんば正法を護ると名づくればなりと。善思復た問はく、云何が名づけて、正理に違はずして常に諍論無くんば正法を護ると名づくと爲すやと。最勝答へて曰はく、若し文字に順ひ正理に違はずして常に諍論無くんば正法を護ると名づく。何を以ての故に、世間の愚夫は皆諸見に著し、正理に順ふ者は則ち常に空を說く。是の故に世間と共に諍論を興すなり。是の如く愚夫は有法を愛重し、正理に順ふ者は有に於ては則ち輕んず。世間

【一】佛の所化身の有情利樂を明す。

【二】正法護持に就て明す。

は常樂我淨有りと說き、正理に順ふ者は無常苦無我不淨なりと說く。是の故に世間と共に諍論を興すなり。諸の愚夫の類は世間の流れに順ふも、正理に順ふ者は世間の流れに逆ふ。是の故に世間と共に諍論を興すなり。世間の愚夫は蘊界處に著するも正理に順ふ者は都て著する所無し。是の故に世間と共に諍論を興すなり。世に順ふ愚夫は正理を行ぜざるも正理に順ふ者は世と相違す。故に常に諍ひ無きを正法を護ると名づくと。[三]善思菩薩復た最勝に問はく、今天王は何をか取る所と爲すと。最勝答へて曰はく、善思當に知るべし、我れ我を取らず亦た法を取らずと。善思又た問はく、云何が取らざるやと。最勝答へて言はく、我の自性は離、有情及び法の自性も亦た離、是の如き諸の離も亦た得可からず。過去の自性は離、未來現在の自性も亦た離、是の如き諸の離も亦た得可からず。諸佛の自性は離に非ず、諸佛の自性は不離に非ず、諸の佛土の自性は離に非ず諸の佛土の自性は不離に非ず。諸法の自性は離に非ず諸法の自性は不離に非ず。善思當に知るべし、是の如きの行を正理に順ふと名づくと。取不取無くして能く正法を護るなりと。爾の時善思菩薩、最勝天王を讃めて言はく、善哉善哉、大士正士、能く是の如く甚深般若波羅蜜多を說きて取る無く著する無く文無く字無く諸の戲論を滅し能分別及び所分別を離ると。[四]爾の時衆中に一天子有り、名づけて賢德と曰ふ。座より而かも起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊、最勝天王の所說の無分別とは是れ何の法と爲すやと。佛、賢德に告げたまはく、天子當に知るべし、無分別とは是れ寂靜法なりと。所以は何ん、能取所取は倶に得可からず生ぜず滅せず我我所を離る。是の如きを名づけて無分別の法と爲す。若し菩薩摩訶薩の是の如く觀ずる者は能く正法を護りて能護及び所護の法を見ざるなりと。此の法を說く時十千の苾芻は心解脫を得、一千の天子は遠塵離垢して淨法眼を生じたり。

[五]爾の時善思菩薩、最勝天王に問ひて言はく、何等の辯才か能く是の如き甚深の法を說くと。最勝

【三】最勝の主張を明す。

【四】無分別法を明す。

【五】甚深の法を說く辯才に就て明す。

答へて言はく、一切の煩惱の習氣無き者の得る所の辯才は能く是の如き甚深の法を說く。語言の道に過ぎ思量す可からざる、勝義妙智なり。是の如き辯才は能く是の如き甚深の法を說くと。善思菩薩、賢德天子に問ひて言はく、云何が無生法の中にて辯才を以て說くやと。賢德天子、善思に答へて言はく、若し菩薩摩訶薩無生無滅の法の中に住せずんば則ち辯才もて甚深の法を說く無し。何を以ての故に、戲論を遠離して所緣を見ず能緣を見ず心住する所無し、是の故に能く說けるなり。我法に住せず、此彼に住せず、唯だ清淨の勝義諦の中にのみ住す、是の故に能く說けるなりと。善思菩薩即ち佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、賢德天子は實に爲れ希有なり、乃ち能く甚深の法に通達して辯才無盡なりと。佛、善思に告げたまはく、賢德天子は妙喜界の不動佛の所より而かも此の堪忍世界に來至して深般若波羅蜜多を聽けり。汝等當に知るべし、賢德天子は已に無量百千億劫に於て希有の陀羅尼門を修習せり、劫を經て法を說くも亦た窮盡せずと。[六]善思菩薩復た佛に白して言さく、何をか希有の陀羅尼門と謂ふやと。佛言はく、善思、此の希有とは衆法の陀羅尼門に入らざるに名づく。此の陀羅尼門は諸の文字を過ぎ、言も入ること能はず、心も量ること能はず、內外法の中皆得可からず。善思當に知るべし、少法も能く此れに入る者有ること無しと。是の故に名づけて衆法は陀羅尼門に入らずと爲す。所以は何ん、此の法は平等にして高無く下無く入る無く出づる無く、一文字も外より而かも入る無く、一文字も內より而かも出づる無く、一文字も此の法の中に住する無く、亦た文字の共に相見る者無く、亦た法非法の異りを分別せず、是の諸の文字は亦た滅する無しと說き增す無しと說かず、本際より來た起作及び壞滅する者無ければなり。諸の文字の如く心も亦た是の如し、心の如く一切法も亦た是の如し。何を以ての故に、法は言語を離れ亦た思量を離れ、本際より來た無生無滅なるが故に入出無ければなり。此れに由りて名づけて衆法は陀羅尼門に入らずと爲す。[七]若し能く此の法門に通達せば辯才無盡なり。所以は何ん、通達に無盡の法を斷ぜざるが故な

【六】衆法は陀羅尼門に入らざるを明す。

【七】陀羅尼門に通達せば辯才無盡、自在を得るを明す。

り。若し人有りて能く虛空に入らば則ち能く此の陀羅尼門に入るなり。善思當に知るべし、若し菩薩摩訶薩能く此の陀羅尼門に通達せば心淸淨なることを得。身語も亦た爾なり。行ずる所理に順ひ般若堅固にして諸の惡魔軍の能く嬈す者無く、一切の外道も敢へて對揚せず、諸の煩惱業も之を能く壞する莫く、身力堅固にして心怯弱を離れ、凡そ演說する所辯才盡くる無く、能く深妙の諸の聖諦門を宣べ、智慧多聞なること猶ほ大海の如く、寂定に安住せること妙高山に喩へ、師子王の衆に處して畏れ無きが如く、世法に染まざること猶ほ淨蓮華のごとく、有情を饒益するは之を大地に譬へ、垢穢を洗除すること喩へば大水の如く、世間を成熟すること諸の大火に方り、善法を增長すること彼の大風に同じく淸涼にして意を悅ばしむること之を朗月に類へ、能く衆の闇を破すること其れ猶ほ烈日のごとく、煩惱の怨を摧くこと威ある勇士の如く、心性調伏せること猶ほ大象王のごとく、能く法の雷を震ふは大龍を喩と爲し、普ねく衆の法を雨すは之を大雲に譬へ、大良醫の煩惱の病を除くが如く、猶ほ大國主の善く世間を御するがごとく、四天王の有情類を護り及び正法を護るが如く、天帝釋の人天の中に於て富貴最勝にして心自在を得るが如く、大梵王の堪忍界に於て自在を主領して身の無礙を得るが如く、[八]揭路荼の有情に示教するが如く、世間の父の能く法寶を流すが如く、毘沙門の能く世間の種種の珍寶を出すが如く、福德智慧の莊嚴する所なり。有情の見る者益を蒙らざる無く、諸佛世尊の稱讚する所なり。天龍等の衆咸く之を擁護す。善思當に知るべし、諸の菩薩摩訶薩若し是の如き陀羅尼門を得ば卽ち能く自在に有情を饒益し方便して法を說き而かも窮盡せず、心疲倦無くして利譽に徇はず、法施平等にして慳嫉有ること無く、淨戒を受持して三業愆る無く、安忍淸淨にして諸の恚惱を離れ、精進淸淨にして所作成立し、靜慮淸淨にして善く心を調伏し、般若淸淨にして永く疑惑無く、四無量を具すること大梵王の如く、能善く[九]等持等至を修行し入出自在にして諸の世間に勝り、大覺の因を修して諸の福慧を具し、灌頂位を受けて大自在を得

【八】揭路荼(Garuḍa)。頂瘦、食吐悲苦聲と譯す。一名蘇鉢刺尼(Suparṇi)、金翅鳥、妙翅鳥と譯す。龍をとりて食すといふ鳥類の王。

【九】等持等至。等持(Samādhi の譯)、等至(Samāpatti の譯)、共に定の別名。

と。佛是の如き總持門を說きたまふ時衆中の六萬四千の菩薩は不退轉を得、三萬の菩薩は無生忍を得、二萬の天人は遠塵離垢して淨法眼を生じ、無量無邊の人天等の衆は俱に無上正等覺の心を發せり。

第六分陀羅尼品第十三

[一]爾の時曼殊室利菩薩摩訶薩即ち座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、甚だ奇なり世尊、如來の說きたまふ所の、諸の菩薩摩訶薩若し是の如き衆法の陀羅尼門に入らざるを得ば無量無邊の功德を得とはと。佛、曼殊室利菩薩に告げて言はく、善男子、是の如き功德は假使ひ如來百千年說くも亦た未だ盡くこと能はざるなりと。爾の時衆中に一りの菩薩有り、寂靜慧と名づく。即ち曼殊室利菩薩摩訶薩に白つて言はく、若し菩薩摩訶薩是の如き陀羅尼門を證得せば佛世尊の稱歎する所と爲らん、是の如き菩薩は善く大利を得、自行もて彼れを化して皆悉く空しからざらしめんと。時に曼殊室利菩薩、寂靜慧菩薩に報へて言はく、善男子、勝義諦の中には法の讃む可き無く色無く相無し。色相無くんば何すれぞ讃む可き有らん。讃む可き無きが故に何に於てか歡喜せんと。時に寂靜慧復た是の言を作さく、我れ聞く如來は[二]契經の中にて諸法の自性は我我所無く、能く喜ばしむる無く亦た瞋らしむる無しと說きたまへり。此の法は平等なれば菩薩は應に學すべし。譬へば大地は水輪に依止す、若し井池を鑿たば水を得て受用し其の鑿たざる者に由りて之を致す無きが如く、是の如く聖智の法平等の境は一切法に遍ず、若し般若巧便を勤修する有らば即便ち證得するも其の修せざる者は云何が之を得ん。是の故に菩薩無上正等菩提を求めんと欲せば懈怠すべからず。若し勤め精進せば是の如く說く所の法の平等の境則ち現在前せん。生盲人の色を見ること能はざるが如く、是の如く煩惱に盲ひられたる有情は平等の法に於て見得ること能はず。人眼有るも外の光明無くんば所有る色像を覩見すること能はざるが如く、是の如く行人智慧有りと雖も若し善友無くんば法を見ること能はず。天眼有るは外の明を假らざるも自ら能く色を見るが如く是の如く菩薩の法流に預る者は自然に勝進す。譬へば世間の胎藏に處せる者

【一】菩薩の陀羅尼門證得を喩說す。

【二】契經、修多羅(Sūtra)の譯。佛の經典のこと。

は漸く増長すと雖も而かも自ら見ざるが如く是の如く菩薩の勤め精進する者は衆行漸く増すも亦た自ら見ずして而かも能く一切の佛法を成辦す。雪山中に妙藥樹有るに枝條葉條枯れず折れざるが如く是の如く菩薩勤めて精進を修せば所有る勝行退せず失はず。轉輪王の世に出現するに七財寶を具するが如く是の如く菩薩菩提心を發さば七法寶の所謂布施淨戒安忍精進靜慮般若巧便を具す。轉輪王の四洲界に遊ぶに有情類に於て其の心平等なるが如く是の如く菩薩[三]四攝事を以て有情を饒益するに心常に平等なり。轉輪王の所在の處に隨て則ち諍訟無きが如く是の如く菩薩如實に法を說くに亦た諍論無し。譬へば三千大千世界初めて成るに即ち妙高山王及以大海有るが如く是の如く菩薩初めて無上正等覺の心を發すに即ち般若及以大悲に於て譬へば日の出づるに諸山の高き者は其の光先づ照らすが如く是の如く菩薩の得る般若の炬は諸の高行有りて根熟せる菩薩先に光照を蒙る。譬へば大地の普ねく能く一切の草木花果藥樹を荷負して皆悉く平等なるが如く是の如く菩薩は是の如き陀羅尼門を證得し諸の有情に於て其の心平等なりと。爾の時佛、寂靜慧を讃めて言はく、善哉善哉、汝が所說の如し、諸の菩薩摩訶薩若し是の如き陀羅尼門を得て諸の所說有らば一文一字佛語に非ざること無し。是の如き所說は色聲香味觸法を遠離す。何を以ての故に、此の所說の法は世俗に非ざるが故に無盡無邊にして能く一切の身心の輕利を引けばなり。假使ひ百千佛の前にて說かんも亦た怯弱ならざらん。所以は何ん、是の菩薩摩訶薩は佛の加持の故に心著する所無ければなり。謂ゆる我に著せず有情に著せず諸法に著せず、此れに由りて清淨眞如、清淨法界、清淨實際を證得し、得法盡くる無く、文字盡くる無く、辯說盡くる無し。爾の時即ち殊勝の歡喜を生ず。妙慧を得るが故に、妙智を得るが故に、疑網無きが故に。佛此の總持門を說きたまひし時に當りて八千の菩薩俱に是の如き衆法の陀羅尼門に入らざるを得たり。復た一萬二千の菩薩有りて不退轉を得、五千の菩薩は無生忍を得、一萬六千の諸の天子衆は遠塵離垢して淨法眼を生じ、無量無邊の諸の有情類は俱に

【三】四攝事。四攝法なり。菩薩が衆生を度脫せしむるにつき、先づ用ひて衆生を攝拓する四種の法、即ち布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝をいふ。

無上正等覺の心を發せり。

[四]爾の時佛、寂靜慧に告げて言はく、此の陀羅尼は能く魔衆を伏し、諸の外道を摧き、法を嫉む人を壞し、般若の燈を然して煩惱の火を滅し、說法者を護りて涅槃に至らしめ、內心を調伏して善く外の衆を化し、容儀整肅にして見る者歡喜し、正行の人の爲に平等に法を說き、如實に有情の根性を觀察し法を授くるに時に應じて前に非ず後に非ずと。佛是の如き諸の功德を說きたまふ時、此の三千大千世界に於ける一切の大海妙高山王大地諸山皆悉く振動せり。爾の時天より微妙音花、大微妙音花、妙靈瑞花、大妙靈瑞花、[五]嗢鉢羅花、[六]拘某陀花、[七]鉢特摩花、[八]奔荼利花、迦末羅花を雨らし、諸天は空中にて衆の伎樂を作せり。世尊復た寂靜慧に告げて言はく、善男子、過去無量無數無邊の思議し難き劫に佛有(いま)して世に出でたまへり。名づけて寶月と爲す、十號具足したまへり。國を無毀と名づけ、劫を喜讃と名づく。聲聞の弟子三十二億、菩薩の弟子は無量無邊なり。然るに彼の如來先に苦行及び降魔の事無くして而かも菩提を證せし時彼の衆中に一りの菩薩有り寶功德と名づく。妙辯才を具せり。能く有情の爲に種種に法を說く時諸の大衆、彼の如來に涅槃に入らずして世に久住せんことを請へり。時に寶功德、大衆に告げて言はく、諸佛世尊は生ずる無く滅する無し。何ぞ涅槃に入りたまはざるを勸請するを用ひん。若し太虛空涅槃に入らば如來乃ち般涅槃に入りたまふ可し。若し眞如法界實際不思議界涅槃に入ること有らば如來乃ち般涅槃に入りたまふ可し。所以は何ん、如來の法は成無く壞無く染無く淨無く世間に非ず出世間に非ず有爲に非ず無爲に非ず常に非ず斷に非ず。假令一にならんも而かも十舌有り、是の一一の舌復た百舌を生じ、是の一一の舌復た千舌を生ずるも亦た如來の成壞を說くこと能はず、乃至常斷有りと說くこと能はず。云何が大衆、如來に涅槃に入らずして世に久住したまはんことを勸請するやと。彼の寶功德此の法を說く時八萬六千の諸の菩薩衆は不退轉を得、七千の菩薩摩訶薩衆は倶に無邊の功德陀羅尼門、悅意陀羅尼門、

【四】陀羅尼の種種の功德を明す。

【五】嗢鉢羅花(Utpala)。青蓮華のこと。

【六】拘某陀花(Kumuda)。黄蓮華のこと。

【七】鉢特摩花(Padma)。赤蓮華のこと。

【八】奔荼利花(Puṇḍarika)。白蓮華のこと。

無礙陀羅尼門、歡喜陀羅尼門、大悲陀羅尼門、月愛陀羅尼門、月光陀羅尼門、日愛陀羅尼門、日光陀羅尼門、妙高山王陀羅尼門、深廣大海陀羅尼門、功德寶王陀羅尼門を得、三萬六千の人天の大衆は遠塵離垢して淨法眼を生じたり。世尊復た寂靜慧に告げて言はく、昔の寶功德は今の汝が身是れなり。此の因緣に由りて汝能く是の陀羅尼門の種種の功德を說くと。時に曼珠室利菩薩摩訶薩而かも頌を說いて言はく、

總持は猶ほ妙藥のごとく　能く衆の惑病を療す
亦た天の甘露の如く　服する者は常に安樂なり

と。時に功德花王菩薩摩訶薩復た頌を說いて言はく、

總持は文字無きも　文字もて總持を顯す
般若の大悲に由り　言を離るるも言を以て說く

と。[九]爾の時珊視史多天王卽ち座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、諸佛の功德は思議す可からず、諸佛の所說は思議す可からず、諸の大菩薩の行ずる所の勝行、說く所の妙法は思議す可からず。我れ等諸天宿世に植ゑし所の善根深厚にして如來に値ひて是の如き甚深の妙法を說きたまふを聞くことを得たりと。卽ち無量の天の妙花香を以て如來に奉散して而かも爲に供養せり。[一〇]爾の時佛、彼の天王に告げて言はく、天王當に知るべし、諸の佛世尊を供養せんと欲する者は當に三法を修すべし、一には菩提心を發し、二には正法を護持し、三には教の如く修行するなり。天王當に知るべし、若し能く此の三法を修學する者は乃ち名づけて眞に佛を供養すと爲すことを得。假使ひ如來一劫世に住して此の供養の獲る所の功德を說かんも亦た盡くすこと能はず。是の故に天王、若し佛世尊を供養せんと欲する者此の三法を具せば眞の供養と名づく。天王當に知るべし、若し佛の一四句頌を護ること有らば則ち爲れ過去未來現在の諸

【九】珊視史多天王佛を讃歎供養す。
【一〇】眞の佛の供養を明す。

佛所證の無上正等菩提を擁護するなりと。何を以ての故に、諸佛世尊の證したまふ所の無上正等菩提は[一]法に從て生ずるが故なり。法の供養は眞の供養と名づく、諸の供養の中にて最も爲れ第一なり、資財の供養の比ぶること能はざる所なり。天王當に知るべし、我れ無量無數の思議し難き劫を念ふに精勤して菩薩道を修學せし時虛空の中にて天の頌を說いて曰ふを聞けり。

二人遠離す王賊等　侵す能はざる所の大寶藏
百千萬劫にも法は聞き難し　聞くを得るも持たずんば施さざるに等し
大菩提心もて正法を護り　敎の如く修行して心寂靜に
自利利他心平等ならば　是れ則ち眞に佛を供養すと名づく

と。天王當に知るべし、我れ過去に於て初めて此の頌を聞きて卽ち他の他の爲に說けりと。時に八千の諸の有情類有りて倶に無上正等覺の心を發せり。是の故に天王、法を以て供養するは最も爲れ第一なり。何を以ての故に、諸佛の無上正等菩提は法に從て生ずるが故なりと。

【一】如來は法に從て生ず、法とは眞に生くることなり。

第六分勸誡品第十四之一

[一]爾の時曼殊室利菩薩復た座より起ちて佛足を頂禮し偏へに右肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、如來の所說の甚深般若波羅蜜多を頗し有情有りて當來世に於て正法將に滅せんとする時分轉せん時能く信受するや不や。若し善男子善女人等、是の經を說くを聞きて信受して謗らずんば此の如き人等は何の功德を成ずるやと。佛、曼殊室利菩薩に告げて言はく、善男子、當來世に於て正法の時に滅せんとする時分轉せん時善男子善女人等の曾て無量無邊の佛所に於て淨戒靜慮般若を修せる有らば是れ佛の眞子にして能く此の經を信じ、致す所の功德は稱計す可からず。諸の勝善法は般若に從て生ずればなり。若し人有りて能く信受して謗らざるを吾れ今汝が爲に略して喩を以て說かん、曼殊室利、此の贍部洲の周匝は七千踰繕那量にして北は廣く南は狹く形車箱の如し。其の中の人の面も亦復た是の如し。假使ひ此の贍部洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢果獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに、善男子善女人等有りて彼の聖衆の壽量の短長を盡くすまで諸の世間上妙の飲食衣服臥具及び醫藥等を以て殷淨心を起して奉施供養し、般涅槃して後も各[二]馱都を收め窣堵波を起てて嚴飾し供養し、或は七寶を以て贍部洲に滿し積みて梵宮に至り、諸の聖衆に於て各別に爾所の七寶を奉施し、自らの壽量を畢るまで晝夜三十[三]牟呼栗多相續して斷ぜずんば、曼殊室利、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること多きや不やと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人等能く此の經に於て信受して謗らずんば獲る所の福聚は前の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。曼殊室利、東勝身洲の周匝は八千踰繕那量にして形半月の如く人の面も亦た爾なり。假使ひ東勝身洲に充

【一】般若を信受して謗らざれば獲る所の福聚大なるを喩說す。

【二】馱都(Dhātu)。佛の舍利をいふ。

【三】牟呼栗多(Muhūrta)。時分の名、須臾と譯す。晝夜三十牟呼栗多は盡晝盡夜なり。

滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに、善男子善女人等有りて彼の聖衆の壽量の短長を盡くすまで諸の世間上妙の飲食衣服臥具及び醫藥等を以て殷淨心を起して奉施供養し、般涅槃して後各駄都を收め窣堵波を起てて嚴飾し供養し、或は七寶を以て勝身洲に滿たし積みて梵宮に至り、諸の聖衆に於て各別に爾所の七寶を奉施し、自らの壽量を畢るまで晝夜三十牟呼栗多相續して斷ぜずんば、曼珠室利、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること多きや不やと。曼珠室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛、曼珠室利菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人等、能く此の經に於て信受して謗らずんば獲る所の福聚は前の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至[四]鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。曼珠室利、西牛貨洲の周匝は九千踰繕那量にして量形滿月の如く人の面も亦た爾なり。假使ひ西牛貨洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに善男子善女人等有りて彼の聖衆の壽量の短長を盡くすまで諸の世間上妙の飲食衣服臥具及び醫藥等を以て殷淨心を起して奉施供養し、般涅槃して後も各駄都を收め窣堵波を起てて嚴飾し供養し、或は七寶を以て牛貨洲に滿たし積みて梵宮に至り、諸の聖衆に於て各別に爾所の七寶を奉施し、自らの壽量を畢るまで晝夜三十牟呼栗多相續して斷ぜずんば、曼珠室利、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること多きや不やと。曼珠室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛、曼珠室利菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人等能く此の經に於て信受して謗らずんば獲る所の福聚は前の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。曼珠室利、此倶盧洲の周匝は十千踰繕那量にして其の形方正にして人の面も亦た爾なり。假使ひ此倶盧洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに善男子善女人等有りて彼の聖衆の壽量の短長を盡

【四】鄔波尼殺曇(Upanisad)。近少、微細、因など譯し、數の極なり。

くすまで諸の世間上妙の飲食衣服臥具及び醫藥等を以て殷淨心を起して奉施供養し、般涅槃して後も各駄都を收め窣堵波を起てて嚴飾し供養し、或は七寶を以て倶盧洲に滿たし積みて梵宮に至り、諸の聖衆に於て各別に爾所の七寶を奉施し、自らの壽量を畢るまで晝夜三十牟呼栗多相續して斷ぜずんば、曼殊室利、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること多しや不やと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝と。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人等能く此の經に於て信受して誇らずんば獲る所の福聚は前の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲すと。

卷の第五百七十三

第六分勸誡品第十四之二

[一]佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、假使ひ此の三千大千堪忍世界を碎きて悉く極微と爲し、一一の極微を一聖者と爲さんに、善男子善女人等有りて彼の聖衆の壽量の短長を盡くすまで諸の世間上妙の飲食衣服臥具及び醫藥等を以て殷淨心を起して奉施供養し、般涅槃して後も各駄都を收め窣堵波を起てて嚴飾し供養し、或は七寶を以て前に說くが如き爾所の極微の大千世界の上に滿たし、復た積みて色究竟天に至り、彼の聖者に於て各別に爾所の大千世界の七寶を奉施し、自らの壽量を畢るまで晝夜三十牟呼栗多に相續して斷ぜずんば、曼殊室利、意に於て云何、是の善男子善女人等は此の因緣に由りて福を獲ること多きや不やと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、前に說く施福すら尙ほ思議し難し。何に況んや此の獲る所の福の量に於てをやと。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し善男子善女人等此の經を受持し流通し演說して獲る所の福聚は前の施福よりも百倍勝ると爲し、千倍勝ると爲し、乃至鄔波尼殺曇倍亦復た勝ると爲す。曼殊室利、

[一] 續いて較喩によりて福聚の大なるを明す。

是の如き功德は若し佛菩提を廻求せずんば應に爾所の極微數の劫を經て當に他化自在天王と作るべく。復た爾所の極微數の劫を經て當に樂變化天王と作るべく、復た爾所の極微數の劫を經て當に覩史多天王と作るべく、復た爾所の極微數の劫を經て當に夜摩天王と作るべく、復た爾所の極微數の劫を經て天帝釋と作らん、況んや轉輪王をや。彼れは一切智を廻求するを以ての故に能く甚深般若波羅蜜多を成辦することを得方便善巧して當に無上正等菩提を證すべし。[二]曼珠室利、假使ひ此の贍部洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに暴惡人有りて極瞋恚を起して皆悉く爾所の聖者を殺害せば、曼珠室利、意に於て云何、彼の人は斯れに由りて罪を獲ること多きや不やと。曼珠室利即ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、一聖者を殺すすら尙ほ無間大地獄の中に墮ちて一劫苦を受く。何に況んや爾所の聖者を殺害せんをや。彼れの獲る所の罪は稱計す可からずと。佛、曼珠室利菩薩に告げたまはく、若し此の經典を毀謗する者有らば其の罪前に過ぐること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。曼珠室利、假使ひ東勝身洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに、暴惡人有りて極瞋恚を起して皆悉く爾所の聖者を殺害せば、曼珠室利、意に於て云何、彼の人は斯れに由りて罪を獲ること多きや不やと。曼珠室利即ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、一聖者を殺すすら尙ほ無間大地獄の中に墮ちて一劫苦を受く。何に況んや爾所の聖者を殺害せんをや。彼れの獲る所の罪は稱計す可からずと。佛、曼珠室利菩薩に告げたまはく、若し此の經典を毀謗する者有らば其の罪前に過ぐること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。曼珠室利、假使ひ西牛貨洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間隙無からんに、暴惡人有りて極瞋恚を起して皆悉く爾所の聖者を殺害せば曼珠室利、意に於て云何、彼の人は斯れに由りて罪を獲ること多きや不やと。曼珠室利即ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚

【二】般若毀謗の罪の大なることを喩說す。

だ多し善逝、一聖者を殺すすら尙ほ無間大地獄の中に墮ちて一劫苦を受く、何に況んや爾所の聖者を殺害せんをや。彼れの獲る所の罪は稱計す可からずと。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し此の經典を毀謗する者有らば其の罪前に過ぐること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。曼殊室利、假使ひ此倶盧洲に充滿せる預流一來不還阿羅漢獨覺、粟稻麻竹荻蘆葦甘蔗林等の如くにして中間際無からんに暴惡人有りて極瞋恚を起して皆悉く爾所の聖者を殺害せば、曼殊室利、意に於て云何、彼の人斯れに由りて罪を獲ること多きや不やと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、一聖者を殺すすら尙ほ無間大地獄の中に墮ちて一劫苦を受く、何に況んや爾所の聖者を殺害せんをや。彼れの獲る所の罪は稱計す可からずと。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し此の經典を毀謗する者有らば其の罪前に過ぐること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。曼殊室利、假使ひ此の四大洲界を碎きて悉く極微と爲し、一一の極微を各一佛を爲さんに一りの極惡邪見の衆生有りて毒害心を起して爾所の佛を殺し、一切の法財資財を劫奪し、世間の法王法藥を破滅せば、曼殊室利、意に於て云何、彼の惡衆生は罪を獲ること多きや不やと。曼殊室利卽ち佛に白して言さく、甚だ多し世尊、甚だ多し善逝、彼れの獲る所の罪は無量無邊にして思議す可からず稱計す可からず、我れ彼の事に於ては尙ほ聞くすら忍びず、況んや能く其の罪を獲ることの多少を說かんをや。若し一佛を害するすら猶ほ無間大地獄の中に墮ちて多劫に苦を受く、況んや爾所の諸佛世尊を殺すをや。是の如き衆生は定めて無間大地獄の苦を受けて出期有ること無けんと。佛、曼殊室利菩薩に告げたまはく、若し此の經を毀謗し障礙すること有りて演說流通供養せしめずんば其の罪前に過ぐること百倍千倍乃至鄔波尼殺曇倍なり。〔三〕曼殊室利、假使ひ三千大千世界の一切有情各百千無數の大劫を經て種種の諸の菩薩行を備修して皆無上正等菩提を證するも彼の惡衆生は罪業重きが故に猶ほ未だ大地獄の苦より出づること能はず。曼殊室利、彼の惡衆生は十方界の無間地獄に於て一として經ざる

【三】佛、上來般若毀謗の罪の恐るべきを說いて、これを犯さゞるやう誡しむ。

無く多劫に苦を受く、況んや餘の地獄傍生鬼界をや。何を以ての故に、彼の愚癡者は十方三世の諸佛の法身の母を毀壞するが故なり。設ひ彼れは前の極微數の劫を經、重苦を受け已て三惡趣より出でて人中に來生するも大惡疾を得一切の醫藥の救ふこと能はざる所なり。復た爾所の極微數の劫を經て生ぜば便ち舌無く或は手等無くして各爾所の極微數の劫を經ん。曼珠室利、我れ神力を以て世に一劫或は一劫の餘住りて彼の衆生の此の經を毀謗し障礙する罪報を說かんも亦た盡くすこと能はず。曼珠室利、諸の智有らん者現在未來の安樂を得んと欲せば此の經に於て毀謗し障礙すること勿れと。

第六分二行品第十五

一佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ぜんには宜しく應に前後の般若波羅蜜多を成就すべし。何を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は二種の行有りて般若を成就して有情を化導すればなりと。爾の時曼珠室利菩薩便ち佛に白して言さく、世尊、云何が諸の菩薩摩訶薩は般若を成就して有情を化導するやと。佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩初般若より乃至後際まで功用の心を離れて法を說くこと盡くる無く中間隙無く、有情を惡趣の三有より脫して善趣に住せしめ或は三乘の聖果を證得せしむることを爲さば、曼珠室利、是れを菩薩摩訶薩樂深般若波羅蜜多を行じて有情を化導すと名づく。曼珠室利、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜多を行じて無邊無爲の般若を成就せば是れを菩薩摩訶薩自ら般若を行ずと名づく。何を以ての故に、此れは能く一切の德を圓滿するが故なりと。曼殊室利復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるに何の法行を修せば能く一切智と相應するやと。佛、曼殊室利菩薩に告げて言はく、善男子、若し菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ、一切智眞實の法を修せば思議を遠離して微妙無相なり、甚深の理趣は觀察す可からず極めて通達し難し。常に寂靜に住して清涼遍滿し、分別有ること無く著無く礙無く正理に隨順し執取す可からず、極靜大寂にして一切法の中無上無等なり。曼珠室利、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じ此の法行を修せば能く一切智と相應するなりと。曼珠室利復た佛に白して言さく、諸の菩薩摩訶薩は何の境界に於て深般若波羅蜜多を行ずるやと。二佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、諸の菩薩摩訶薩は決定して應に甚深の境界、廣大の境界、功德の境界に於て深般若波羅蜜多を行ずべし。曼珠室利、甚深の境とは體是れ無爲にして二邊に著せず亦た相離れず、自性清淨にして諸障を解脫し、思議す可からず稱計す可から

【一】菩薩の行般若、有情化導に當て明す。

【二】菩薩の般若所行の境界を明す。その境界として甚深と廣大と功德とを說く。

ず、一切の聲聞獨覺と共ならざるなり。曼珠室利、廣大の境とは諸佛如來の一切の功德にして大悲般若の二法を性と爲す、分別の相を離れ功用の心無く、有情を利樂し時として暫くも捨つる無く、諸の說く所の法皆彼の意に稱ふなり。曼珠室利、功德の境とは諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行じて與に相應する所の一切の功德、三十二相八十隨好にして諸の有情の根欲性行に隨て樂ふ所の種種の形相差別を佛の威神力もて悉く能く示現するなり。所謂或は覩史多に昇るを現じ、或は天より下りて贍部に生ずるを現じ、或は胎に處するを現じ、或は初めて生ずるを現じ、或は童子を現じ、或は遊戲するを現じ、或は出家を現じ、或は苦行を現じ、或は菩提樹の下に往詣するを現じ、或は無上菩提を證得するを現じ、或は轉法輪を現じ、或は般涅槃を現ず。是の如き諸相の差別を示現するは皆有情を生死より解脫せしめんが爲なり。曼珠室利、是の如きを名づけて諸の菩薩摩訶薩の甚深般若波羅蜜多所行の境界と爲すと。曼珠室利便ち佛に白して言さく、希有なり世尊、菩薩の是の如き甚深般若波羅蜜多は是れ佛の境界にして思議す可からずと。佛、曼珠室利菩薩に告げたまはく、是の如し是の如し、汝が所說の如し。甚深般若波羅蜜多は是れ不共法にして思議す可からず。何を以ての故に、一切の異生聲聞獨覺は通達すること能はざればなり、共の境に非ざるが故に。佛世尊を除きて能く得る者無し。何を以ての故に諸法眞如の義は甚深なるが故なり。自在不動無漏界の攝にして有情類をして利樂圓滿せしむ。是の故に名づけて諸佛の境界と爲す。語言の道を過ぎ勝義諦の攝にして尋伺分別思議を遠離し、世間の法の能く喩へを比ぶる所に非ず、一切法の中最も爲れ上品にして生死に在らず涅槃に住せざるなり。[三]曼珠室利、諸の菩薩摩訶薩深般若波羅蜜多を行ずるに凡そ五事の不可思議有り、一には自性、二には方處、三には諸住、四には一異、五には利樂なり。曼珠室利、云何が(一)自性は思議す可からざる。色に卽せる眞如は求むるも得可からず、色を離れし眞如は求むるも得可からず。受想行識も亦復た是の如し。眼に卽せる眞如は求むるも得可からず、

【三】菩薩の般若行に於ける五つの不可思議事を明す。自性、方處、諸住、一異、利樂なり。
(一)自性。

眼を離れし眞如は求むるも得可からず。耳鼻舌身意も亦復た是の如し。色に即せる眞如は求むるも得可からず、色を離れし眞如は求むるも得可からず。聲香味觸法も亦復た是の如し。眼識に即せる眞如は求むるも得可からず、眼識を離れし眞如は求むるも得可からず、耳鼻舌身意識も亦爾なり。地界に即せる眞如は求むるも得可からず、地界を離れし眞如は求むるも得可からず。水火風空識界も亦た爾なり。有法の眞如は求むるも得可からず、無法の眞如は求むるも得可からず、是の故に自性は思議す可からず。曼珠室利、云何が[二]方處は思議す可からざる。是の如き眞如若し欲界に在らば思議す可からず、若し欲界を離るれば思議す可からず、色無色界も亦復た是の如し。若し東方に在らば思議す可からず、若し東方を離るれば思議す可からず、南西北方四維上下も亦復た是の如し。是の故に方處は思議す可からず。曼珠室利、云何が[三]諸住は思議す可からざる。若し安樂住ならば思議す可からず、若し寂靜住ならば思議す可からず、若し有心住ならば思議す可からず、若し無心住ならば思議す可からず。是の故に諸住は思議す可からず。曼珠室利、云何が[四]一異と思議す可からざる。三世の如來は同じく一處に在り、自性清淨にして無漏界の攝なり、若しは一若しは異思議す可からず。是の故に一異は思議す可からず。曼殊室利、云何が[五]利樂は思議す可からざる。智慧神力は同一法界、般若方便の二相平等にして能く有情は無量の利樂を作すも宣說す可からず。語言の境を過ぐ。而かも有情の根性の差別に順ひて種種の說、種種の示現を作す。三十二相八十隨好、有情の心に隨ひて皆能く示現すと、曼珠室利白して言さく、世尊、何等をか名づけて三十二相八十隨好と爲すと。佛、曼珠室利菩薩に告げて言はく、善男子、如來の相好は無量無邊なり。我れ若し廣說せば窮盡す可からず、但だ世間の樂ふ所に隨て三十二相八十隨好を略說せん。[四]曼珠室利、云何が名づけて三十二相と爲す。如來の足下には平滿相有り妙善安住すること猶ほ奩底の如く、地高下すと雖も是の踏む所に隨て皆悉く坦然として等觸せざる無し、是れを第一と爲す。如來の足下には

（二）方處。
（三）諸住。
（四）一異。
（五）利樂。
【四】三十二相を明す。

千輻輪の文、輞轂の衆相圓滿せざる無し。是れを第二と爲す。如來の手足は悉く皆柔軟にして[五]覩羅綿の一切に勝過せるが如し。是れを第三と爲す。如來の手足の一一の指は皆纖長圓妙にして人に過ぎ以て長壽を表す。是れを第四と爲す。如來の手足の一一の指間は猶ほ鴈王の如く咸く鞔網有りて金色交絡し文綺畫に同じ。是れを第五と爲す。如來の足跟は廣長圓滿にして趺相と稱ひ餘の有情に勝る。是れを第六と爲す。如來の足趺は脩高にして充滿し、柔軟妙好にして跟相と稱ふ。是れを第七と爲す。如來の雙腨は漸次纖圓にして鹽泥耶仙鹿王の腨の如し。是れを第八と爲す。如來の雙臂は脩直傭圓にして象王の鼻の如く平立して膝を摩す。是れを第九と爲す。如來の陰相は勢峰藏密し其れは猶ほ龍馬のごとく亦た象王の如し。是れを第十と爲す。如來の毛孔は各一毛生じ柔潤紺青にして右旋宛轉す。是れ第十一。如來の髮毛の端は皆上靡し右旋宛轉し、柔潤紺青にして金色身を嚴し甚だ愛樂す可し。是れ第十二。如來の身皮は細薄潤滑にして、塵垢水等皆住まらざる所なり。是れ第十三。如來の身皮は皆眞金色にして光潔晃曜すること妙金臺の衆寶もて莊嚴するに衆の見んと樂ふ所なるが如し。是れ第十四。如來の兩足二手の掌中、頸及び雙肩の七處は充滿し光淨柔軟にして甚だ愛樂す可し。是れ第十五。如來の肩項は圓滿殊妙なり。是れ第十六。如來の髆腋は悉く皆充實す。是れ第十七。如來の容儀は洪滿端直なり。是れ第十八。如來の身相は脩廣端嚴なり。是れ第十九。如來の體相は縱廣の量等しく、周匝圓滿にして[六]諸瞿陀の如し。是れ第二十。如來の頷臆并びに身の上半は威容廣大にして師子王の如し。是れ二十一。如來の身光の面は各一尋なり。是れ二十二。如來の齒相は四十齊平淨密にして根深く白きこと珂雪に踰ゆ。是れ二十三。如來の四牙は鮮白鋒利なり。是れ二十四。如來は常に味中の上味を得、喉脈直きが故に、能く身中の千の肢節脈の所有る上味を引く。是れ二十五。如來の舌相は薄淨廣長にして能く面輪を覆ひて耳毛の際に至る。是れ二十六。如來の梵音は詞韻和雅にして衆の多少に隨ひて等しく聞こえざる無く、其の聲洪震すること猶

【五】覩羅綿。覩羅(Tūla)は樹名、綿はその樹果より出づるもの。

【六】諸瞿陀。尼拘陀(Nyagrodha)に同じ。樹の名。迦葉佛は此樹下で成道されたと傳ふ。

ほ天鼓の如く、發言婉約にして[7]頻迦音の如し。是れ二十七。如來の眼睫は猶ほ牛王の如く、紺青齊整して相雜亂せず。是れ二十八。如來の眼睛は紺青鮮白にして紅環間飾し皎潔にして分明たり。是れ二十九。如來の面輪は其れ猶ほ滿月のごとく、眉相は皎淨にして[8]天帝弓の如し。是れ第三十。如來の眉間には白毫相有りて右旋し柔軟なること覩羅綿の如く鮮白にして光淨きこと珂雪等に踰ゆ。是れ三十一。如來の頂上の[9]烏瑟膩沙高顯周圓なること猶ほ天蓋の如し。是れ三十二なり。是れを如來の三十二相と名づく。[10]曼殊室利、云何が名づけて八十隨好と爲す。如來の指の爪は狹長く薄潤、光潔鮮淨にして花赤銅の如し。是れを第一と爲す。如來の手足の指は圓く纖長く、傭直柔軟にして節骨現れず、是れを第二と爲す。如來の手足は各等しくして差無く、諸の指間に於て悉く皆充滿す。是れを第三と爲す。如來の手足は圓滿にして意の如く軟淨にして光澤あり色蓮花の如し。是れを第四と爲す。如來の筋脈は盤結し堅固にして深く隱れて現れず。是れを第五と爲す。如來の兩踝は倶に隱れて現れず。是れを第六と爲す。如來は行步するに直進し庠審なること龍象王の如し。是れを第七と爲す。如來は行步するに安平庠序として過ぎず減ぜざること猶ほ牛王の若し。是れを第九と爲す。如來は行步するに進止威儀譬へば鵝王の如し。是れを第十と爲す。如來は廻顧するに必ず右旋すること龍象王の身を擧げて隨て轉ずるが如し。是れ第十一。如來の支節は漸次傭圓にして妙善に安布す。是れ第十二。如來の骨節は交結して隙無きこと猶ほ龍盤の若し。是れ第十三。如來の膝輪は妙善に安布し堅固にして圓滿なり。是れ第十四。如來の隱處は其の文妙好にして威勢具足し圓滿にして清淨なり。是れ第十五。如來の身支は潤滑柔軟、光悅鮮淨にして塵垢著かず。是れ第十六。如來の身容は敦肅にして畏れ無く常に怯弱ならず。是れ第十七。如來の身支は堅固稠密にして善く相屬著す。是れ第十八。如來の身支は安定し敦重にして常に掉動せず圓滿にして壞する無し。是れ第十九。如來の身相は猶ほ仙王の若く周匝に端嚴の光淨くして翳を離る。是れ第二十。如來の身に

【七】頻伽、迦陵頻伽(Kalaviṅka)の略、鳥の名。好聲等と譯す。
【八】天帝弓。虹の異名。
【九】烏瑟膩沙(Uṣṇīṣa)。略して烏瑟といふ。肉髻と譯す。
【一〇】次に八十隨好を明す。

は周匝せる圓光有りて行等の時に於て恒に自ら照曜す。是れ二十一。如來の腹形は方正にして缺くる無く柔軟にして現れず衆相もて莊嚴す。是れ二十二。如來の臍は深くして右旋し圓妙淸淨にして光潔なり。是れ二十三。如來の臍は厚くして凹ならず凸ならず周匝妙好なり。是れ二十四。如來の皮膚は疥癬を遠離し亦た黶點疣贅等の過無し。是れ二十五。如來の手掌は充滿し柔軟にして足下は安平なり。是れ二十六。如來の手文は深長にして明直、潤澤にして斷ずる無し。是れ二十七。如來の脣色は光潤丹暉にして頻婆果の上下相稱へるが如し。是れ二十八。如來の面門は長からず短からず大ならず小ならず量の如くにして端嚴なり。是れ二十九。如來の舌相は軟薄廣長にして赤銅色の如し。是れ第三十。如來の發聲するに威震ふこと深遠にして象王の吼ゆるに明朗にして淸徹するが如し。是れ三十一。如來の音韻美妙具足せること深谷の響の如し。是れ三十二。如來の鼻は高脩にして且つ直ぐ其の孔現れず。是れ三十三。如來の諸の齒は方整にして鮮白なり。是れ三十四。如來の諸の牙は圓白光潔にして漸次鋒利なり。是れ三十五。如來の目は淨くして靑白分明なり。是れ三十六。如來の眼相は脩廣にして譬へば靑蓮華葉の甚だ愛樂す可きが如し。是れ三十七。如來の眼睫は上下齊整し稠密にして白からず。是れ三十八。如來の雙眉は長くして而かも白からず、緻にして而かも細軟なり。是れ三十九。如來の雙眉は綺靡にして順次紺琉璃色なり。是れ第四十。如來の雙眉は高顯光潤にして形初月の如し。是れ四十一。如來の耳は厚く廣大脩長にして輪埵成就す。是れ四十二。如來の兩耳は綺麗齊平にして諸の過失を離る。是れ四十三。如來の容儀は能く見る者をして損する無く染する無く皆愛敬を生ぜしむ。是れ四十四。如來の額は廣く圓滿平正にして形相殊妙なり。是れ四十五。如來の身分の上半は圓滿にして師子王の威嚴の無對なるが如し。是れ四十六。如來の首髮は脩長紺靑稠密にして白からず。是れ四十七。如來の首髮は香潔細軟にして潤澤旋轉す。是れ四十八。如來の首髮は齊整して亂るる無く亦た交雜せず。是れ四十九。如來の首髮は堅固にし

て斷ぜず永く墮落無し。是れ第五十。如來の首髮は光滑殊妙にして塵垢著かず、是れ五十一。如來の身分は堅固にして充實せること、【一】那羅延に踰ゆ。是れ五十二。如來の身體は長大にして端直なり。是れ五十三。如來の竅穴は清淨にして圓好なり。是れ五十四。如來の身支の勢力は殊勝にして與に等しき者無し。是れ五十五。如來の身相は衆の觀んと樂ふ所にして厭足すること無し、是れ五十六。如來の面輪は脩廣にして所を得、皎潔光淨なること秋の滿月の如し。是れ五十七。如來の顏色は舒泰光顯し笑を含みて先に言ふに向ふ有りて背く無し。是れ五十八。如來の面貌は光澤熙怡ありて顰蹙青赤等の過を遠離す。是れ五十九。如來の身支は清淨無垢にして常に臭穢無し。是れ第六十。如來は所有る諸の毛孔の中より常に如意微妙の香を出す。是れ六十一。如來は面門より常に最上殊勝の香を出す。是れ六十二。如來の首相は周圓妙好にして末達那の如く亦た猶ほ天蓋のごとし。是れ六十三。如來の身毛は紺青光淨にして孔雀の項の如く紅輝綺飾して色は赤銅に類せり。是れ六十四。如來の法音は衆の大小に隨て增さず減ぜず理に應じて差ふ無し。是れ六十五。如來の頂相は能く見る者無し。是れ六十六。如來の手足の指は約分明に莊嚴妙好にして赤銅色の如し。是れ六十七。如來の行く時其の足地を去ること四指量にして印文を現す。是れ六十八。如來は自ら持して他の持を待たず、身傾動無く亦た逶迤せず。是れ六十九。如來の威德は遠く一切に震ひ惡心なるを聞きて喜び恐怖せるも見て安んず。是れ第七十。如來の音聲は高からず下からず衆生の意に隨て和悅して與に言ふ。是れ七十一。如來は能く諸の有情類の言音意樂に隨て爲に法を說く。是れ七十二。如來は一音もて正法を演說し有情類に隨て各得解せしむ。是れ七十三。如來の說法は咸く次第に依り必ず因緣有りて言善ならざる無し。是れ七十四。如來は等しく諸の有情類を觀て善を讃め惡を毀りて而かも愛憎無し。是れ七十五。如來の爲す所は先に觀じて後に作し、軌範具足して善淨を識らしむ。是れ七十六。如來の相好は一切の有情の能く觀盡くすもの無し。是れ七十七。如來の頂

【一】那羅延(nārāyaṇa)。人本生、堅固力士などと譯し、毘紐天の名、或は梵天の異名なり。

骨は堅實にして圓滿なり。是れ七十八。如來の顏容は常に少くして老いず好く舊處に巡る。是れ七十九。如來の手足及び胸臆の前には皆吉祥喜旋德相有りて文は綺畫に同じく色は朱丹に類す。是れ第八十なり。是れを如來の八十隨好と名づくと。

第六分讃歎品第十六

[一]爾の時曼殊室利菩薩即ち座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、如來の功德は希有無等にして思議す可からず。過去未來現在の諸佛に皆異り有ること無し。若し如來を見たてまつり或は功德を聞かば此の有情類は亦た思議し難し。今重ねて佛の大法輪を轉じたまふを見て未曾有なることを得て歡喜踊躍せりと。是の語を作し已て即ち虛空に昇ること七多羅樹にして合掌し讃めて曰はく、

一切の有情類は　唯だ佛のみを最も尊しと爲す、
尚ほ等しき者すら有ること無し　況んや復た當に勝るもの有るべけん
我法の二は俱に空にして　妙理は無等等なり
唯だ我が佛世尊のみ　能く無等等に等し
煩惱幷びに習氣　俱に盡きて永く餘り無し
能く一切法を知りて　皆明了ならざる無し
若しは智若しは說法　能く佛に及ぶ者無し
三千大千界に　唯だ佛のみ獨り尊しと爲す
十力無畏等は　定めて有りて虛妄に非ず
帝釋と梵王との　咸く得ること能はざる所なり
世尊の大恩德は　諸の有情に普洽せり
此の事思議し難く　定めて能く及ぶ者無し
能く微妙の慧　及び方便善巧を以て

【一】曼殊室利讃歎す。

諸の有情を化導して　皆利樂を得せしめたまふ

と。[二]爾の時會中に一りの天子有り名づけ妙色と曰ふ。卽ち座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌して佛に向ひ頌を以て讃めて曰はく、

世間に佛に等しき者を說くならば　彼の言は實に非ずして虛誑と爲す
若し法王は最極の尊なりと說かば　此の言は妄に非ずして諦語と爲す
人天の儔は正問すること難く　能く我が大師を坼くこと有ること無し
善逝は魔を降し外道を伏し　世間を將導して解脫に至らしむ
清淨の四辯もて無窮に說き　甘露の妙藥を有情に施し
遍ねく諸法を觀じて智礙ふる無く　一切の刹那に滅失せず
大悲もて平等に有情を視　清淨の心世に染まず
善能く根欲性を了知して　樂聞する所に隨て應に說くべし
煩惱の差別は一種に非ず　無量の對治門を示さんが爲に
唯だ佛のみ彼の因緣を巧說す　專ら有情を利樂せんが爲の故なり
佛に値ひ法を聞きて聖を得ざる　是の如き有情は度すること極めて難し
如來の大名は應に渴仰すべし　若し見ることを得ば無限に益せん
佛智は能く心をして清淨ならしむ　正教を聞くことを得ば生死より出でん
佛の名號を聞くは大吉祥なり　常に世尊を念じて恒に喜樂せよ
發心して佛のみもとに詣りて慧解を生じ　敎の如く勤修せば種智を成ぜん
戒品清淨にして垢濁無く　靜慮第一とせば心澂明ならん
智慧最勝にして傾動し難く　法海清淨にして甘露の如し

【二】妙色天子讃歎す。

一切の有情は放逸を憙ぶ　諸佛は專精に世間を離れ
等しく有情を慈しむこと一子の如し　恩德深厚なるも能く報ゆる無し
先に能く結賊の法を破するを說き　久しく天魔幻化の軍を摧き
世尊は已に三有の過を說きて　廣く涅槃の無量の德を示したまへり
百千大劫にも甚だ聞き難し　故に我れ至誠もて今諸禮したてまつる

と。[三]爾の時會中に一りの天子有り、名づけて善名と曰ふ。卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌して佛に向ひ頌を以て讃めて言はく、

如來は平等に大慈を行じたまふ　設し度す可き智を他の者に與へんには
尙ほ[四]天授すら最前に得しむ　況んや復た其の餘の有情類をや
我れ今愜く空しく過すことを爲さず　大行を修持して佛恩に報ぜん
唯だ無漏の滅を自證するのみなる有らば　彼れ佛恩に於て未だ報ずと爲さず
若し佛の深教を修行する有らば　乃ち名づけて佛の眞子と爲すことを得む
佛の久しく勤苦したまへるは有情の爲なり　無上の大恩能く報ずることも罕れなり
大慈もて眞妙法を開顯し　衆をして修行して化他を兼ねしむる
若し佛世間に出でたまはずば　一切の有情大苦を受けん
則ち人天無く唯だ惡趣のみありて　但だ種種の苦の音聲のみを聞かん
諸趣の苦を受くるも能く免るゝ無けん　煩惱有情を繫縛するが故に
佛は他の諸の毒結を解かんと欲し　翻りて大悲の縈る所と爲りたまふ
如來は是れ世の大福田なり　教に依りて正しく修せば惡趣を離れむ
若し佛の教に違ひて修行せずば　彼れは定めて人天に生ずるを得じ

【三】善名天子讃歎す。

【四】天授、調達、提婆達多のこと、提婆の如き妨害するものにも與ふべきに先づ與へて悋まず。

佛の所に於て惡心を起し
是れ等の有情は甚だ愍む可し
佛世尊の自ら智を知りたまへるが如く
佛智は我が測量する所に非ず
無畏智力不共法は
相好莊嚴微妙の香
三種開敷して暫くも息まず
唯だ佛のみ善く無上覺を知りて
佛は爲れ第一最無上なり
佛は功德の正法水を以て
世尊は本來内外淨なり

或は復た深法を樂聞せざる有らば
決定して永く當に黑暗に處すべし
其れ等を如來は乃ち能く了したまへり
稽首して十方の佛を敬禮したてまつる
唯だ佛世尊のみ獨り圓備したまへり
觀る者厭く無く衆色を超ゆ
淸淨の佛華我れ今禮せん
能く永へに諸の險難より出離したまへり
稽首して兩足尊に歸命したてまつる
普ねく能く諸の垢穢を洗除したまふ
我れ今眞淨身を頂禮したてまつる

と。[五]爾の時堪忍界の主、大梵天王即ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌して佛に向ひ頌を以て讃めて言はく、

如來は勝福慧を具足し
常に甘露を雨らして飢渴を濟ひたまふ
世間最勝にして敬ふ可き者
諸惡斯れ盡き衆善備はる
普ねく諸の有情を濟拔せんが爲に
生死を度りて安樂を得せしむ
微妙の金色身に稽首したてまつり

有情を利樂して暫くも息む無く
我れ今能く他を利するに稽首したてまつる
彼の類すら猶ほ來りて佛を供養す
我れ今無等の尊に稽首したてまつる
一行として修學せざること有ること靡く
我れ今救世の師に稽首したてまつる
說きたまふ所の甘露法に稽首したてまつり

【五】大梵天王讃歎す。

清淨にして垢無き智に稽首したてまつり　一切の功德林に稽首したてまつる

と。[六]爾の時佛、大梵天に告げて言はく、善哉善哉、汝が讃むる所の如し。如來の此の事は是れ實にして虛に非ず。何を以ての故に、諸佛世尊は無量劫に於て種種の福德智慧を修集し、斯れに由りて果位備足せざる無し。所以は何ん、如來は布施淨戒安忍精進靜慮般若波羅蜜多を具足し、身語意の三淸淨ならざる無し。故に能く眞如實際に通達す。實際に住するが故に所言虛しからずと。時に大梵王佛足を頂禮し合掌恭敬して復た佛に白して言さく、唯だ願くば世尊、神通力を以て此の般若波羅蜜多をして世間に久住して一切を利樂せしめたまへと。爾の時佛、大梵天王に告げたまはく、十方三世一切の如來は大神通を以て咸く共に甚深般若波羅蜜多の世間に久住して一切を利樂するを護念したまへり。天魔梵志外道沙門皆能く滅壞障礙有ること無し。何を以ての故に、[七]我れ過去を念ずるに佛有り、名づけて寶月如來と曰ふ。十號圓滿せり。國を無毀と名づけ、劫を喜讃と名づく。彼の佛に二りの苾芻の弟子有り、大法師と作りて善く深法を說く。一を智蓋と名づけ、二を譜授と名づく。常に彼の佛に隨て正法輪を轉じ一劫の中を經て是の如き甚深般若波羅蜜多を宣說するに三千大千百億の魔衆悉く皆化を受けて菩提心を發せり。是の故に此の經をば諸の天魔等皆力有りて滅壞障礙すること無しと。爾の時寂靜慧菩薩摩訶薩卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、寶月如來は住して何れの所に在すや。猶ほ世に住せりと爲すや已に涅槃せりと爲すやと。爾の時世尊、寂靜慧に告げて言はく、善男子、東方に此を去ること十千億の諸佛世界を過ぎて曾て世界有り名づけて無毀と曰ふ。其の中の如來の壽は十千劫なり。彼の佛の世界は常に是の如き甚深般若波羅蜜多を說くに彼の諸の天魔及び外道は此の經典に於て障礙すること能はずして皆無上正等覺の心を發す。智蓋苾芻は卽ち是れ今の曼殊室利、譜授苾芻は卽ち是れ今の最勝天王なり。此の二菩薩は方便善巧して種種に甚深般若波羅蜜多を擁護して世に久住

【六】佛、これに應じて重ねて般若功德を說く。

【七】寶月如來の因緣を語る。

せしむ。十方の佛の國に若し是の如き甚深般若波羅蜜多を說かば此の二菩薩卽ち往いて聽受すること、我れ今是の法門を說くに大光明を放てば光を尋ねて來集せるが如くならんと。

第六分付囑品第十七

[一]爾の時佛、阿難陀に告げて言はく、汝甚深般若波羅蜜多を受持す可し忘失せしむること勿れと。時に阿難陀卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して佛に白して言さく、云何が是の如き經典を受持せんやと。是に於て佛、阿難陀に告げて言はく、此の經を受持するに十種の法有り、一には書寫、二には供養、三には施他、四には諦聽、五には披讀、六には受持、七には廣說、八には諷誦、九には思惟、十には修習なり。斯の十法に依りて此の經を受持するなり。譬へば世間の一切の草木華果藥等は皆大地に依るが如く是の如く一切の殊勝の善法は皆般若波羅蜜多に依る。轉輪王若し世に住在せば七寶常に現ずるが如く甚深般若波羅蜜多も亦復た是の如し。若し世に住在せば三寶滅せずと。爾の時大衆尊顏を瞻仰し異口同音に俱に傷歎して曰はく、如來の滅後に誰れか能く是の如き世尊の大法の重擔、謂ゆる無量無邊大劫に修集して得る所の無上菩提を荷擔せんと。[二]爾の時衆中に便ち一萬二千の菩薩有り、此の法を護らんが爲に卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して而かも頌を說いて言はく、

我れ等身命を捨つるも　未來の福を求めず
佛の說きたまふ所の　此の甚深の法要を護持せん

と。爾の時衆中の[三]五百の天子、賢王を首と爲る、復た座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して而かも頌を說いて言はく、

諸の有情を度し　大悲の願力を成ぜんが爲に
佛の說きたまふ所の　此の甚深の法要を護持せん

と。[四]時に天帝釋、持髻梵王、毘沙門王、皆座より起ちて佛足を頂禮し偏へに左肩を覆ひ右膝を地に

【一】阿難に付囑し受持せしむ。
【二】萬二千菩薩護法を誓ふ。
【三】五百天子もまた誓ふ。
【四】釋梵等說頌護法す。

著け合掌恭敬して而かも頌を說いて言はく、

能く一切の病を療する　世尊の今說きたまふ所の
般若微妙の藥を　我れ等頂戴し持たん

と。執金剛神亦た座より起ちて佛足を頂禮し、偏へに左肩を覆ひ右膝を地に著け合掌恭敬して而かも頌を說いて言はく、

法は本名字無きも　佛は名字を以て說きたまふ
大悲の眞の敎法を　我れ今頂戴し持たん

爾の時佛、持髻梵に告げて言はく、梵天當に知るべし、佛は三事を最も爲れ無上なりと讃ずと。何等をか三と爲す、一には菩提心を發し、二には正法を護持し、三には敎の如く修行するなり。是の如き三法は最も爲れ無上にして、能く修行する者は眞に佛を供養するなり。我れ若し世に住して一劫或は一劫の餘此の功德を說かんも亦た盡くすこと能はず。如來の一四句頌を護持して獲る所の功德すら尙ほ盡くす可からず、況んや能く三世の佛の母なる甚深般若波羅蜜多を護持せんをや。何を以ての故に、三世の諸佛は皆般若波羅蜜多に因りて生ずることを得るが故なり。法を以て供養するは眞に佛を供養するなり。若し資財を以てせば眞の供養に非ず。故に法の供養は最も爲れ第一なり。若し佛の正法を護持する者有らば當に知るべし、彼の類は二世安樂なりと。是の故に梵天、常に應に甚深般若波羅蜜多を擁護すべし。汝法を護るに由りて已に當に賢劫千佛を見ることを得て悉く請主と爲るべし。梵天當に知るべし、此の穢土に於て正法を須臾の間護持するは淨土の中にて若しは一劫或は一劫の餘を經て獲る所の功德に勝ると。故に應に精勤して正法を護持すべしと。世尊復た天帝釋に告げて言はく、憍尸迦、甚深般若波羅蜜多所在の處に隨て當に知るべし卽ち是れ如來の生處、菩提を得る處、法輪を轉ずる處、涅槃に入る處なりと。何を以ての故に、憍尸迦、一切の

菩薩、一切の善法、一切の如來は皆此より生ずればなり。若し法師有りて是の如き甚深般若波羅蜜多を宣説せば此の地は卽ち爲れ佛の所行の處なり。諸の有情類は法師の所に於て當に善友の佛を尊重する心を生じて恭敬歡喜供養讃歎すべし。若し我れ世に住して一劫或は一劫の餘、此の法師の此の經を流傳して獲る所の功德を說かんも亦た盡くすこと能はず。憍尸迦、若し此の法師の所行の處に、善男子等能く刺して血を地に灑ぎて供養すること有らんも未だ多しと爲すに足らず。何を以ての故に、無上の法輪は受持し難きが故なりと。時に天帝釋白して言さく、世尊、未來世の中にて此の經を說く處は我れ及び眷屬皆當に彼の地方の所及び說法師を供養すべし。若し此の經の所在の處を見ば卽ち前說の[五]四種處心を生ぜんと。爾の時世尊、天帝釋を讃めたまはく、汝能く是の如し。善哉善哉、吾れ此の經を以て汝に付囑す。宜しく來世に於て擁護し流通すべしと。時に天帝釋卽ち佛に白して言さく、我れ等諸天の善趣に生ずることを得たるは皆般若波羅蜜多に由る、菩提心を發せるも亦復た此れに由る。是の故に我れ等身命を顧みずして世尊の是の如き深法を擁護せんと。時に佛復た天帝釋を讃めて言はく、善哉善哉、說の如く能く作すと。時に薄伽梵是の經を說き已て最勝天王及び十方界の諸の大菩薩一切の聲聞天龍藥叉健達縛阿素洛揭路荼緊捺洛莫呼洛伽人非人等、佛の所說を聞き皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

【五】四種處心、如來の生處、得菩提處、轉法輪處、入涅槃處なり。

昭和九年八月廿五日印刷
昭和九年八月三十日發行
昭和十一年四月十日再版

不許複製

國譯一切經 般若部 五

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝二一一六番

製本所　兩角製本所

18

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 5949